

御手洗遺跡

高知広域都市計画道路上町2丁目南城山線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2014. 3

高知市教育委員会

御手洗遺跡

高知広域都市計画道路上町2丁目南城山線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2014. 3

高知市教育委員会



第1面完掘状況（東より）



P124 遺物出土状況



SK16 遺物出土状況



SK18 遺物出土状況



弥生土器 壺 (244)



弥生土器 壺 (277)



弥生土器 高杯 (260)



磨製石包丁 (193)



中国産 青磁碗 (509)



中国産 白磁盃 (413)



中国産 黄釉鉄絵洗 (364)



京都系 緑釉陶器椀 (475)

序

御手洗遺跡の所在する神田地区は、高知市街地の西南部に位置しており、鏡川と支流・神田川による沖積平野の広がる地です。農業生産に恵まれたこの一帯では、これまでにも柳田遺跡や鴨部遺跡より縄文時代から古代にかけての人々の営みを示す跡が確認されてきました。

近年この地は国道バイパス開通や周辺道路の整備、河川改修等により、田園地帯から急速に新興住宅地として開発が進みつつあります。

この度、都市計画道路上町2丁目南城山線（鴨部工区）の進捗に伴い、予定地の発掘調査が実施されました。その結果、市内平野部では初めての弥生時代中期の竪穴住居跡群が検出され、弥生集落の発見という新たな歴史が刻まれることとなりました。さらに調査の過程では、古代から近世に至る遺構・遺物も上層より確認でき、地域の歴史を同じ遺跡からたどり記録するという貴重な成果を得ることもできました。

この報告書が、さらに高知市の歴史を理解するうえで何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成26年3月

高知市教育委員会

例　　言

1. 本書は、高知市教育委員会が平成23年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査対象地は、高知市神田字御手洗368・371・374－2他に所在する。
3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成24年度から25年度にかけて行った。

試掘調査 平成23年3月10日～3月14日、調査面積27m²

平成23年4月20日～4月21日、調査面積27m²

本調査 平成23年10月11日～平成24年2月10日、調査面積960m²

4. 調査体制は以下の通りである。

調査主体 高知市教育委員会

調査事務 同 生涯学習課主事 須賀悠

高知市都市建設部道路整備課主任 金子一郎

調査担当 同 生涯学習課指導主事 浜田恵子 梶原瑞司

5. 本書の編集は浜田が行い、執筆はⅡ章－2を梶原が、それ以外は浜田が行った。遺物写真は梶原が撮影した。
6. 調査にあたっては、高知県教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。
7. 遺物の資料調査については森達也（愛知県陶磁美術館）、出原恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター）、池澤後幸（同）、吉成承三（同）はじめ諸氏のご教示を賜った。（敬称略）
8. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

【発掘作業】岡崎速男 齋田泰詔 佐竹寛 下本益之 武内順一 弘田誠一 松吉弘明
山下勝正 吉田司

【測量補助】田上浩 田坂京子

【整理作業】櫻尾洋子 島村加奈 松木富子 村上裕紀 山崎佳代子 吉川沙織
和田エリ

9. 掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。
10. 遺構の略号は、竪穴住居：ST、土坑：SK、溝・溝状遺構：SD、柱穴及び小型の穴：P、性格不明遺構：SXとした。
11. 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管した。注記の略号は「11-MR」である。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
第Ⅲ章 試掘調査	
1. 試掘調査の方法	9
2. 試掘調査の成果	9
第Ⅳ章 調査の方法	13
第Ⅴ章 調査の成果	
第1節 基本層序	15
第2節 遺構と遺物	23
1. 弥生時代の遺構と遺物	
(1) 堪穴住居跡・堪穴状遺構	23
(2) 土坑	37
(3) 溝状遺構・流路	60
(4) ピット	62
(5) 土器満り・炭化物満り・性格不明遺構	64
(6) 包含層出土の遺物	65
2. 古代末～中世の遺構と遺物	
(1) 挖立柱建物跡	65
(2) 土坑	73
(3) 溝	79
(4) ピット	93
(5) 包含層出土の遺物	95
3. 近世の遺構と遺物	
(1) 挖立柱建物跡	95
(2) 土坑	99
(3) ピット	99
4. 近代の遺構と遺物	
(1) 土坑	99
(2) 瓦溜り	100
(3) 包含層出土の遺物・その他の遺物	100
第VI章 考察	
第1節 御手洗遺跡 弥生時代の検出遺構と遺物	138
第2節 古代末～中世の御手洗遺跡 検出遺構の性格と変遷	150
第3節 古代末～中世の御手洗遺跡 出土遺物の様相	165

挿図目次

Fig. 1	御手洗遺跡調査区位置図	1
Fig. 2	高知市航空写真（昭和22・23年撮影）	6
Fig. 3	高知市航空写真（昭和34年撮影）	7
Fig. 4	御手洗遺跡及び周辺の遺跡	8
Fig. 5	柳田遺跡隣接地試掘調査TP1・2出土遺物実測図	10
Fig. 6	TP1～3・6・18・19・21土層柱状図	11
Fig. 7	平成20～23年度試掘調査試掘坑配置図	12
Fig. 8	調査区風景	13
Fig. 9	調査区位置図	14
Fig. 10	基本層序（1）	16
Fig. 11	基本層序（2）	17
Fig. 12	基本層序（3）	18
Fig. 13	検出遺構全体図（弥生時代）	19～20
Fig. 14	検出遺構全体図（古代末～中世・近世・近代）	21～22
Fig. 15	ST1平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図	24
Fig. 16	ST2平面図・セクション図・出土遺物実測図	25
Fig. 17	ST3平面図・セクション図・出土遺物実測図	27
Fig. 18	ST4平面図・セクション図・遺物出土状況図	29
Fig. 19	ST4出土遺物実測図（1）	30
Fig. 20	ST4出土遺物実測図（2）	31
Fig. 21	SX1平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図	32
Fig. 22	SX2・4平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図	33
Fig. 23	SX5平面図・セクション図・出土遺物実測図	34
Fig. 24	SX9平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図	35
Fig. 25	SX10平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図	36
Fig. 26	SX11平面図・セクション図	37
Fig. 27	SK15平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図	38
Fig. 28	SK16～18平面図・セクション図・遺物出土状況図・SK17出土遺物実測図	39
Fig. 29	SK16出土遺物実測図（1）	40
Fig. 30	SK16出土遺物実測図（2）	41
Fig. 31	SK18出土遺物実測図（1）	42
Fig. 32	SK18出土遺物実測図（2）	43
Fig. 33	SK19平面図・エレベーション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図	44
Fig. 34	SK20～24平面図・セクション図・SK23出土遺物実測図	45
Fig. 35	SK25・26平面図・セクション図・エレベーション図・SK25出土遺物実測図	46
Fig. 36	SK27平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図	47
Fig. 37	SK28～30平面図・セクション図・遺物出土状況図	47
Fig. 38	SK29出土遺物実測図	48
Fig. 39	SK31・32平面図・セクション図・出土遺物実測図	49
Fig. 40	SK33平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図	50

Fig. 41	SK35 平面図・エレベーション図・出土遺物実測図・	51
Fig. 42	SK36 平面図・セクション図・出土遺物実測図・	52
Fig. 43	SK37 平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図・	53
Fig. 44	SK38・39 平面図・セクション図・遺物出土状況図・	54
Fig. 45	SK38・39 出土遺物実測図・	54
Fig. 46	SK40・42 平面図・セクション図・遺物出土状況図・	55
Fig. 47	SK40 出土遺物実測図・	56
Fig. 48	SK41 平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図・	57
Fig. 49	SK42 出土遺物実測図・	58
Fig. 50	SK43 平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図・	59
Fig. 51	SK44 平面図・セクション図・縛・遺物出土状況図・出土遺物実測図・	59
Fig. 52	SD9 セクション図・出土遺物実測図・	60
Fig. 53	SRI セクション図・出土遺物実測図・	61
Fig. 54	P218・221・224・228・236・土器溜1・2・SX6 平面図・セクション図・エレベーション図・ 遺物出土状況図・	62
Fig. 55	P218・221・224・228・236・土器溜2 出土遺物実測図・	63
Fig. 56	IV～VI 層出土遺物実測図・	64
Fig. 57	SB4・5 平面図・エレベーション図・	66
Fig. 58	SB6・7 平面図・エレベーション図・	68
Fig. 59	SB8・9 平面図・エレベーション図・	69
Fig. 60	SB10・11 平面図・エレベーション図・	70
Fig. 61	SB7・9・10 出土遺物実測図・	71
Fig. 62	SB12・13 平面図・エレベーション図・	72
Fig. 63	SK1～4 平面図・セクション図・	74
Fig. 64	SK5～8 平面図・セクション図・	76
Fig. 65	SK2・4・5・8 出土遺物実測図・	77
Fig. 66	SK9・10・12・13・34 平面図・セクション図・縛出土状況図・	78
Fig. 67	SK9・10・12 出土遺物実測図・	79
Fig. 68	SD1 平面図・セクション図・エレベーション図・縛出土状況図・	80
Fig. 69	SD1 セクション図・	81
Fig. 70	SD1 出土遺物実測図 (1)・	82
Fig. 71	SD1 出土遺物実測図 (2)・	83
Fig. 72	SD1 出土遺物実測図 (3)・	84
Fig. 73	SD1 出土遺物実測図 (4)・	85
Fig. 74	SD1 出土遺物実測図 (5)・	86
Fig. 75	SD2 平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図・	88
Fig. 76	SD2 出土遺物実測図 (1)・	89
Fig. 77	SD2 出土遺物実測図 (2)・	90
Fig. 78	SD3～7 セクション図・	91
Fig. 79	SD4・6 出土遺物実測図・	92
Fig. 80	SD5・7 出土遺物実測図・	93
Fig. 81	P13・122・124・157・160・171・193・197・210 平面図・エレベーション図・	94

Fig. 82	P122・124・160・171・210出土遺物実測図	94
Fig. 83	II・III層出土遺物実測図	95
Fig. 84	SB1平面図・セクション図・エレベーション図	96
Fig. 85	SB2・3平面図・エレベーション図	97
Fig. 86	SB1・2出土遺物実測図	98
Fig. 87	SK14・P137平面図・セクション図・エレベーション図・P137出土遺物実測図	99
Fig. 88	SK11平面図・エレベーション図	100
Fig. 89	SK11出土遺物実測図(1)	101
Fig. 90	SK11出土遺物実測図(2)	102
Fig. 91	SK11・瓦溜1出土遺物実測図	103
Fig. 92	瓦溜1・I層出土遺物実測図	104
Fig. 93	I層・搅乱層出土遺物実測図	105
Fig. 94	御手洗遺跡周辺の調査と遺跡の分布	148
Fig. 95	柳田遺跡・神田ムク入道遺跡近接地出土遺物実測図	149
Fig. 96	御手洗遺跡屋敷地の変遷(1)	155
Fig. 97	御手洗遺跡屋敷地の変遷(2)	156
Fig. 98	御手洗遺跡と周辺の小字(1)	161
Fig. 99	御手洗遺跡と周辺の小字(2)	162

表目次

Tab. 1	土坑一覧表(弥生時代)	106
Tab. 2	土坑一覧表(古代末～中世・近世・近代)	107
Tab. 3	ピット計測表(弥生時代)	107
Tab. 4	STピット計測表(弥生時代)	108
Tab. 5	ピット計測表(古代末～中世)	108
Tab. 6	SBピット計測表(古代末～中世・近世)	109
Tab. 7～33	遺物観察表	110～136
Tab. 34	弥生土器の器種別出土点数と組成比	145
Tab. 35	壺・甕の口縁部形態と組成比	146
Tab. 36	周辺の調査と遺跡の分布	147
Tab. 37	古代末～中世の掘立柱建物跡計測表	152
Tab. 38	神田の小字と『神田地検帳』の記載(1)	163
Tab. 39	神田の小字と『神田地検帳』の記載(2)	164
Tab. 40	御手洗遺跡出土遺物器種別出土点数と組成比	166
Tab. 41	御手洗遺跡出土遺物用途別出土点数と組成比	166

写真図版目次

巻頭図版1 第1面完掘状況(東より)、P124遺物出土状況

巻頭図版2 SK16遺物出土状況、SK18遺物出土状況

巻頭図版3 弥生土器壺、弥生土器壺、弥生土器高杯、磨製石包丁、中国産青磁碗、中国産白磁壺、中国産黄釉鉄絵洗、京都系綠釉陶器壺

PL. 1	調査区全景	175
PL. 2	完掘状況(第1面)	176
PL. 3	調査区北壁	177
PL. 4	SK5・SK9セクション・礫出土状況	178
PL. 5	SBI-P1セクション・礫出土状況、P122遺物出土状況	179
PL. 6	P124セクション、P124遺物出土状況	180
PL. 7	SD1・2・4、SD4～7	181
PL. 8	SD4、SD5～7完掘状況	182
PL. 9	SD2セクション、SD6・SK9礫出土状況	183
PL. 10	SD7セクション、SD1東部礫出土状況	184
PL. 11	SD1東部、SD1西部セクション	185
PL. 12	SK4・6・10・13セクション、SK4・7完掘状況、SK14、SD3	186
PL. 13	SBI-P7・SB4-P7・SB6-P6柱痕検出状況、SB9-P1・SB8-P3礫出土状況、SB3-P6セクション、P155完掘状況、SB9-P5・P171遺物出土状況	187
PL. 14	SD1遺物出土状況	188
PL. 15	SD1・2遺物出土状況	189
PL. 16	ST1完掘状況・礫出土状況、ST1中央ピットセクション	190
PL. 17	ST2完掘状況、ST4遺物出土状況	191
PL. 18	ST3・4セクション、ST4遺物出土状況	192
PL. 19	ST3・4、ST3・4完掘状況	193
PL. 20	SX1遺物出土状況、SX1完掘状況	194
PL. 21	SX9・SK42遺物出土状況、SX9完掘状況	195
PL. 22	SX9・10・SX9・SK41完掘状況	196
PL. 23	SK16遺物出土状況、SK18遺物出土状況	197
PL. 24	SK18セクション、SK18遺物出土状況	198
PL. 25	SK29遺物出土状況、SK33遺物出土状況	199
PL. 26	SK37遺物出土状況、SK38遺物出土状況	200
PL. 27	SK40遺物出土状況、SK42遺物出土状況	201
PL. 28	石集中1・SK44礫出土状況、SK44遺物出土状況	202
PL. 29	SK15・19・26・27遺物出土状況、SK16・23・24完掘状況、SK17・21・25セクション	203
PL. 30	SK28、SK30・31完掘状況、SK33遺物出土状況、SK35完掘状況・ST2中央ピット礫出土状況、SK39、SK43完掘状況、SD9・SX1・SD9	204
PL. 31	ST3-P5礫出土状況、ST4・SX1・10・SK18・33・37遺物出土状況	205
PL. 32	調査区北壁、調査区風景	206
PL. 33	平成21年度試掘調査(柳田遺跡隣接地)・ST1・4出土遺物	207
PL. 34	ST4・SX1・4・9・10・SK16出土遺物	208

PL 35	SK16出土遺物	209
PL 36	SK18出土遺物	210
PL 37	SK19・25・29・32・33出土遺物	211
PL 38	SK33・35・37・38出土遺物	212
PL 39	SK38・40～42・44・SD9出土遺物	213
PL 40	SD9・SR1・P218・221・236・土器窯2・IV～VI層出土遺物	214
PL 41	V層・SB9・10・SK4・8・9出土遺物	215
PL 42～45	SD1出土遺物	216～219
PL 46	SD1・2出土遺物	220
PL 47	SD2出土遺物	221
PL 48	SD2・4～6・P122・124・171・II・III層出土遺物	222
PL 49	SB2・I・II層出土遺物	223
PL 50	調査区風景（東より）、発掘作業風景	224

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

高知市が事業主体である高知広域都市計画道路事業3・5・66号上町2丁目南城山線は、国道33号線上町2丁目交差点から県道高知土佐線を結ぶ、延長約5.5kmの主要幹線道路である。本路線は市街地南西部から市街地中心部に流入する自動車交通を分散・誘導し、交通渋滞の緩和と交通安全性の向上を図り、沿線地域の主要生活道としての機能も備えるものである。

本路線の工事区間は、柳田遺跡、鷺泊橋付近遺跡、神田ムク入道遺跡の近隣を横断しており、工事予定地内での遺跡の広がりが予想されたことから、平成20年度から23年度にかけて高知市教育委員会が試掘調査を実施してきた。御手洗遺跡は平成22年度に実施した試掘調査によって確認されたもので、平成23年7月に周知の埋蔵文化財包蔵地として新設されたものである。

平成23年3月10日～14日と4月20日～21日に実施した試掘調査では、中世の遺構と遺物を検出し、この結果を受けて、高知県教育委員会の指導のもと、道路建設工事によって影響を受ける範囲について、高知市教育委員会が記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

本調査は平成23年10月11日から平成24年2月10日にかけて実施した。

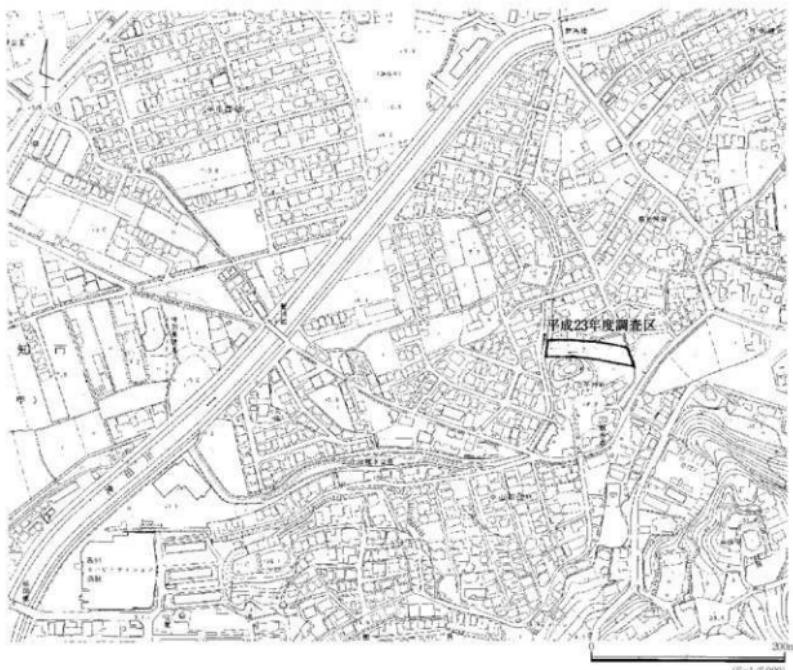


Fig.1 御手洗遺跡調査区位置図

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

御手洗遺跡が所在する高知市は、土佐湾に面した高知県のほぼ中央部に位置する。市域の西部及び北部は東西に山地が連なり、東部の高知平野には浦戸湾が深く入り込んでいる。河川は、鏡川が市の西北部から東流して浦戸湾に注ぎ、南国市北部及び香美市西部域からは国分川が西流し、江ノ口川、舟入川を合わせて浦戸湾に注いでいる。現在の平野部の殆どは古くは内海であったが、その後、河川堆積や隆起、干拓による埋め立てなどによって、近世以降ほぼ現在の状態になったものである。

この平野の堆積には、秩父累帯北帯に源を発する鏡川が多くの役割を担い、さらに周囲の山々より流れ込む久万川、神田川、吉野川などの小河川がそれを部分的に補ったものとみられている。鏡川は多くの支流を集め、高知市鏡、川口付近より水量を増して南進した後、高知市尾立付近から川幅を広げ扇状地を形成している。御手洗遺跡の周辺にもこの扇状地が広がっており、かつての鏡川は低湿地を何度も河道を変えつつ様々に流路を形成していたものと思われる。

御手洗遺跡は、高知市の南部を東西に連なる宇津野山、烏帽子山、柏尾山を含む鷲尾山脈の北側丘陵の先端付近にあり、神田川を北に臨む微高地に立地している。鏡川の一支部である神田川は現在、高知市西部の小丘陵である針木の谷を発した後、東進して現在の高知市朝倉、鶴部、神田地区を流れるが、かつてその河道は一定せず、度々氾濫を繰り返したとみられている。このため神田地区周辺には蛇行する河道路らしい地形が幾筋か認められている。(Fig2・3)

今回の調査区では、弥生時代中期以前の堆積で河砂利と砂からなる河川堆積層が確認されており、これ以前には当地点が河道の一部にあたっていたことが推定される。また、弥生時代後期後半以降、及び古代から中世においても小規模な流路跡を検出している。御手洗遺跡では、様々に河筋を変化させる神田川の影響を受けつつ、微高地に集落が営まれたと思われる。

2. 歴史的環境

御手洗遺跡周辺の平野部には、神田川を隔てて約1km西に柳田遺跡があり、縄文時代後期の包含層から有文深鉢や外面条痕深鉢及びサヌカイトの大型剥片が出土している。また、晩期の包含層からは深鉢、浅鉢のほか磨製石斧、叩石、勾玉といった石器も出土している。柳田遺跡ではこの他にも弥生から古墳時代に至る土坑や流路の遺構、大量の土器をはじめ、木製の農具、建築材、琴柱、梯子さらに馬骨も発見されており、高知市内最大級の遺跡として注目される。さらに当遺跡の約0.8km北の鶴部遺跡では、縄文晚期から弥生後期までの土器・石器類及び竪穴住居跡が検出されている。また南の井城山山腹のケジカ端遺跡からは弥生時代の石包丁・磨製石斧が出土し、同じ尾根筋のシルタニ遺跡からは石包丁が採集されている。さらに南東約750mの独立丘陵北端の神田遺跡でも弥生土器片や石斧が出土しており、神田地区周辺の開発が確認できる。

古墳は近くの独立丘陵や山腹に点在しており、いずれも後期に属する舟岡山古墳、高座古墳、ウグレス山古墳などである。古代の遺跡としては、先に述べた鶴部遺跡で検出された掘立柱建物跡、

柵列、溝跡に集落の存在が推定され、縁軸陶器の出土も特筆される。約250m東の神田ムク入道遺跡では8~9世紀を主とした掘立柱建物跡や土坑群が検出され、県内では地域の拠点的遺跡から限定的に確認される赤色塗彩土師器が出土している。この約800m北西方の加治屋敷遺跡からは、須恵器高杯脚部表採のほか、須恵器蓋・甕などの遺物包含層が確認されている。当地には延喜式内社の郡頭神社があり、これを祀る勢力の存在が想定される。また、鏡川右岸の朝倉、神田地区一帯には良好な条里地割りの遺存が指摘されており、律令制下の開発も広く行われたとみられる。

『和名類聚鈔』によると神田地区は「土佐郡」に属し、「神戸」郷にあたると考えられる。『続日本紀』神護慶雲二(768)年条には「土左国土左郡人神依田公名代等冊一人賜姓賀茂」の記事があり、隣接する「鴨部」郷の地名からも、古代豪族「賀茂氏」との強い関わりが想定される。『東大寺東南院文書』によると、鴨部郷は天平勝宝四(752)年「造寺司牒」の封戸施入記事で「土左郡鴨部郷五十戸」とあり、東大寺の封戸として中央との関わりを有していた。後に、この「五十戸」は香美郡に移つておらず、久安四(1148)年に「土左国百畠 同代米二百六十四石六斗二升以色代如形辨之」とあるのは鴨部郷ではないものの、平安時代末期まで長きにわたり土左に東大寺封戸が存在したことは注目される。

中世の神田地区は、土佐一国の検地の結果を記した『長宗我部地検帳』によると、表題に「土佐郡神田之庄地検帳」〔天正拾六(1588)年成立〕とあり、領主は不明ながらそれ以前に莊園化されていたことを窺わせる。併せて『地検帳』の中には「マトコロヤシキ」(政所屋敷)の小字が記され、莊園支配者の居住地を思わせることもそれを裏付けている。また検地高を記した際の土地の所有者をみると、大半は「地頭分」で他は「八名分」とあり長宗我部氏家臣の給地で、両者は明白に二分されている。これを莊園制下の下地中分の名残とみて、「八名分」が領家分にあたるとの見方もある(『高知市史 上巻』)。検地面積は神田庄全体で八十七町七段余となっている。当地及びその周辺とみられる地名をあげていくと、先にふれた「マトコロヤシキ」をはじめ、「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土ゐヤシキ」「シウケンヤシキ」など在地有力者の居宅を思わせるものが遺り、重要な地域であったことが推察される。

この『地検帳』を廻る時代に当地に住んだ有力者やその支配の様子を具体的に知ることは、資料的な制約から難しい。

信仰面からみると、南に隣接した三所神社は当地の産土神であるが、『地検帳』に「ミタライノ前」「大通寺」「観音堂」の記述はあるものの具体的な所在は確認できない。近世の『南路志』には「三所権現」として記録に現れ、祭神から熊野系の神社とはみられるが、鎮座期の特定は難しい。しかし当地から続く南嶺の峰々には、中世に求聞持院觀正寺が庵を連ねた柏尾山(323m)があり、その東の烏帽子山(358m)山頂には石土神社が鎮座し修験者の活動が看取されることから、これらの影響は想定されよう。当社の境内にも社殿裏に巨岩を含んだ独立丘陵があり、近くを神田川の支流が流れることから、自然崇拜による祭祀が古来よりなされていたことが推察される。

中世城跡では北東約950mに石立城跡、北方約700mに神田旧城跡、南方約300mに神田南城跡、北西約900mに鴨部城跡がある。これらに囲まれる地勢から、戦国時代に『土佐物語』など軍記物に語られるような激しい合戦場となったことも頷ける。城主も変遷を遂げたようで確実なことは不明

である。ただ鏡川を隔てて約2km北西の杓田の地には、この地域を広く領した有力地頭・大黒氏が居り、朝倉・鴨部・神田といった高知市西部にも少なからぬ勢力を及ぼしていたことが推測される。『佐伯文書』（『土佐国叢簡集拾遺』一所引）によると、南北朝期に大黒氏は北朝方に属し、大高坂松王丸ら南朝方と、今の高知城の場所にある大高坂城周辺を主戦場に戦闘を繰り返していたらしい。最終的に勝利し、引き続き有力守護・細川氏との関係を維持しつつ、当地を支配していたものと考えられる。

その他当地に勢力を及ぼしていたらしい有力土豪としては、仁淀川を隔てた高岡郡東部・蓮池を本拠地とした大平氏がある。「土左郡鴨部社棟札」（『土佐国叢簡集』卷四所引）には「鴨部御社大檀那大平山城守国雄永正元年甲子九月十日」の文字があった。この史料から大平氏の支配の様子までは導きだせないが、永正元（1504）年頃に一定の勢力を当地に有していたことは認められよう。

しかし大永七（1527）年には「朝倉庄池内天神社」棟札（『土佐国叢簡集拾遺』卷三所引）に、後に本山氏となる「八木実茂」の棟上げが記されており、この時期には四国山地の懷・嶺北地方から台頭してきた強力な本山氏の勢力が、高知市の平野部に拡大しつつあったことがみてとれる。そして後には土佐唯一の規模をもつ朝倉城を築き、浦戸湾以西の土佐中央部に広く支配を及ぼしている。よってこの城から3km圏にある在来の神田の土豪たちは戦って敗れたか、配下に属し、何とか生き延びる道を選んだものとみられる。

このような時代の流れのなか、中世の土佐で注目すべきは、海上交通の発達とそれに伴う経済の進展である。15世紀に始まる勘合貿易のルートは、当初兵庫から瀬戸内海を経由して関門海峡から東シナ海を渡り、明に向かっていた。しかし応仁の乱以降、貿易船を出していた細川氏が、瀬戸内海西部を制する大内氏と対立するようになると、新たな海路の開拓に迫られた。その結果、細川氏は自らの勢力圏である揖津から四国東部を経て、土佐湾に至り、浦戸から日向の油津を通り、九州南部から東シナ海を渡るルートを利用するようになった。この結果、大陸の産物を扱う埠商人との取引も増え、土佐の人々も少なからず関与し回船商人として各地に渡ったと推測される。なお神田地区は神田川・鏡川を利用して浦戸湾に出ると、浦戸の外港には至便であり、神田の人々もその通商圏にあったものとみられる。そのことは当遺跡から少なからず出土する輸入陶磁器からも窺えるであろう。

なお当地から南西に道をとり標高231mの白土峠を越えると、先にふれた觀正寺（觀音正寺）跡を経て、吾南平野に至る古道が通じており、かつては城下町と豊かな農業地帯とを結ぶ幹道となっていた。

〔参考文献〕

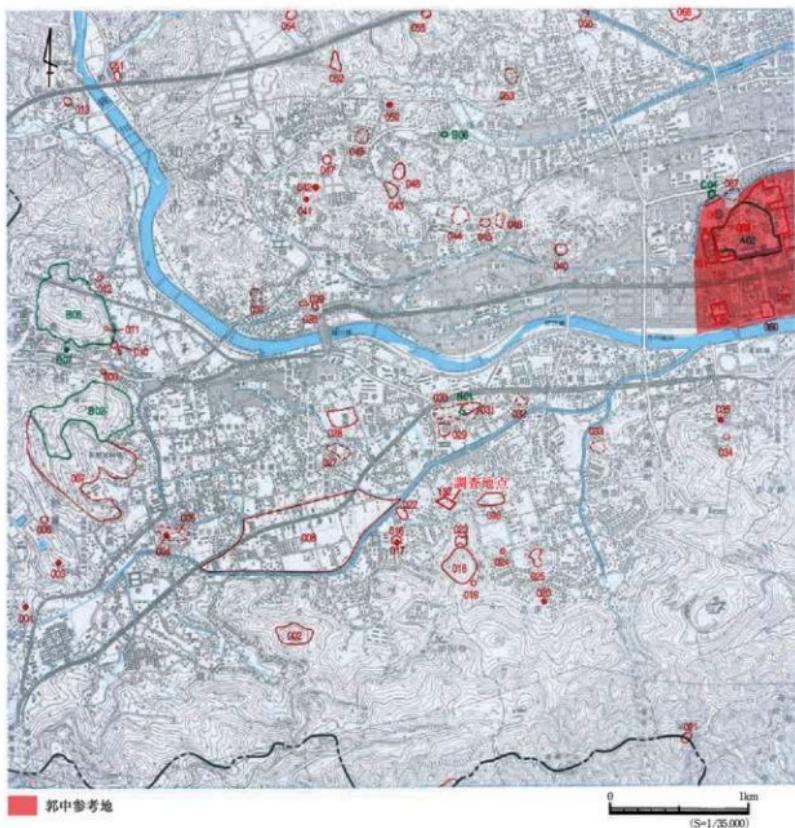
- 『日本の地質8－四国地方』日本の地質 四国地方編集委員会編1991年
『高知県の地名』日本歴史地名大系40 平凡社1983年
『高知市史 上巻』高知市史編纂委員会編1958年
『高知県史 古代中世編』高知県編1971年
荻慎一郎・森公章・市村高男・下村公彦・田村安興『高知県の歴史』山川出版2001年
大脇保彦「土佐の条里—その復元再考と補説」『高知の研究 第2巻』清文堂1982年
『柳田遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1994年
『鷦部遺跡』高知市教育委員会2002年
『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2005年
『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2012年



Fig.2 高知市航空写真 (昭和22・23年撮影)



Fig.3 高知市航空写真（昭和34年撮影）



都中参考地

(S=1/35,000)

No.	道路名	時代	No.	道路名	時代	No.	道路名	時代
152	御手洗遺跡	弥生・中世	026	神田ムク入道跡	弥生・中世	051	尾立道跡	古代～中世
001	鷺山古墳	古墳	027	鶴郡城跡	中世	052	中の谷道跡	弥生
002	夷美山跡	中世	028	加治原遺道跡	古代～中世	053	高武保宇城跡	中世
003	行呂古墳古墳	古墳	029	鶴郡道跡	弥生・古代	054	舟ヶ谷道跡	縄文～弥生
004	ワカルス山古墳	古墳	030	神田山城跡	中世	055	福井丹道跡	縄文～中世
005	鶴来山城跡	中世	031	能条山城跡	近世	056	月初道跡	弥生
006	明曾城山第2遺跡	弥生	032	石丸城跡	中世	060	南朝原牧跡	近世
007	朝曾原山道跡	弥生	033	久寿原ノ丸道跡	弥生～中世	061	中島町道跡	古墳
008	伊吹山遺跡	縄文～古墳	034	小石川道跡	近世	063	大木山城跡	中世
009	野中山遺跡	江戸	035	大山古墳	古墳	064	印口道跡	近世
010	朝曾原村	後代	036	印田城跡	中世	066	尾口堂跡	近世
011	木沢山遺跡	古代～	038	上本宮道跡	弥生	067	安東寺山城跡	中世
012	朝曾原山道跡	後代	039	印田清野跡	古墳	068	安東寺山城跡	中世
013	田子谷古跡	古代～	040	井口城跡	中世	146	高知城伝下屋敷跡	古墳～近世
016	寺岡山道跡	弥生	041	塚の原1号墳	古墳	149	金子橋道跡	近世
017	寺岡山古墳	古墳	042	塚の原2号墳	古墳	151	西弘小路道跡	近世
018	神田山城跡	中世	043	高知字御茶道跡	弥生～古代	A 02	高知城跡	近世
019	アガラ城道跡	弥生	044	福井西城跡	中世	B 01	能条山城跡	近世
020	高柳古墳	古墳	045	福井中央城跡	中世	B 02	朝曾城跡	中世
021	斐庭城跡	中世	046	福井元尾城跡	中世	B 05	赤鬼山	
022	斐庭城跡近道跡	弥生～中世	047	横内道跡	弥生	B 06	東村雅治城跡	近世
023	シルタニ遺跡	弥生・古代	048	からとじ道跡	弥生	B 07	朝曾古跡	古墳
024	高神道跡	古墳・古代	049	寺田別城跡	中世	C 04	寺田寅資邸跡	明治
025	神田道跡	弥生～中世	050	福井古墳	古墳			

*No.は高知県道路地図による。

Fig.4 御手洗遺跡及び周辺の遺跡

第三章 試掘調査

1. 試掘調査の方法

試掘調査は平成20年度から23年度にかけて実施した。調査は上町2丁目南城山線道路建設工事予定地と関連工事予定地のうち、埋蔵文化財包蔵地とその近隣にかかる7地点（約5,234m²）を対象とし、5×5mと3×3mの試掘坑22箇所を設定した。（Fig.7 - TP1～22）調査にあたっては、重機と人力作業で掘削を行い、遺構、遺物の検出、堆積層の確認を行った。

2. 試掘調査の成果

（1）平成20年度調査

①柳田遺跡隣接地（高知市朝倉字栄田19-1他）

3箇所の試掘坑（TP3～5）を設定した。各試掘坑とともに、現耕作土直下にて、古代～中世の遺物を含むシルト層（II層）を検出している。その下位（標高5.0m以下）では粘土層（III・V層）と砂礫層（IV層）が厚く堆積しており、V層には部分的に木屑や炭化物が含まれる。（Fig.6 - TP3）

III～V層とも遺物、遺構は確認できなかった。

（2）平成21年度調査

①鷲泊橋付近遺跡隣接地（高知市鷲部字屋根添1017-3・1018-3）

2箇所の試掘坑（TP6・7）を設定した。各試掘坑とも近現代の整地層が厚く、その下位にて粘質シルト層（II層）、砂層（III層、標高4.6m以下）、粘土層（IV層）が堆積する。（Fig.6 - TP6）

遺物はII層から近世陶磁器と土師質土器小皿が出土している。III～IV層では遺物、遺構とも確認できなかった。

②柳田遺跡隣接地（高知市朝倉字栄田24-1・24-7）

2箇所の試掘坑（TP1・2）を設定した。各試掘坑とも現耕作土と近現代の整地層（I層）の下位にて、粘質シルト層（II層、標高5.6～5.3m前後）、シルト質粘土層（III-1層、標高4.7～5.3m前後）、粘土層（III-2層）、シルト質粘土層（III-3層）が堆積する。（Fig.6 - TP1・2）

このうち、II層は古代の遺物包含層にある。試掘坑TP2では、II層最上位で検出した土器溜りから、土師器杯（4～6）、皿・甕、須恵器杯・皿・蓋（7）・甕などが出土している。

III-1層は古墳時代の遺物包含層である。試掘坑TP1では、III-1層の上位にて、南北長1m深さ32cmの遺構SX1を検出し、ここから小型丸底壺（1）がほぼ完形の状態で出土している。また、TP2では、III-1層の下位から完形の土師器高杯（2）、須恵器甕（3）が出土している。（Fig.5）

（3）平成22年度調査

①神田ムク入道遺跡隣接地1（高知市神田字青木408-1他）

3箇所の試掘坑（TP16～18）を設定した。平成23年度本調査区の西に接する本地点では、近現代の整地層と旧耕作土層が表土下12mまで及んでいる。（Fig.6 - TP18）

中世の遺構と遺物包含層は検出できなかった。

②神田ムク入道遺跡隣接地2（高知市神田字祝言屋敷、御手洗374-2他）

3箇所の試掘坑 (TP13～15) を設定し、各試掘坑で中世～近世の遺構を検出した。本地点は平成23年度本調査の対象範囲に該当する。

(4) 平成23年度調査

①御手洗遺跡 (高知市神田字御手洗368・371)

3箇所の試掘坑 (TP10～12) を設定し、各試掘坑で中世～近世の遺構を検出した。本地点は平成23年度本調査の対象範囲に該当する。

②御手洗遺跡隣接地 (高知市神田字御手洗359～23)

2箇所の試掘坑 (TP8・9) を設定した。平成23年度本調査区の西に接する本地点では、現代の整地層（I層）の下に、近現代の遺物と木片、植物等を含むシルト質粘土層（II層）が深く堆積する。近世以前に遡る遺構、遺物は検出できなかった。

③柳田遺跡 (高知市朝倉字糀原甲69～2他)

4箇所の試掘坑 (TP19～22) を設定した。本地点では、現耕作土層の直下にて、シルト層（II層）、砂礫層（III層）を確認した。(Fig.6 - TP19・21) III層は自然流路に関わる堆積層とみられるもので、同層の下位から弥生時代又は古墳時代の土器片が少量出土し、この時期には当地点が流路の河筋にあたっていたことが推察される。

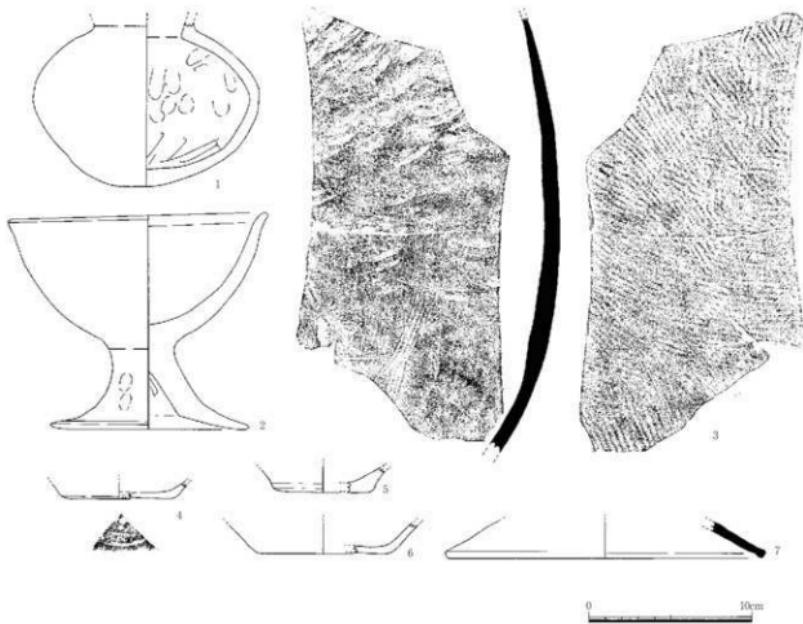
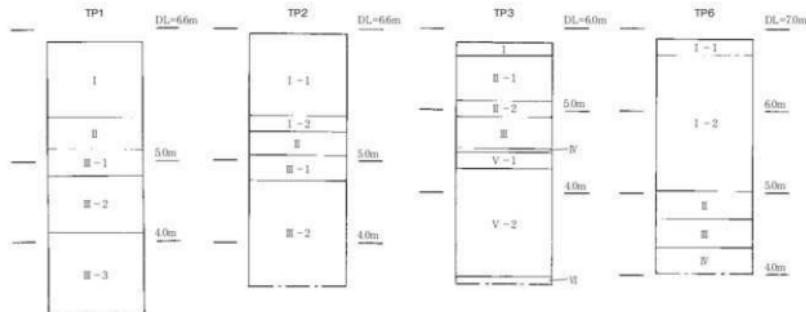


Fig.5 柳田遺跡隣接地試掘調査 TP1・2出土遺物実測図 (TP1:1, TP2:2～7)

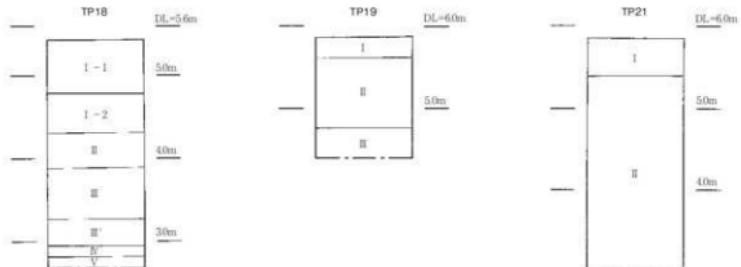


I層 : 10YR4/3L.4L+黃褐色シルト
II層 : 10YR4/3L.4L+黃褐色シルト
III-1層 : 3Y5/1灰褐色シルト質粘土
III-2層 : 3Y4/1灰褐色粘土 (灰化物を含む。)
III-3層 : 3Y5/1灰褐色シルト質粘土

I-1層 : 75YR4/4褐色シルト
I-2層 : 75YR3/2黒褐色シルト
II層 : 10Y5/3灰褐色粘質シルト
III-1層 : 3Y5/1灰褐色粘土
III-2層 : 3Y4/1灰褐色粘土

II-1層 : 10YR4/4L.5L+黃褐色シルト
II-2層 : 10YR5/4L.5L+黃褐色シルト
III層 : 10YR4/3L.4L+黃褐色粘質シルト
V-1層 : 10YR6/2灰黃褐色粘土
V-2層 : 10YR6/1灰褐色粘土

I-1層 : 10YR4/3L.4L+黃褐色シルト
I-2層 : 10YR3/1黒褐色シルト
II層 : 5Y5/1灰褐色粘質シルト
III層 : 5Y4/1灰色砂
IV層 : 5Y4/1灰褐色粘土



I-1層 : 10YR4/3L.4L+黃褐色シルト
I-2層 : 10YR4/4L.5L+黃褐色シルト
II層 : 10Y5/3灰褐色粘質シルト
III層 : 10YR5/7鵝灰色シルト質粘土
IV層 : 10YR5/2K黃褐色シルト質粘土 (木片・植物遺体を多く含む。)
V層 : 10YR4/1鵝灰色粘土 (時に粘質シルトが混じる。)



Fig.6 TP1～3・6・18・19・21土層柱状図

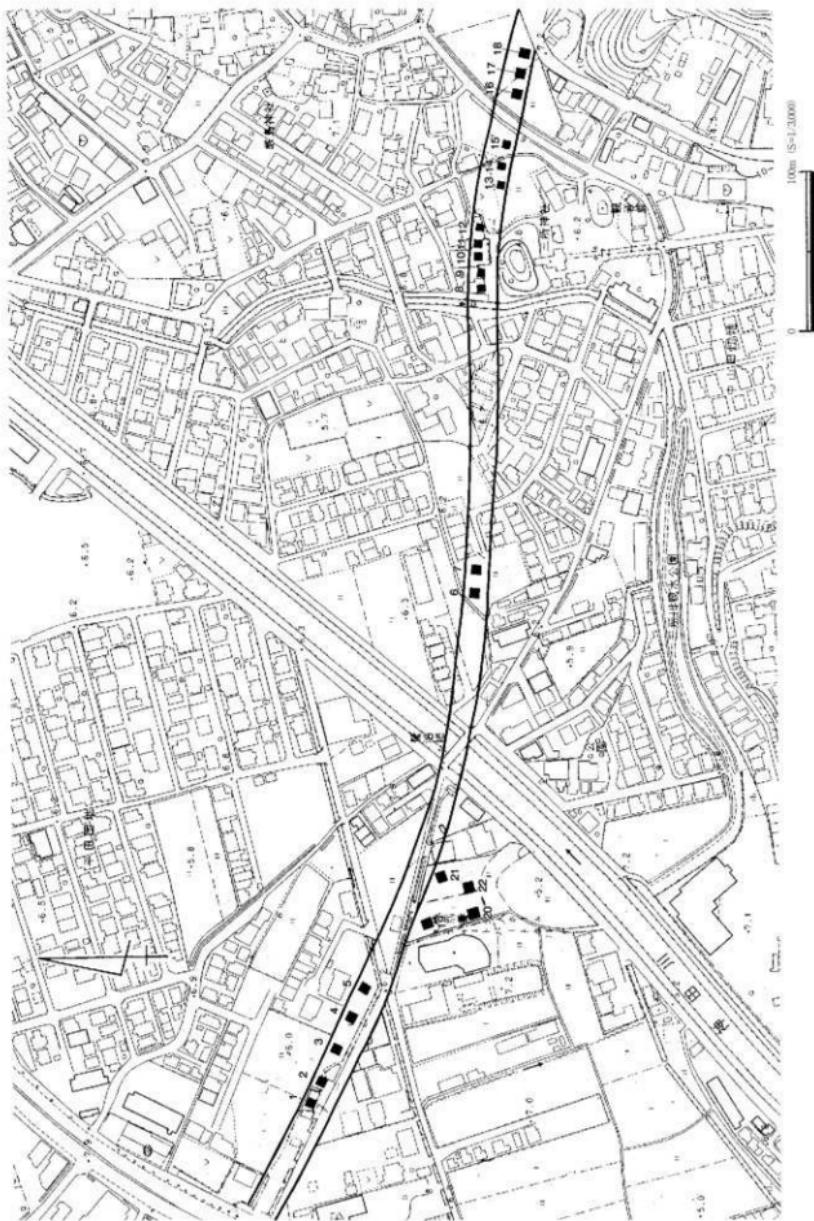


Fig.7 平成20～23年度試掘調査試掘坑配置図

第IV章 調査の方法

本調査対象地は耕作地となっており、中世・近世の遺構検出面は現耕作土の直下であった。作業は、重機によって表土と現耕作土層を除去し、その後、人力による遺構検出と遺構掘削を行った。遺構検出は、中世の遺物包含層の直下にあたるⅢ層上面、弥生時代の遺物包含層であるV層の2面にて行った。

検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層図と平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の測量については、世界測地系公共座標に基づく $4 \times 4\text{m}$ の方眼区画を設定し、それをもとに実測を行った。平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。

水準については、高知市神田字祝言屋敷に設定された4級基準点を使用した。また、都市再生街区基本調査により設定された基準点を利用して多角測量を行い、調査対象地内にて座標を測定した。



Fig.8 調査区風景

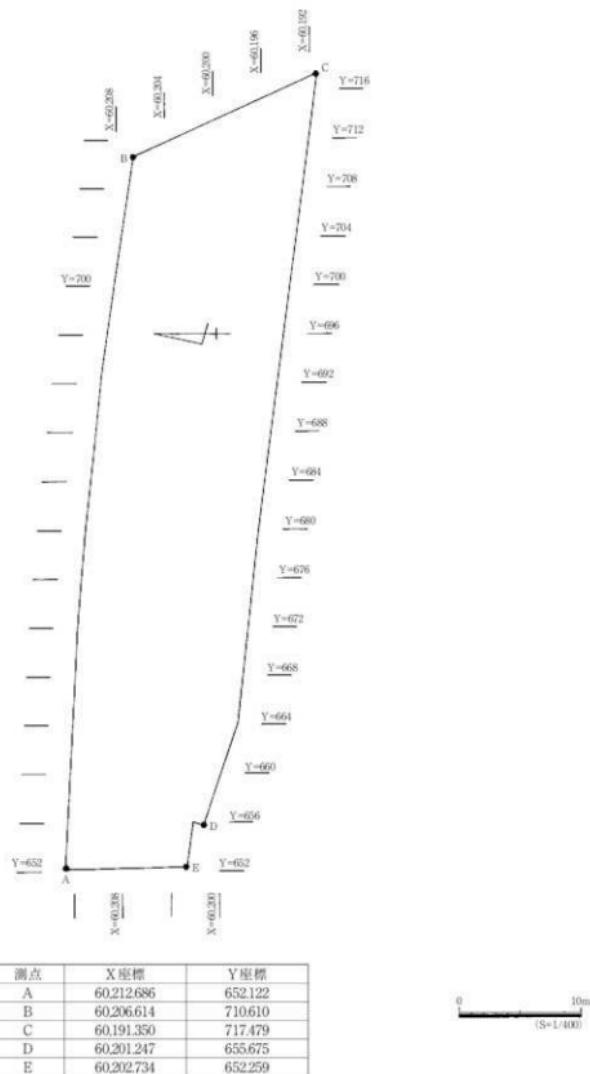


Fig.9 調査区位置図

第V章 調査の成果

第1節 基本層序

基本層序は調査区の北壁と南壁にて観察した。堆積層は次の通りである。(Fig.10～12)

I層: 10YR5/6黄褐色シルト

II層: 10YR4/2灰黄褐色シルト

III-1層: 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト、III-2層: 10YR5/4にぶい黄褐色シルト質砂

III-3層: 10YR5/4にぶい黄褐色砂、III-4層: 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫

IV-1層: 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト、IV-2層: 10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土

IV-3層: 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、IV-4層: 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト

V-1層: 10YR5/1褐色灰色シルト質粘土、V-2・3層: 5Y5/1灰色シルト質粘土

VI層: 5Y5/1灰色砂質シルト

VII-1層: 10YR5/3にぶい黄褐色礫、VII-2層: 5Y5/1砂礫

I層は表土と現代の耕作土層、II層は古代末～近世の遺物包含層である。II層は後世の削平が著しく、調査区の多くの箇所で耕作土直下がIII層上面となり、ここが古代末～中世・近世の遺構検出面にあたっている。

III層は砂質シルトを基調とし、部分的に砂層(III-2・3層)と砂礫層(III-4層)が入る。III層の多くは無遺物であるが、上位から古代末～中世の遺物が僅かに出土している。

IV層は粘質シルトを基調とするもので、部分的にシルトやシルト質粘土となる。IV層は弥生時代中期～後期の遺物包含層にあたる。V-1・2層もシルト質粘土層で、弥生時代中期から後期初頭の遺物を含む。VI層は砂質シルト層で弥生時代中期の遺物を含んでいる。

VII-1・2層は砂層と礫層からなる河川堆積層で、出土遺物は確認できていない。

各層の堆積状況によると、本調査区にVII層が堆積する弥生時代中期以前には、当地域は北方を蛇行して流れる河川(鏡川の支流にあたる現在の神田川)の影響を強く受ける環境下にあり、進路を様々に変えた支流の河筋にあたっていたとみられる。IV・V層の堆積が進んだ弥生時代中期後半には、本調査区付近は安定した立地環境に移ったとみられ、弥生時代の遺構群が出現し始める。

また、調査区の西側では、流路の一部とみられる砂礫層(SR1)を検出している。(Fig.10) 同層は弥生時代の遺物包含層であるIV層を切り、SR1上位から弥生時代後期後半の甕(328)が出土することなどから、この時期には流路は調査区の西側に移っていたことが窺われる。

統いて遺構が増加するのは、II・III層の堆積が進んだ古代末～中世である。該当期の遺構はII層からIII層上位にかけて掘削されているが、浅いものが多く、特に調査区北西部では著しく削平されていた。このため当時の生活面は東西間でも高低差があったと推定される。

調査区北壁 (1)

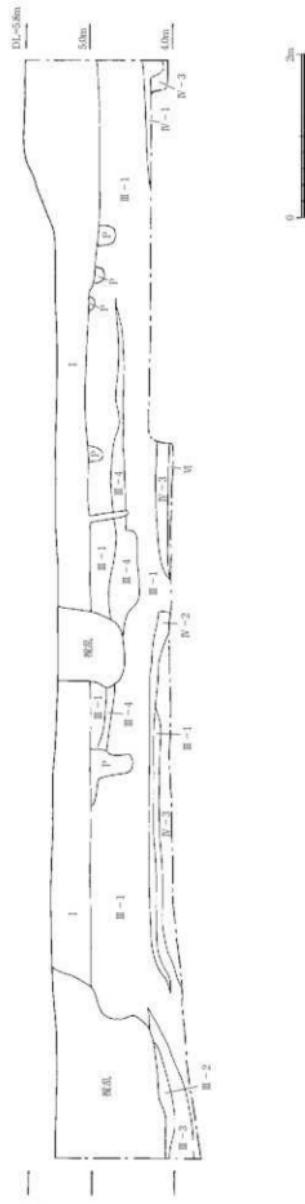
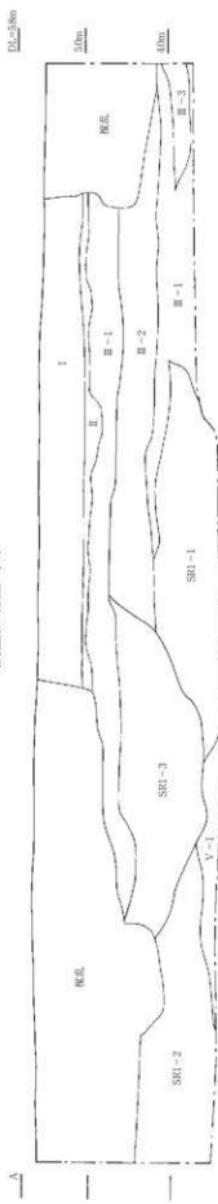
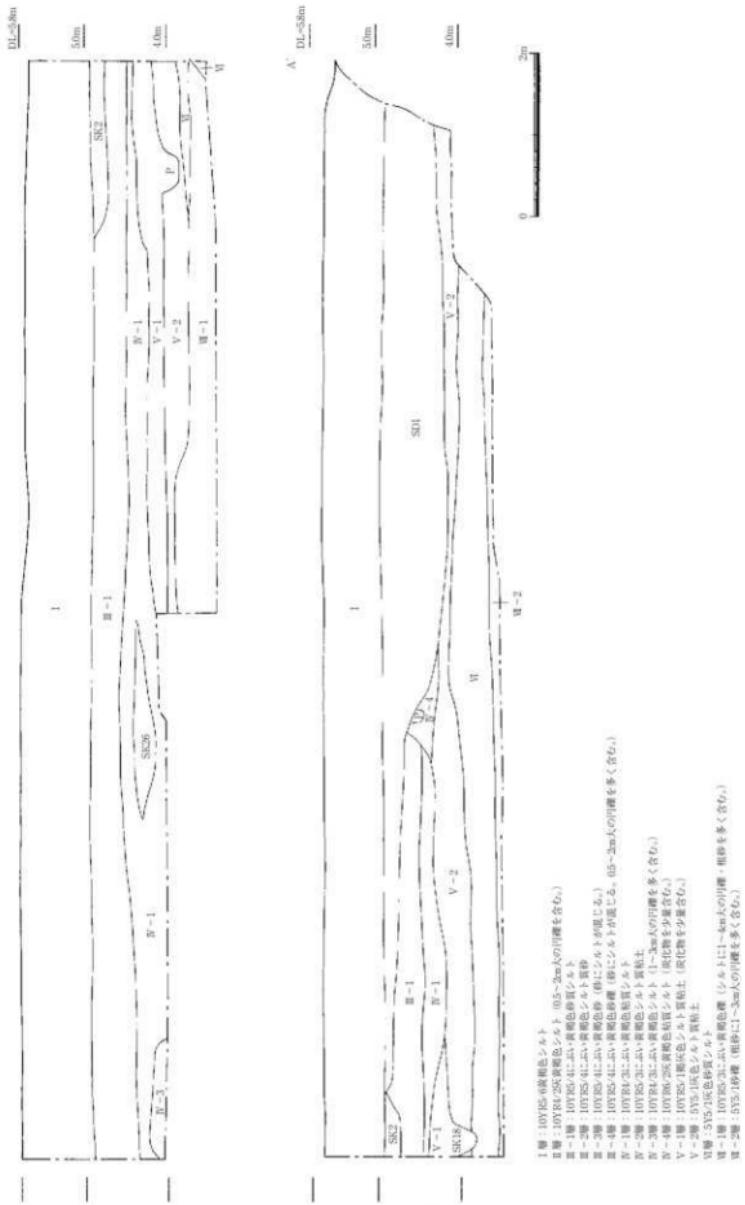


Fig.10 基本層序 (1)

調査区北壁 (2)



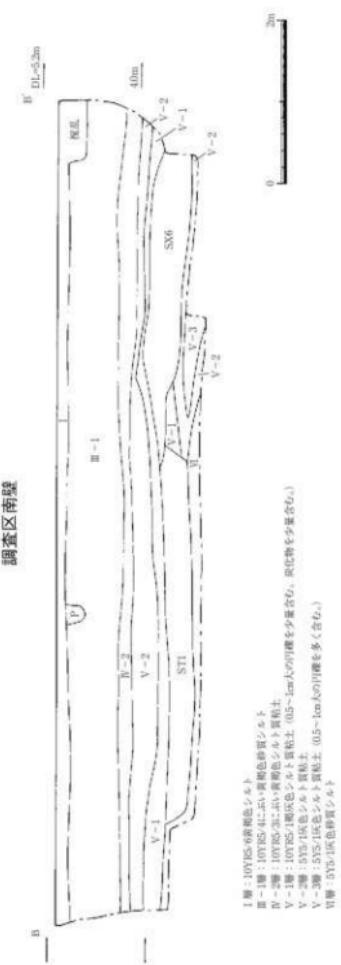


Fig.12 基本層序 (3)

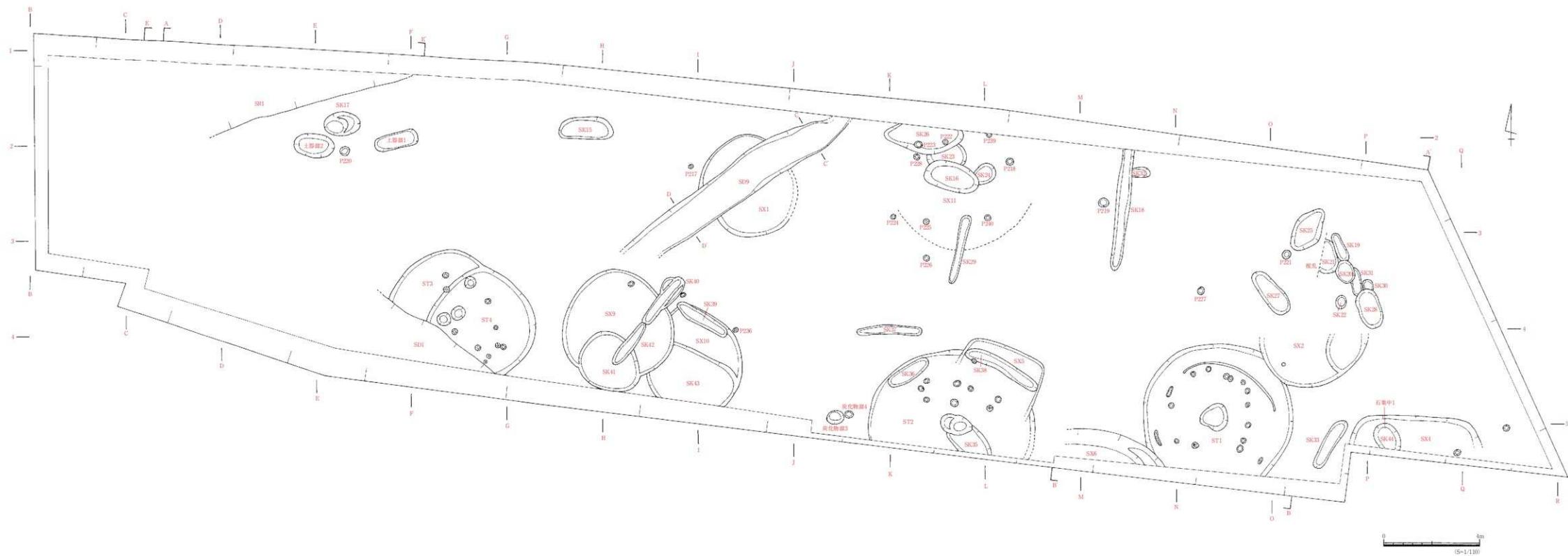


Fig.13 検出遺構全体図(弥生時代)

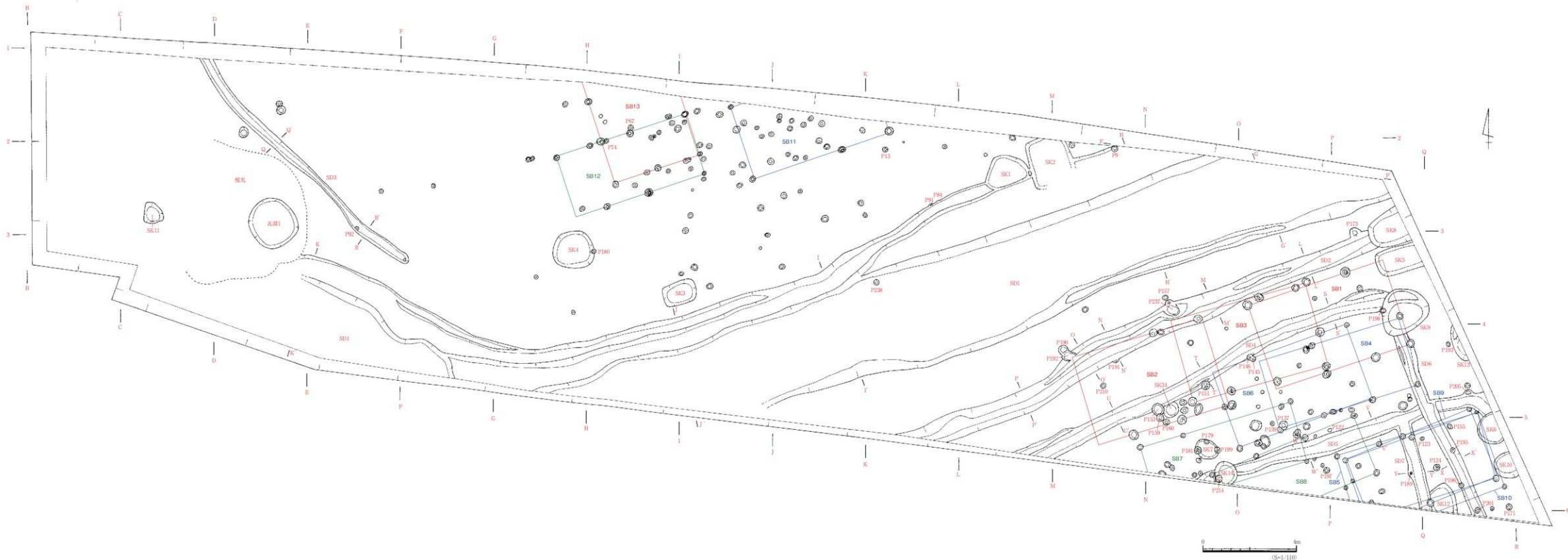


Fig.14 検出遺構全体図（古代末～中世・近世・近代）

第2節 遺構と遺物

1. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、堅穴住居跡4棟、堅穴状遺構6基、土坑29基、ピット15個、その他に性格不明遺構、炭化物溜り、溝状遺構を検出した。

堅穴住居跡とこれに類似した形態と規模をもつ堅穴状遺構は、何れも弥生時代中期（IV様式）に属する。その他の遺構も多くが該当期のもので、調査区の東部から中央部にかけて分布している。本調査区ではこれに先行する段階の遺構も確認されており、III様式に属する土坑SK16・23・24・32・35・41を検出した。

弥生時代後期の検出遺構としては、調査区東部でSK27・P221を検出しているが、該当期は検出遺構、遺物ともに極めて少ない。調査区の北西部では弥生時代後期後半の遺物を含む自然流路跡が確認されており、この時期には集落の中心は他に移っているとみられる。

遺構検出面は弥生時代の遺物包含層にあたるIV層中位～V層上面であり、標高4.0～4.2m前後を測る。

(1) 堅穴住居跡・堅穴状遺構

ST1 (Fig.15)

調査区南東部に位置する堅穴住居跡で、ST2の東に隣接する。他遺構との切り合い関係では、SX6に切られている。また直接的な切り合いはないが、SX2の下面で検出されており、ST1が先行する。

ST1の南部は調査区外となるが、平面形は円形とみられ、規模は径6.30m、深さ24～32cmを測る。埋土は黄灰色粘土で、下層には炭化物が多く含まれている。また、床面では内側を巡る幅9～12cm深さ1～6cmの壁溝を検出しておらず、住居の拡張が行われたことが分かる。壁溝の検出プランからみて、1次住居の規模は径4.9m前後とみられ、その後、2次住居への拡張が行われている。

中央ピットは1基を検出し、規模は径120×113cm、深さ18～24cmを測る。埋土は黄灰色粘土で炭化物を多く含んでいる。その他のピットは床面にて12個を検出した。規模は径15～25cm、深さはP1～4が26～35cm、P5～7・9・11・12が10～23cm、P8・10が5～6cmを測る。埋土は褐灰色粘土又は黄灰色粘土で、P1～5・10では炭化物が多く含まれている。1次・2次住居の柱穴の特定はできなかったが、位置関係や規模などからみてP1・2・4が2次住居の主柱穴になる可能性が考えられる。

出土遺物は壺、甕、高杯であり、口縁部点数にして壺1点、甕又は甕1点、高杯1点、底部点数にして甕又は甕8点、高杯1点が出土している。この他、床面からは径25～30cm大で上面が平坦に摩耗した台石状の礫2個が出土している。

図示したものは壺(8～10)、高杯(11・12)、底部(13～19)、叩石(20)である。12は高杯の脚部で、粘土板充填による杯底部が剥離している。20は砂岩製の叩石で両先端に敲打痕が残る。

ST1は弥生時代中期末（IV-2様式）に位置付けられる。

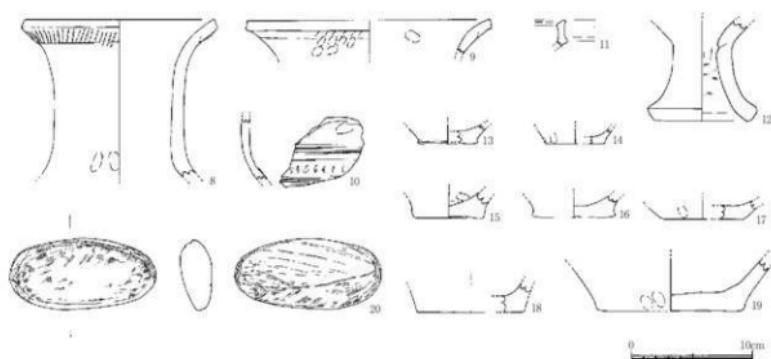
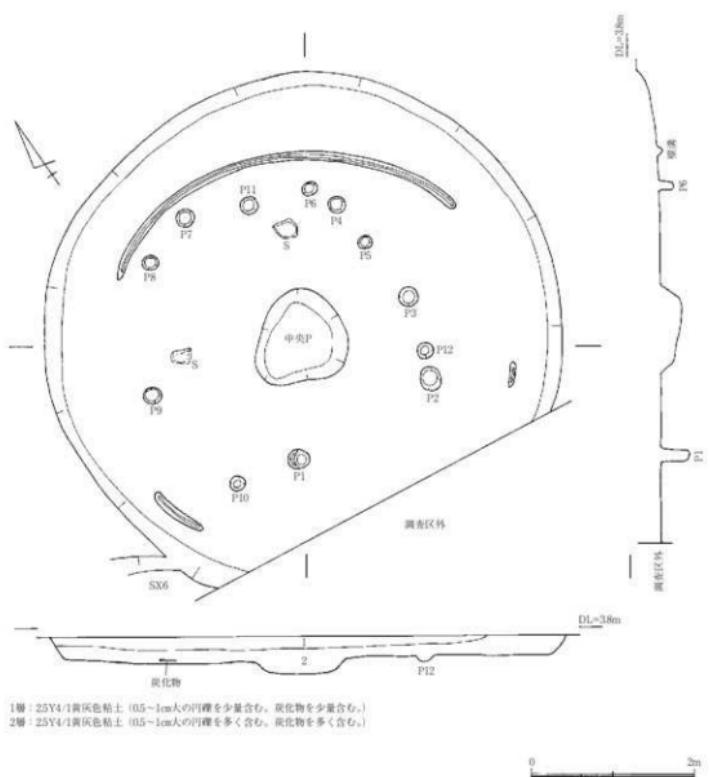
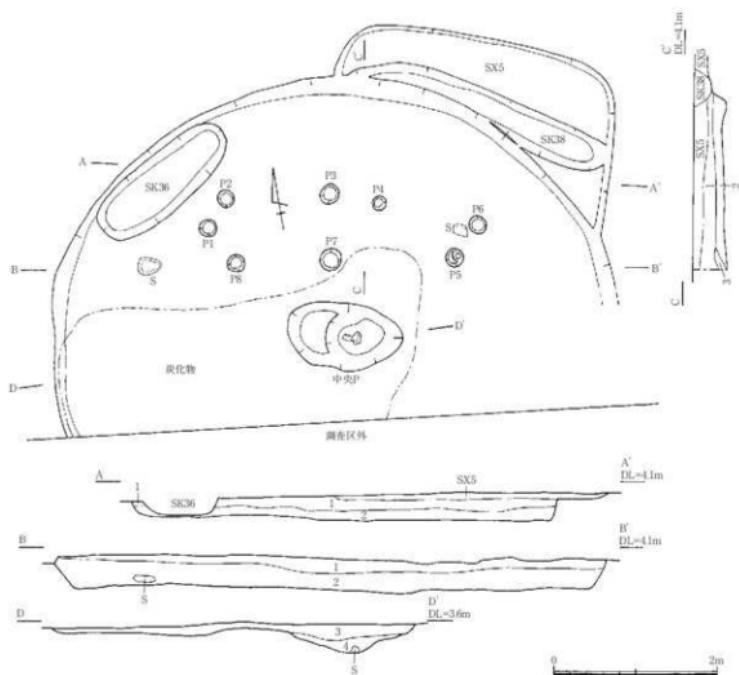


Fig.15 ST1平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図



1層: 10YR4/1褐色灰色シルト質粘土 (0.5~1cm大の角礫・円礫を多く含む。炭化物を多く含む。)

2層: 10YR5/1褐色灰色シルト質粘土 (0.5~1cm大の角礫・円礫を多く含む。炭化物を多く含む。)

3層: N3暗褐色粘土 (0.5~1cm大の角礫・円礫を多く含む。炭化物を多く含む。)

4層: N4灰色粘土 (0.5~1cm大の角礫・円礫を多く含む。炭化物を多く含む。)

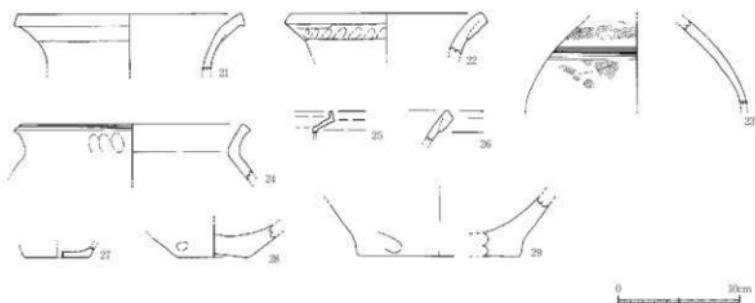


Fig.16 ST2平面図・セクション図・出土遺物実測図

ST2 (Fig.16)

調査区南部に位置する竪穴住居跡で、ST1の西に隣接する。他遺構との前後関係では、SK35を切り、SX5・SK36・38に切られている。

南部が調査区外にあり南東部の壁が未検出であるが、径6.9～7.0m前後の大型の円形住居とみられ、深さは38cmを測る。埋土は褐灰色シルト質粘土で炭化物を多く含んでいる。また南部の床面には暗灰色粘土からなる炭化物溜りが広がっている。

中央ピットは楕円形で、径142×82cm、深さ28cmを測り、埋土中に炭化物を多く含んでいる。柱穴は床面にて8個を検出し、規模は径16～25cm、深さはP1が36cm、P2が43cm、P4が24cm、P5が22cm、その他が13～20cmである。埋土は何れも褐灰色シルト質粘土で、このうちP1・2・5からは炭化物が多量に出土し、P5では柱痕を検出している。主柱穴は特定できていないが、複数の同心円上にピットが広がる様子が認められるため、数度の建て替えがあった可能性が考えられる。

出土遺物は壺、甕で、口縁部点数にして壺3点、甕2点、壺又は甕4点、底部点数にして壺又は甕7点が出土している。このうち壺・甕では、粘土帶貼付口縁(21・22・26)が6点、凹線文を施すもの(24)が2点、口縁を上方に拡張させるもの(25)が1点含まれる。この他、西部の床面からは径30cm大で上部が扁平な台石状の礫が出土している。

図示したものは壺(21～23・26)、甕(24・25)、底部(27～29)である。23は壺で、上胴部に乱れた細かい櫛描波状文と櫛描直線文が施される。

ST2は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

ST3 (Fig.17)

調査区南西部に位置する竪穴住居跡である。切り合い関係では、ST4の上面を切り、南部が中世の溝SD1に切られている。平面形は円形又は楕円形とみられ、東西長5.31m、南北残存長3.09m、深さ12～20cmを測る。埋土は褐灰色シルト質粘土で炭化物を少量含んでいる。

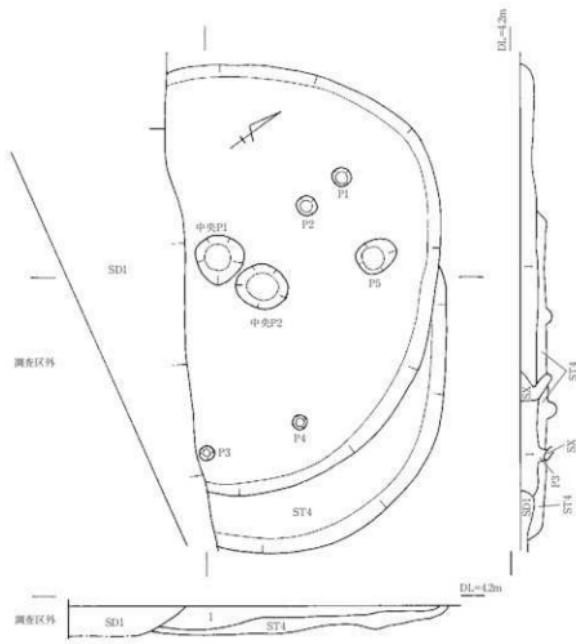
中央ピットは2基を検出している。規模は中央P1が径62×56cm、深さ24cm、中央P2が径55×54cm、深さ16cmを測る。埋土はともに褐灰色シルト質粘土で炭化物を多く含んでおり、中央P1の床面には炭化物が溜っている。

ピットはP1～5を検出した。このうちP1～4は径15～24cm、深さ12～15cmを測る。埋土は何れも褐灰色粘土で、炭化物を少量含んでいる。P5は径50×40cm、深さ24cmと大型で、褐灰色粘土に炭化物が多く含まれる。P5の埋土中からは20cm大のチャート礫2個と30cm大の緑色岩の円礫1個が出土している。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯である。土器は口縁部点数にして甕1点、壺又は甕2点、鉢1点、底部点数にして壺又は甕4点、高杯の脚部2点が出土している。このうち壺・甕では、粘土帶貼付口縁のタイプが1点、凹線文を施すタイプ(30)が1点、素口縁(31)が1点含まれる。

図示したものは壺(30・31)、底部(32・33)、高杯(34)である。

ST3は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。



1層：10YR5/1褐色灰色シルト質粘土（0.5～1cm大の角礫・円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
SX：10Y5/1灰色粘土（砂が混じる。）

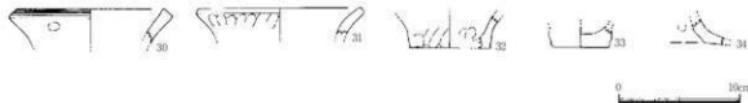


Fig.17 ST3平面図・セクション図・出土遺物実測図

ST4 (Fig.18~20)

調査区南西部に位置する竪穴住居跡である。切り合い関係では、ST3に上面を切られ、南部が中世の溝SD1に切られている。検出規模は東西長4.23m、南北残存長3.33m、深さは22~36cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は斜め上方に立ち上がっている。埋土は1層が褐色シルト質粘土で、炭化物を多く含む。2層は東部から北部にかけて床面に広がる炭化物溜りである。2層には多量の炭化物とともに焼土粒が含まれ、多量の土器片が出土している。また、北壁付近で検出した4層には炭化物とともに焼土ブロックが多く含まれる。

ピットはP1~6を検出した。規模はP1・2・4~6が径18~24cm、深さはP2が28cm、P1・4~6が6~13cmを測る。P3はST3の中央ピットによって削平されており、径15cm、ST4床面から復元した深さは29cmとなる。中央ピットは確認できなかった。

出土遺物は壺、甕、高杯、石包丁、砥石である。出土点数は口縁部点数にして壺3点、甕8点、壺又は甕2点、高杯3点、底部点数にして壺・甕11点、高杯5点である。このうち壺・甕では、粘土帶貼付口縁(38・41・44)が5点、凹線文を施すもの(35・36・46・47)が6点、口縁を拡張させるものの(37・48)が2点含まれる。

図示したものは壺(35~37・39・40)、甕(41~48)、壺又は甕(38)、高杯(49~54)、底部(55~62)、石包丁(63・64)、叩石(65)、砥石(66)である。41~45は南四国型甕である。52~54は高杯の脚部で、外面に数条のヘラ描き沈線を巡らせ、下段に3本を1単位とする縦方向の沈線を配する。52・54は脚端部に凹線文を施す。51は高杯杯部の粘土充填部分が剥離したのか。63・64は頁岩製の磨製石包丁。65は砂岩の円彫を叩石に使用したもので、中央部両面と側面に敲打痕が残る。66は砥石で、鉄器を研いだとみられる条痕が残る。

SX1 (Fig.21)

調査区北部に位置する竪穴状の遺構である。他遺構との切り合い関係では、SD9に切られている。また東壁付近は流路又はIV層の堆積によって削平されており、東部のプランが未検出である。平面形は橢円形を呈し、床面はほぼ平坦である。検出規模は長軸4.34m、短軸3.64m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色質シルトである。柱穴と中央ピットは検出できていない。

出土遺物は壺、甕、石包丁未製品で、土器は口縁部点数にして壺8点、甕11点、壺又は甕3点、底部は3点が出土している。このうち壺と甕では、粘土帶貼付口縁(67~71・73)が8点、凹線文を施すもの(76・77)が2点、口縁端部を拡張させるもの(74・75・79)が6点、素口縁(78)が6点含まれている。また、床面の中央部付近からは径30cm大の礫が出土している。

図示したものは壺(67~72・81・83)、壺か(82)、甕(74~78)、壺又は甕(73・79・80)、底部(84~86)、石包丁未製品(87)である。82はⅢ様式の壺の体部片とみられるもので、外面に半截竹管状の原体による連続刺突文又は櫛描籠状文を施している。87は頁岩製で、磨製石包丁の未製品とみられる。

SX1は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

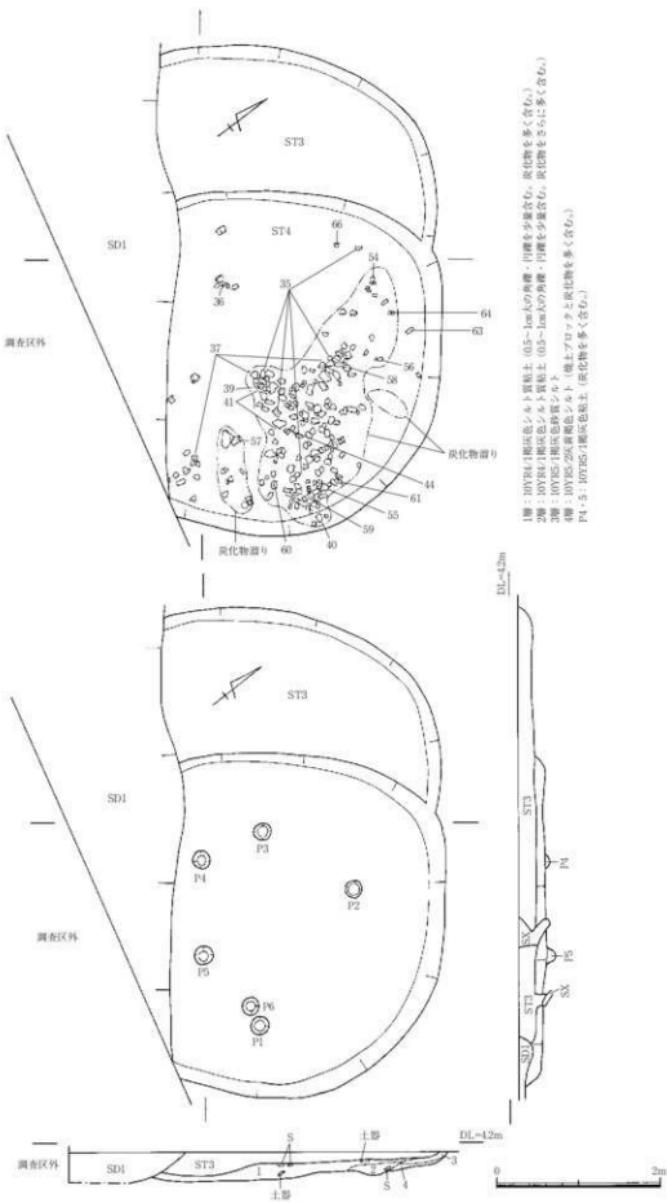


Fig.18 ST4平面図・セクション図・遺物出土状況図

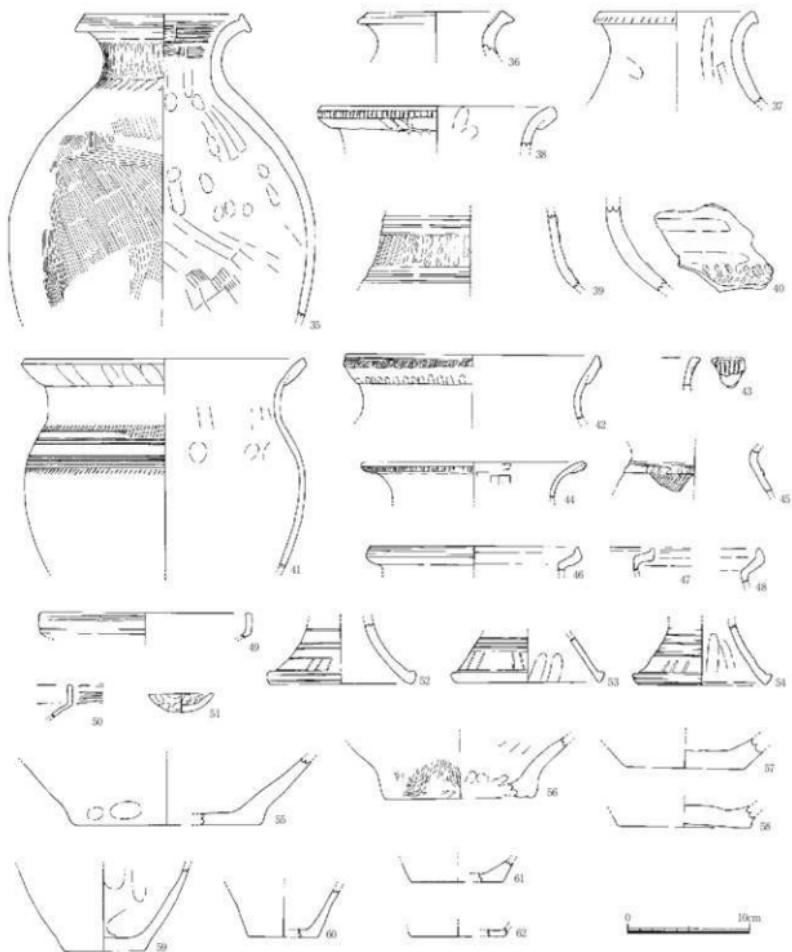


Fig.19 ST4出土遺物実測図(1)

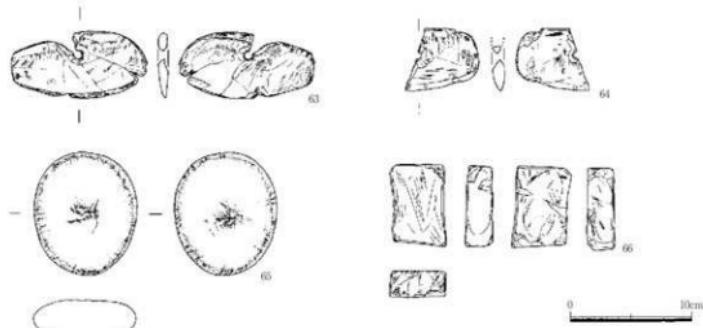


Fig.20 ST4出土遺物実測図 (2)

SX2 (Fig.22)

調査区東部に位置する堅穴状の遺構である。遺構の直接的な切り合いは無いが、ST1の上面で検出しておき、SX2が後続する。北側のプランは未検出であるが、東西検出長4.50m、南北残存長1.94m、深さ18~22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質粘土である。柱穴と中央ピットは検出できていない。

遺物は壺の口縁部(88)1点と体部片(89)が出土している。89は断面三角形の小突帯を巡らせ下端に円形浮文を貼付する。

SX2は弥生時代中期末(IV-2様式)に位置付けられる。

SX4 (Fig.22)

調査区南東部にて検出した堅穴状の遺構である。遺構の直接的な切り合いは無いが、SK44の上面で検出しておき、SX4が後続する。北側の一部を検出したのみであるが、SX1・2に類似した堅穴状の遺構であった可能性がある。検出規模は東西長5.37m、南北確認長1.06m、検出面からの深さは14cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は斜め上方に立ち上がっている。埋土は灰黄褐色シルト質粘土である。柱穴と中央ピットは検出できていない。

出土遺物は南四国型の壺(90)と体部片である。

SK44との前後関係からみて、SX4は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SX5 (Fig.23)

調査区南部にて検出した堅穴状の遺構で、ST2を切り、SK38に切られる。重複するST2と埋土が類似するため南部のプランが不明瞭であったが、検出規模は東西長3.46m、南北確認長2.7m、深さ10~20cmを測る。床面はほぼ平坦である。埋土は褐灰色シルト質粘土で、炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は壺、甕で、口縁部点数にして甕1点、壺又は甕3点、底部は2点が出土している。

図示したものは壺(92・93)、壺又は甕(91)、底部(94・95)である。

ST2・SK38との前後関係及び出土遺物からみて、SX5は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

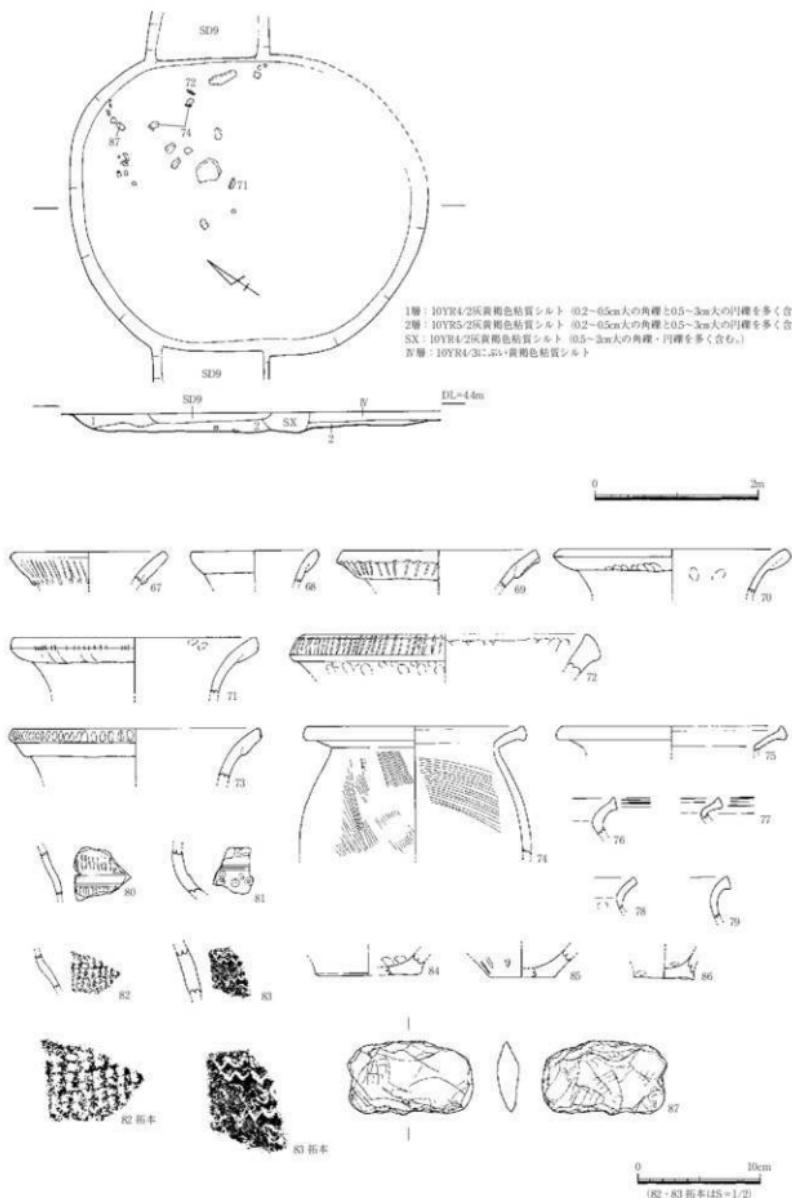


Fig.21 SX1平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

SX9 (Fig.24)

調査区南西部に位置する堅穴状の遺構である。他遺構との切り合い関係では、SX10・SK41・43を切り、SK40・42に切られる。平面形は円形で、検出規模は長軸4.56m、短軸4.42m、検出面からの深さは10~14cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は斜め上方に立ち上がっている。埋土は灰黄褐色シルト質粘土で、床面に灰黄褐色粘質シルトが堆積する。また床面の一部では焼土が検出され、径30cm前後の角礫が出土している。柱穴はP1を検出するが、その他は確認できなかった。

出土遺物は壺、甕で、口縁部は壺3点、甕6点、壺又は甕7点、底部は4点が出土している。

また、P1からは弥生土器細片2点が出土している。壺・甕の口縁部は粘土帶貼付口縁(98)が6点、円線文を施すもの(96・100)が6点、口縁端部を上方に拡張させるもの(99)が2点、素口縁(97)が2点である。

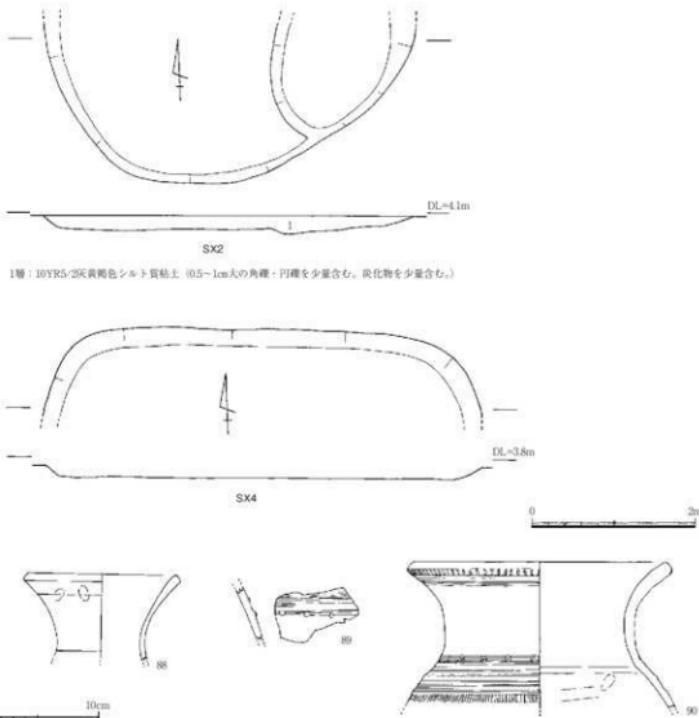


Fig.22 SX2・4平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図
(SX2:88・89、SX4:90)

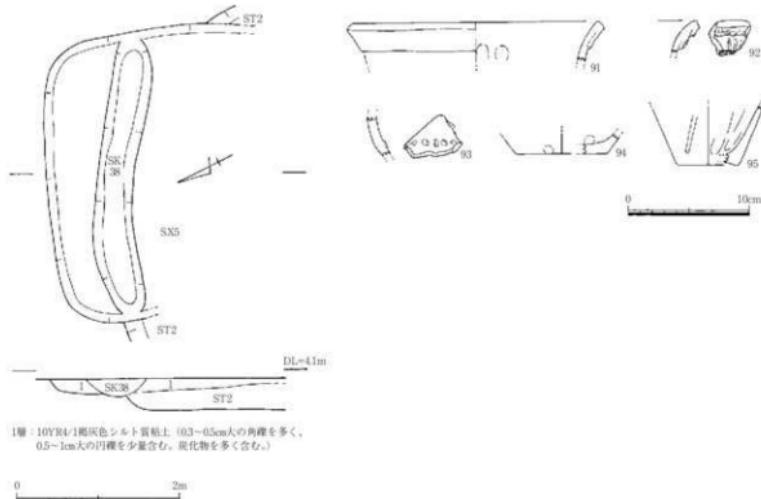


Fig.23 SX5平面図・セクション図・出土遺物実測図

図示したものは壺(96・97・103)、壺(99・100)、壺又は壺(98)、底部(101・102)である。103は壺の体部片で、上胴部に断面三角形の突帯を貼付して棒状の原体によるU字状のキザミを施し、キザミ内に布目压痕が残る。突帯の下には櫛描直線文と乱れの強い櫛描波状文が数段施される。

SX9は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SX10 (Fig.25)

調査区南西部に位置する竪穴状の遺構である。他遺構との切り合い関係では、SK43を切り、SK9・SK39に切られる。平面形は円形で、検出規模は東西残存長3.16m、南北確認長3.80m、深さ22~28cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は斜め上方に立ち上がっている。埋土は褐灰色シルト質粘土である。

出土遺物は壺、壺、高杯で、口縁部は壺4点、壺3点、壺又は壺3点、高杯4点、底部は壺又は壺3点、高杯の脚部1点が出土している。壺・壺の口縁部は粘土帶貼付口縁(105~107・111・112)が5点、四線文を施すもの(104)が1点、口縁端部を拡張させるもの(108・113)が4点である。

図示したものは壺(104~110)、壺(111~113)、鉢(114)、高杯(115・116)、底部(117・118)である。104は長頸壺で口縁部外面に四線文を施す。111・112は南四国型壺である。115・116は高杯の杯部で、口縁部外面に四線文を施す。

SX10は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SX11 (Fig.26)

調査区北部のK-2・3・L-2・3グリッドに広がる褐灰色シルト質粘土の溜りである。同じ地点ではSK16・23・24・26・29が検出されているが前後関係は不明である。平面プランが明瞭でなく、南

北に設けたトレンチでも壁の立ち上がりが確認できなかったが、同トレンチの西壁セクションで、床直上に炭化物溜り（2層）が広がり、床面から2基のピット（P239・240）が掘り込まれている様子が検出されている。また、同セクションでは平坦な床面が4.4m以上にわたって広がっており、P240から1m程南に寄った辺りから床が緩やかに高まっている様子が確認できる。

SX11の床付近にあたる標高4.0m前後の面では、P218・222・223・225・228・239・240を検出した。各ピットとSX11との関係性は特定できないが、同心円の範囲内に分布するものがあり、竪穴住居に伴う柱穴が含まれている可能性をもつ。位置関係から柱穴の可能性が高いと思われるP218・222・223・225・228・239・240についてみると、P218が径28cm深さ18cm、P222が径22cm深さ10cm、P223

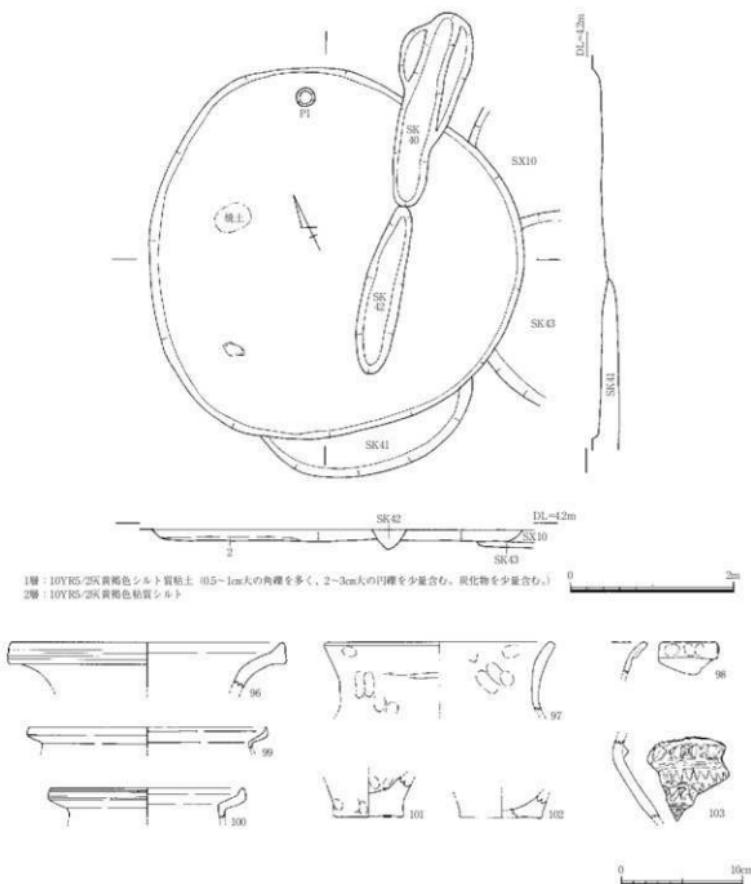


Fig.24 SX9平面図・セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図

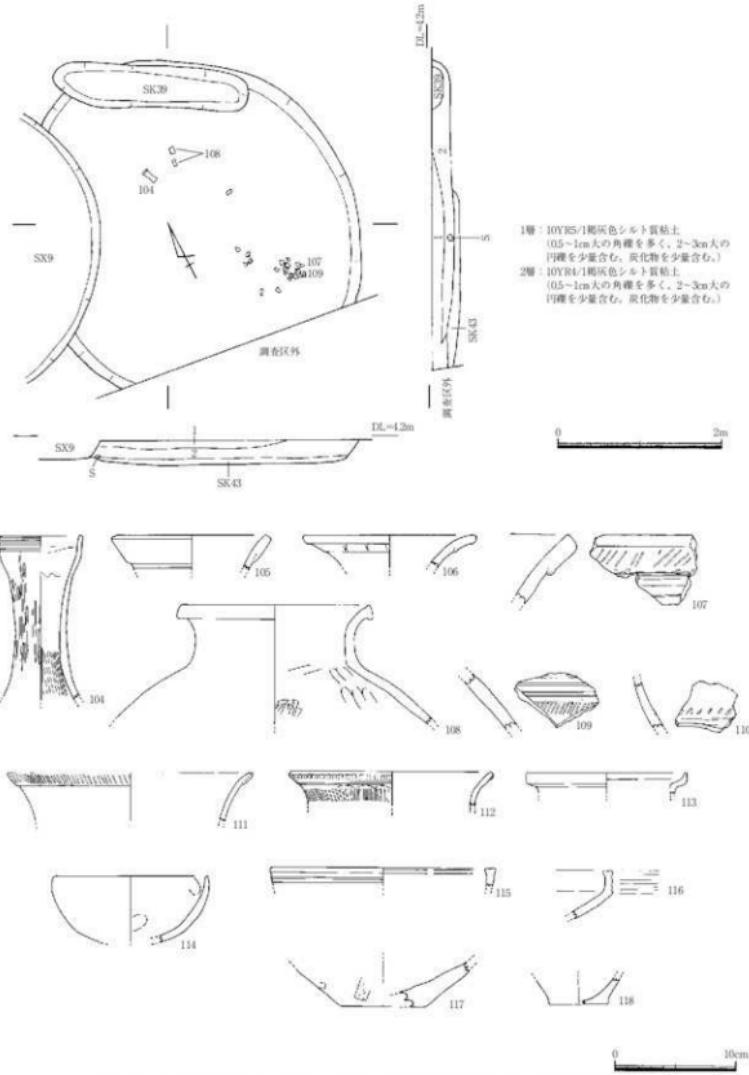


Fig.25 SX10平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

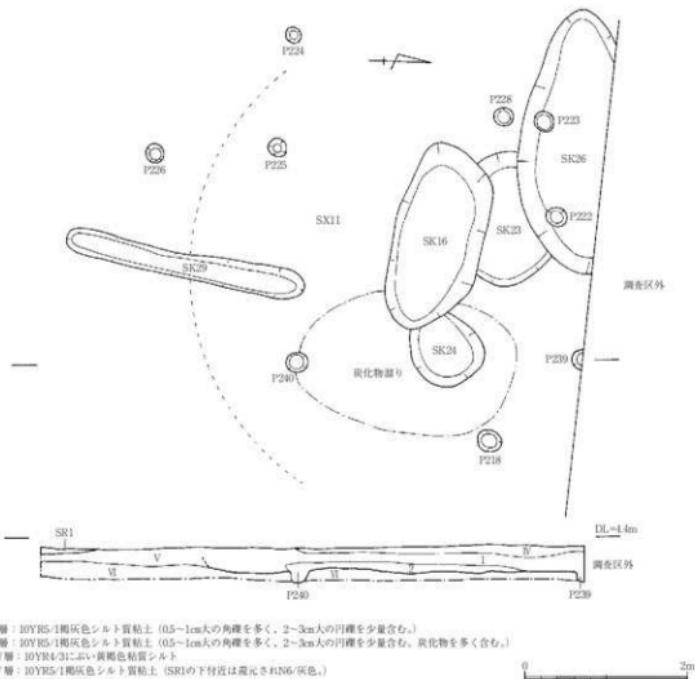


Fig.26 SX11平面図・セクション図

が径24cm深さ8cm、P225が径22cm深さ15cm、P228が径24cm深さ16cm、P239・240が径22cm深さ14cmを測り、埋土は灰黄褐色粘質シルト又は褐灰色シルト質粘土からなる。

遺物はP218からⅢ-2様式の壺(329)、P228からⅣ様式の壺の体部片(331)、炭化物滲りから弥生土器体部片が出土している。

(2) 土坑

SK15 (Fig.27)

調査区北西部に位置する。平面形は橢円形を呈し、検出規模は長軸2.26m、短軸0.88m、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

遺物は口縁部点数にして壺1点、甕1点、高杯1点が出土している。

図示したものは壺(119)、高杯(120)、台石(121)である。120は高杯で口縁部外面に凹線文を施す。

SK15は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK16 (Fig.28~30)

調査区北部に位置する土坑で、SK23・24を切る。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸2.25m、短軸1.10m、深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトと黒褐色粘質シルトで、下層には炭化物が多量に含まれる。

出土遺物は壺、甕、叩石で、土器は口縁部点数にして壺21点、甕2点、壺又は甕6点、底部は22点が出土している。このうち壺・甕では粘土帶貼付口縁(125～136・141～143)が24点、素口縁(124)が5点である。

図示したものは壺(124～140・143・144・156～165)、甕(141・142)、底部(145～155)、叩石(166・167)である。141・142は南四国型甕で、口縁部に粘土帶を貼付し、粘土帶の下端に断面三角形の小突帯を設けて上下をヨコナデする。144は長頸広口壺の頭部で、頭部外面に突帯を多段貼付し、その間に櫛描纏状文を施す。156は壺の体部片で、上胴部に2条の小突帯、櫛描纏状文、櫛描直線文を施す。160も壺の体部片で、突帯と櫛描纏状文、櫛描による円弧状の文様を施す。166・167は砂岩の円礫を叩石に使用するもので、166は先端部、167は先端部と中央に敲打痕を認める。

SK16は弥生時代中期(Ⅲ-2様式)に位置付けられる。

SK17 (Fig.28)

調査区北西部に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.56m、短軸1.01m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

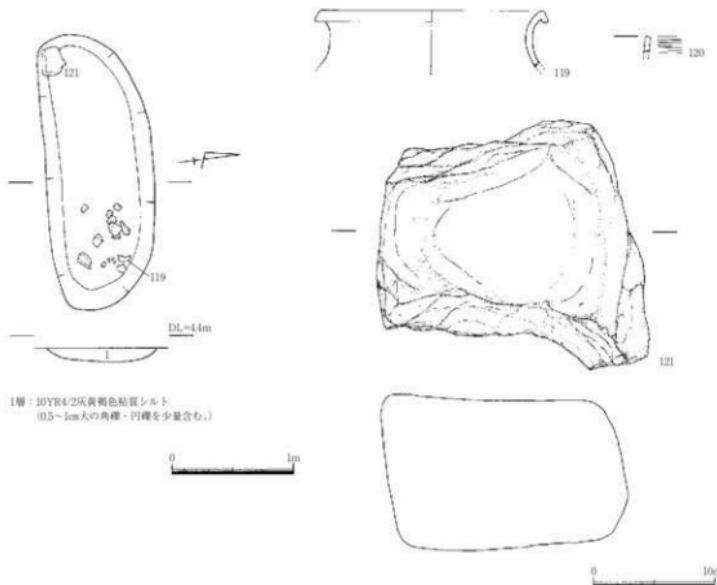


Fig.27 SK15平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

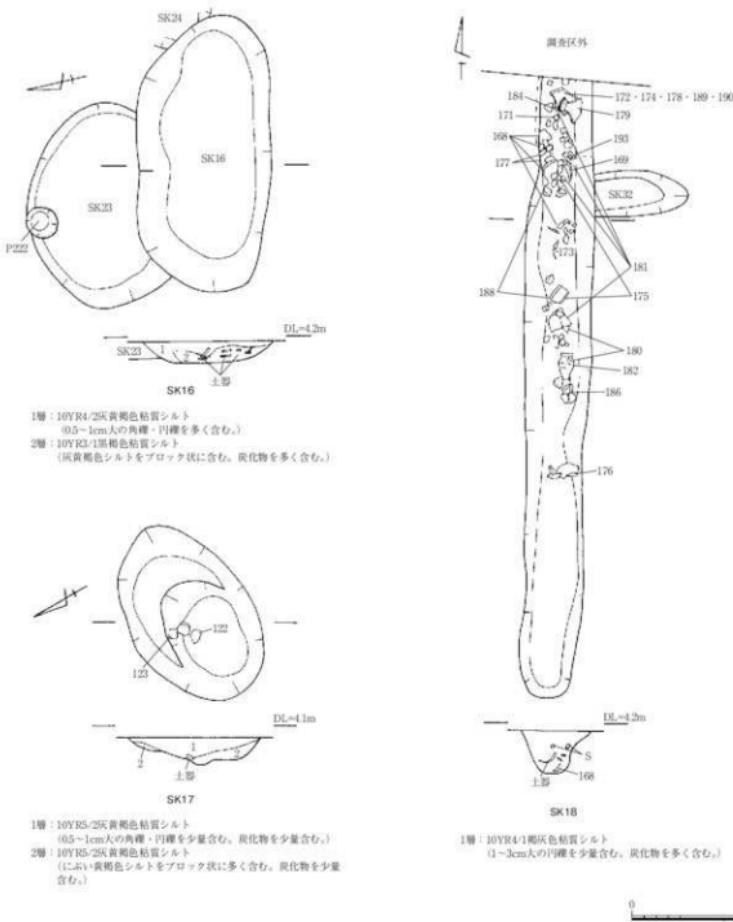
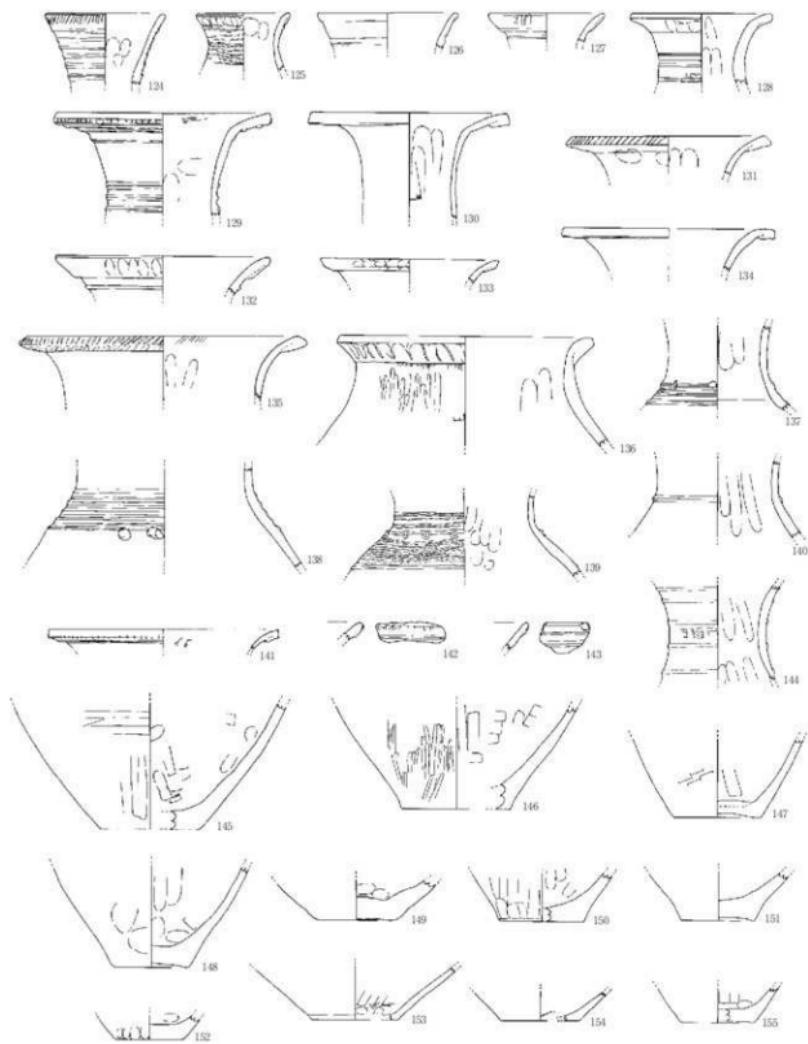


Fig.28 SK16～18平面図・セクション図・遺物出土状況図・SK17出土遺物実測図



0 10cm

Fig.29 SK16出土遺物実測図 (1)

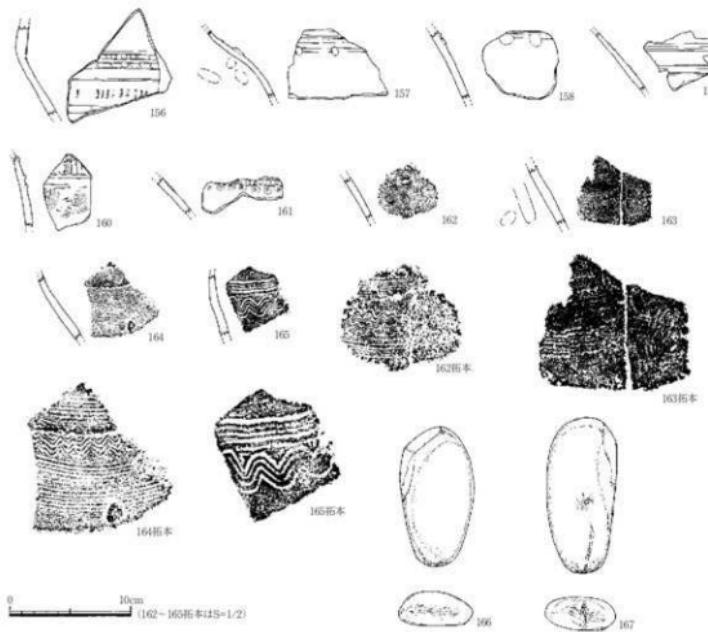


Fig.30 SK16出土遺物実測図(2)

遺物は壺の口縁部1点、壺又は甕の底部1点、体部片が出土している。

図示したものは壺(123)、底部(122)である。

SK17は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK18 (Fig.28・31・32)

調査区北東部に位置する溝状の土坑である。他遺構との切り合い関係ではSK32を切っている。検出規模は南北確認長5.08m、東西長0.56m、深さ35cmを測る。埋土は褐灰色粘質シルトで、炭化物を多量に含んでいる。

出土遺物は壺、甕、石包丁である。土器は口縁部点数にして壺12点、甕2点、壺又は甕4点、底部は13点が出土している。このうち壺・甕の口縁部は粘土帶貼付口縁(168～175)が13点、凹線文を施すもの(177～179)が4点、口縁端部を拡張させるもの(176)が1点含まれる。

図示したものは壺(168～181・188)、甕(182・184)、壺又は甕(183・185・186)、底部(187・189～192)、石包丁(193)である。174は長頸広口壺で、口縁部の粘土帶外面にキザミを施し下端に楕円形浮文を貼付する。頸部外面には乱れの強い櫛描直線文を多段巡らせている。185は内面下半にヘラケズリ、186は外面下位にヘラケズリ後ナデ、内面下位にヘラケズリを施す。193は頁岩製の磨製

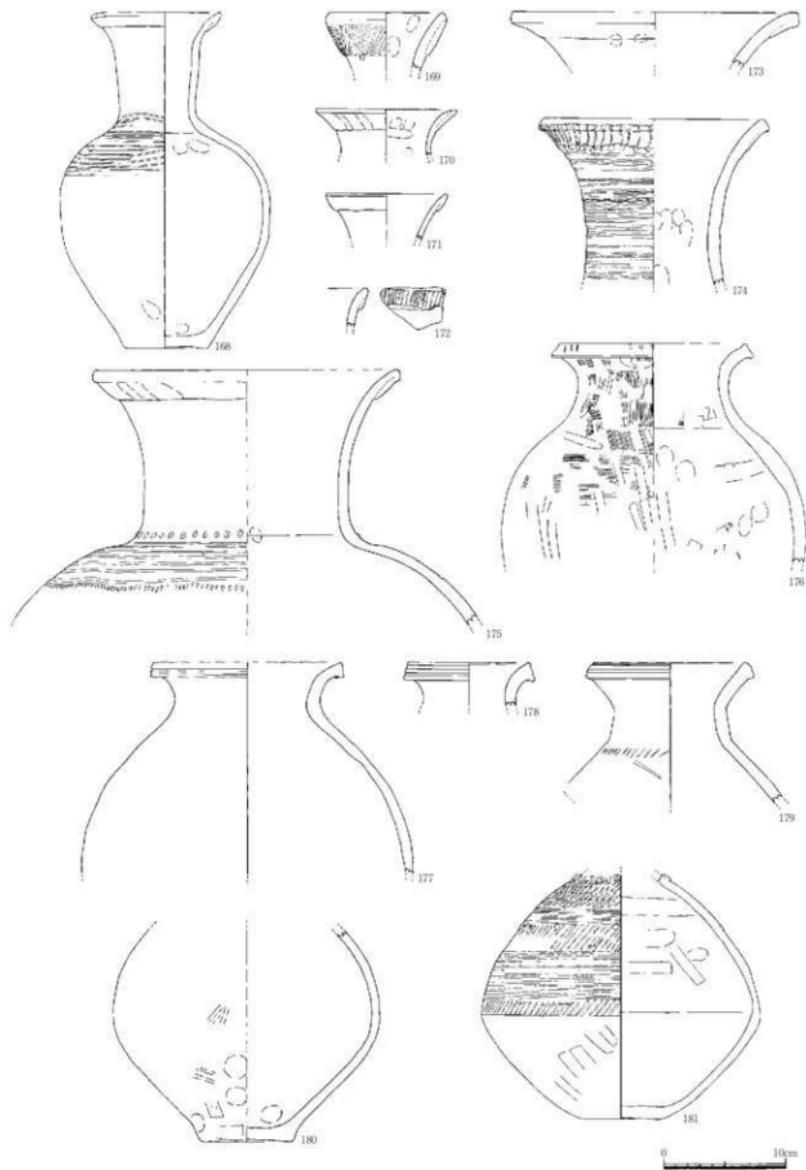


Fig.31 SK18出土遺物実測図 (1)

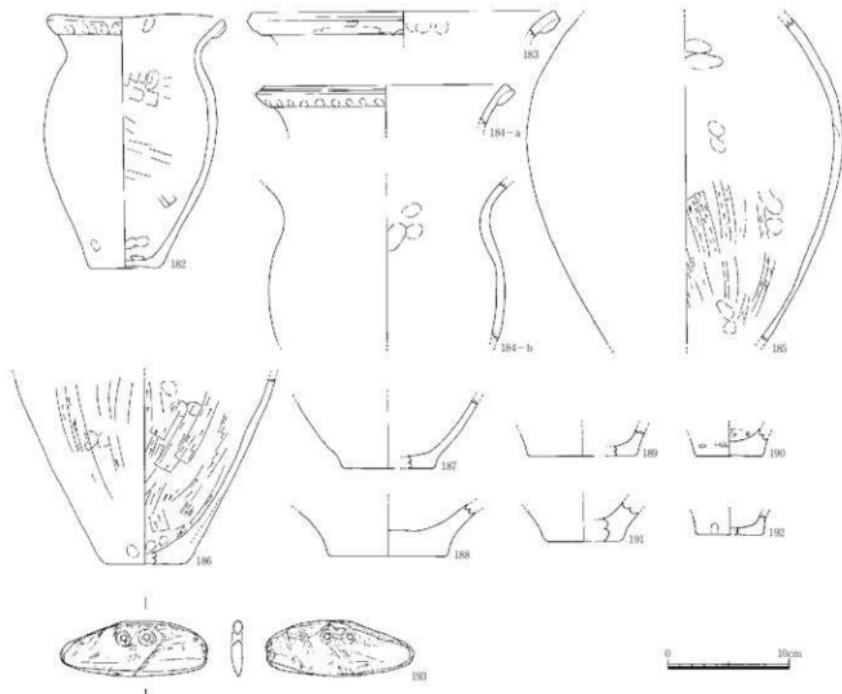


Fig.32 SK18出土遺物実測図 (2)

石包丁である。

SK18は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK19 (Fig.33)

調査区北東部に位置する。他遺構との切り合い関係ではSK20・21に切られている。平面形は長楕円形を呈し、南北長1.17m、東西残存長0.42m、深さ9cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

遺物は床面から壺の口縁部(194)1点と底部(195)1点が出土している。

SK19は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK20 (Fig.34)

調査区北東部に位置する。他遺構との切り合い関係では、SK19・21を切っている。また直接的な切り合いはないがSK20の下面でSK31が検出されている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.00m、短軸0.76m、深さ14cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトとぶい黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は弥生土器体部片である。

SK20は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

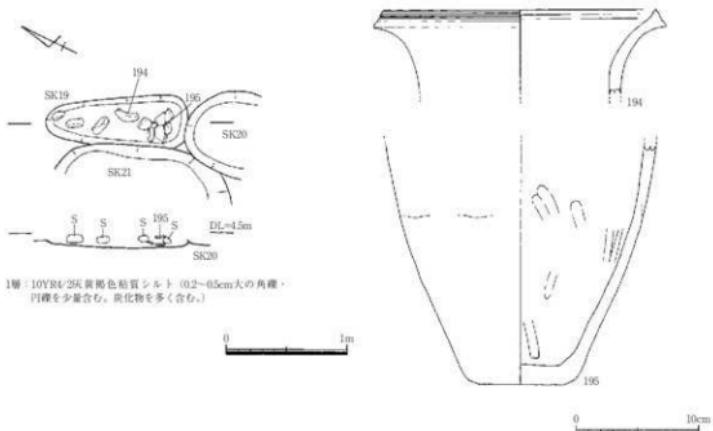


Fig.33 SK19平面図・エレベーション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

SK21 (Fig.34)

調査区北東部に位置する。他遺構との切り合い関係では、SK19を切り、SK20に切られる。西部は未検出であるが、平面形は梢円形とみられ、南北長1.46m、東西残存長0.70m、深さ18cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトである。出土遺物は弥生土器体部片である。

SK21は弥生時代中期（IV様式）に位置付けられる。

SK22 (Fig.34)

調査区北東部に位置する。平面形は梢円形で、長軸0.56m、短軸0.45m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物は弥生土器体部片である。

SK22は弥生時代中期（III-2～IV様式）に位置付けられる。

SK23 (Fig.34)

調査区北部に位置する。切り合い関係ではSK16・26に切られている。また、SK23の下面でP222を検出している。平面形は梢円形とみられ、東西長1.70m、南北残存長0.90m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は壺の口縁部（196）1点と弥生土器体部片である。

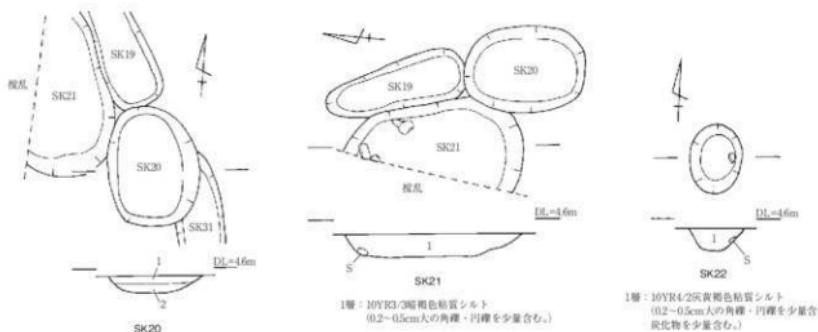
SK16との切り合い関係からみて、SK23は弥生時代中期（III-2様式）に位置付けられる。

SK24 (Fig.34)

調査区北部に位置する土坑で、SK16に切られている。平面形は梢円形で、東西残存長0.85m、南北長0.80m、深さ14cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は弥生土器体部片である。

SK16との切り合い関係及び出土遺物からみて、SK24は弥生中期（III-2様式）に位置付けられる。



1層: 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
(0.5~1cm大的角繩・円繩を多く含む。炭化物を少量含む。)

2層: 10YR4/3に近い黄褐色粘質シルト

1層: 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
(0.2~0.5cm大的角繩・円繩を少量含む。炭化物を少量含む。)

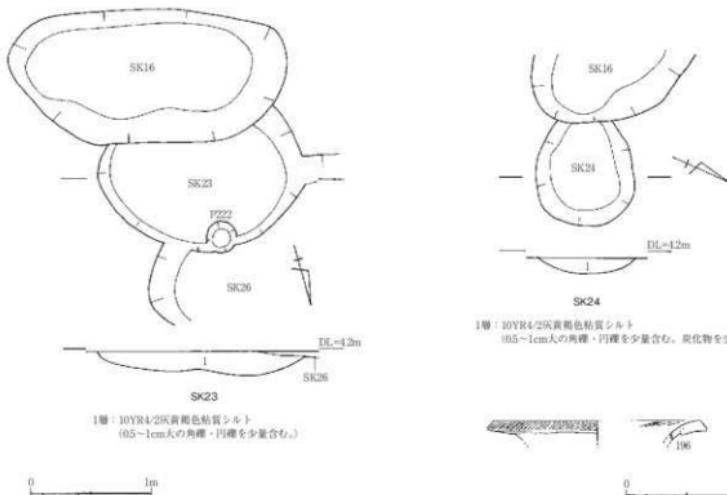


Fig.34 SK20~24平面図・セクション図・SK23出土遺物実測図

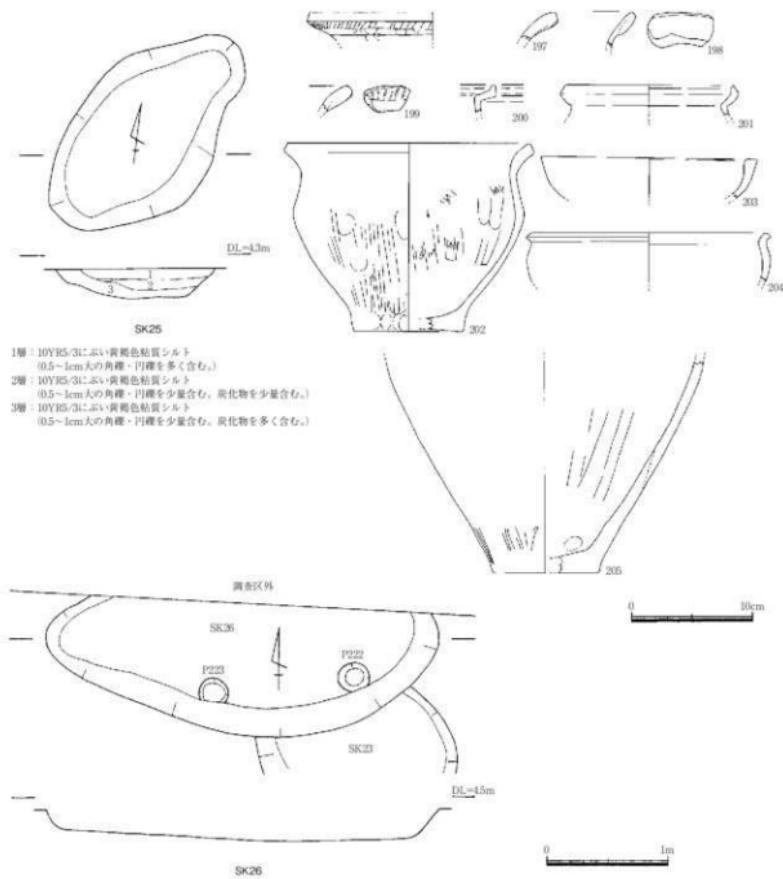


Fig.35 SK25・26平面図・セクション図・エレベーション図・SK25出土遺物実測図

SK25 (Fig.35)

調査区北部に位置する。平面形は不整形で、長軸2.02m、短軸1.16m、深さ26cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯で、口縁部は壺3点、甕3点、鉢2点、高杯1点、底部は5点が出土している。このうち壺・甕の口縁部は粘土帶貼付口縁(197~199)が3点、凹線文を施すもの(200)が2点、口縁端部を拡張させるもの(201)が1点含まれる。

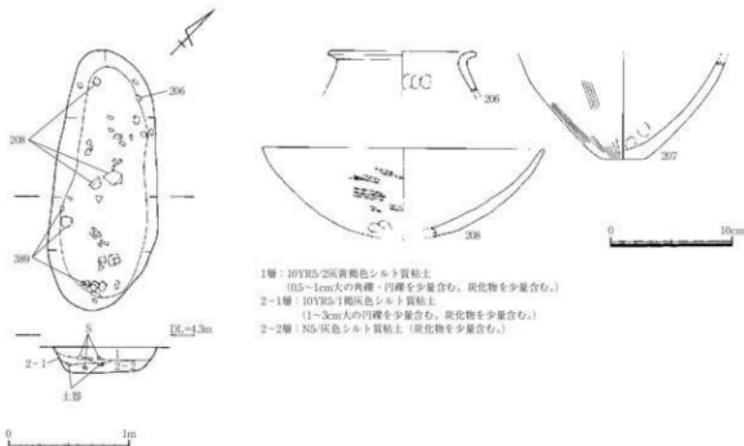


Fig.36 SK27平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

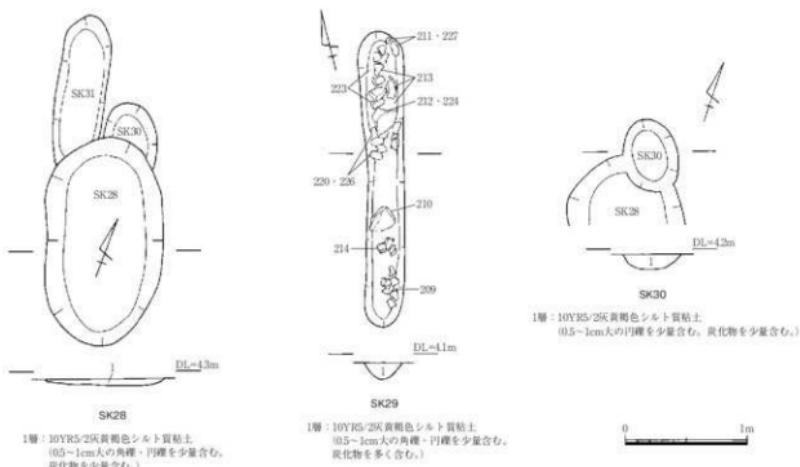


Fig.37 SK28～30平面図・セクション図・遺物出土状況図

図示したものは壺(197～199)、壺(200・201)、鉢(202・204)、高杯(203)底部(205)である。

SK25は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK26 (Fig.35)

調査区北部に位置し、SK23・P222・223を切っている。北部が調査区外に出ているため全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形とみられ、東西長3.22m、南北確認長1.08m、深さ25cmを測る。

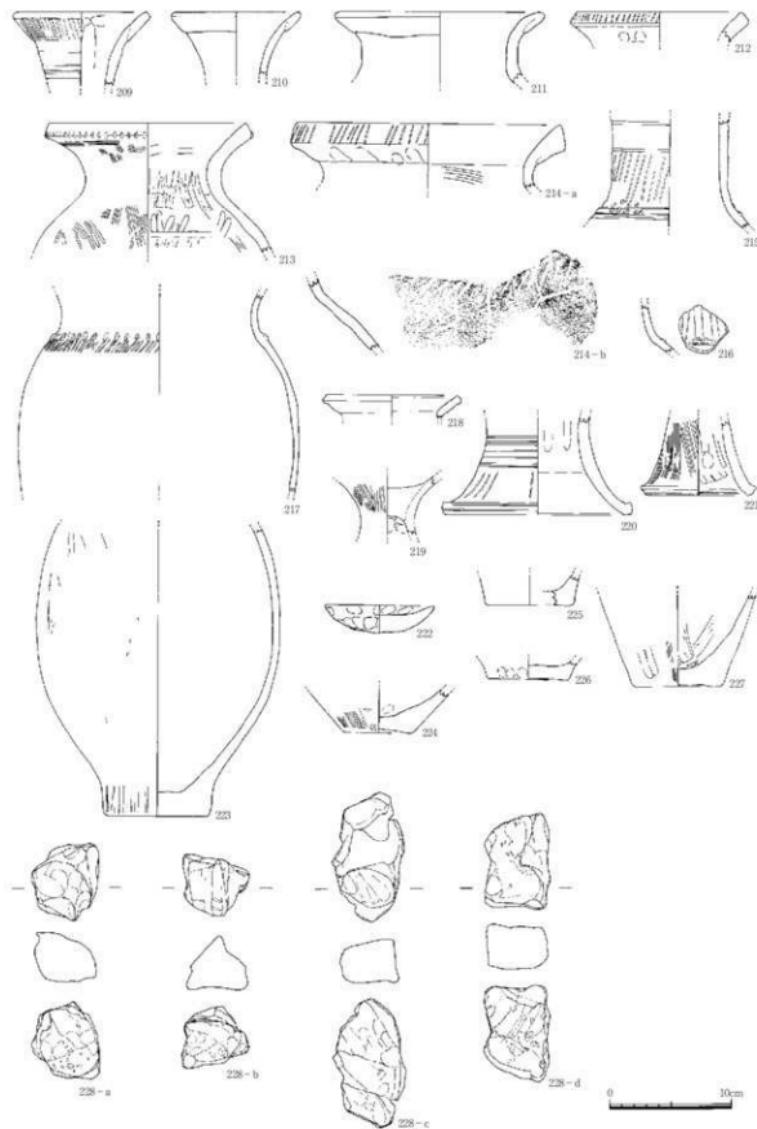


Fig.38 SK29出土遺物実測図

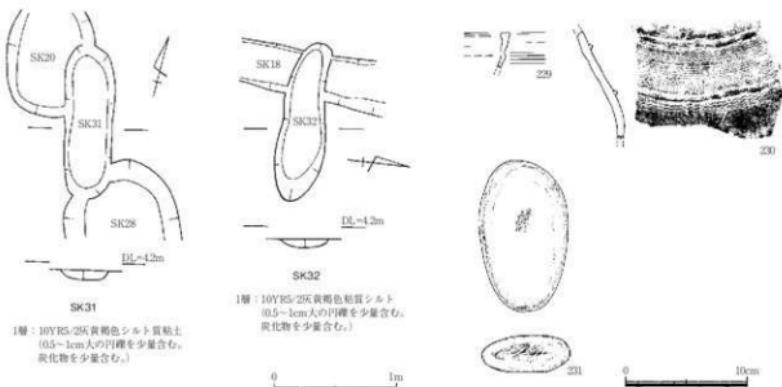


Fig.39 SK31・32平面図・セクション図・出土遺物実測図 (SK31: 229, SK32: 230・231)

埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は弥生土器体部片である。

SK26は弥生時代中期（III-2～IV様式）に位置付けられる。

SK27 (Fig.36)

調査区北東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸2.13m、短軸0.86m、深さ20cmを測る。埋土は1層が灰黄褐色シルト質粘土、2-1層が褐灰色シルト質粘土、2-2層が灰色シルト質粘土である。

出土遺物は甕、鉢の口縁部各1点、甕の底部2点、弥生土器体部片である。

図示したものは甕(206)、鉢(208)、底部(207)である。208は鉢でタタキ後ナデ調整を施すが、部分的にタタキ目が残る。

SK27は弥生時代後期（V様式後半）に位置付けられる。

SK28 (Fig.37)

調査区北東部に位置する土坑で、SK30・31を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.70m、短軸0.96m、深さ6cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質粘土である。

出土遺物は弥生土器体部片のみであるが、薄手で南四国型甕の体部片とみられるものが含まれる。

SK28は弥生時代中期（III-2～IV様式）に位置付けられる。

SK29 (Fig.37・38)

調査区中央部に位置する溝状の土坑である。規模は長軸2.43m、短軸0.30m、深さ15cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質粘土で、炭化物を多く含み、床面には多量の土器片が廃棄されている。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯、用途不明の粘土塊で、口縁部点数にして壺4点、甕4点、壺・甕の底部5点、高杯の脚部2点が出土している。

図示したものは壺(209~216)、壺(217・218)、壺又は壺(223)、高杯(219・221・222)、高杯又は台付鉢(220)、底部(224~227)、粘土塊(228)である。217は南四国型壺の体部で、上胴部に楕円形浮文と斜方向のキザミを施す。220・221は高杯の脚部で、脚端部に凹線文を施す。220は外面下位に櫛描直線文と3本1単位の縦方向の沈線を施す。222は高杯の充填部分が剥離したものか。227は内面下位にヘラケズリを施す。228は用途不明の粘土塊である。小片に割れているため元の形状が分かり難いが、外面にチヂ目や粗砂・小砾の圧痕が認められる。

SK29は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

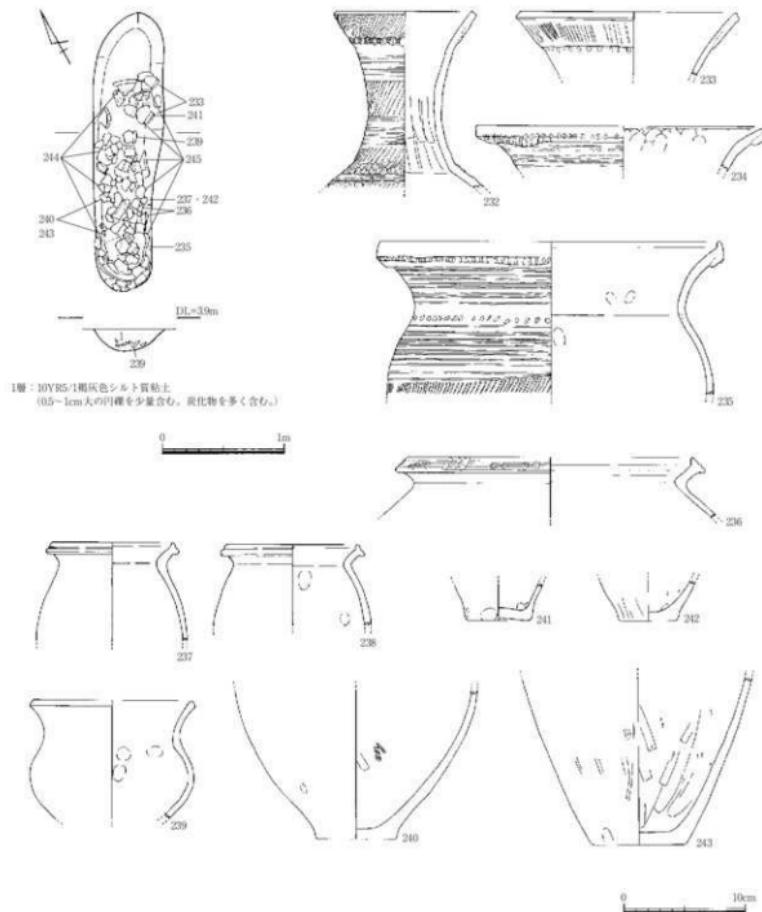


Fig.40 SK33平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

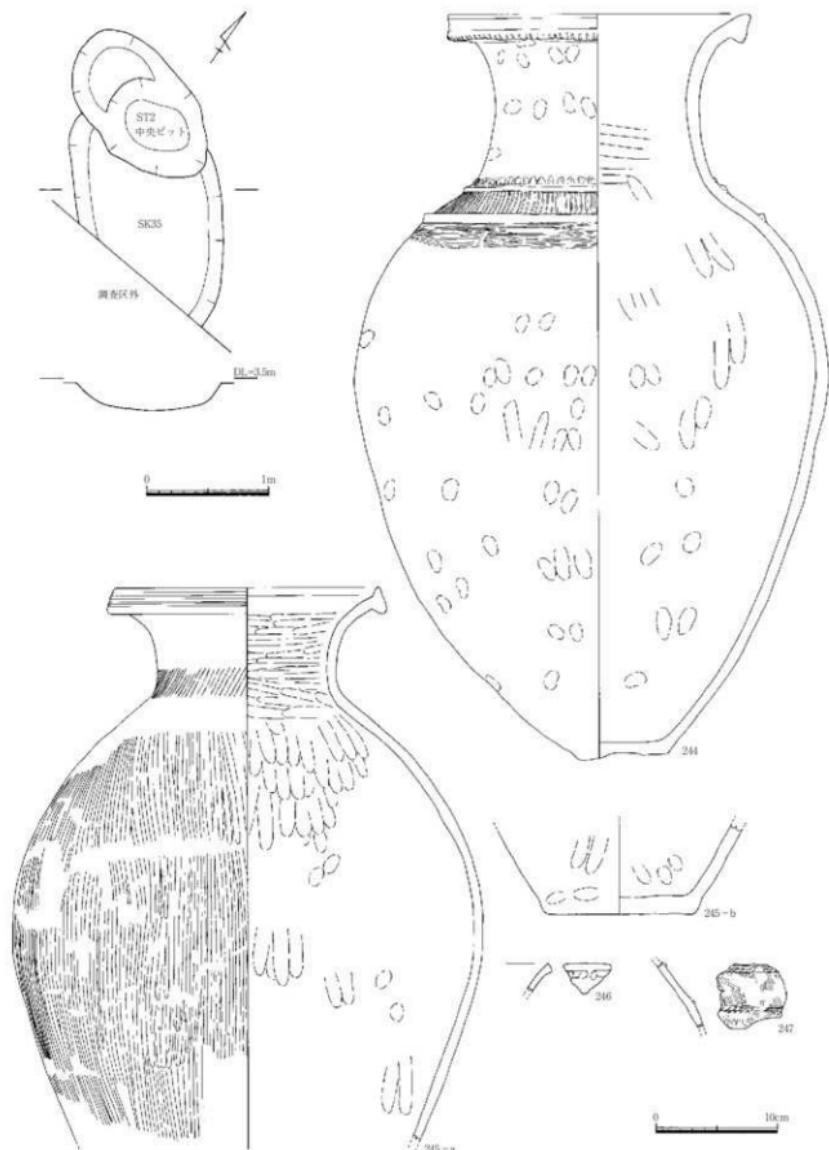


Fig.41 SK35平面図・エレベーション図・出土遺物実測図



Fig.42 SK36 平面図・セクション図・出土遺物実測図

SK30 (Fig.37)

調査区北東部に位置する土坑で、SK28に切られている。平面形は楕円形で、長軸0.61m、短軸0.44m、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質粘土である。

出土遺物は弥生土器体部片で、薄手のものが含まれる。

SK28との切り合い関係及び出土遺物からみてSK30は弥生時代中期(Ⅲ-2~Ⅳ様式)に位置付けられる。

SK31 (Fig.39)

調査区北東部に位置する。他遺構との前後関係では、SK20の下面で検出しており、SK28にも切られている。平面形は溝状で、長軸1.26m、短軸0.40m、深さ8cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質粘土である。出土遺物は壺又は鉢の口縁部(229)1点と弥生土器体部片である。

SK20・28との前後関係からみてSK31は弥生時代中期(Ⅲ-2~Ⅳ様式)に位置付けられる。

SK32 (Fig.39)

調査区北東部に位置する溝状の土坑で、弥生IV期のSK18に切られている。規模は長軸1.35m、短軸0.40m、深さ8cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は壺の体部片と、叩石1点である。図示したものは壺(230)、叩石(231)である。230は壺の体部片で、外面に断面三角形の突帯を数段貼付し、上下に櫛描直線文と細かい櫛描波状文を施している。231は砂岩の円窪を叩石に使用したもので、先端部と側面、中央に敲打痕を認める。

SK32は弥生時代中期(Ⅲ-2様式)に位置付けられる。

SK33 (Fig.40)

調査区南東部に位置する溝状の土坑である。規模は長軸2.28m、短軸0.58m、深さ18cmを測り、埋土は褐灰色シルト質粘土である。断面形は皿状で、下層から土器片が多量に出土している。

出土遺物は壺、甕で、口縁部点数にして壺6点、甕5点、底部は4点が出土している。このうち壺・甕の口縁部は粘土帶貼付口縁(232~235)が4点、凹線文を施すもの(236)が4点、口縁端部を拡張

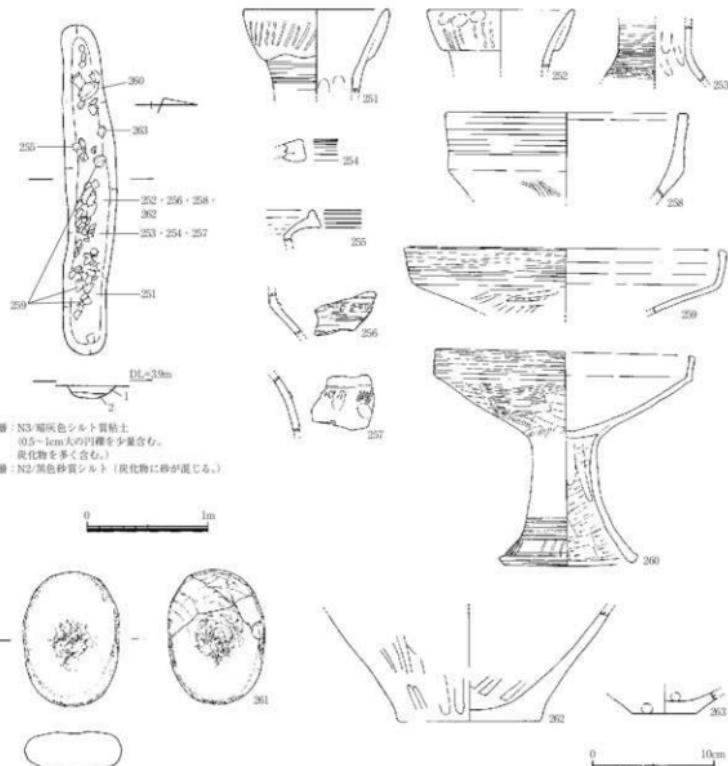


Fig.43 SK37 平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

させるもの(237・238)が2点、素口縁(239)が1点である。

図示したものは壺(232～234)、甕(235～239)、底部(240～243)である。235は南四国型甕で、頸部と上胴部に乱れの強い櫛描直線文を巡らせ、楕円形浮文と斜方向のキザミを施す。236は口縁端部に凹線文を巡らせ、円形浮文と棒状浮文を貼付している。

SK33は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK35 (Fig.41)

調査区南部に位置する土坑で、ST2の中央ピットに切られている。平面形は楕円形を呈し、南北確認長200m、東西長1.18m、深さ20cmを測る。埋土は灰色粘土である。

出土遺物はほぼ完形の壺2点、壺又は甕の口縁部1点と弥生土器部片である。

図示したものは壺(244・245・247)、甕(246)である。

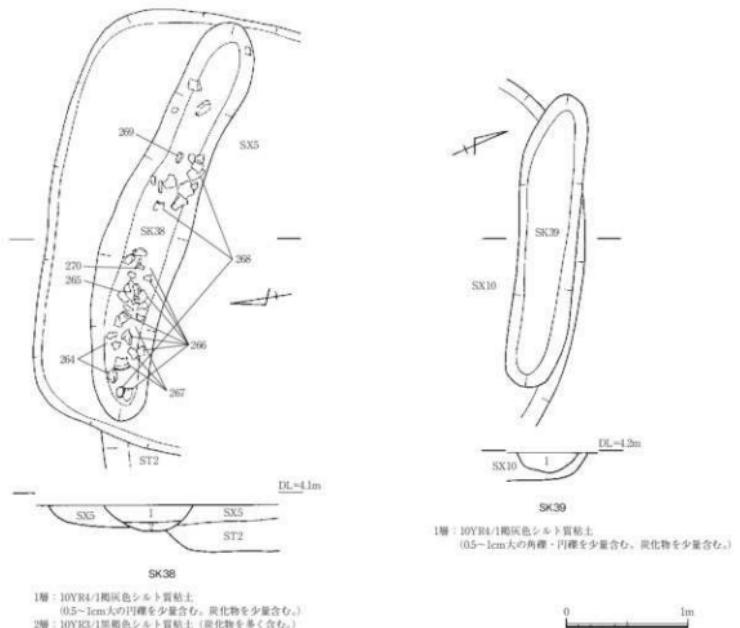


Fig.44 SK38・39平面図・セクション図・遺物出土状況図

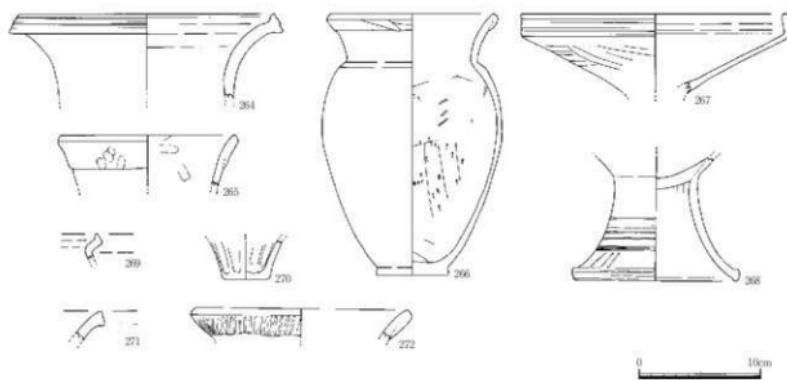


Fig.45 SK38・39出土遺物実測図 (SK38: 264~270, SK39: 271・272)

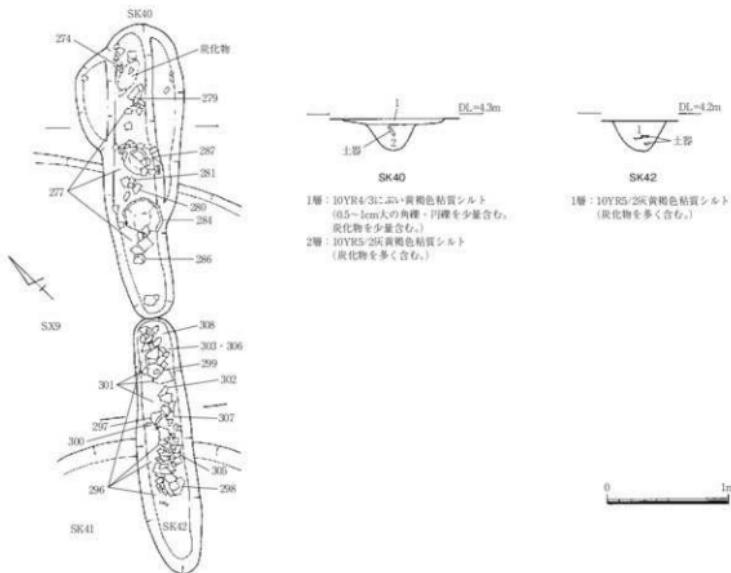


Fig.46 SK40・42平面図・セクション図・遺物出土状況図

SK35は弥生時代中期（III-2・3様式）に位置付けられる。

SK36 (Fig.42)

調査区南部に位置する。直接的な切り合いはないがST2の上面で検出しておき、SK36が後続する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.88m、短軸0.70m、深さ18cmを測る。埋土は褐灰色粘土で、下層には炭化物が多量に含まれる。

出土遺物は壺、甕の口縁部各1点と弥生土器体部片である。図示したものは壺（248・250）、甕（249）である。

ST2との切り合い関係からSK36は弥生時代中期（IV様式）に位置付けられる。

SK37 (Fig.43)

調査区南部に位置する溝状の土坑である。規模は長軸2.70m、短軸0.41m、深さ10cmを測る。埋土は上層が暗灰色シルト質粘土で、下層には砂を含む炭化物の層が堆積している。埋土中からは多量の土器片が出土している。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯、叩石で、土器は口縁部点数にして壺4点、甕1点、鉢1点、高杯2点、底部は壺又は甕3点、高杯の脚部1点が出土している。

図示したものは壺（251～254・256）、甕（255）、壺又は甕（257）、鉢（258）、高杯（259・260）、底部（262・263）、叩石（261）である。

SK37は弥生時代中期（IV様式）に位置付けられる。

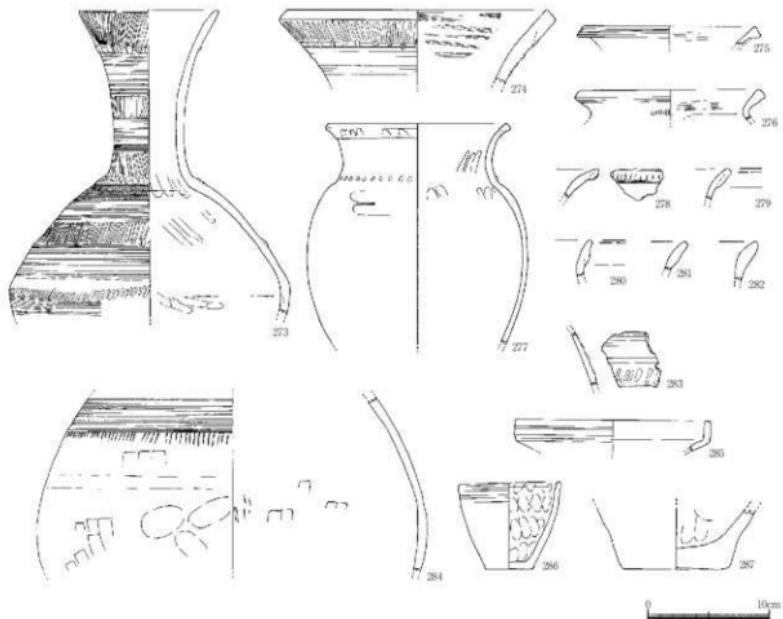


Fig.47 SK40出土遺物実測図

SK38 (Fig.44・45)

調査区南部に位置する溝状の土坑で、ST2・SX5を切っている。規模は長軸3.38m、短軸0.66m、深さ22cmを測る。断面形は皿状で、埋土は上層が褐色シルト質粘土、下層が炭化物を多く含む黒褐色シルト質粘土である。床面から下層にかけては多量の土器片が出土している。

出土遺物は壺、甕、高杯で、口縁部点数にして壺2点、甕2点、高杯1点、底部は壺又は甕1点、高杯の脚部1点が出土している。

図示したものは壺(264・265)、甕(266・269)、高杯(267・268)、底部(270)である。

SK38は弥生時代中期末(IV-2様式)に位置付けられる。

SK39 (Fig.44・45)

調査区南西部に位置する溝状の土坑で、SX10を切っている。規模は長軸2.41m、短軸0.48m、深さ16cmを測る。埋土は褐色シルト質粘土である。

出土遺物は壺(272)、壺又は甕(271)の口縁部各1点と、弥生土器体部片である。

SK39は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK40 (Fig.46・47)

調査区南西部に位置する溝状の土坑で、SX9を切っている。また、南側に延びる溝状土坑SK42

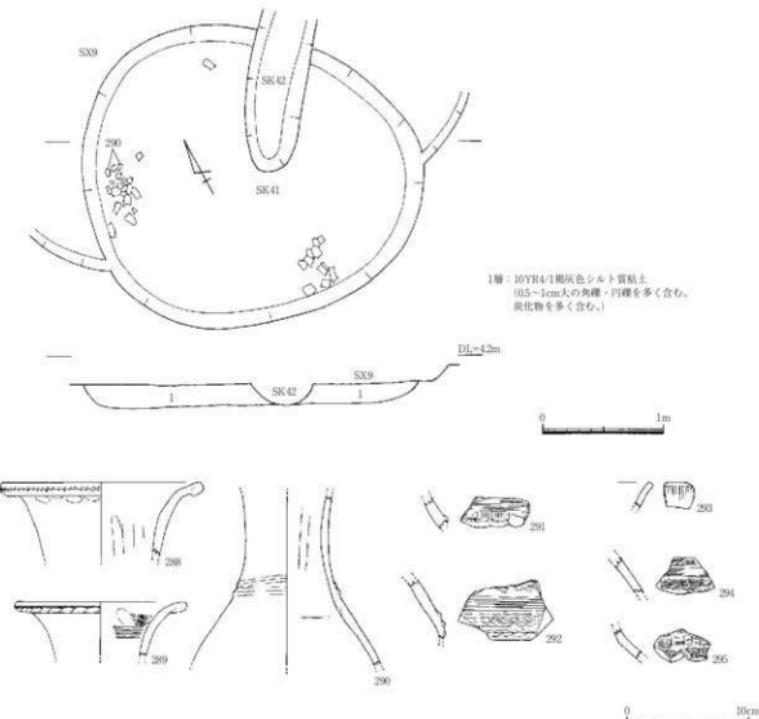


Fig.48 SK41 平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

とは軸方向、断面形、埋土とも共通し、同一遺構又は同時に機能していた可能性がある。規模は長軸2.42m、短軸0.45～0.88m、深さ26cmを測る。埋土は上層がにぶい黄褐色粘質シルト、下層が灰黄褐色粘質シルトで、下層からは多量の炭化物とともに土器片が多く出土している。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯で、口縁部点数にして壺3点、甕3点、壺又は甕4点、鉢1点、底部は壺又は甕1点、高杯の脚部1点が出土している。

図示したものは壺(273・274・283・284)、甕(275～278)、壺又は甕(279～282)、鉢(286)、高杯(285)、底部(287)である。

SK40は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK41 (Fig.48)

調査区南西部に位置する土坑で、SK42とSX9に切られている。平面形は楕円形を呈し、長軸2.82m、短軸2.50m、深さ18cmを測る。埋土は褐灰色シルト質粘土で、炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は壺の口縁部2点、甕の口縁部1点、弥生土器体部片である。図示したものは壺(288～

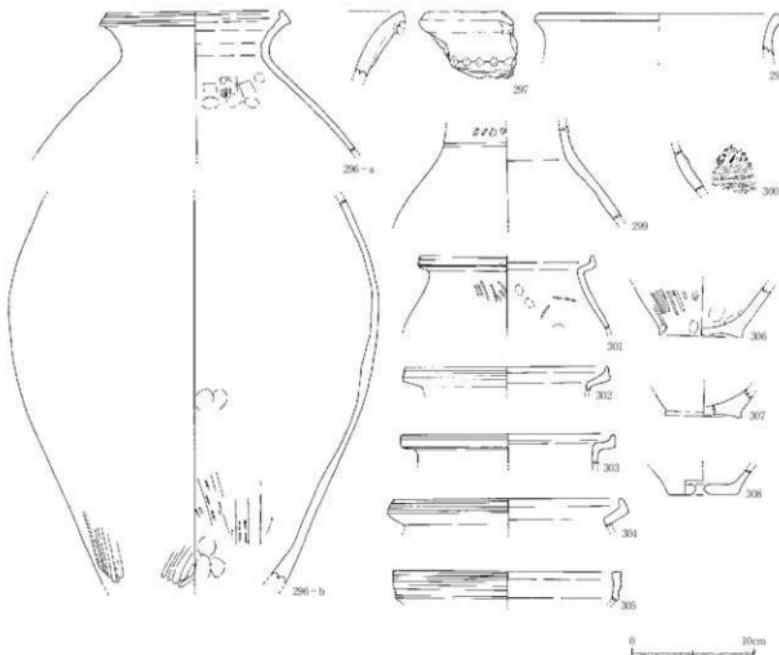


Fig.49 SK42出土遺物実測図

292・294・295)、壺(293)である。

SK41は弥生時代中期(Ⅲ-2・3様式)に位置付けられる。

SK42 (Fig.46・49)

調査区南西部に位置する溝状の土坑で、SK41・SX9を切っている。また、北側に延びる溝状土坑SK40とは軸方向、断面形、埋土とも共通し、同一遺構又は同時に機能していた可能性がある。規模は長軸2.11m、短軸0.48m、深さ25cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトで、多量の炭化物とともに土器片を多く含んでいる。

出土遺物は壺、甕、高杯で、口縁部点数にして壺3点、甕4点、壺又は甕1点、高杯1点、底部は壺又は甕3点が出土している。図示したものは壺(296・297・299・300)、甕(301～304)、壺又は甕(298)、高杯(305)、底部(306～308)である。

SK42は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK43 (Fig.50)

調査区南西部に位置する土坑で、SX9・10に切られている。南部が調査区外に出るが、平面形は楕円形とみられ、東西長3.83m、南北確認長2.40m、SX10床面からの検出深度は12cmを測る。埋土は褐灰色シルト質粘土である。

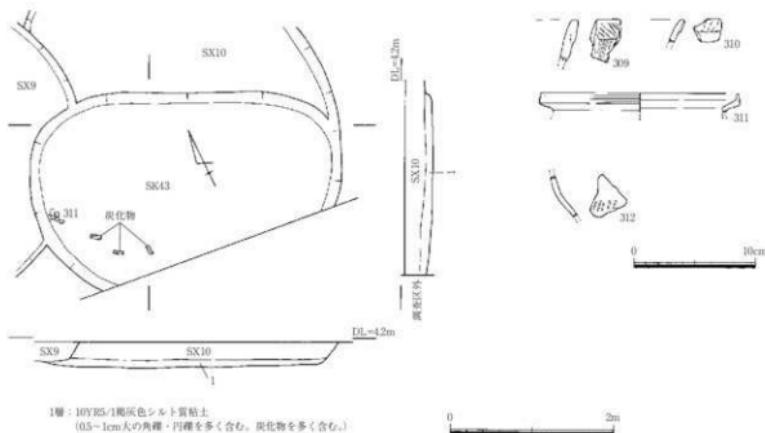


Fig.50 SK43 平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

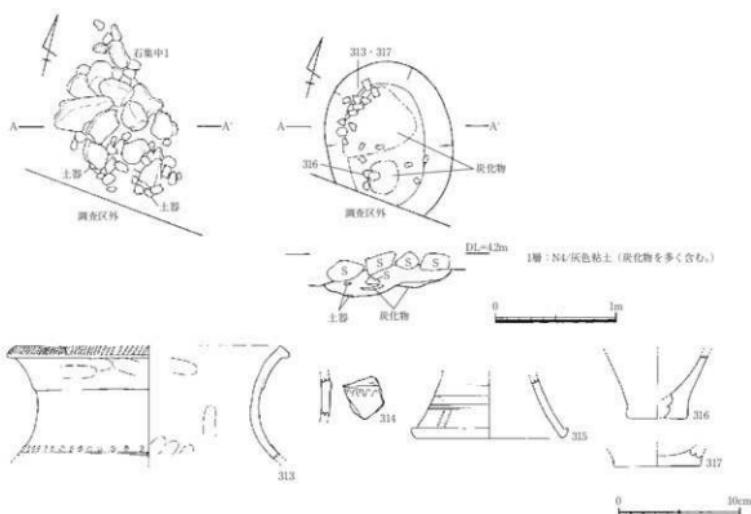


Fig.51 SK44 平面図・セクション図・発掘状況図・出土遺物実測図

出土遺物は壺、甕、高杯で、口縁部点数にして壺2点、甕2点、高杯1点、底部は壺又は甕3点が出土している。図示したものは壺(309・310)、甕(311・312)である。

SK43は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

SK44 (Fig.51)

調査区南東部に位置する浅い皿状の土坑で、石集中1の直下にて検出した。また、直接的な切り合はないが、下面にて弥生IV期のSX4が検出されており、これに後続する。平面形は楕円形とみられ、南北確認長1.30m、東西長1.02m、深さ16~20cmを測る。埋土は灰色粘土で、炭化物を多く含んでおり、床面には炭化物の層が広がっている。さらに埋土の上面には多数の円窪が土坑の上面を覆うように置かれている。

出土遺物は壺の口縁部1点、及び壺又は甕の底部2点、高杯の脚部1点、弥生土器体部片である。この他、上層の石の間からも炭化物とともに弥生土器体部片(314)が出土している。

図示したものは壺(313・314)、高杯(315)、底部(316・317)である。

SK44は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

(3) 溝状遺構・流路

SD9 (Fig.52)

調査区北西部にて検出した溝状の遺構で、SX1を切っている。北部と南部ではプランが不明瞭になり、性格が分かり難いが、検出規模は確認長10.4m、幅1.32~1.58m、深さは東部で16cm、西部で21cmを測る。軸方向はN-55°-Eである。埋土は灰黄褐色粘質シルトとぶい黄褐色シルト質粘

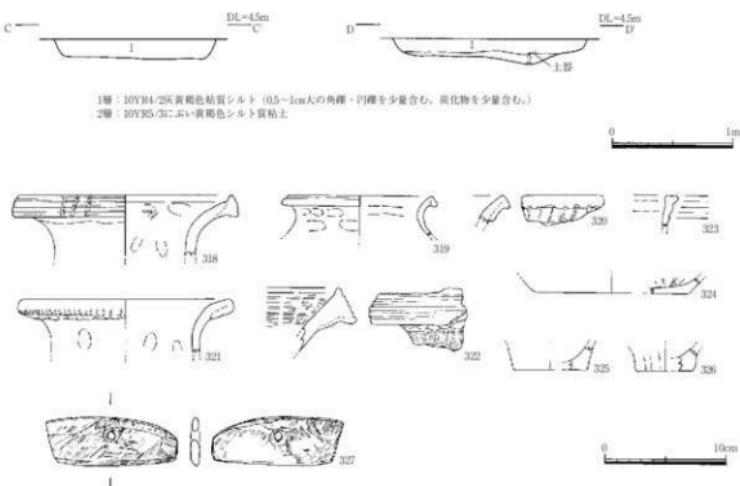


Fig.52 SD9セクション図・出土遺物実測図

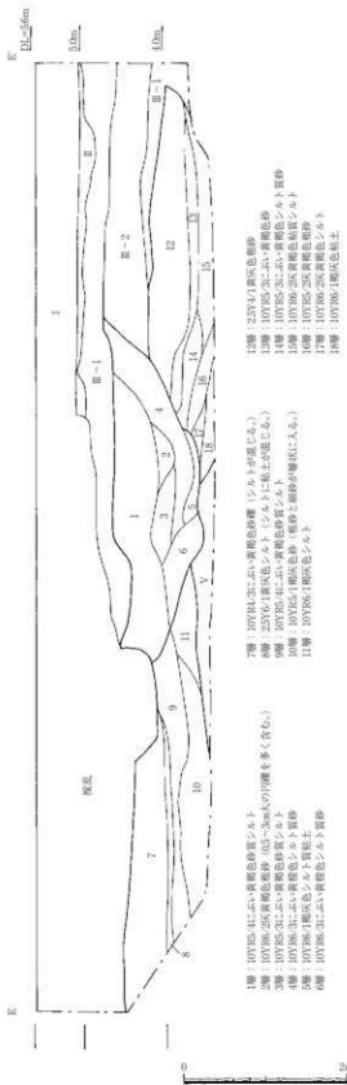


Fig.53 SR1 セクション図・出土遺物実測図

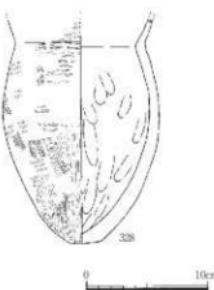
である。

出土遺物は壺、甕、高杯、石包丁、石斧で、土器は口縁部点数にして壺3点、甕2点、壺又は甕2点、高杯1点、底部は4点が出土している。

図示したものは壺(318～322)、高杯(323)、底部(324～326)、石包丁(327)である。327は頁岩製の磨製石包丁で穿孔を1穴穿つ。

SR1 (Fig.53)

調査区北西部F-1グリッド以西にて検出した自然流路で、北東から南西方向に向かって延びる岸の一部を検出している。調査区北壁で観察した堆積状況によれば、SR1は中世の遺物包含層であるIII-1層以下で検出されており、埋土は砂礫層、砂層、シルト質砂層、砂質シルト層、シルト層、粘質シルト層、粘土層からなる。流路の堆積層は大きく2～3段階に分かれており、古段階のSR1-1(12～18層)と新段階のSR1-2(7～11層)、SR1-3(1～6層)がみられる。このうち古段階の流路SR1-1は弥生時代中期～後期の遺物包含層であるIII-2層によって埋没して



おり、その後西側の位置にSR1-2・3が移っている。

遺物はSR1-1の埋土中から弥生時代後半の甕(328)が出土している。

(4) ピット

弥生時代のピットは15個(P217~228・236・239・240)を検出した。これらのうち、P221が弥生時代後期後半、他のピットについては弥生時代中期に位置付けられるものである。また、調査区北部のK-2・L-1・2グリッドで検出されたP218・222・223・225・228・239・240については、SX11に伴う柱穴群であった可能性が高いものである。

ここでは良好な出土遺物が得られたものについて図示し、その他はピット一覧表(Tab.3)に概要を示した。

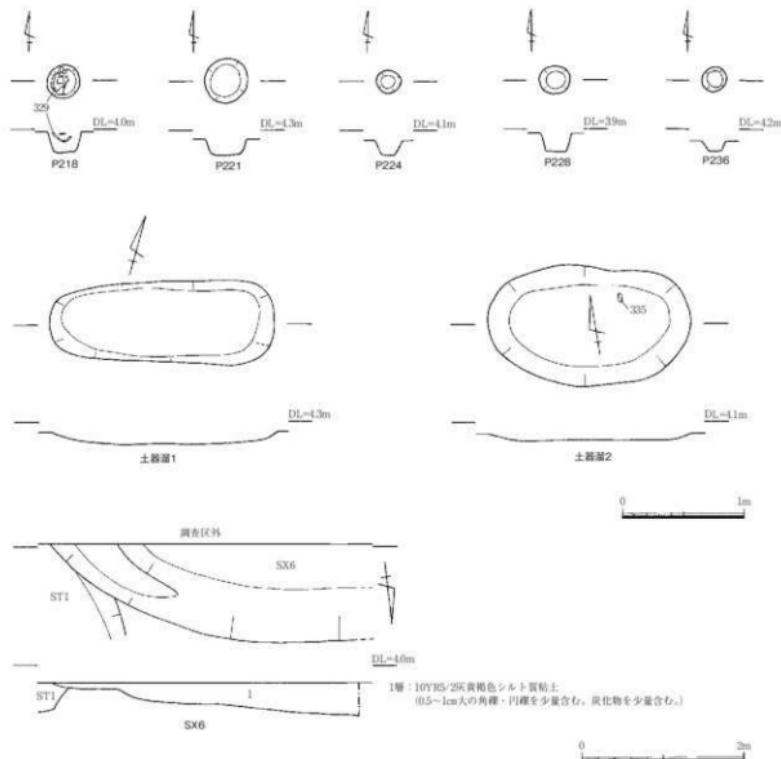


Fig.54 P218・221・224・228・236・土器溜1・2・SX6平面図・セクション図・エレベーション図・
遺物出土状況図

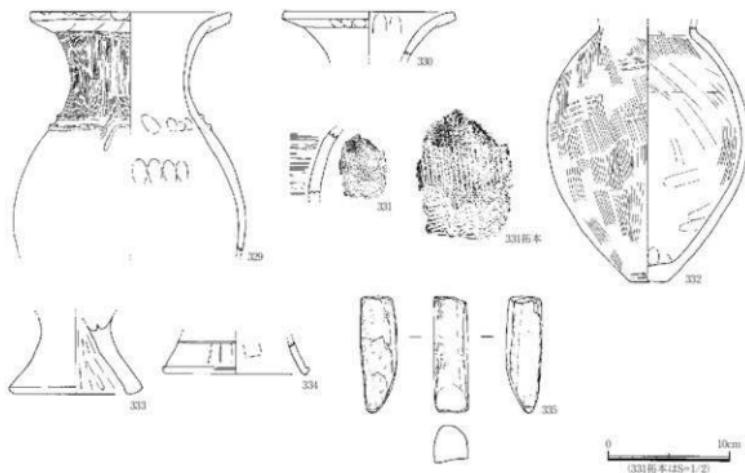


Fig.55 P218・221・224・228・236・土器窯2出土遺物実測図

(P218:329, P221:332, P224:330, P228:331, P236:333, 土器窯2:334・335)

P218 (Fig.54・55)

L-2グリッド、SX11の床面付近で検出した。検出規模は径28cm、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物はⅢ-2様式の壺(329)である。

P221 (Fig.54・55)

O-3グリッド、V層の上位で検出した。検出規模は径36cm、深さ13cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物は壺(332)で、下層からほぼ完形で出土している。

P221は弥生時代後期後半に位置付けられる。

P224 (Fig.54・55)

K-2グリッド、SX11の床面付近で検出した。検出規模は径20cm、深さ12cmを測り、埋土は灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物は壺の口縁部(330)1点と弥生土器細片である。

P224は弥生時代中期(IV様式)に位置付けられる。

P228 (Fig.54・55)

K-2グリッド、SX11の床面付近で検出した。検出規模は径24cm、深さ14cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質粘土である。出土遺物は壺の体部片(331)である。

P236 (Fig.54・55)

I-3グリッドに位置する。検出規模は径20cm、深さ8cmを測り、埋土は灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物は高杯の脚部(333)1点と壺の体部片である。

(5) 土器溜り・炭化物溜り・性格不明遺構

土器溜りと炭化物溜りは、調査区の北西部で土器溜1・2、北東部で炭化物溜6、南部で炭化物溜3・4を検出した。その他、性格不明遺構はSX6を検出した。

土器溜1 (Fig.54)

調査区北西部にて検出した土器溜りで、SK17の南東に近接している。規模は長軸1.84m、短軸0.66m、深さ9cmを測り、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトである。埋土中からは炭化物とともに弥生土器の体部片が出土している。

土器溜2 (Fig.54・55)

調査区北西部にて検出した土器溜りで、SK17の南西に近接している。規模は長軸1.66m、短軸1.00m、深さ6cmを測り、埋土は灰黄褐色粘質シルトである。床面には炭化物と焼土が広がっており、ここから高杯の脚部(334)、弥生土器体部片、石斧(335)が出土している。335は結晶片岩製の柱状片刃石斧で、破損品を叩石に転用しており、刃部に敲打痕が残る。

SX6 (Fig.54)

調査区南壁付近にて検出した落ち込み状の遺構である。一部を検出したのみであるため性格が不明であるが、規模や床面の形態からみてSX2・4に類似した竪穴状遺構や大型の土坑であった可能性

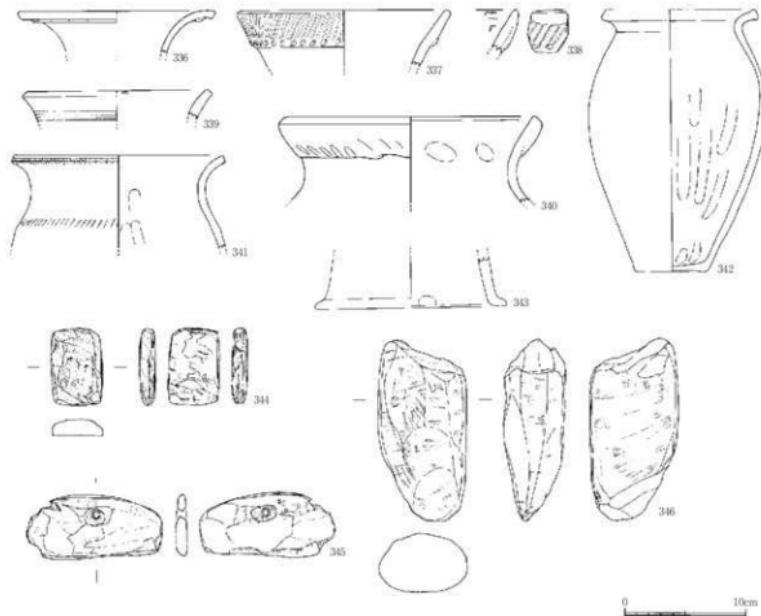


Fig.56 IV～VI層出土遺物実測図
(IV層：336～338・343、V層：339～341・344～346、VI層：342)

をもつ。他遺構との切り合い関係では、ST1を切っている。検出規模は東西確認長381m、南北確認長1.20m、深さ39cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質粘土である。出土遺物は弥生土器細片である。

(6) 包含層出土の遺物

IV～VI層 (Fig.56)

弥生時代中期～後期の遺物はIV～VI層から出土している。

図示したものは壺(336～340)、甕(341・342)、器台(343)、石包丁(345)、石斧(344・346)である。

2. 古代末～中世の遺構と遺物

古代末～中世の遺構は、掘立柱建物跡10棟、土坑13基、ピット217個、溝7条を検出した。該当期の遺構検出面はII層の下位、又は現耕作土の直下にあたるIII層上面であり、標高4.9m前後を測る。遺物は12～15世紀のものが主体をなすが、16世紀や10世紀以前に遡る古代の遺物も少量出土している。

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は10棟を確認した。しかし、この他にも柱痕を伴うピットが多数あることから、本采の建物数はさらに多かったと思われる。建物跡は屋敷地の区画溝とみられるSD2・4～7の区画内に集中する建物群(SB4～10)と、大溝SD1の北側に分布する建物群(SB11～13)に大きく分かれしており、建物の規模や柱間寸法にもいくつかのタイプが認められた。

なお、各柱穴の規模その他については、SBピット計測表(Tab.6)に示している。

SB4 (Fig.57)

調査区東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N-71°-Eの棟方向をもつ。他遺構との前後関係では、P4がSK9、P4・5がSD6を切り、P8が近世のP137に切られている。また、P6～8がSB6-P5-7と重複している。規模は梁間3.00m、桁行6.40mを測る。桁行の柱間寸法は1.96～2.24mである。

柱穴は6基を検出し、P1・3が未検出である。柱穴の規模は径19～27cm、深さ5～28cmを測る。埋土は何れも灰黄褐色シルトである。また、P4・7から褐灰色粘土の柱痕、P6の床面から褐灰色シルトで径12cmの柱痕を検出している。

遺物はP6の柱痕から瓦器椀の体部、P7から土師質土器小皿の底部1点、P2・6・7から土師質土器細片が出土している。

SB5 (Fig.57)

調査区東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N-73°-Eの棟方向をもつ。他遺構との前後関係では、P4がSD5を切っている。また、P4がSB10-P3、P5がSB9-P4と重複している。規模は梁間2.94m、桁行6.20mである。桁行の柱間寸法はP1・2間で1.90mを測るが、その他は2.06m前後になるとみられる。

柱穴は4基を検出し、P3・6が未検出、P7・8が調査区外となる。柱穴の規模は径15～22cm、深さ

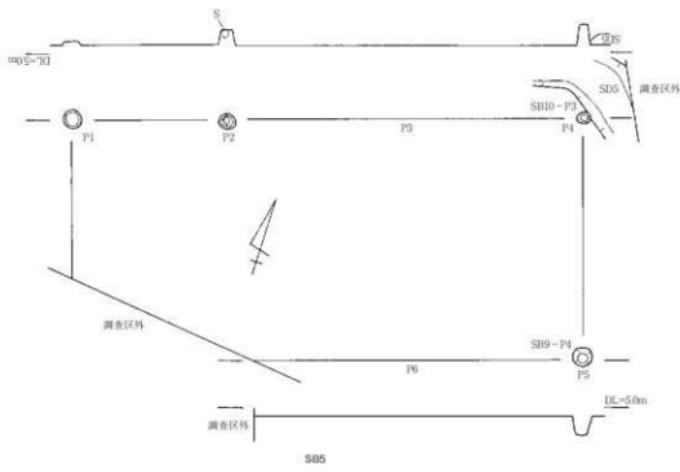
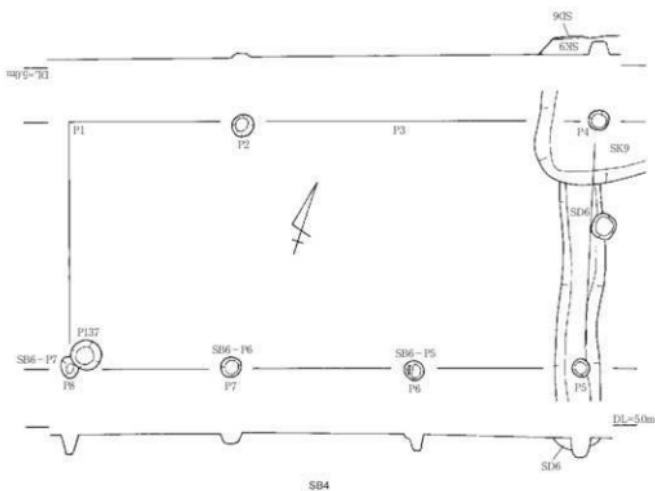


Fig.57 SB4・5平面図・エレベーション図

4~26cmを測る。埋土はP1・2・5が灰黄褐色シルトであるが、P4では径15cmの柱痕を検出しており褐灰色粘土となる。

遺物はP5から土師質土器杯の底部1点、瓦器椀の口縁部1点と体部、P2・5から土師質土器細片が出土している。

SB6 (Fig.58)

調査区東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N-70°-Eの棟方向をもつ。他遺構との前後関係では、P2がP146に、P7が近世のP137に切られる。また、P5~7がSB4-P6~8と重複している。規模は梁間3.40m、桁行6.10mである。桁行の柱間寸法は1.90~2.24mである。

柱穴は6基を検出し、P1・3が未検出である。柱穴の規模は径16~25cm、深さ10~28cmを測る。埋土は何れも灰黄褐色シルトである。またP5・6ではともに褐灰色粘土からなる径14cmの柱痕を検出している。

遺物はP2から土師質土器小皿の口縁部1点、P5の柱痕から瓦器椀の体部、P6から土師質土器小皿の底部1点、P8から瓦器椀又は皿の口縁部1点、及びP2・4~6・8から土師質土器細片が出土している。

SB7 (Fig.58・61)

調査区東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N-73°-Eの棟方向をもつ。規模は梁間2.66m、桁行6.78mである。桁行の柱間寸法はP1・2間で200mを測り、平均は2.26mである。

柱穴は4基を検出し、P3・6が未検出、P7・8が調査区外となる。柱穴の規模は径15~22cm、深さ4~28cmを測る。埋土は何れも灰黄褐色シルトで、P4では下層にて褐灰色粘土からなる径14cmの柱痕を検出している。

遺物はP1から土師質土器杯の口縁部2点と小皿の口縁部1点、瓦器椀の口縁部1点、P4から瓦器椀の体部、P5から土師質土器小皿の口縁部1点、及びP1・2から土師質土器細片が出土している。

図示したものは和泉型瓦器椀(347)である。

SB8 (Fig.59)

調査区東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N-68°-Eの棟方向をもつ。他遺構との切り合い関係では、P1がSD5を切る。規模は梁間2.60m、桁行6.60mを測り、桁行の柱間寸法は2.06~2.26mである。

柱穴は5基を検出し、P6が未検出、P7・8が調査区外となる。柱穴の規模は径23~29cm、深さ18~50cmを測る。埋土は何れも灰黄褐色シルトで、P4では床面にて褐灰色シルトからなる径13cmの柱痕を検出している。また、P3では埋土中に大型の礫が含まれる。

遺物はP1から土師質土器杯の体部、P2から土師質土器小皿の底部1点、P4の柱痕から土師質土器小皿の底部1点と古代の土師器甕の体部、P5から土師質土器杯の底部1点、皿の口縁部1点、その他P1~4から土師質土器細片が出土している。

SB9 (Fig.59・61)

調査区東部で検出された1間×2間の東西棟建物跡で、N-68°-Eの棟方向をもつ。他遺構との切り合い関係では、P5がSK12を切り、P2・5がSD7を、P3がSD5を切っている。またP1がSB10

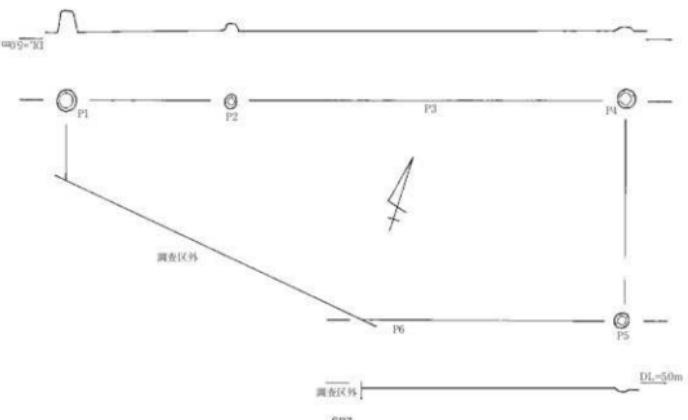
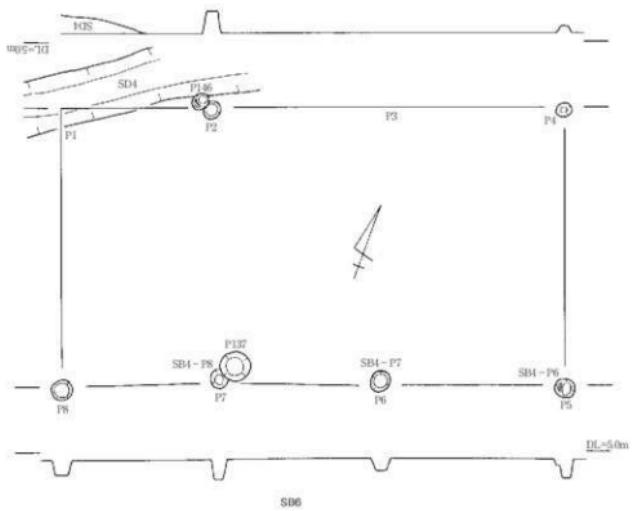


Fig.58 SB6・7平面図・エレベーション図

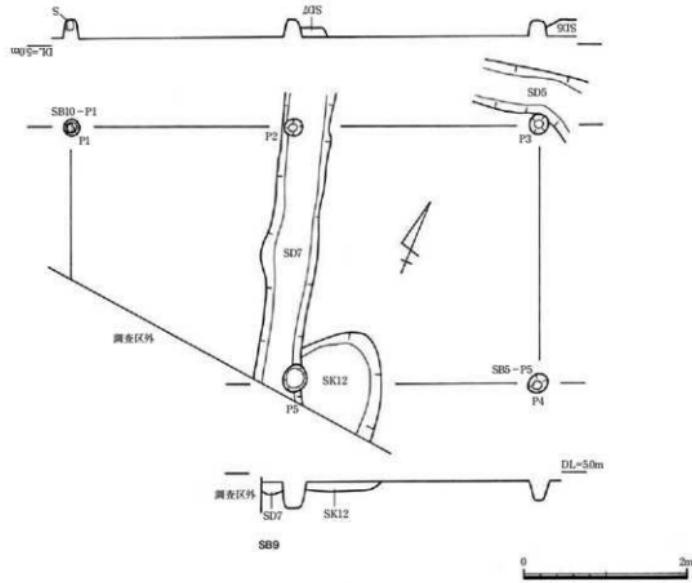
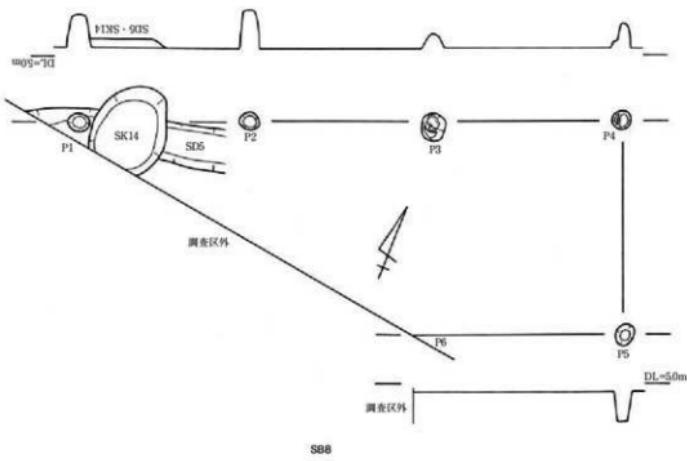


Fig.59 SB8・9平面図・エレベーション図

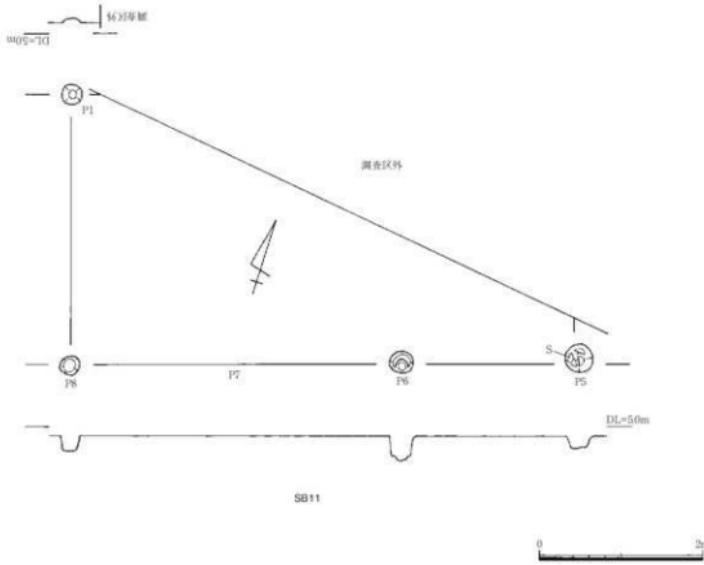
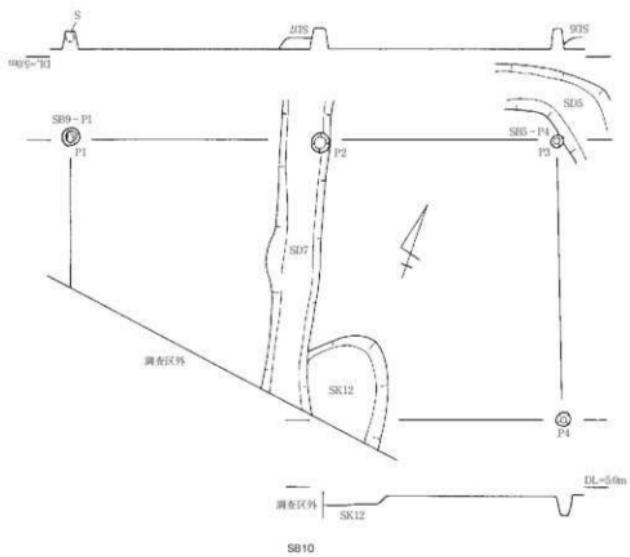


Fig.60 SB10・11平面図・エレベーション図



Fig.61 SB7・9・10出土遺物実測図
(SB7-P1:347, SB9-P5:349・350, SB10-P2:348)

- P1と、P4がSB5-P5と重複している。規模は梁間3.16m、桁行5.72mを測り、桁行の柱間寸法は2.70～3.00mである。

柱穴は5基を検出し、P6が調査区外となる。柱穴の規模は径20～28cm、深さ21～31cmを測る。埋土は何れも灰黄褐色シルトで、P1では下層に大型の角礫が入る。

遺物はP1から土師質土器鍋の体部、P2から土師質土器小皿の口縁部1点、P4から土師質土器杯の底部1点、瓦器椀の口縁部1点と体部、P5から土師質土器杯の口縁部2点と底部1点、瓦器皿1点、甕の口縁部1点、その他P1・4・5から土師質土器細片が出土している。このうち瓦器皿(349)はP5の床面から完形で出土したものである。

図示したものは和泉型瓦器皿(349)、土師質土器杯(350)である。

SB10 (Fig.60・61)

調査区東部で検出された1間×2間の東西棟建物跡で、N-70°-Eの棟方向をもつ。他造構との切り合い関係では、P2がSD7を切り、P3がSD5を切る。またP1がSB9-P1と、P3がSB5-P4と重複する。規模は梁間3.39m、桁行5.94mを測り、桁行の柱間寸法は2.90～3.04mである。

柱穴は4基を検出し、P5・6が調査区外となる。柱穴の規模は径15～24cm、深さ24～26cmを測る。埋土はP1・2・4が灰黄褐色シルト、P3は柱痕部分とみられるもので褐灰色粘土である。

遺物はP1から土師質土器鍋の体部、P2から瓦器椀の口縁部1点と体部、その他P1・2から土師質土器細片が出土している。

図示したものは和泉型瓦器椀(348)である。

SB11 (Fig.60)

調査区西部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N-72°-Eの棟方向をもつ。規模は梁間3.28m、桁行6.12mである。桁行の柱間寸法はP5・6間で2.14mを測り、平均は204mである。

柱穴は4基を検出し、P7が未検出、P2～4が調査区外となる。柱穴の規模は径24～32cm、深さ6～28cmを測る。埋土は何れも灰黄褐色シルトで、P6では床面にて柱痕を検出している。

遺物はP1から土師質土器小皿の底部1点、P5から土師質土器小皿の底部3点と須恵器甕の体部、P8から土師質土器杯の底部1点、P1・5・8から土師質土器細片が出土している。

SB12 (Fig.62)

調査区西部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N-72°-Eの棟方向をもつ。切り合い関係では、P3がP67を切っている。またP4がSB13-P2と重複している。規模は梁間2.70m、桁行5.80mである。桁行の柱間寸法はP1・2間が1.62mと間隔が狭く、P2・3とP6・7間が1.78～1.90m、

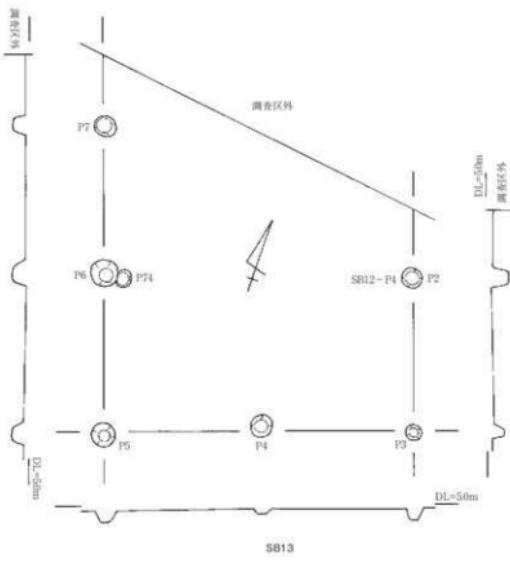
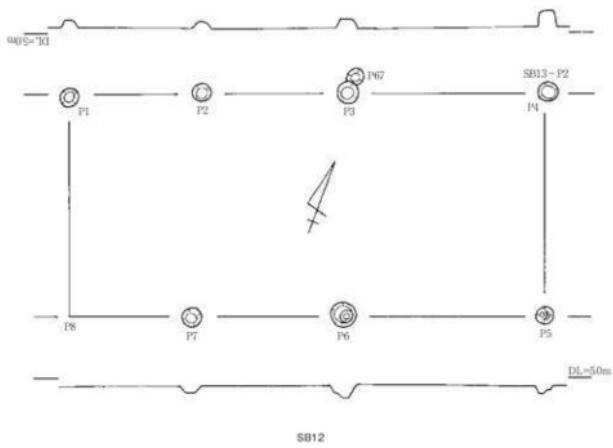


Fig.62 SB12・13平面図・エレベーション図

P3・4とP5・6間が2.42mである。

柱穴は7基を検出し、P8が未検出である。柱穴の規模は径17～30cm、深さ9～20cmを測る。埋土は何れも灰黄褐色シルトで、P5・6では床面から柱痕を検出している。

遺物はP3から土師質土器小皿の体部、P4から土師質土器杯の体部、P5から土師質土器杯の口縁部1点、P6から土師質土器杯の口縁部1点、P7から土師質土器小皿の底部1点、及びP1・6から土師質土器細片が出土している。

SB13 (Fig.62)

調査区西部で検出された掘立柱建物跡である。北側が調査区外に出るため全体の規模が明らかでないが、東西3個、南北3個の柱穴の並びを確認している。梁間2間で桁行2間又は3間以上の南北棟建物を想定した場合、棟方向はN-19°-Wとなる。切り合い関係では、P6がP74を切っている。またP2がSB12-P4と重複している。規模は梁間3.76mを測り、桁行は不明である。梁間の柱間寸法はP3・4間が1.86m、P4・5間が1.90m、桁行の柱間寸法はP2・3間が1.88m、P5・6間が1.90m、P6・7間が1.85mである。

柱穴は6基を検出し、P1と北側の柱穴が調査区外となる。柱穴の規模は径19～30cm、深さ6～20cmを測る。埋土は何れも灰黄褐色シルトである。

遺物はP2から土師質土器杯の体部、P5から土師質土器杯の底部1点、P6から土師質土器杯の底部1点と細片が出土している。

(2) 土坑

SK1 (Fig.63)

調査区北部に位置する土坑である。南部がSD1によって切られるため全体の規模、形態が不明であるが、平面形は不整形とみられ、東西長1.86m、南北残存長1.22m、深さ9cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトと灰黄褐色砂である。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部4点、小皿の底部1点、及び土師質土器細片、古代の混入とみられる須恵器杯の口縁部1点である。

SK2 (Fig.63・65)

調査区北部に位置する土坑である。北側の一部が調査区外にあり、南部がSD1によって切られるため形態が分かり難いが、東西長1.78m、南北残存長2.18m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部2点と底部5点、皿の口縁部2点、椀の底部1点、鍋の口縁部1点と底部1点、瓦器椀の底部1点、須恵器鉢の口縁部1点、須恵器甕の体部1点、陶器碗の体部1点、青磁碗の口縁部2点、及び土師質土器細片と瓦器細片、白磁碗又は皿の体部である。

図示したものは青磁碗(351・352)、陶器碗(353)、須恵器鉢(354)、土師質土器鍋(355・356)である。351・352は中国龍泉窯系の青磁碗(E類)で15世紀後半～16世紀前半。353は瀬戸の天目形碗。354は東播系須恵器鉢。355は播磨型の鍋、356は在地系の鍋でともに15世紀の製品である。

SK2は15世紀後半～16世紀前半に比定される。

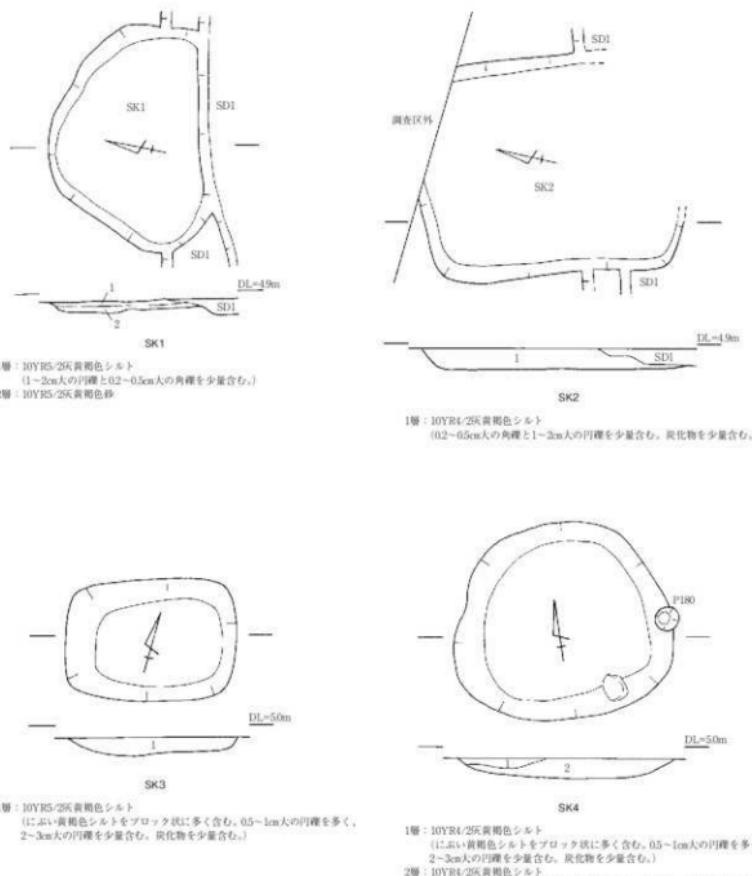


Fig.63 SK1~4平面図・セクション図

SK3 (Fig.63)

調査区西部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.40m、短軸1.00m、深さ15cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師質土器細片である。

SK4 (Fig.63・65)

調査区西部に位置する土坑で、P180を切っている。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸1.80m、短軸1.62m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部4点、小皿の底部6点、瓦器椀の底部1点、陶器擂鉢の底部1点、青磁碗の口縁部1点、及び土師質土器細片、瓦質土器鍋の体部、土師器壺の体部、白磁細片である。

図示したものは中国龍泉窯系の青磁碗(357)、備前焼擂鉢(358)である。

備前焼擂鉢(358)の出土等からみて、SK4は14世紀後半以降に比定される。

SK5 (Fig.64・65)

調査区北東部に位置する。平面形は隅丸長方形とみられ、規模は東西確認長1.98m、南北長1.16m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部2点、小皿の口縁部3点と底部5点、瓦器椀又は皿の口縁部1点と底部1点、白磁碗又は皿の口縁部1点、須恵器壺又は壺の口縁部1点と体部である。

図示したものは土師質土器小皿(360)、白磁碗(359)である。359は中国産の白磁碗(IV類)で12世紀。玉線状の口縁をもち、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。

SK6 (Fig.64)

調査区南東部に位置する土坑で、SD5を切っている。東部が調査区外となるため全体の規模と形態は不明であるが、東西確認長0.84m、南北長1.32m、深さ14cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトと灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は須恵器体部片である。

SK7 (Fig.64)

調査区南東部に位置する。切り合い関係では、P179・199を切り、P181に切られる。平面形は梢円形を呈し、長軸1.02m、短軸0.86m、深さ8cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

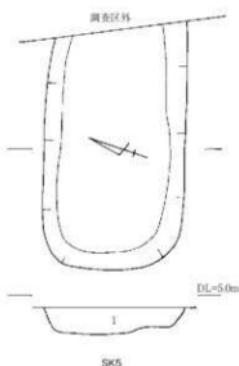
出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部1点、土師質土器細片である。

SK8 (Fig.64・65)

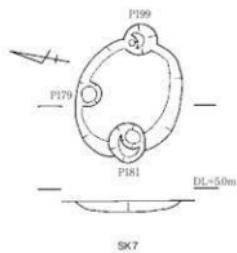
調査区北東部に位置する土坑で、SK5の北に隣接している。切り合い関係ではSD2を切っている。東部が調査区外となるが、平面形は梢円形とみられ、規模は南北長1.68m、東西確認長1.64m、深さ42cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部4点と底部4点、小皿の口縁部3点と底部2点、瓦器椀の口縁部3点、白磁碗の体部1点、青磁碗の体部2点、黄釉鉄絵洗の底部1点、土錐1点、及び土師質土器細片、瓦器体部、須恵器壺体部、須恵器細片、古代の土師器壺口縁部である。

図示したものは瓦器椀(361～363)、陶器洗(364)、須恵器鉢(365)、土錐(366)である。361～363は和泉型瓦器椀。364は中国福建省磁竈窯の黄釉鉄絵洗で、12～13世紀。内面に鉄錆で蜻を描



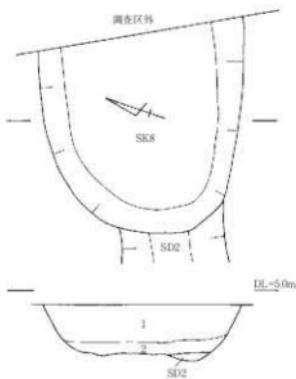
SK5
1層：10YR5/2灰黄褐色シルト
(0.2~0.5cm大的の角礫と1~3cm大的の円礫を少量含む。)
炭化物を少量含む。)



SK7
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト
(0.2~0.5cm大的の角礫を少量含む。炭化物を少量含む。)



SK6
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト (0.2~0.5cm大的角礫・円礫を多く含む。)
2層：10YR5/2灰黄褐色粘質シルト



SK8
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト
(0.2~0.5cm大的角礫と1~3cm大的円礫を少量含む。)
2層：10YR4/2灰黄褐色シルト
(粗砂が混じる。0.2~0.5cm大的の角礫と1~3cm大的の円礫を少量含む。)



Fig.64 SK5~8平面図・セクション図

き、にぶい黄色の釉を施す。胎土は灰黄色を呈し、黒色粒を多く含んでいる。365は東播系須恵器の鉢で14世紀の製品である。

SD2との切り合い関係からみて、SK8は15世紀に位置付けられる。

SK9 (Fig.66, 67)

調査区北東部に位置する。切り合い関係ではSD4・6とP198を切り、SB4 - P4に切られている。

平面形は楕円形で、規模は長軸2.00m、短軸1.91m、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。床面では東西方向の石列が検出されている。

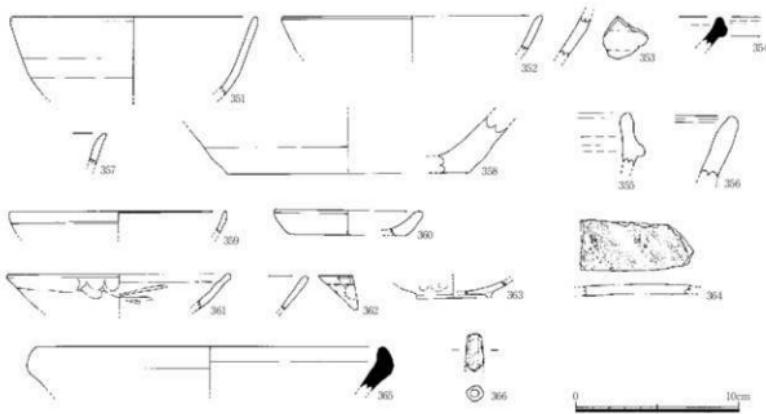


Fig.65 SK2・4・5・8出土遺物実測図
(SK2:351～356, SK4:357・358, SK5:359・360, SK8:361～366)

出土遺物は瓦器椀の口縁部3点、須恵器椀の底部1点、白磁碗の体部1点、及び土師質土器細片、瓦器細片である。

図示したものは和泉型瓦器椀(367)、東播系須恵器椀(368)である。

SD4・6、SB4との切り合い関係からみてSK9は14世紀～15世紀前半に位置付けられる。

SK10 (Fig.66・67)

調査区南東部に位置する土坑で、SK6の南に近接する。東部が調査区外となるため全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形とみられ、南北長1.12m、東西確認長0.84m、深さ14cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトと灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と底部1点、小皿の底部2点、椀又は杯の底部1点、及び土師質土器細片、瓦器細片である。

図示したものは土師質土器椀又は杯(369)である。

SK12 (Fig.66・67)

調査区南東部に位置する土坑で、SB9～P5、SD7に切られる。南部が調査区外となるため形態と規模は不明であるが、南北確認長1.18m、東西残存長0.96m、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部5点と底部4点、椀の底部1点、青磁碗の口縁部1点、瓦器椀の口縁部5点と底部2点、皿の口縁部4点と底部2点、及び土師質土器細片、瓦器細片、須恵器甕の体部、古代の土器甕の口縁部である。

図示したものは土師質土器杯(370)、土師質土器椀(371)、瓦器椀(372)・皿(373～376)、青磁碗(377)である。372～376は和泉型の瓦器椀と皿、377は中国龍泉窯系の青磁碗である。

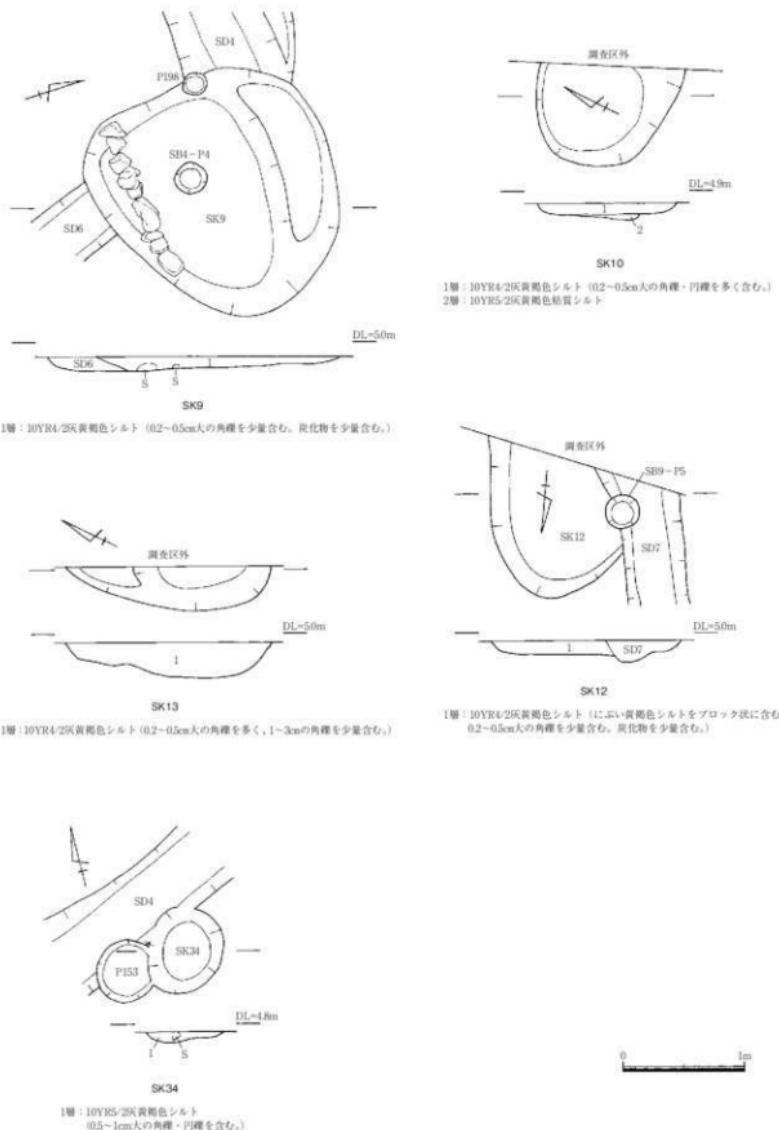


Fig.66 SK9・10・12・13・34平面図・セクション図・発出土状況図

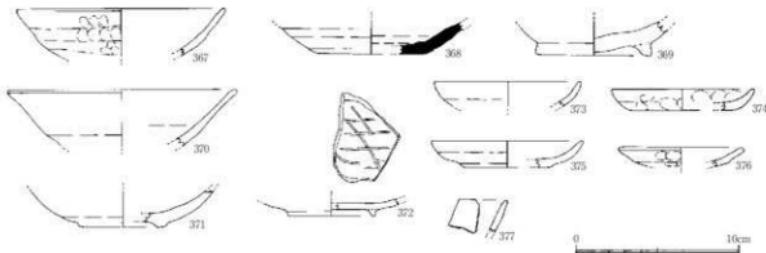


Fig.67 SK9・10・12出土遺物実測図
(SK9: 367・368・369、SK10: 370・371、SK12: 370～377)

SD7との切り合い関係及び出土遺物からみて、SK12は13世紀に位置付けられる。

SK13 (Fig.66)

調査区東部に位置する。東側の大部分が調査区外となるため形態と規模は不明であるが、南北確認長1.68m、東西確認長0.36m、深さ29cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部4点と底部1点、小皿の底部1点、瓦器椀の口縁部1点、及び土師質土器細片、瓦器細片、須恵器壺又は甕の体部である。

SK34 (Fig.66)

調査区南東部に位置する土坑で、SD4に切られる。また、直接的な切り合いは無いが、P153の下面で検出しておらずSK34が先行する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.74m、短軸0.60m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿の体部である。

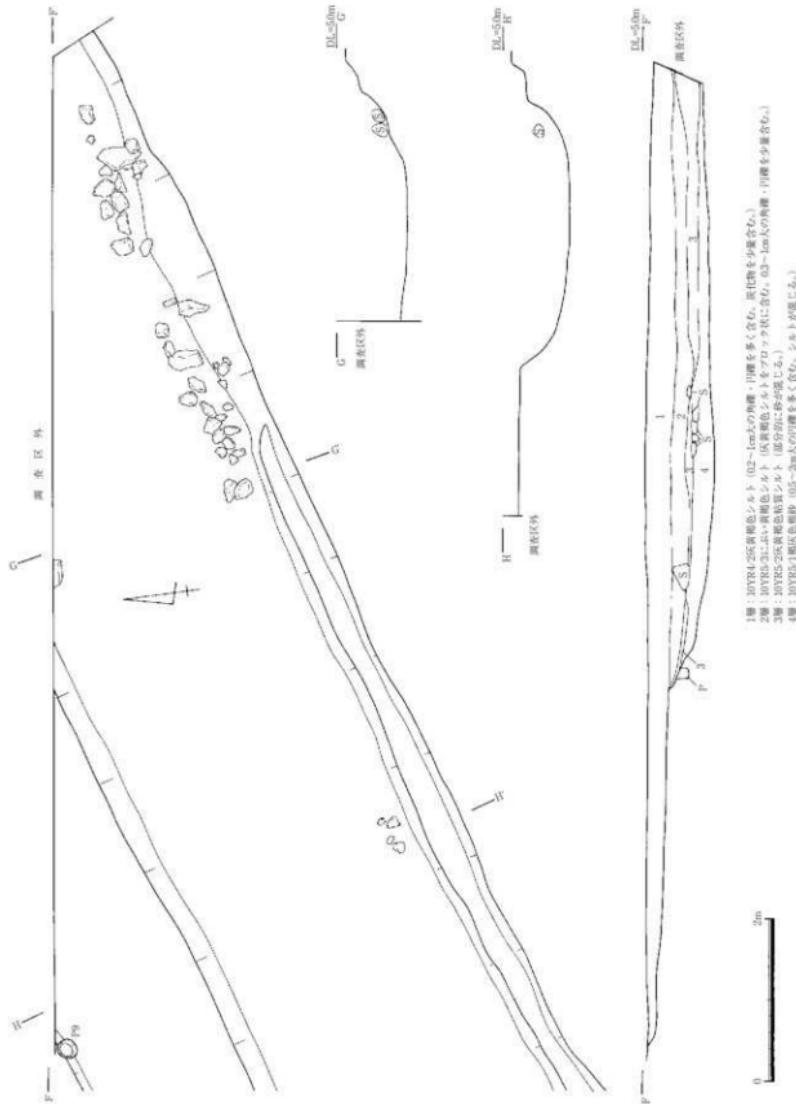
SD4との切り合い関係からみてSK34は14世紀以前に比定される。

(3) 溝

SD1 (Fig.68～74)

調査区の南西部から北東部にかけて流れる大型の溝である。SD1は西部ではN-64°-Wの軸方向をもって南寄りに進むが、G-4グリッド付近から緩やかに方向を変え、その後N-70°-Eの軸方向を保ちながら北東へ直線的に延びている。他遺構との切り合い関係では、SK1・2・P9・84・91・238を切っている。また、南側には同時期頃に機能したとみられるSD2が並行している。

検出長は49m、規模は中央部で幅5.0m、深さ77cm、東部で幅5.4m、深さ70cmを測る。壁は床面から緩やかに立ち上がるが、北岸と南岸では所々にテラス状の段が認められ、特に北岸には幅広いテラス部や2段のテラスによる段差がみられる。このテラス部は後述する埋土1層によって埋没しており、幅が拡張された最終段階の溝の形態とみられるものである。特に東部のL-2・M-2グリッド付近では、幅の拡大によって北岸に浅く広いテラスが形成されており、SK1・2・P9・84・91がテラス部の埋土1層によって切られている。

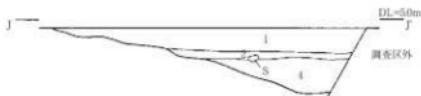


1図：SD1-25m層褐色色シルト (0.2~1cmの砂層・凹面を多く含む。泥化度少部分含む。
2図：10YR5.5-1.5N褐色色シルト (0.5~1cmの砂層・凹面を多く含む。特に含むGz。0.3~1cmKの砂層・凹面を少部分含む。)
3図：10YR5.5褐色色粘質シルト (底付近に少部分含む。
4図：10YR5.5褐色色粘質シルト (0.5~2cmKの砂層を多く含む。含む。1cmK砂層を含む。)

Fig.68 SD1平面図・セクション図・エレベーション図・出土状況図



- 1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.2～1cm大の角礫・円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
 2層：10Y5/3にぶい黄褐色シルト（灰黄褐色シルトをブロック状に含む。0.3～1cm大の角礫・円礫を少量化する。）
 3層：10Y5/2灰黄褐色粘質シルト（部分的に砂が混じる。）
 4層：10Y5/1褐色粗砂（0.5～2cm大の円礫を多く含む。シルトが混じる。）



- 1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.2～0.5cm大の角礫と1～2cm大の円礫を多く含む。4～5cm大の円礫を少量含む。炭化物を少量化する。）
 2層：10Y5/2灰黄褐色粘質シルト（0.5～1cm大の円礫を少量含む。）
 3層：10Y5/1褐色粗砂（0.5～2cm大の円礫を多く含む。シルトが混じる。）

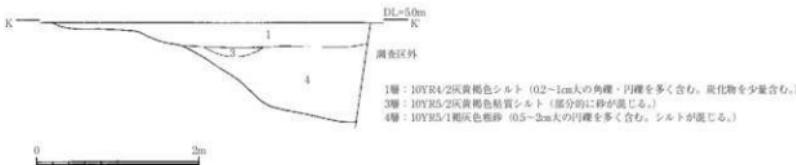


Fig.69 SD1 セクション図

埋土は1層：灰黄褐色シルト、2層：にぶい黄褐色シルト、3層：灰黄褐色粘質シルト、4層：褐色粗砂である。このうち1層は溝の埋没に伴うシルト層で、陶磁器・土器を多く含んでいる。2層にはにぶい黄褐色シルトの中に灰黄褐色シルトのブロックが混じり、同じく埋め戻しに伴う層と考えられるものである。3層は粘質シルトに砂が混じるもので、溝の機能時の堆積層と考えられる。この頃には床は初段階よりも浅くなっており、床面が標高4.5m前後（検出深度約40cm）にあったと推定される。4層は円礫を多く含む粗砂層で、機能時の堆積層とみられるものである。床面は西部で標高3.9m、東部から中央部では標高4.2m前後にあって、弥生時代の遺物包含層を切っている。

これらの状況からみて、溝は4層、3層の堆積によって次第に浅くなつた後、最後には1・2層によって埋め戻されたと考えられる。また、最終形態とみられるテラス状の拡張部分を除くと、埋土2～4層が堆積する溝の本体部分は幅3.7～4.0m前後となり、本来は幅4m前後の溝であった可能性が考えられる。

この他、SD1の東部では岸に沿って、白色系のチャートや砂岩からなる大型の角礫が多く出土している。（Fig.68）これらは3層の床から2層の下位にかけて出土し、南岸に沿って帶状に分布してい

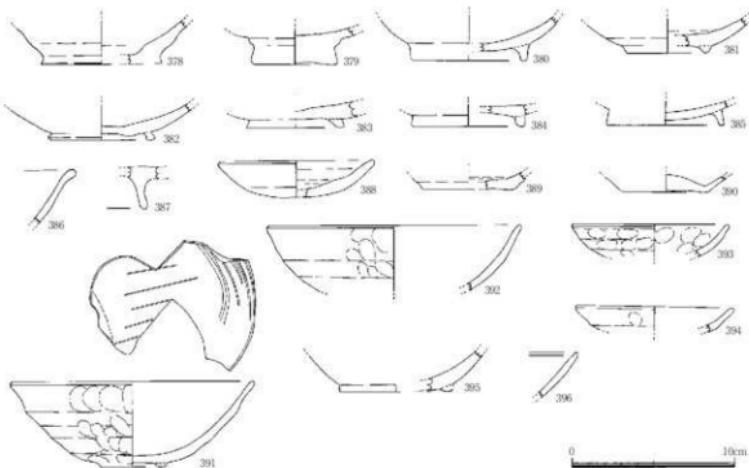


Fig.70 SD1出土遺物実測図(1)

るもので、3層面まで堆積が進んだ頃に溝底への石の投げ込みが行われたことが推定される。白色系碟の出土は、疎らではあるがSD1全体にわたってみられており、後述するSD2でも同様の碟の廃棄が確認されている。

出土遺物は土師質土器杯・椀・小皿、瓦器椀・皿、土師質土器鍋・壺・羽釜、瓦質土器鍋・須恵器甕・鉢、白磁碗・皿・杯、青磁碗、青花碗、陶器小皿・擂鉢・壺・甕・瓶、土錘、銅製品、石臼、轆の羽口、鉄滓である。

出土点数は、口縁部点数にして土師質土器杯60点・椀5点・小皿72点、瓦器椀16点・皿4点、土師質土器鍋23点・羽釜2点、瓦質土器鍋2点、須恵器鉢8点、白磁碗12点、青磁碗7点・皿1点、青花碗1点、陶器小皿3点・擂鉢4点、底部点数にして土師質土器杯138点・椀20点・小皿90点、瓦器椀11点・瓦質土器鍋1点、白磁碗4点・皿3点・杯1点、青磁碗5点、陶器擂鉢底部1点・甕1点・壺1点・瓶1点であり、コンテナ2箱分の遺物片が出土している。

これらの遺物は殆どが1層からの出土であり、12～15世紀の遺物が主体を占める。16世紀以降の製品は少量であるが、1層上位から16世紀の中国産白磁皿(403)、16世紀後半の中国景德鎮窯系青花碗(432)、北テラス検出面から16世紀前半～中葉の瀬戸の灰釉反り皿(433)が出土している。また、14・15世紀以降生産され16世紀前半まで下る可能性をもつ遺物では他に、中国龍泉窯系青磁碗(415・417・421・422・429・430)も含まれる。この他、少量ではあるが古代の遺物も含まれ、須恵器杯(476)、10世紀の縁釉陶器椀(475)、10世紀後半～11世紀の篠窯の須恵器鉢(478)、11世紀前半の楠葉型黒色土器椀(396)などが認められている。

一方、2～4層からの出土遺物は非常に少ない。確認できたものは、2層出土の土師質土器椀(379・

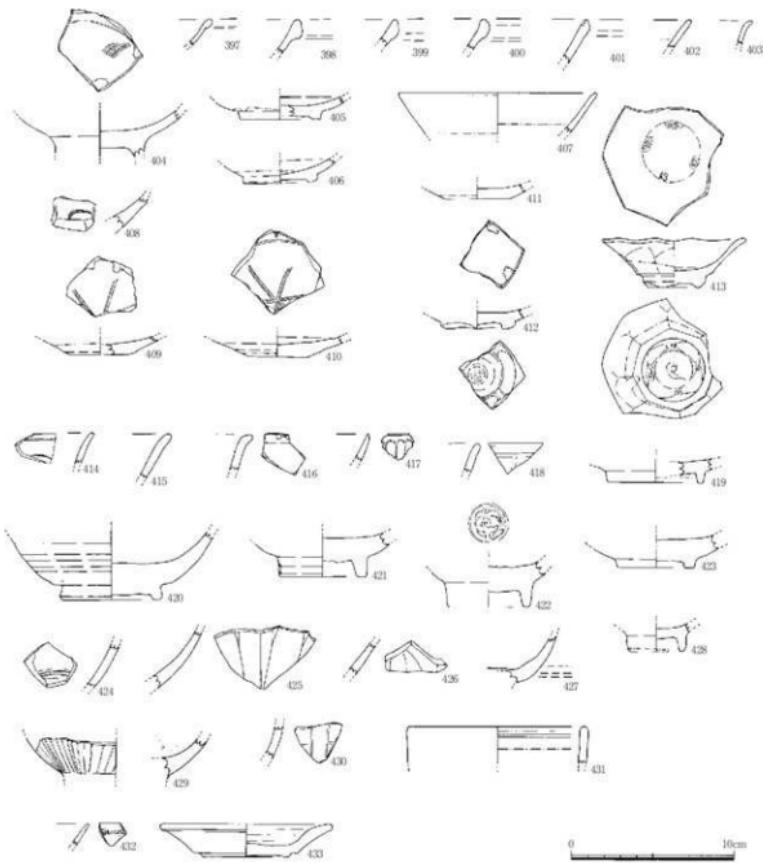


Fig.71 SD1出土遺物実測図 (2)

381)、14世紀後半～16世紀前半の中国龍泉窯系の青磁碗(421)、4層上位出土の土師質土器小皿(389)、4層下位から出土した9世紀末～10世紀前半の土師器皿(473・474)などである。

図示したものは378～487である。378・387は土師質土器杯、379～385は椀、386は掬又は杯、388～390は小皿である。458・459は土師質土器鉢で、外面にユビオサエとナデを施す。391・392は和泉型の瓦器椀、393・394は皿である。395・396は黒色土器椀。395は在地系、396は楠葉型で口縁部内面に沈線を施す。

397～413は白磁で、何れも中国産。397～401・405・406は碗(IV類)で12世紀。397～401は玉縁

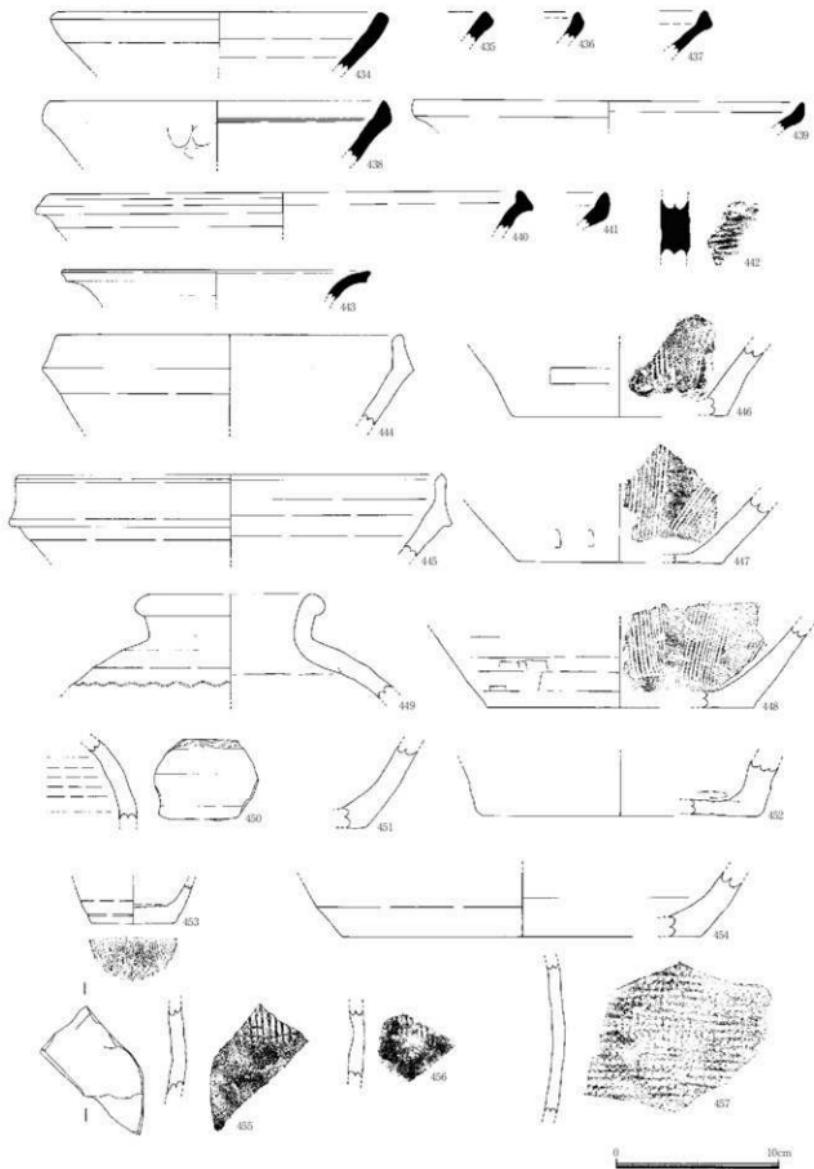


Fig.72 SD1出土遺物実測図(3)

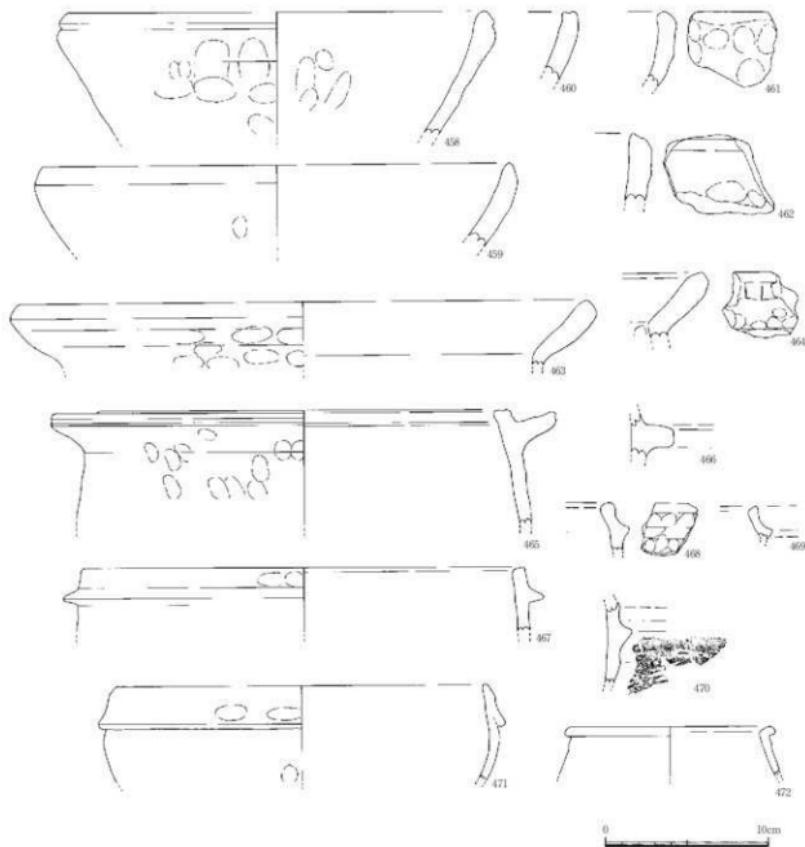


Fig.73 SD1出土遺物実測図(4)

状の口縁をもち、灰白色又は灰黄色を帯びる半透明の釉を施す。404は碗で内底に円圏状の段をもち櫛目を施す。403・407・409～412は皿。403は皿(E群)で16世紀。端反形の口縁部をもち、透明の釉を施す。407・412は皿(D群)で15世紀。412は抉入高台をもち、内底に別個体の高台痕が残る。413は面取盃(D群)で15世紀。抉入高台をもち、内底に別個体の高台痕が残る。408は碗又は皿で、内面にヘラ彫りによる文様を施す。409・410は皿(VII類)で12世紀～13世紀初頭。放射状の櫛目と花文を施す。414～431は青磁で、424が中国同安窯系、その他は龍泉窯系である。414・415・417～430は碗。424は内面に櫛描による文様を描く。414は碗(I-2類)で12世紀後半～13世紀前葉。内面に沈線と片切彫りによる文様を施す。425は碗(I-5b類)で13世紀後半～14世紀前半。外面

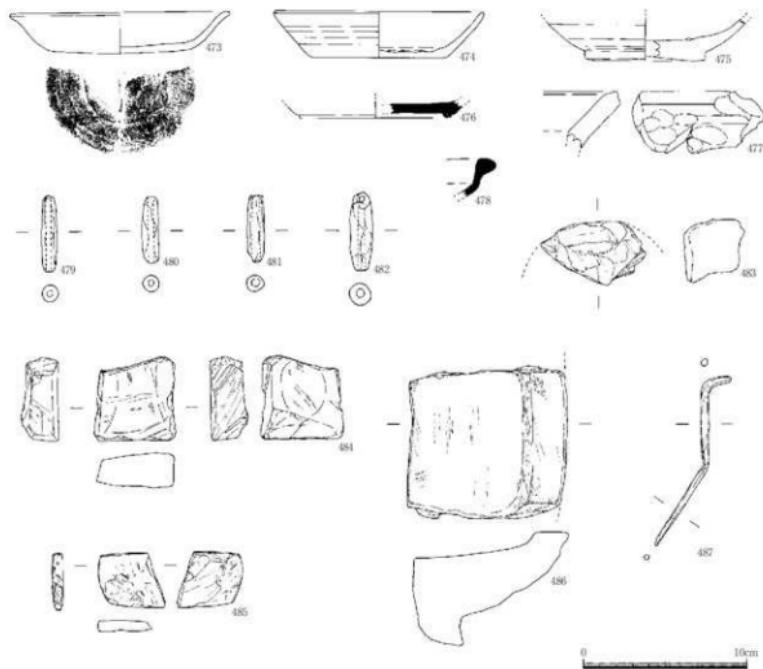


Fig.74 SD1出土遺物実測図(5)

に鍋運弁文を配しにぶい黄色を帯びる半透明の釉を施す。426は碗(Ⅲ類)で14世紀前半。外面に鍋運弁文を配し明オリーブ灰色を帯びる半透明の釉を施す。428は碗(Ⅲ類)の底部である。418は碗(B3類)で15世紀。外面に丸彫りによる蓮弁文を描く。417・429・430は碗(B4類)で15世紀～16世紀前半。外面に細線による蓮弁文を描き、オリーブ灰色を帯びる半透明の釉を施す。422は碗(E類)で15世紀後半～16世紀前半。内底に印花文を認める。416は棱花皿で、口縁部を波状に変形させている。431は香炉とみられ、内面無釉で、外面にはオリーブ灰色を帯びる半透明の釉を施す。432は中国景德鎮窯系の青花碗(E群)で、口縁部外面に雷文帯、内面に圓線を描く。

433は瀬戸の灰釉小皿で、浅黄色を帯びる透明の釉を施す。高台内に輪ドチ痕とみられる粘土紐状の目痕が残る。434～441は東播系の須恵器鉢で12～14世紀の遺物が含まれる。442は佐古龜山窯(高知県香南市佐古龜山)の須恵器甕で、外面に平行状のタタキ目が残る。胎土中に大粒の黒色粒を含み、内外面に自然釉が掛かる。443は須恵器壺である。444～448は備前焼の擂鉢。449・450は備前焼の壺で、外面にヘラ描きによる波状文を施す。451・452は備前焼の壺又は甕。453は陶器瓶で、外面に自然釉が掛かる。454～456は常滑焼の甕で、455・456は外面に格子状のタタキ目が残る。

457は陶器壺で、外面に格子状のタタキ目が残る。

460～464・468～470は土師質土器鍋。460～464は在地系の鍋で、ユビオサエとナデを施す。468～470は播磨型の鍋で、470は体部外面に斜方向の平行タタキが残る。465～467は土師質土器釜。465・466は揖津型の釜で、口縁部に回転ナデを施す。471は瓦質土器鍋。472は土師質土器壺類か。473・474は古代の土師器皿で外底にヘラ切り痕が残る。475は京都系の縁釉陶器碗で、内面に縁釉、外面に縁釉を刷毛塗りする。476は須恵器杯。477は古代の土師器壺。478は篠窯の須恵器鉢である。

479～482は土錘。483は轆の羽口とみられ、前面に自然釉が厚く掛かる。外側面に焦げが付着し、前面側の胎土断面は被熱し変色している。484は砥石。486は砂岩製の石臼。485は蛇文岩製の石製品である。487は銅製の棒状製品である。

近接し合うSD1・2間で白色系礫の廃棄状況が類似することからみて、SD1とSD2には併存した時期があり、SD2が埋没する15世紀以前から機能していたと推察される。また埋め戻しの埋土である1・2層出土遺物の内容からみて、SD1の埋没は16世紀に比定される。

SD2 (Fig.75～77)

調査区の中央部を東西方向に延びる溝で、軸方向はN-65°-Eである。他遺構との切り合い関係では、P173・191・192・237を切り、SK8と近世初頭のSB2-P1・3・4・SB3-P3に切られている。規模は検出長21.8m、幅80～126cm、深さ41～60cmを測る。断面形態はV字形又は不整形で、狭まつた床面から壁が斜め上方に立ち上がっている。また溝の北岸には部分的にテラス状の段がみられる。

埋土は1層、2層が灰黄褐色シルト、3層が褐灰色粘質シルトである。3層内には木片や植物遺体が多く含まれており、桃の種が出土している。1層には部分的に白色系の大型の礫が含まれており、特に溝のテラスから床面にかけて多く出土している。

出土遺物は口縁部点数にして土師質土器杯59点・小皿41点、瓦器碗15点・皿6点、須恵器鉢8点、瓦質土器鍋3点・羽釜1点、土師質土器鍋2点、青磁碗1点と、白磁碗2点・杯1点・皿2点、底部点数にして土師質土器杯93点・小皿25点・碗8点、瓦器碗14点・皿1点、須恵器擂鉢1点、青磁碗1点、白磁杯1点で、その他土師質土器細片、瓦器碗・皿、瓦質土器鍋、土師質土器鍋、陶器壺、須恵器壺、青磁碗、白磁碗・皿の体部片、土錘などが出土しており、12世紀から15世紀までの製品が含まれる。

図示したものは488～530である。488・489は土師質土器杯、497～499は碗、495・496は碗又は杯、490～494は小皿である。500・501は和泉型の瓦器碗。502～506は中国産の白磁。502は碗(IV類)で12世紀。玉縁状の口縁をもつ。506は碗で、内底に円圧状の段をもつ。503は皿(V類)。504・505は皿(IX類)で、13世紀後半～14世紀前半。504は口縁部内面と端部無釉。505は平底である。507～510は中国龍泉窯系の青磁碗。508は碗(I-2類)、510は碗(I-4類)で、ともに12世紀後半～13世紀前葉。508は内面に片切彫りによる文様を描き、明緑灰色の半透明の釉を施す。510の内面文様は飛雲文と割花文とみられる。509は碗(III類)で14世紀前半。外面に鶴運弁文を配し、明オリーブ灰色の半透明の釉を施す。511～515は東播系の須恵器鉢で、13世紀～14世紀初頭の製品が含まれる。516は須恵器擂鉢又は捏鉢。517～520は須恵器壺である。517は東播系の壺で、外面にタタキ目が残る。518・519は佐古亀山窯(高知県香南市佐古亀山)の壺で、胎土中に大粒の黒色粒を多く認める。519は外面に平行状のタタキを施す。521は在地系の土師質土器鍋である。522

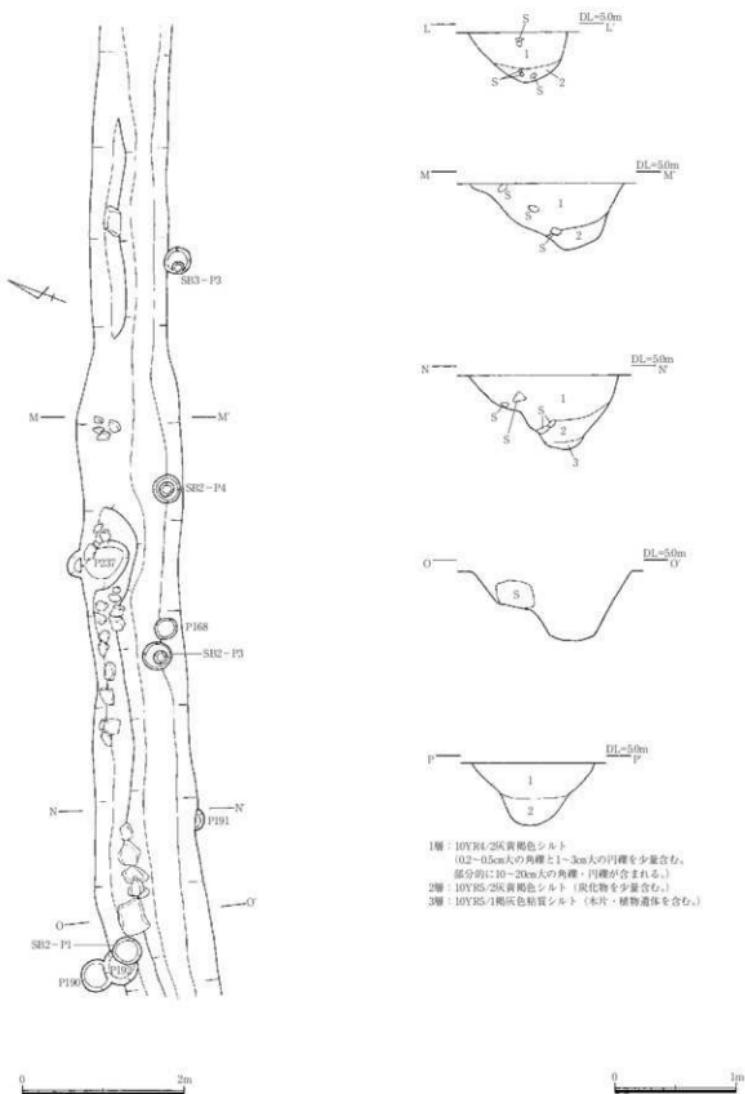


Fig.75 SD2平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図

は器種不明。523～525は瓦質土器鍋で、口縁部外面に粘土帯を貼付する。526は瓦質土器鉢。527は河内型の瓦質土器釜で15世紀前半。528・529は陶器甕。528は常滑焼の甕で、外面に格子状のタタキ目が残り、灰オリーブ色の自然釉が掛かる。530は土鍤である。

SD2の廃絶時期は15世紀に比定される。

SD3 (Fig.78)

調査区の中央部を南東から北西方向に延びる溝で、軸方向はおよそN-47°-Wである。他遺構との切り合い関係では、P92を切っている。規模は検出長12.4m、幅41～50cm、深さ10～18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の底部1点、小皿の口縁部1点、瓦器椀の口縁部1点、及び土師質土器細片である。

SD4 (Fig.78・79)

調査区の中央部を東西方向に延びる溝で、南北方向の溝SD6と直角に交わっている。軸方向はN-65°-Eである。他遺構との切り合い関係では、SK34・P151・153を切り、SK9に切られている。規模は検出長17.2m、幅58～63cm、深さ19～24cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部17点と底部22点、小皿の口縁部21点と底部8点、椀の底部2点、瓦器椀の口縁部6点と底部6点、瓦器皿の口縁部1点、土師質土器鍋の口縁部1点、土鍤1点、綠釉陶器皿の口縁部1点、及び瓦質土器鍋、須恵器甕、陶器捕鉢、青磁碗、白磁碗又は皿の体部片で、10～14世紀までの遺物が含まれる。

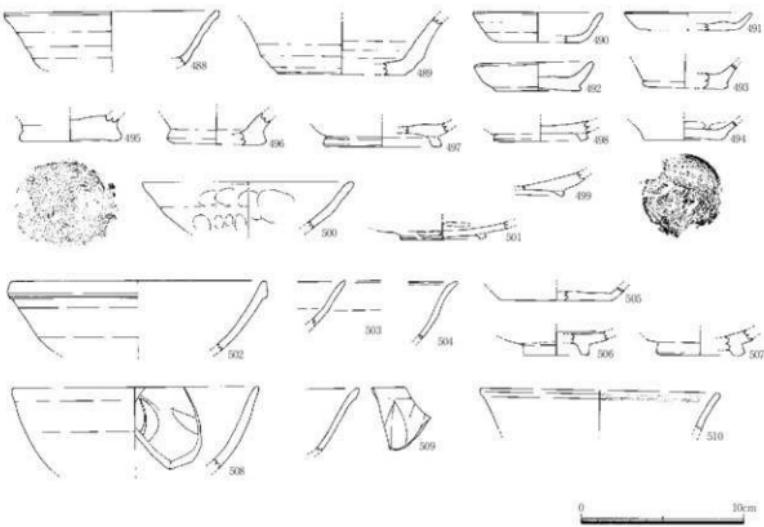


Fig.76 SD2出土遺物実測図(1)

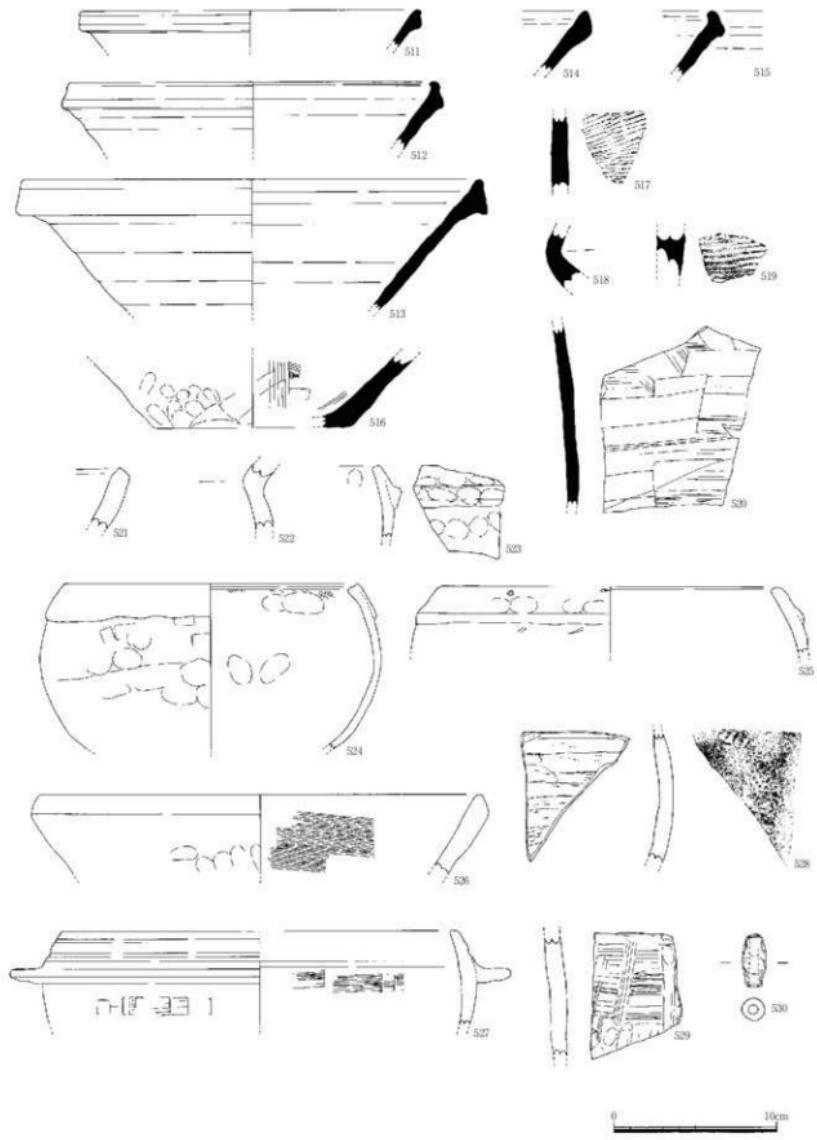


Fig.77 SD2出土遺物実測図 (2)

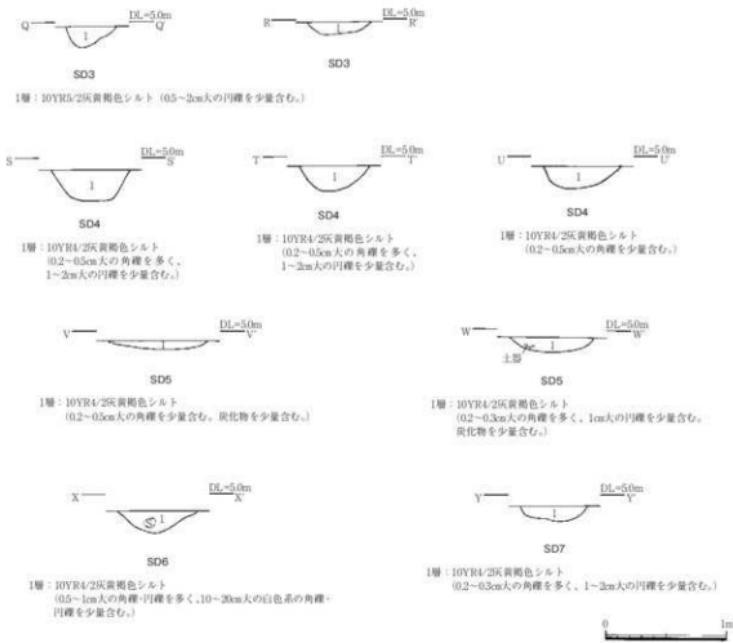


Fig.78 SD3 ~ 7セクション図

図示したものは532・533・541・543・544・546である。532は土師質土器杯、533は小皿である。541は京都系の縁軸陶器皿で10世紀。543は中国産の白磁碗又は皿。544は中国龍泉窯系の青磁碗(1~5b類)で13世紀後半~14世紀前半。外面に鏽蓮弁文を施す。546は土師質土器鍋で14世紀。内外面ナナデ、外面上位に断面三角形の鐫を貼付している。

他遺構との切り合い関係及び出土遺物からみて、SD4の廃絶時期は14世紀に比定される。

SD5 (Fig.78・80)

調査区の南部を東西方向に延びる溝で、南北方向の溝SD7と交わっている。軸方向はN-72°-Eである。他遺構との切り合い関係では、P205を切り、SB8-P1・SB9-P3・SB10-P3・SK6・14・SD6に切られている。またP214との前後関係は不明である。規模は検出長13.2m、幅70~79cm、深さ6~12cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部15点と底部18点、小皿の口縁部5点と底部4点、椀の底部1点、瓦器椀の口縁部6点と底部6点、白磁碗の口縁部1点、及び青磁碗の体部、土師質土器細片、瓦器細片、須恵器甕の体部、土師器甕の体部で、古代末から13世紀までの遺物が出土している。

図示したものは551~554である。551は土師質土器杯、552は和泉型の瓦器椀、553は中国産の白

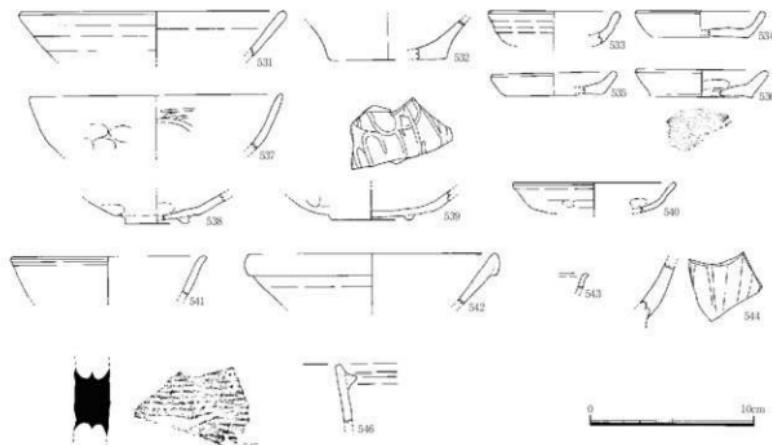


Fig.79 SD4・6出土遺物実測図
(SD4: 532・533・541・543・544・546、SD6: 531・534～540・542・545)

磁皿である。554は中国龍泉窯系の青磁碗（I - 4類）で12世紀後半～13世紀前葉。内面に飛雲文と割花文を施す。

SD7との関係性及び出土遺物からみて、SD5の廃絶時期は13世紀に比定される。

SD6 (Fig.78・79)

調査区の南東部を南北方向に延びる溝で、東西方向の溝SD4と直角に交わっている。軸方向はN - 25° - Wである。他遺構との切り合い関係では、SD5・P195・196・201を切り、SB4・P4・5・SK9、近世のSB1・P5に切られている。規模は検出長9.9m、幅66cm、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部6点と底部9点、小皿の口縁部7点と底部5点、瓦器椀の口縁部7点と底部3点、皿の口縁部1点、白磁碗の口縁部1点、及び青磁碗、須恵器甕の体部、土師質土器細片、瓦器細片、古代の須恵器細片と土師器甕の体部で、古代末から13世紀までの遺物が含まれる。

図示したものは531・534～540・542・545である。531は土師質土器椀又は杯、534～536は小皿である。537～539は和泉型の瓦器椀、540は皿である。542は中国産の白磁碗（IV類）で12世紀。玉縁状の口縁をもち、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。545は佐古龜山窯（高知県香南市佐古龜山）の須恵器甕で、外面に平行状のタタキ目が残る。内外面に自然釉が掛かり、胎土中に大粒の黒色粒を多く含む。

SD4との関係性からみて、SD6の廃絶時期は14世紀に比定される。

SD7 (Fig.78・80)

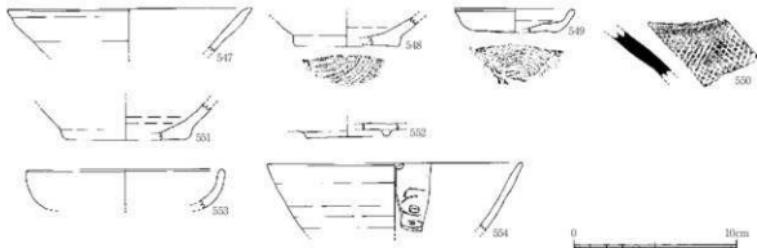


Fig.80 SD5・7出土遺物実測図 (SD5: 551～554, SD7: 547～550)

調査区の南部を南北方向に延びる溝で、東西方向の溝SD5と交わっている。軸方向はN-17°-Wである。他遺構との切り合い関係では、SK12・P189を切り、SB9-P2・5、SB10-P2に切られる。規模は検出長38m、幅55cm、深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯の口縁部9点と底部7点、小皿の口縁部4点と底部5点、瓦器椀の口縁部11点と底部3点、及び白磁碗又は皿、須恵器壺の体部、土師質土器細片、瓦器細片、古代の土器器壺体部で、古代末から13世紀までの遺物が出土している。

図示したものは土師質土器杯(547)・椀(548)・小皿(549)、須恵器壺(550)である。

出土遺物からみて、SD7の廃絶時期は13世紀に比定される。

(4) ピット

古代末～中世のピットは、SB柱穴を含めて217個を検出した。ピットの多くは13～14世紀の遺物を含んでおり、該当期の遺構とみられるものである。以下では、良好な遺物出土状況を示したものや柱痕を検出したピットを取り上げる。この他、柱痕を検出したものや他遺構との切り合い関係をもつものについては、ピット計測表に概要を示している。(Tab.5)

P13 (Fig.81)

K-2グリッドに位置する。検出規模は径23cm、深さ24cm、埋土は灰黄褐色シルトである。灰色粘土からなる径11cmの柱痕を検出している。出土遺物は未確認である。

P122 (Fig.81・82)

O-5・P-5グリッドに位置する。検出規模は径16cm、深さ7cm、埋土は灰黄褐色シルトである。床面からは和泉型瓦器皿(559)がほぼ完形の状態で出土している。

P124 (Fig.81・82)

Q-5グリッドに位置する。検出規模は径27cm、深さ21cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、床面付近から径15cmの褐灰色粘土の柱痕を検出している。出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と土師質土器細片、瓦器椀の口縁部2点と底部1点、白磁碗の口縁部1点と体部片である。

図示したものは土師質土器杯(555)、和泉型の瓦器椀(556・557)、中国産の白磁碗(IV類)(558)である。

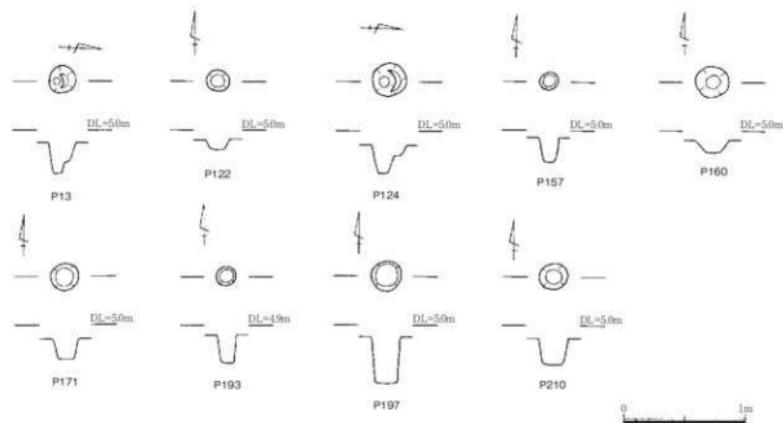


Fig.81 P13・122・124・157・160・171・193・197・210平面図・エレベーション図

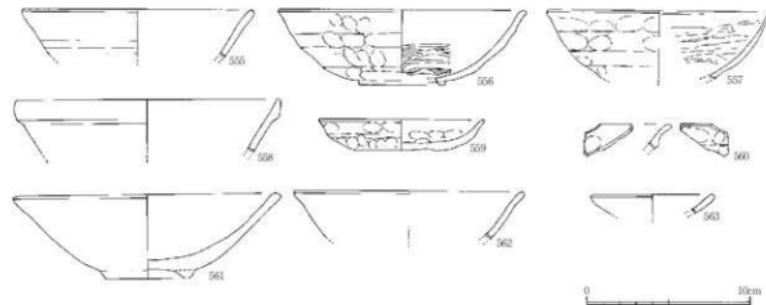


Fig.82 P122・124・160・171・210出土遺物実測図
(P122:559、P124:555~558、P160:560、P171:561、P210:562・563)

P157 (Fig.81)

N - 3グリッドに位置する。検出規模は径16cm、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、下層から褐灰色粘土の柱痕を検出している。出土遺物は確認できていない。

P160 (Fig.81・82)

N - 5グリッドに位置する。検出規模は径26cm、深さ10cmを測り、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は瓦器皿の口縁部1点と土師質土器細片である。図示したものは和泉型の瓦器皿(560)である。

P171 (Fig.81・82)

Q - 5グリッドに位置する。検出規模は径23cm、深さ16cmを測り、埋土は灰黄褐色シルトである。

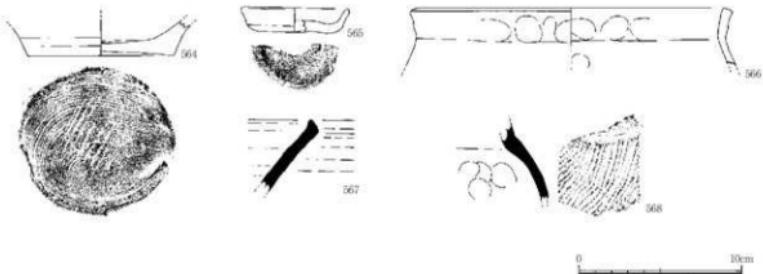


Fig.83 II・III層出土遺物実測図

遺物としては、下層からほぼ完形の土師質土器碗(561)が出土している。

P193 (Fig.81)

Q-4グリッドに位置する。検出規模は径16cm、深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、径16cmの褐色粘土の柱痕を検出している。出土遺物は土師質土器細片と須恵器甕の体部片である。

P197 (Fig.81)

O-5グリッドに位置する。検出規模は径23cm、深さ38cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、下層から褐色粘土の柱痕を検出している。出土遺物は土師質土器小皿の口縁部1点と底部1点、土師質土器細片である。

P210 (Fig.81・82)

M-4グリッドに位置する。検出規模は径22cm、深さ19cm、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師質土器杯の口縁部(562)、土師質土器小皿の口縁部(563)、土師質土器細片である。

(5) 包含層出土の遺物

II・III層 (Fig.83)

中世の遺物はII・III層から出土している。図示したものは土師質土器杯(564)、小皿(565)、東播系須恵器鉢(567)、須恵器壺又は甕(568)、瓦質土器鍋(566)である。

3. 近世の遺構と遺物

(1) 堀立柱建物跡

近世の堀立柱建物跡は3棟を確認した。何れもIII層上面にて検出したもので、出土遺物の内容から17世紀以降に比定される。各柱穴については、SBピット計測表(Tab.6)に規模を示している。

SB1 (Fig.84・86)

調査区東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N-72°-Eの棟方向をもつ。他遺構との前後関係では、P5が中世のSD6を切っている。また、未検出ではあるが、位置関係からみてP4が中世のSK5と切り合うとみられる。規模は梁間3.87m、桁行6.18mを測る。桁行の柱間寸法はP1-P2-P3間とP6-P7間が2.23~2.25m、P5-P6間が1.70mとなり、西端の柱間が広い。

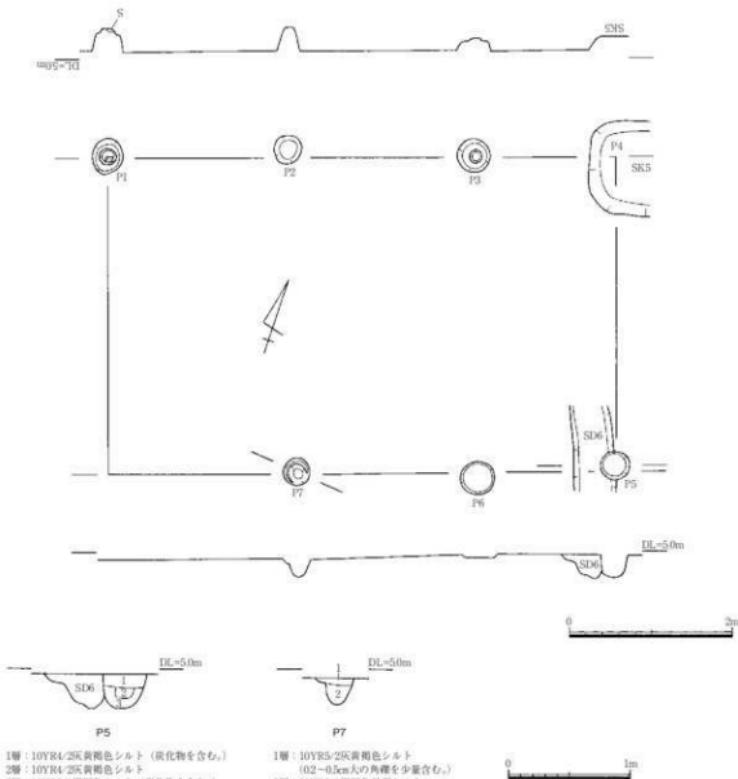


Fig.84 SB1平面図・セクション図・エレベーション図

柱穴は6基を検出し、P4・8が未検出である。柱穴の規模は径29~40cm、深さはP1~3・5・7が14~30cm、P6が4cmで、削平を受けて浅くなったものや残存しないものが含まれる。埋土は何れも灰黄褐色シルトで、P1~3・5・7では径14~19cmの柱痕を検出している。

遺物はP1から肥前産の刷毛目皿(569)と土師質土器細片、P1の柱痕から土師質土器細片、P2から中世の土師質土器椀、P3から肥前産の唐津系灰釉陶器小皿と土師質土器椀(570)、P7から中世の瓦器細片、P7柱痕から白磁碗の体部片と土師質土器細片が出土している。

P1出土遺物の内容からみて、SB1の廃絶は17世紀末~18世紀に比定される。

SB2 (Fig.85・86)

調査区東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N~72°~Eの棟方向をもつ。他遺構との前後関係では、P1・3・4が中世のSD2を切っている。またP1がP192と切り合うが前後関係は不明

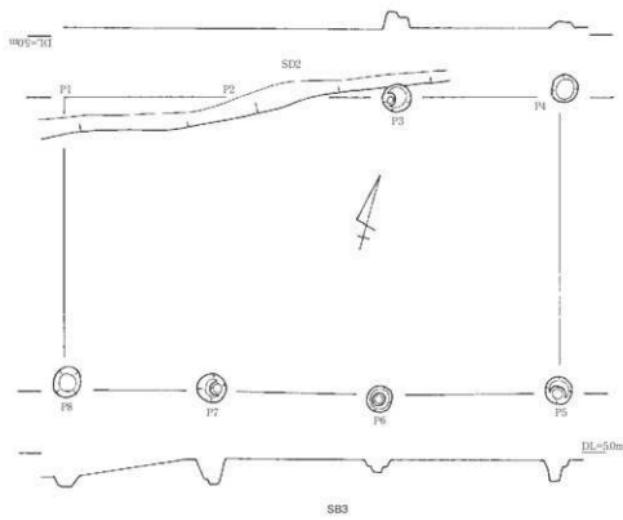
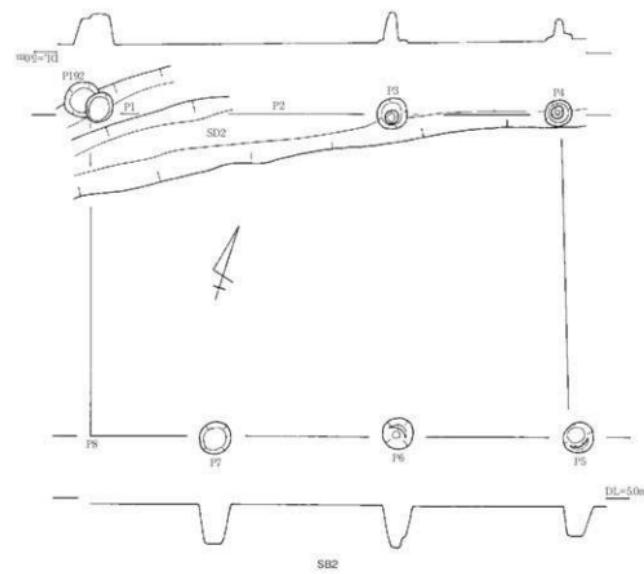


Fig.85 SB2・3平面図・エレベーション図

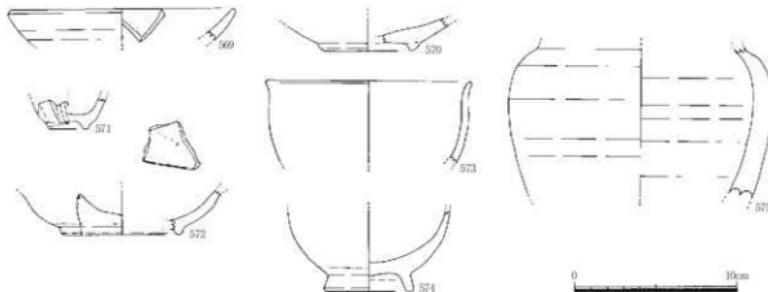


Fig.86 SB1・2出土遺物実測図

(SB1 - P1:569、SB1 - P3:570、SB2 - P5:574・575、SB2 - P6:571、SB2 - P7:572・573)

である。規模は梁間3.94m、桁行5.82mを測る。桁行の柱間寸法はP3-P4間とP5-P6-P7間が2.05~2.18m、P2・8を復元した場合のP1-P2間とP7-P8間が1.56m前後となり、西端の柱間が短くなる。

柱穴は6基を検出し、P2・8が未検出である。柱穴の規模は径30~39cm、深さは24~52cmである。埋土はP1・3・4・5・7が灰黄褐色シルト、P6が褐灰色シルトである。またP5では検出面から柱痕を検出し、P3・4・6では床面で径14cm前後の柱痕を検出している。

遺物はP3の柱痕から土師質土器細片、P4から土師質土器細片、P5から陶器碗の底部と壺の体部、P6から染付小杯の底部、白磁瓶の体部、土師質土器小皿、P7から陶器碗の口縁部、青花皿の底部、土師質土器小皿などが出土している。

図示したものはP5床面出土の肥前産陶器中碗(574)、備前焼壺(575)、P6上層出土の肥前産染付小杯(571)、P7上層出土の中国漳州窯系青花皿(572)、肥前産又は肥前系の陶器中碗(573)である。

出土遺物の内容からみて、SB2は17世紀に比定される。

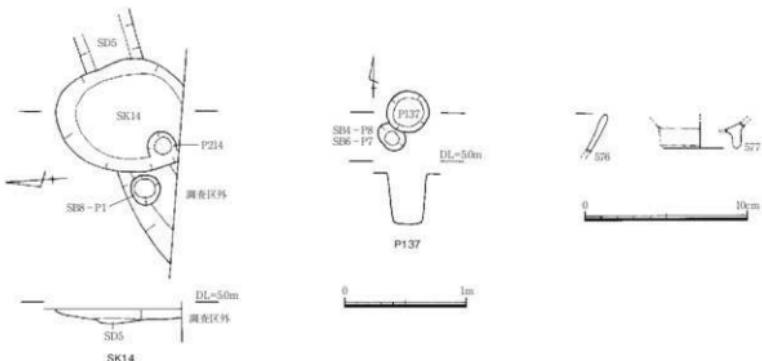
SB3 (Fig.85)

調査区東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N-74°-Eの棟方向をもつ。他造構との前後関係では、P3が中世のSD2を切っている。規模は梁間3.64m、桁行6.06mを測る。桁行の柱間寸法はP3-P4間とP5-P6-P7間が2.02~2.20m、P7-P8間が1.84mで、西端の柱間が短くなる。

柱穴は6基を検出し、P1・2が未検出である。柱穴の規模は径29~33cm、深さは4~30cmを測る。埋土は何れも灰黄褐色シルトである。またP3・5~7では径14~16cmの柱痕を検出している。

遺物はP6から土師質土器杯の底部、P7から土師質土器小皿の口縁部、P3・8埋土中とP5の柱痕から土師質土器細片が出土している。

建物や柱穴規模の共通性、位置関係などからみて、SB3は近世の造構であった可能性をもつ。



1層：10YR4/2灰黄褐色シルト (0.2~0.5cm太の角繩を少量含む。)

Fig.87 SK14・P137平面図・セクション図・エレベーション図・P137出土遺物実測図

(2) 土坑

SK14 (Fig.87)

調査区南東部に位置する土坑で、中世のSD5・P214を切っている。南部が調査区外となるため全体の規模は不明であるが、平面形は梢円形とみられ、南北確認長1.06m、東西長0.93m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は17世紀後半～18世紀前半の肥前産灰釉碗1点、及び中世の混入とみられる土師質土器杯、瓦器挽、土師質土器細片である。

(3) ピット

近世のピットはSB柱穴を含めて18個を確認した。

P137 (Fig.87)

0~5グリッドに位置し、SB4-P8・SB6-P7を切る。検出規模は径33cm、深さ42cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、下層で褐灰色粘土からなる径20cmの柱痕を検出する。出土遺物は細片と須恵器壺の体部片である。遺物は上層から白磁碗の口縁部(576)、下層から肥前産染付碗の底部(577)、その他土師質土器細片が出土している。

4. 近代の遺構と遺物

(1) 土坑

SK11 (Fig.88~91)

C-2グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸0.92m、短軸0.82m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中からは近世～近代の陶磁器、土器、瓦片が出土している。

図示したものは染付中碗(578)・小碗(580)、白磁小杯(579)、陶器皿(583・584)・捏鉢又は片



Fig.88 SK11平面図・エレベーション図

口 (585・586)・土瓶 (588・590・592)・土瓶蓋 (587・589・591)・水注類 (593)・壺 (596)・小壺 (595)・壺蓋 (594)、土師質土器壺^壺 (597)、及び近世の染付大皿 (581)・鉢 (582) である。

(2) 瓦溜り

瓦溜1 (Fig.91・92)

D-2グリッドに位置する瓦溜りで、多量の瓦片とともに近世～近代の遺物が多く出土している。

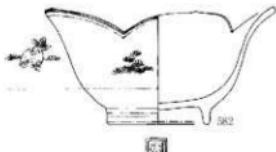
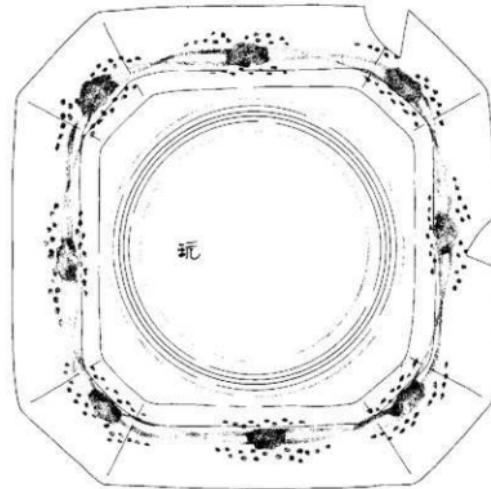
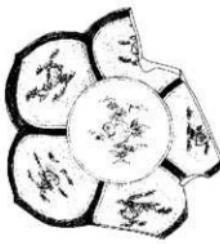
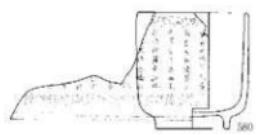
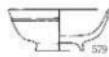
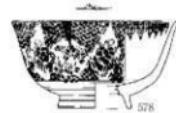
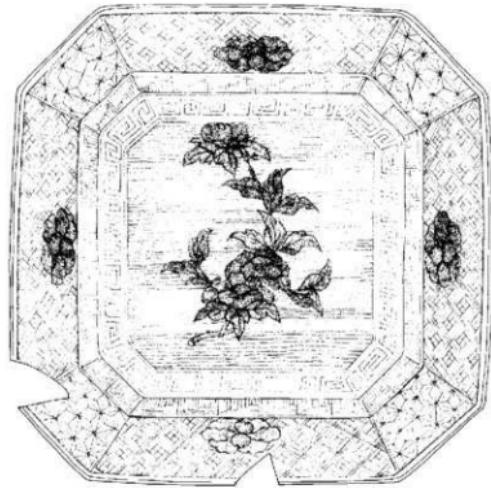
図示したものは近代の染付中碗 (598・599)・小碗 (601)・皿 (600)・小瓶 (603)、陶器小皿 (602)・捏鉢又は片口 (605)・土瓶 (604)・瓶 (606・607)・甕 (610)・灯明受皿 (609)・火鉢 (608) である。

(3) 包含層出土の遺物・その他の遺物

I層・搅乱層 (Fig.92・93)

I層及び搅乱層内からも近世・近現代の遺物が出土している。

図示したものは近現代の染付中碗 (613)・五寸皿 (614)、磁器色絵中碗 (617)・香炉 (616)、陶器小皿 (615)、能茶山窯産の陶器大瓶 (618)、近世の染付中碗 (611)・鉢 (612)、近世又は近現代の窯道具 (619～623) である。616は香炉で、外底に型による「瀬148」の記号をもつ。619～623はハマで、近隣に所在する能茶山窯からもたらされた可能性をもつ。



0 10cm

Fig.89 SK11出土遺物実測図 (1)

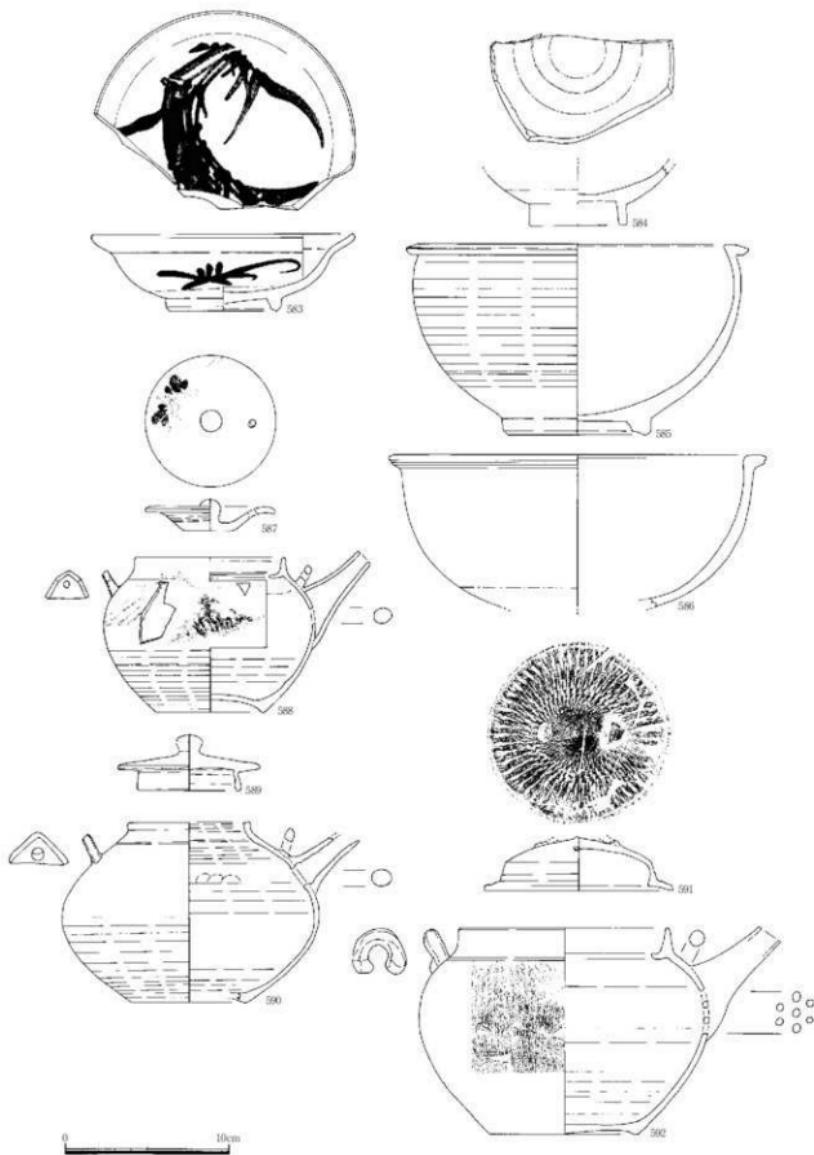


Fig.90 SK11出土遺物実測図 (2)

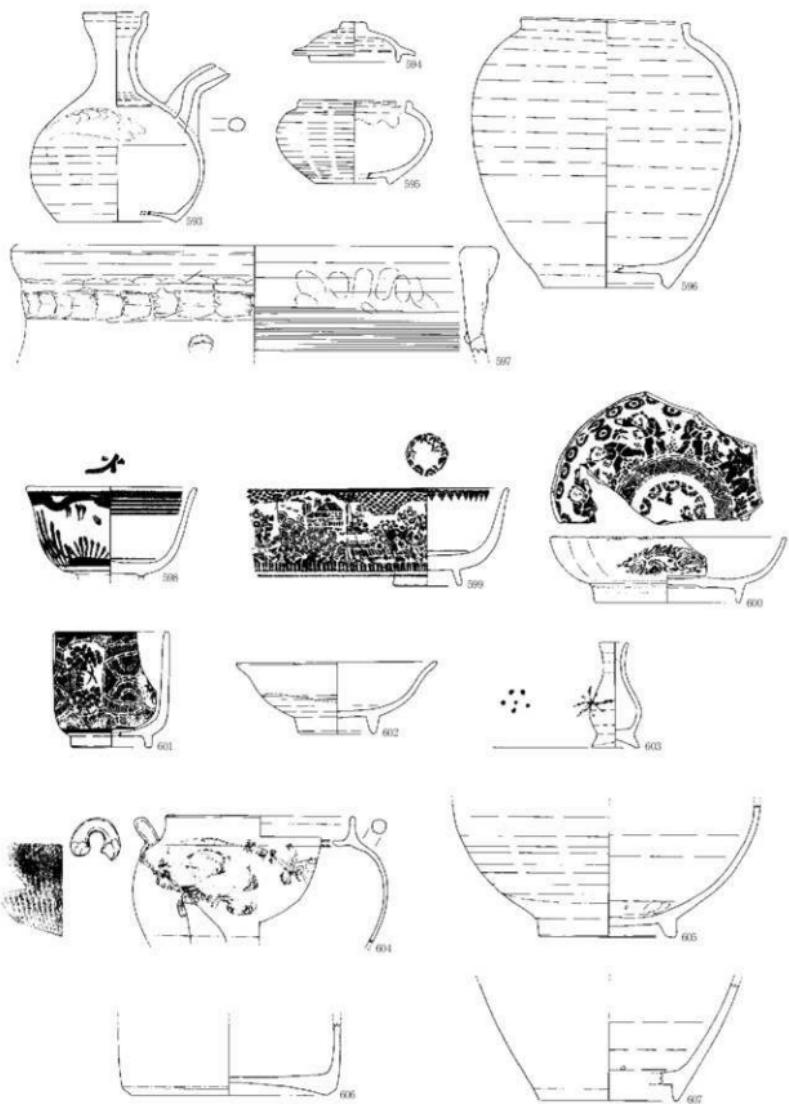


Fig.91 SK11・瓦溜1出土遺物実測図
(SK11:593～597、瓦溜1:598～607)

0 10cm

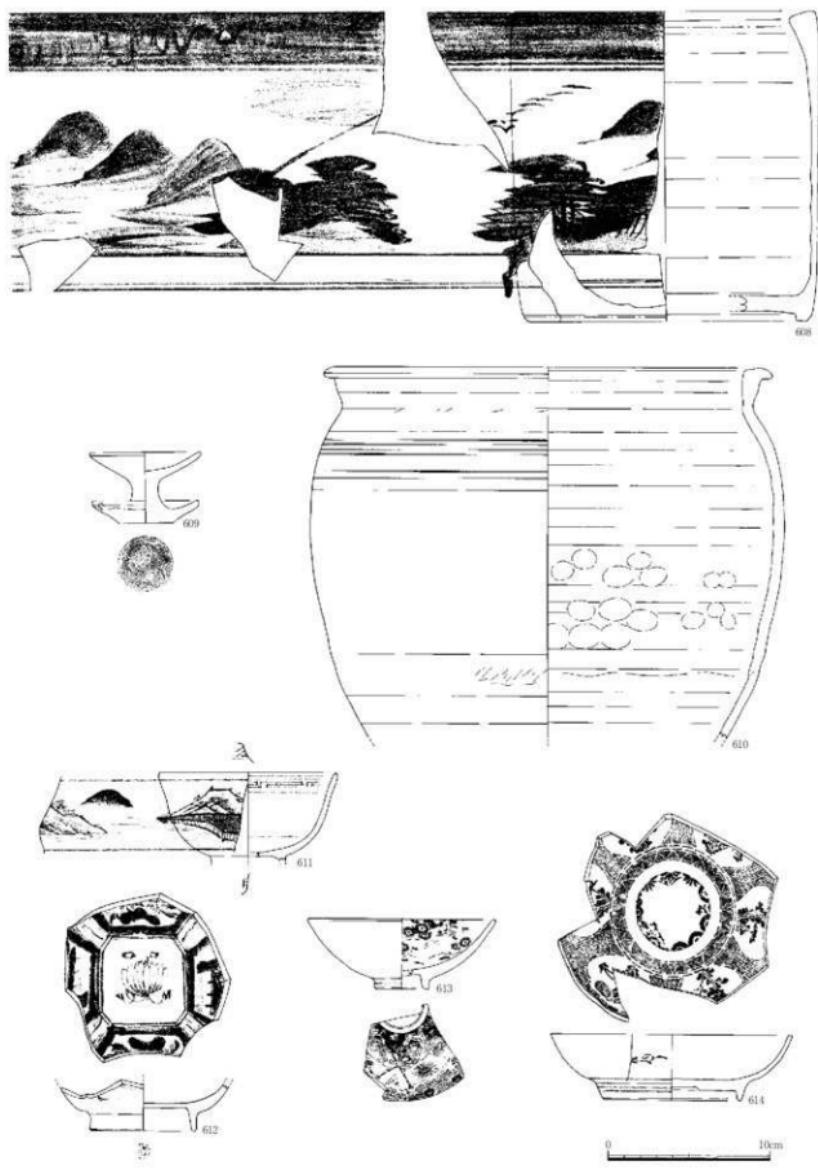


Fig.92 瓦溜1・I層出土遺物実測図 (瓦溜1:608～610、I層:611～614)

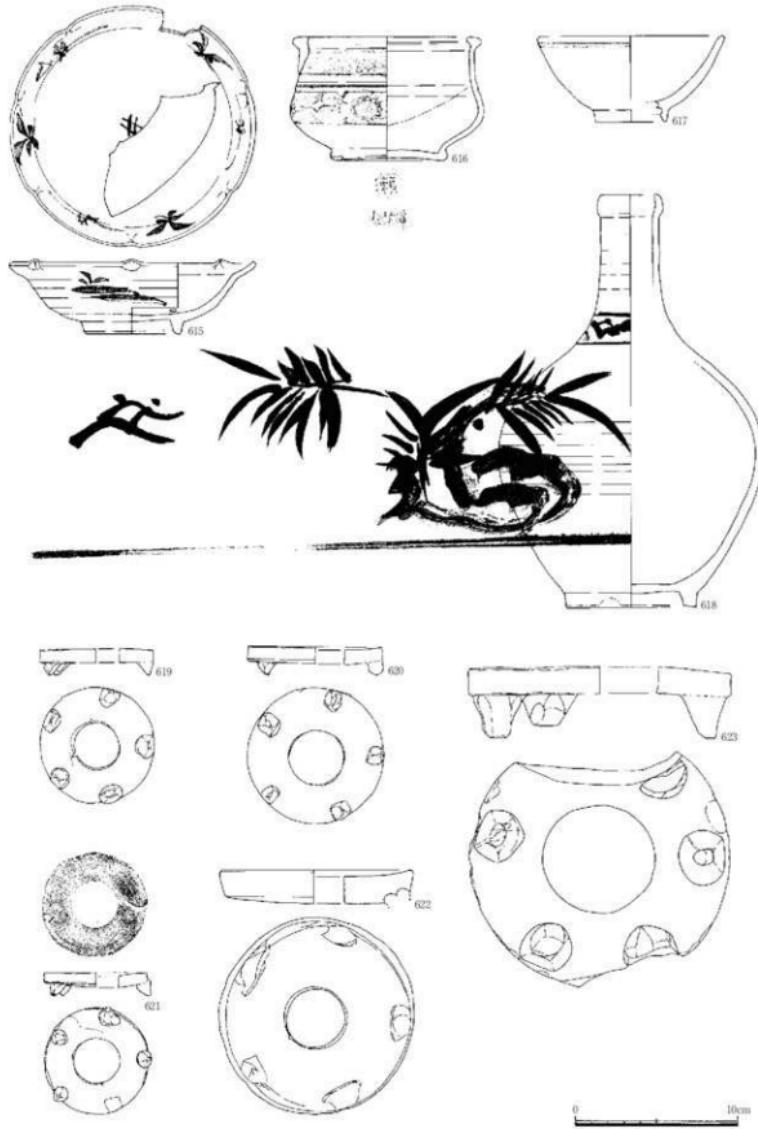


Fig.93 I層・搅乱層出土遺物実測図 (I層: 615・622、搅乱: 616～621・623)

Tab. 1 土坑一覧表 (弥生時代)

遺構名	グリッド	形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	切り合い関係	時期
SK15	G - 1	楕円形	2.26	0.88	11		弥生 IV
SK16	K - 2	楕円形	2.25	1.10	19	SK23・24を切る。	弥生 III - 2
SK17	E - 1	楕円形	1.56	1.01	22		弥生 IV
SK18	M - 2・3	溝状	南北確認長 5.08	東西長 0.56	35	SK32を切る。	弥生 IV
SK19	O - 3	長楕円形	南北長 1.17	東西残存長 0.42	9	SK20・21に切られる。	弥生 IV
SK20	O - 3	楕円形	1.00	0.76	14	SK19・21を切る。 SK31の上面で検出。	弥生 IV
SK21	O - 3	楕円形	南北長 1.46	東西残存長 0.70	18	SK19を切る。 SK20に切られる。	弥生 IV
SK22	O - 3	楕円形	0.56	0.45	18		弥生 III - 2 - IV
SK23	K - 2	楕円形	東西長 1.70	南北残存長 0.90	18	SK16・26に切られる。 P222の上面で検出。	弥生 III - 2
SK24	K - 2・L - 2	楕円形	東西残存長 0.85	南北長 0.80	14	SK16に切られる。	弥生 III - 2
SK25	O - 2・3	不整形	2.02	1.16	26		弥生 IV
SK26	K - 1・2	楕円形か	東西長 3.22	南北確認長 1.08	25	SK23・P222・223を切る。	弥生 III - 2 - IV
SK27	N - 3・O - 3	楕円形	2.13	0.86	20		弥生 V 後半
SK28	O - 3・P - 3	楕円形	1.70	0.96	6	SK30・31を切る。	弥生 III - 2 - IV
SK29	K - 2・3	溝状	2.43	0.30	15		弥生 IV
SK30	O - 3・P - 3	楕円形	0.61	0.44	11	SK28に切られる。	弥生 III - 2 - IV
SK31	O - 3	溝状	1.26	0.40	8	SK28に切られる。 SK20の下面で検出。	弥生 III - 2 - IV
SK32	M - 2	溝状	1.35	0.40	8	SK18に切られる。	弥生 III - 2
SK33	O - 4・5	溝状	2.28	0.58	18		弥生 IV
SK35	K - 4・5 L - 5	楕円形	南北確認長 2.00	東西長 1.18	20	ST2に切られる。	弥生 III - 2・3
SK36	K - 4	楕円形	1.88	0.70	18	ST2の上面で検出。	弥生 IV
SK37	J - 3・4 K - 3・4	溝状	2.70	0.41	10		弥生 IV
SK38	K - 4・L - 4	溝状	3.38	0.66	22	ST2・SX5を切る。	弥生 IV - 2
SK39	H - 3 I - 3・4	溝状	2.41	0.48	16	SX10を切る。	弥生 IV
SK40	H - 3	溝状	2.42	0.45 - 0.88	26	SX9を切る。	弥生 IV
SK41	G - 3・4 I - 3・4	楕円形	2.82	2.50	18	SK42・SX9に切られる。	弥生 III - 2・3
SK42	H - 3・4	溝状	2.11	0.48	25	SK41・SX9を切る。	弥生 IV
SK43	H - 4・I - 4	楕円形か	東西長 3.63	南北確認長 2.40	12	SX9・10に切られる。	弥生 IV
SK44	P - 5	楕円形か	南北確認長 1.30	東西長 1.02	16 - 20	SX4の上面で検出。 石龜中1の直下で検出。	弥生 IV

Tab.2 土坑一覧表(古代末～中世・近世・近代)

遺構名	グリッド	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	切り合ひ開闢	時期
SK1	L-2	不整形か	東西長 186	南北残存長 122	9	SD1に切られる。	中世
SK2	L-2	不明	東西長 178	南北残存長 218	18	SD1に切られる。	15世紀後半～16世紀前半
SK3	H-3-I-3	隅丸長方形	140	100	15		中世
SK4	G-3-H-3	椭円形	180	162	18	P180を切る。	14世紀後半以降
SK5	P-3	隅丸長方形 か	東西確認長 198	南北長 116	22		12～13世紀
SK6	Q-5	不明	東西確認長 084	南北長 132	14	SD5を切る。	中世か
SK7	N-5	椭円形	102	086	8	P179・199を切る。P181に切られる。	12～13世紀か
SK8	P-2-3	椭円形か	南北長 168	東西確認長 164	42	SD2を切る。	15世紀
SK9	P-3-4	椭円形	200	191	11	SD4・6・P198を切る。SD4・P4に切られる。	14世紀～15世紀前半
SK10	Q-5	椭円形か	南北長 112	東西確認長 084	14		13世紀
SK11	C-2	不整形	092	082	22		近世
SK12	Q-5	不明	南北確認長 118	東西残存長 096	11	SD9・P5・SD7に切られる。	13世紀
SK13	Q-4	不明	南北確認長 168	東西確認長 036	29		13世紀
SK14	N-5	椭円形か	南北確認長 106	東西長 093	10	SD5・P214を切る。	近世
SK34	N-4	椭円形	074	060	10	SD4に切られる。P153の下面で検出。	14世紀以前

Tab.3 ピット計測表(弥生時代)

遺構名	グリッド	径(cm)	深さ(cm)	検出面
P217	H-2	17	27	V層下位
P218	L-2	28	18	V層下位、SX11床
P219	M-2	11	38	V層上位
P220	E-2	46	5	
P221	O-3	36	13	V層上位
P222	K-2	22	10	V層下位、SX11床
P223	K-2	24	8	V層下位、SX11床
P224	K-2	20	12	V層
P225	K-2	22	15	V層下位、SX11床
P226	K-3	20	6	V層
P227	N-3	26	6	V層
P228	K-2	24	16	V層下位、SX11床
P236	I-3	20	8	
P239	L-1	22	14	V層下位、SX11床
P240	L-2	22	14	V層下位、SX11床

Tab.4 ST ピット計測表(弥生時代)

遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱痕
ST1	中央P	120×113	18~24	
	P1	16	32	柱痕
	P2	25	35	柱痕
	P3	18	27	
	P4	19	26	
	P5	15	23	
	P6	15	18	
	P7	20	10	
	P8	18	5	
	P9	18	12	
	P10	18	6	
	P11	20	12	
	P12	20	10	
ST2	中央P	142×82	28	
	P1	22	36	
	P2	21	43	
	P3	22	14	
	P4	16	24	
	P5	22	22	柱痕
	P6	22	13	
	P7	25	20	
	P8	22	20	
ST3	中央P1	62×56	24	
	中央P2	55×54	16	
	P1	19	14	
	P2	24	15	
	P3	15	12	
	P4	16	15	
ST4	P5	50×40	24	
	P1	24	13	
	P2	18	28	
	P3	15	6 [29]	
	P4	21	6	
	P5	20	12	
	P6	18	9	

※〔 〕は住居床面に合わせた復元深度。

Tab.5 ピット計測表(古代末~中世)

遺構名	グリッド	径(cm)	深さ(cm)	柱痕・切り合い関係
P9	M-2	26	13	SD1に切られる。
P13	K-2	23	24	柱痕(径11cm)
P67	H-1	20	12	SB12-P3に切られる。
P74	H-1·2	19	19	SB13-P6に切られる。
P84	K-2	24	4	SD1に切られる。
P91	K-2	25	4	SD1に切られる。
P92	E-2	18	8	SD3に切られる。
P122	P-5	16	7	
P123	Q-5	15	5	柱痕(径15cm)
P124	Q-5	27	21	柱痕(径15cm)
P139	O-5	16	10	柱痕(径10cm)
P146	O-4	20	18	SD4・P145を切る。
P151	N-4	25	6	SD4に切られる。
P153	N-4	50	10	SD4・P159に切られる。SK34の上面で検出。
P157	N-3	16	20	柱痕(径12cm)
P159	N-4	28	9	P153を切る。
P160	N-5	26	10	
P171	Q-5	23	16	
P173	P-3	41	13	SD2に切られる。
P179	N-5	20	9	SK7に切られる。
P180	H-3	20	14	SK4に切られる。
P181	N-5	30	46	SK7を切る。
P189	P-5	6	8	SD7に切られる。
P191	M-4	22	14	SD2に切られる。
P192	M-4	42	29	SD2・P190に切られる。
P193	Q-4	16	24	柱痕(径16cm)
P195	Q-5	16	14	SD6に切られる。
P196	Q-5	13	24	柱痕。SD6に切られる。
P197	O-5	23	38	柱痕
P198	P-3	20	20	柱痕。SD4を切る。SK9に切られる。
P199	N-5	21	14	SK7に切られる。
P201	Q-5	22	15 [24]	SD6に切られる。
P205	Q-4	45	6	SD5に切られる。
P210	M-4	22	19	
P214	N-5	18	8 [13]	SK14に切られる。SD5と切り合う。
P237	N-3	60×50	47	SD2に切られる。
P238	K-3	20	5 [24]	SD1に切られる。

※〔 〕は中世の遺構検出面に合わせた復元深度。

Tab.6 SB ピット計測表 (古代末～中世・近世)

遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱痕・確
SB1	P1	35	28	柱痕(径17cm) 確
	P2	33	30	柱痕(径19cm)
	P3	40	14	柱痕
	P4	—	—	
	P5	36	27	柱痕(径14cm)
	P6	40	4	
	P7	29	21	柱痕(径16cm)
SB2	P1	35	36	
	P2	—	—	
	P3	36	34	
	P4	30	24	
	P5	32	35	柱痕
	P6	37	52	
	P7	39	51	白色系確
	P8	—	—	
SB3	P1	—	—	
	P2	—	—	
	P3	31	20	柱痕(径16cm)
	P4	31	4	
	P5	29	25	柱痕(径14cm)
	P6	29	14	柱痕(径14cm)
	P7	33	30	柱痕(径14cm)
	P8	32	12 [30]	
SB4	P1	—	—	
	P2	27	5	
	P3	—	—	
	P4	26	16	柱痕
	P5	19	12 [28]	
	P6	21	20	柱痕(径14cm)
	P7	25	14	柱痕(径14cm)
	P8	21	25	
SB5	P1	22	4	
	P2	20	20	
	P3	—	—	
	P4	15	14 [26]	柱痕(径15cm)
	P5	22	22	
	P6	—	—	
	P7	—	—	
	P8	—	—	
SB6	P1	—	—	
	P2	20	28	
	P3	—	—	
	P4	16	10	
	P5	21	20	柱痕(径14cm)
	P6	25	14	柱痕(径14cm)
	P7	21	25	
	P8	25	19	

遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱痕・確
SB7	P1	22	28	
	P2	15	9	
	P3	—	—	
	P4	22	5	柱痕(径14cm)
	P5	18	4	
	P6	—	—	
	P7	—	—	
SB8	P8	—	—	
	P1	26	30 [40]	
	P2	23	50	
	P3	33×29	18	確
	P4	24	29	柱痕(径13cm)
	P5	26	36	
	P6	—	—	
SB9	P7	—	—	
	P8	—	—	
	P1	20	24	確
	P2	22	21	
	P3	20	21	
	P4	22	22	
SB10	P5	28	31	
	P6	—	—	
	P1	20	24	確
	P2	24	26	
	P3	15	14 [26]	柱痕(径15cm)
	P4	18	24	
SB11	P5	—	—	
	P6	—	—	
	P7	—	—	
	P8	24	20	
	P1	20	11	
	P2	22	10	
	P3	26	12	
SB12	P4	25	20	
	P5	17	10	柱痕
	P6	30	14	柱痕
	P7	22	9	
	P8	—	—	
	P1	20	11	
SB13	P2	22	10	
	P3	19	10	
	P4	23	6	
	P5	26	13	
	P6	30	15	
	P7	25	13	

※〔〕は同じ建物の柱穴検出面に合わせた復元深度。

Tab. 7 遺物観察表 (1)

団数 番号	出土 地点	種類	器種 形	法量(cm)・重量				色調	粘土 (含有鉱物・粒度)	特徴 (文様・施素・底形・ 調整)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
1	TP1 SX1	土師器	壺	—	—	21	140	外) 橙7.5YR6/6 内) 黒褐10YR3/1 断) 黒褐10YR3/1	石・長・青・ 灰・赤褐色・粗	外面ナデ。内面エビオサエ・ナ デ。	
2	TP2 Ⅲ-1層	土師器	高杯	16.1	13.0	12.1	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・青・ 灰・赤褐色・粗	内外面ナデ。	
3	TP2 Ⅱ層	瓶	壺	—	—	—	—	灰白10YR7/1	石・長・青・ 灰・細	外面平行状のタキ目。外面 下径に斜方向のハケ。内面上 半円周状の压痕、内面下半ナ デ。	
4	TP2 Ⅱ層 土器群1	土師器	杯	—	—	6.5	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・青・ 灰・細	摩耗し調整不明。外底へラ切 り。	
5	TP2 Ⅱ層 土器群1	土師器	杯	—	—	6.2	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・青・ 灰・細	摩耗し調整不明。	
6	TP2 Ⅱ層 土器群1	土師器	杯	—	—	8.0	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・青・ 灰・細	内外面削蝕ナデ。外底へラ切 り。	
7	TP2 Ⅱ層 土器群1	瓶	壺	並部径 19.0	—	—	—	灰白2.5Y7/1	石・長・青・ 灰・細	摩耗し調整不明。	
8	ST1	弥生 土器	壺	15.6	—	—	—	外) 灰黃褐 10YR5/3 内) にぶい黄橙 10YR6/3 断) 灰5Y4/1	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	口縁部外面に粘土帯を貼付し 外面にキザミ。内面ナデ。	
9	ST1	弥生 土器	壺	20.0	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	石・長・青・ 白・灰・粗	口縁部外面に粘土帯接合部。 口縁部内面ナデ・ユビオサエ・ 内面ナデ。	
10	ST1	弥生 土器	壺	—	—	—	—	にぶい黄橙 10YR6/3	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	外面に楊撲直線文・棒状浮文。 内外面ナデ。	
11	ST1 上層	弥生 土器	高杯	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y6/1 内) にぶい褐 7.5YR5/4	石・長・青・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	内外面削蝕ナデ。	
12	ST1	弥生 土器	高杯	—	—	脚部径 7.8	—	外) 橙7.5YR7/6 断) 灰褐5Y4/2	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	杯底部は剥離。脚部外面ナデ。 内面ナデ・シボけ目。	
13	ST1 下層	弥生 土器	不明	—	—	4.7	—	外) 黄灰2.5Y6/2 内) 灰5Y4/1	石・長・青・ 白・灰・粗	内外面ナデ。	
14	ST1 上層	弥生 土器	不明	—	—	4.8	—	外) 灰黃褐 10YR5/2 断) オリーブ黒 5Y3/1	石・長・青・ 白・灰・粗	内外面ナデ。底部外側にユビ オサエ。	
15	ST1 上層	弥生 土器	不明	—	—	5.7	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3 断) 黄灰2.5Y6/1	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	外面と底面ナデ。内底エビオ サエ。	
16	ST1 下層	弥生 土器	不明	—	—	6.8	—	外) 黄灰2.5Y6/2 内) 灰NS/2	石・長・青・ 白・灰・粗	外表面ナデ。内底ユビオサエ・ナ デ。	
17	ST1 下層	弥生 土器	不明	—	—	6.4	—	外) 灰黃褐 10YR6/2 内) 黑褐2.5Y3/1	石・長・青・ 白・灰・粗	底部外側と内底エビオサエ・ナ デ。	
18	ST1 下層	弥生 土器	不明	—	—	9.8	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) 黄灰2.5Y5/1	石・長・青・ 白・灰・粗	内外面ナデ。	
19	ST1 下層	弥生 土器	不明	—	—	12.0	—	外) 灰黃褐 10YR6/2 内) 黑褐10YR4/1	石・長・青・ 白・灰・粗	内外面ナデ。底部外側にユビ オサエ。	
20	ST1 下層	石製品	叩石	全長 12.1	全厚 2.6	全幅 5.8	重量 240kg	—	—	砂岩製。圓先端に敲打痕。	
21	ST2 下層	弥生 土器	壺	18.3	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/3	石・長・青・ 白・灰黒・粗	口縁部外面に粘土帯を貼付し して有字。内外面ナデ。	
22	ST2	弥生 土器	壺	15.8	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	口縁部外面に粘土帯を貼付し して有字。内外面ナデ。	
23	ST2 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 内) 黄灰2.5Y4/1	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	上脚部に乱れた細かい楊撲波 状文・楊撲直線文。外表面ナデ・ ハケ。内面ナデ。	
24	ST2	弥生 土器	壺	18.3	—	—	—	内) 灰黃褐 10YR6/2 断) 黄灰2.5Y4/1	石・長・青・ 白・灰・粗	口縁部内に凹溝文。口縁部外 面ユビオサエ・脚部ナデ。内面 ナデ。	
25	ST2 下層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR5/4 内) 黄灰2.5Y4/1	石・長・青・ 白・灰・粗	口縫部を上方に拡張させる。 摩耗し調整不明。	

Tab.8 遺物観察表(2)

回収番号	出土地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	特徵 (文様・抽象・形態・調整)	備考 (生産地・年代・使用歴)
				口径	器高	底径	最大径				
26	ST2 下層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)に赤い褐 7.5YR6/3 断) 黒灰10YR5/1	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し スピオサエ。内外面ナデ。	
27	ST2 下層	弥生 土器	不明	—	—	52	—	外)に赤い黄褐 10YR5/2 断) 黑灰10YR4/1	石・長・雲・灰 粗	内外面ナデ。	
28	ST2 上層	弥生 土器	不明	—	—	60	—	外)に赤い黄褐 10YR7/3 内) 褐灰N3/1	石・長・雲・ 白・灰・灰 赤褐・粗	外表面ナデ。内底スピオサエ・ナ デ。外底スピオサエ・四状。	
29	ST2 下層	弥生 土器	不明	—	—	13.1	—	外)に赤い橙 7.5YR6/4 内) 黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・赤風・ 粗	内外面ナデ。外底スピオサエ・ 四状。	
30	ST3 上層	弥生 土器	壺	122	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・雲・ 灰・粗	口縁端部に凹線文。口縁部外 面スピオサエ・ナデ。内面回転 ナデ。	
31	ST3	弥生 土器	壺	—	—	13.4	—	に赤い黄褐 10YR7/3	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁部外側にスピオサエ。内 面ナデ。	
32	ST3	弥生 土器	不明	—	—	6.6	—	橙7.5YR7/6	石・長・雲・灰 粗	底部外側にスピオサエ・スピナ デ。内底スピオサエ・ナデ。	
33	ST3	弥生 土器	不明	—	—	45	—	外)に赤い橙 7.5YR6/4 断) 黑灰25Y6/1	石・長・雲・ 灰・灰黒・粗	内外面ナデ。	
34	ST3	弥生 土器	高杯	—	—	—	—	外)に赤い黄褐 10YR6/3 断) 黄灰25Y6/1	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色 粗	脚部外側ナデ。内面スピオサエ。	
35	ST4 下層	弥生 土器	壺	131	—	—	25.2	外)に赤い黄褐 10YR6/3 内) 黑灰10YR2/1	石・長・雲・ 灰・粗	口縁端部に凹線文。上脚部に 斜方向のキザミ。口縁部外側 回転ナデ。頭部ハラミガキ。胸 部ヘラミガキ・ハケ。口縁部内 側回転ナデ・ヨコタケ。頭部と 側面部内面スピオサエ・ナデ。	
36	ST4 下層	弥生 土器	壺	11.0	—	—	—	外)に赤い黄褐 10YR7/3 断) 黑灰25Y4/1	石・長・雲・灰 粗	口縁端部に柔の凹線文。外 面ナデ。	
37	ST4 下層	弥生 土器	壺	127	—	—	—	に赤い褐7.5YR5/4	石・長・雲・ 灰・灰・灰黒・粗	口縁端部を下方に拡張させ、 端部にキザミ。外表面ナデ。	
38	ST4 床	弥生 土器	壺又は 甕	18.8	—	—	—	に赤い黄褐 10YR5/3	石・長・雲・ 灰・褐・赤褐色 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し スピオサエ。口縁端部下端に キザミ。外表面ナデ。	
39	ST4 下層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)に赤い黄褐 10YR5/3 内) 黑灰25Y6/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	外側に瓶底三角形の突帯・推 移字文。突帯の上下にコロナ デ。内面ナデ。	
40	ST4 下層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	灰黄褐10YR6/2	石・長・雲・ 白・灰・褐・ 粗	外面に椎円形浮文・斜方向の キザミ。外表面ナデ。	
41	ST4 下層	弥生 土器	壺	23.0	—	—	—	灰黄褐10YR6/2	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色 粗・多量	口縁部外側に粘土帯を貼付し スピオサエ。上脚部に椎形状の 工具による斜方向のキザミ後 揚げ直線文。外表面ナデ。内面 スピオサエ・ナデ。	南四国型
42	ST4 床	弥生 土器	甕	20.6	—	—	—	灰黄25Y7/2	石・長・雲・ 灰・白・灰・赤褐色 粗・多量	口縁部外側に粘土帯を貼付し スピオサエ。口縁部下端に キザミ。内外面ナデ。	南四国型
43	ST4 下層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)に赤い褐 7.5YR6/3 断) 黑灰25Y6/1	石・長・雲・ 灰・褐・粗・多 量	薄手。口縁部外側に粘土帯を 貼付し端部下端にキザミ。内 外面ナデ。	南四国型 43-45同一か
44	ST4 下層	弥生 土器	甕	18.4	—	—	—	黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰・白・灰・粗・多 量	上脚部に沈丁・円形浮文・ハケ の工具による斜方向のキザ ミ。内面ナデ。	南四国型
45	ST4 下層	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外)に赤い褐 7.5YR6/3 断) 黄灰25Y6/1	石・長・雲・ 灰・褐・粗・多 量	口縁端部を上方に拡張させる。 端部に弱い凹線文。口縁部外 面回転ナデ。	南四国型 43-45同一か
46	ST4 下層	弥生 土器	甕	17.2	—	—	—	に赤い褐7.5YR6/3	石・長・雲・ 白・灰・褐・赤褐色 粗	口縁端部を上方に拡張させる。 端部に弱い凹線文。口縁部外 面回転ナデ。	
47	ST4 下層	弥生 土器	甕	—	—	—	—	灰黄褐10YR6/2	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁端部を上方に拡張させ る。口縁部内面回転ナデ。	
48	ST4 床	弥生 土器	甕	—	—	—	—	に赤い褐7.5YR7/4	石・長・雲・ 白・灰・褐・赤褐色 粗	口縁端部を上方に拡張させる。 口縁部内外面回転ナデ。	
49	ST4 下層	弥生 土器	高杯	17.4	—	—	—	黄灰25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁部外側に凹線文。内面ナ デ。	

Tab.9 遺物觀察表(3)

団号 番号	出土 地点	種類	器種 形態	法量(cm)・重量				色調	粘土 (含有鉱物・粒度)	特徴 (文様・施素・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
50	ST4 下層	弥生 土器	高杯	—	—	—	—	に赤い橙5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 粗	口縁部外側に凹線文。内外面 ナデ。	
51	ST4 下層	弥生 土器	高杯	—	—	—	—	灰黄褐色10YR6/2	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 粗	高杯の杯部粘土塊が剥離し たものか。内外面ユビオサエ。	
52	ST4 下層	弥生 土器	高杯	—	—	脚部径 11.7	—	外)に赤い黄褐色 10YR6/4 (内)灰黄褐色 10YR5/2	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色・ 粗	脚部外側に浅い2条の凹線文。 外面に多段のハラ描き沈線・3 本1単位の縱方向の沈線。内 外面ユビナデ。	
53	ST4 床	弥生 土器	高杯	—	—	脚部径 11.7	—	外)黄褐色25Y5/1 (内)灰黄褐色 25Y6/2	石・長・雲・ 白・灰・粗	脚部外側に多段のハラ描き沈 線・3本1単位の縱方向の沈 線。外底ナデ。内底ユビナデ。	
54	ST4 下層	弥生 土器	高杯	—	—	脚部径 10.6	—	外)に赤い黄褐色 10YR5/3 (内)黄褐色25Y4/1	石・長・雲・ 灰・褐・粗	脚部外側に2条の浅い凹線文。 外面に多段のハラ描き沈線・3 本1単位の縱方向の沈線。外 面ナデ。内底ユビナデ。	
55	ST4 下層	弥生 土器	不明	—	—	153	—	外)灰黄褐色25Y6/2 (内)黄褐色25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	内外底ナデ。底部外側にユビ オサエ。外底ナデ。	
56	ST4 下層	弥生 土器	不明	—	—	120	—	外)灰黄褐色25Y4/1 (内)暗灰黄褐色25Y5/2	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 粗	外面ナデ・ハラミガキ。内面イ タナデ、内底ユビオサエ。外底 ナデ。	
57	ST4 下層	弥生 土器	不明	—	—	97	—	外)灰黄褐色 10YR6/2 (内)灰黄褐色 10YR5/2	石・長・雲・ 白・灰・褐・ 粗	内外面ナデ。	
58	ST4 下層	弥生 土器	不明	—	—	108	—	灰黄褐色10YR5/2	石・長・雲・ 白・灰・粗	外底ユビオサエ・凹状。内底 ユビオサエ・ナデ。	
59	ST4 下層	弥生 土器	不明	—	—	65	—	に赤い橙7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色・ 粗	内外面ナデ。外底ナデ。	
60	ST4 下層	弥生 土器	不明	—	—	58	—	灰黄褐色2.5Y7/2	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色・ 粗	内外面ナデ。	
61	ST4 下層	弥生 土器	不明	—	—	7.6	—	橙2.5YR6/6	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色・ 粗	外表面。内底ユビオサエ・ナ デ。	
62	ST4 下層	弥生 土器	不明	—	—	7.6	—	外)灰黄褐色 10YR5/2 (内)黄褐色25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	内外面ナデ。	
63	ST4 床	石製品	石包丁	全長 11.2	全厚 0.8	全幅 5.4	重量 56g			頁岩製。磨製石包丁。径0.7cm の円孔2孔。	
64	ST4 下層	石製品	石包丁	残存長 [6.0]	全厚 1.0	全幅 5.1	重量 [39g]			頁岩製。磨製石包丁。径0.7cm の円孔2孔。	
65	ST4 床	石製品	叩石	全長 10.1	全厚 3.2	全幅 8.4	重量 400g			頁岩製。中央部両面と側面に 敲打痕。	
66	ST4 下層	石製品	砥石	全長 6.7	全厚 2.2	全幅 4.8	重量 108g			鉄器を研ぐいたとみられる条痕 あり。	
67	SX1 上層	弥生 土器	甕	126	—	—	—	外)に赤い黄褐色 10YR6/3 (内)黄褐色25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色・ 粗・多量	口縁部外側に粘土帯を貼付し 外側にキザミ。口縁部に彫形浮文。内外面ナデ。	
68	SX1 上層	弥生 土器	甕	102	—	—	—	外)に赤い黄褐色 10YR5/3 (内)褐黄褐色 10YR6/1	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付。	内外面ナデ。
69	SX1 上層	弥生 土器	甕	160	—	—	—	橙7.5YR6/6	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色・ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し 外側にキザミ。	口縁部外側に粘土帯を貼付し 外側にキザミ。
70	SX1 下層	弥生 土器	甕	186	—	—	—	外)に赤い橙 7.5YR7/4 (内)黄褐色25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。内外面ナデ・ユビ オサエ。	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。内外面ナデ・ユビ オサエ。
71	SX1 床	弥生 土器	甕	201	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR6/4	石・長・雲・ 灰・褐・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。口縁部下端に キザミ。内外面ナデ。	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。口縁部下端に キザミ。内外面ナデ。
72	SX1 床	弥生 土器	甕	234	—	—	—	外)に赤い黄褐色 10YR6/3 (内)黄褐色25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。口縁部内 外面にユビオサエ。	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。口縁部内 外面にユビオサエ。
73	SX1 上層	弥生 土器	甕又は 甕	204	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR7/3	石・長・雲・ 灰・褐・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。内外面ナデ。	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。内外面ナデ。
74	SX1 床・下層	弥生 土器	甕	178	—	—	19.0	橙7.5YR6/6	石・長・雲・ 灰・褐・赤褐色・ 粗	口縁部抵張させる。側部 外側ハケ。内外面ナデ。	

Tab.10 遺物觀察表(4)

回収番号	出土地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	等級 (文様・抽象・形成・調整)	備考 (生産地・年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
75	SX1 床	弥生 土器	甕	18.1	—	—	—	外) に赤い黄 10YR6/3 断) 黄黄褐 10YR5/2	石・長・雲 灰・赤褐色/ 粗	口縁端部を強張させる。口縁 部外表面凹板ナデ。内面ハケ、 凹板ナデ。	
76	SX1 上層	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外) 黄黄褐 10YR6/2 内) 明赤褐5YR5/6	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色/ 粗	口縁端部に円窓文。外面ナデ。 口縁部内面凹板ナデ。胴部内 面ナデ。	
77	SX1 下層	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外) 淡赤10YR4/1 断) 黄黄褐 10YR5/2	石・長・雲・灰 白・灰白・灰黑 /粗	口縁端部に円窓文。口縁部内 外面凹板ナデ。	
78	SX1	弥生 土器	甕	—	—	—	—	明赤褐25YR5/6	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色/ 粗	内外面ナデ。頭部内面ユビオ サエ。	
79	SX1 下層	弥生 土器	甕又は 甕	—	—	—	—	外) 橙7.5YR6/6 断) 黄灰25YR5/1	石・長・雲 白・灰・赤褐色/ 粗	牽耗し調整不明。	
80	SX1 下層	弥生 土器	甕又は 甕	—	—	—	—	に赤い橙7.5YR6/4	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色/ 粗	外面上に模様によるキザミ・ 沈窓。内面ナデ。	
81	SX1 上層	弥生 土器	甕	—	—	—	—	に赤い黄褐 10YR6/3	石・長・雲 白・灰・灰褐色/ 粗	外面上に模様直窓文・円窓浮文 と刺突。内面ナデ。	
82	SX1 床	弥生 土器	甕か	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色/ 粗・多量	外面上に斜載管状の原体によ る連続刺突又は模様直窓文。 内面ナデ。	
83	SX1 上層	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外) 橙5YR6/6 内) 黄灰25YR5/1	石・長・雲 白・灰・赤褐色/ 粗	外面上に模様による波状文。 内面ナデ。	
84	SX1 下層	弥生 土器	不明	—	—	8.7	—	外) 黄黄褐 10YR6/2 断) に赤い黄 7.5YR6/3	石・長・雲・灰 白・灰黑・赤褐色/ 粗	外底中央をやむせる。外 底ナデ。内面ユビオサエ・ナ デ。	
85	SX1 上層	弥生 土器	不明	—	—	5.3	—	外) 黑暗25YR3/1 断) に赤い橙 7.5YR6/4	石・長・雲 白・灰・灰黑色/ 粗	外面上に模様ナデ。内面ナデ。	
86	SX1 床	弥生 土器	不明	—	—	4.9	—	外) に赤い黄 7.5YR5/4 内) 黄灰10YR4/1	石・長・雲・灰 /粗	内外面ユビオサエ・ナデ。外底 ナデ・ユビオサエ。	
87	SX1 床	石製品	石包丁 未製品	全長 10.4	全厚 1.8	全幅 6.0	重量 130g			貝岩製。石製石包丁の未製品。	
88	SX2	弥生 土器	甕	12.3	—	—	—	外) に赤い黄褐 10YR7/4 内) 橙7.5YR7/6	石・長・雲 灰・灰黒・赤褐色/ 粗・多量	頭部外面上に沈窓。口縁部外面上 にユビオサエ・ナデ。内面ナデ。	
89	SX2	弥生 土器	甕	—	—	—	—	に赤い橙7.5YR7/4	石・長・雲 灰・赤褐色/ 粗・多量	外面上に断面三角形の突帯・円 形浮文。内面ナデ。突帯の上 下にヨコナデ。	
90	SX4 上層	弥生 土器	甕	20.8	—	—	—	外) 黄灰10YR5/1 内) に赤い黄褐 10YR7/2	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色/ 粗・多量	口縁部下端にキザミ。口縁部 下断面三重形の小突帯・横 接縫直窓文・上胴部に円窓浮文 と刺突。断面三角形の小空部 を5段高らせ間に佛頂直窓文。 ハケ状の工具によるキザミ。 内面ナデ。	南四国型
91	SX5	弥生 土器	甕又は 甕	20.0	—	—	—	外) に赤い黄褐 10YR7/2 断) 黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 /粗	口縁部外面上に粘土帯を貼付。 内面ナデ。	
92	SX5	弥生 土器	甕	—	—	—	—	に赤い黄褐 10YR6/3	石・長・雲 灰・灰黒・褐色/ 粗・多量	口縁部外面上に粘土帯を2段貼 付し外面上にキザミ。内面ナデ。	
93	SX5	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰25Y4/1 内) に赤い黄褐 10YR5/3	石・長・雲・灰 /粗	外面上に模様浮文。内面ナ デ。	
94	SX5	弥生 土器	不明	—	—	7.4	—	に赤い黄褐 10YK7/2	石・長・雲 灰・灰黒・褐色/ 粗	内外面ユビオサエ・ナデ。外底 ナデ。	
95	SX5	弥生 土器	不明	—	—	4.8	—	外) に赤い黄褐 10YR7/3 内) 黑25Y2/1	石・長・雲 /粗	外面上イタナデ。内面ユビナ デ。外底ユビオサエ・内底。	
96	SX9 床	弥生 土器	甕	22.3	—	—	—	外) に赤い黄褐 7.5YR7/4 内) 黄黄褐 10YR5/2	石・長・雲 白・灰・赤褐色/ 粗	口縁部に円窓文。内面ナ デ。	
97	SX9 床	弥生 土器	甕	18.3	—	—	—	外) に赤い橙 7.5YR8/3	石・長・雲 チ・白・赤褐色/ 粗	内外面ナデ・ユビオサエ。	

Tab.11 遺物観察表(5)

団号 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	粘土 (含有鉱物・粒度)	特徴 (文様・施素・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
98	SX9	弥生 土器	罐又は 甕	—	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR7/3	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色/ 粗	口縁部外面に粘土帯を貼付し ユビオサエ。内外面ナデ。	
99	SX9 下層	弥生 土器	甕	196	—	—	—	外)に赤い褐 75YR6/4 内)灰黃褐色 10YR6/2	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色/ 粗	口縁端部を上方に抵張。摩耗 し調整不明。	
100	SX9 上層	弥生 土器	甕	159	—	—	—	に赤い褐75YR6/4	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色/ 粗	口縁端部に凹溝文。内外面ナ デ。	
101	SX9 下層	弥生 土器	不明	—	—	54	—	外)褐75YR6/6 断)灰黃褐色 10YR6/2	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色/ 粗	外表面ナデ。底部外側にユビオ サエ。内底と外底ユビオサエ・ ナデ。	
102	SX9 上層	弥生 土器	不明	—	—	67	—	外)に赤い褐 10YR6/4 内)に赤い褐 10YR6/4 断)灰黃褐色 25Y7/2	石・長・雲・ 白・灰・褐/粗	外表面ナデ。外底ユビオサエ。	
103	SX9	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)に赤い褐 75YR7/4 断)褐灰10YR4/1	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色/ 粗	外表面に断面三角形の突部を貼 付し棒状の原体によるキザミ。 拂拭直線文・拂拭波状文。キ ザミ内に垂れ目状痕。内面ナデ・ ユビオサエ。	
104	SX10 床	弥生 土器	壺	70	—	—	—	外)に赤い褐 75YR5/4 断)褐灰10YR4/1	石・長・雲・ 白・灰・褐/粗	口縁部外側に凹溝文。頭部外側 斜め方向のキザミ。口縁部内面 糊跡ナデ。頭部外側に拂拭直線文。	
105	SX10	弥生 土器	壺	10.8	—	—	—	外)に赤い褐 10YR7/2 内)灰黃褐色25Y6/2 断)灰黃褐色25Y6/2	石・長・雲・ 白・灰・粗/多 量	口縁部外側に粘土帯を貼付。 頭部外側に拂拭直線文。内面ナ デ。	
106	SX10 下層	弥生 土器	壺	14.2	—	—	—	外)に赤い褐 10YR6/3 断)灰黃褐色 25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色/ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。内外面ナデ。	
107	SX10 下層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)灰黃褐色 10YR6/2 断)褐灰10YR4/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し 斜め方向のキザミ。下端に拂 拭直線文。口縁部下に強いイ タナデによる直線文。内面ナ デ。	
108	SX10 床	弥生 土器	壺	15.5	—	—	—	外)に赤い褐 75YR5/4 断)黑褐色10YR3/1	石・長・雲・ 白・灰・灰黑・ 粗	口縁端部を下方へ起張させる。 外表面ナデ。内面ユビオサエ・ナ デ。	
109	SX10 下層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)に赤い褐 10YR7/2 内)褐灰10YR5/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	外表面多条の沈線・斜方向のキ ザミ。内面ナデ。	
110	SX10 床	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)灰黃褐色25Y4/1 内)に赤い褐 10YR5/3	石・長・雲・ 白・灰・褐/粗/ 多量	外表面に拂拭直線文・沈線。内 面ナデ。	
111	SX10 下層	弥生 土器	甕	20.0	—	—	—	に赤い褐 10YR7/3	石・長・雲・ 白・灰・粗/多 量	口縁部外側に粘土帯を貼付し キザミ。内外面ナデ。	南四国型
112	SX10 下層	弥生 土器	甕	16.5	—	—	—	黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・灰・ 粗/多量	薄手。口縁部外側に粘土帯を 貼付しキザミ・断面三角形の小 突部。頭部外側タテハケ。内面 ナデ。	南四国型
113	SX10 上層	弥生 土器	甕	13.2	—	—	—	外)に赤い褐 75YR6/4 断)灰黃褐色25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁端部を上方に抵張させる。 口縁部内外面回転ナデ。	
114	SX10 下層	弥生 土器	鉢	12.8	—	—	—	外)に赤い褐 10YR6/3 断)灰黃褐色25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	内外面ユビオサエ・ナデ。	
115	SX10	弥生 土器	高杯	18.3	—	—	—	外)褐25YR6/6 断)黑褐色75YR3/1	石・長・雲・ 白・灰・灰黑・ 粗	口縁端部凹状。口縁部外面に 弱い凹溝文。内外面ナデ。	
116	SX10	弥生 土器	高杯	—	—	—	—	外)に赤い赤褐色 5YR5/4 内)褐灰5YR4/2	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁端部凹状。口縁部外面に 弱い凹溝文。内外面ナデ。	
117	SX10 下層	弥生 土器	不明	—	—	6.8	—	外)に赤い褐 10YR6/3 内)灰黃褐色25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	内外面ナデ。	
118	SX10 下層	弥生 土器	不明	—	—	4.9	—	外)に赤い褐 10YR5/3 断)オリーブ黒 5Y3/1	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色/ 粗	内外面ナデ。外底ナデ。	
119	SK15	弥生 土器	壺	18.6	—	—	—	褐5YR6/6	石・長・雲・ 灰・黑・赤褐色/ 粗	口縁端部を下方へ肥厚させる。 内外面ナデ。	

Tab.12 遺物觀察表(6)

回収番号	出土地點	種類	器種・器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有物・浓度)	特徵 (文様・抽象・形成・調整)	備考 (生産地・年代・使用痕)	
				口径	器高	底径	最大径					
120	SK15	弥生土器	高杯	—	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・青・灰 /褐・粗	口縁部外側凹面文。内面ナデ。		
121	SK15	石	石盆	残有孔 [21.5]	全厚 13.7	残存高 [18.5]	重量 8.0kg				砂岩製。	
122	SK17	弥生土器	不明	—	—	10.5	—	外) 橙7.5YR6/6 瓶) 黄灰25Y6/2	石・長・青・ 白・灰・赤褐色 /粗	外底下位竪方向のイタナデ。 内底ユビオサエ・ナデ。		
123	SK17	弥生土器	壺	—	—	—	—	外) 周灰黄25Y5/2 瓶) 黄灰25Y4/1	石・長・青・ 灰・粗/多量	口縁部外側に幅広の胎土帯を貼付しあげ。内面ナデ。		
124	SK16	弥生土器	壺	96	—	—	—	暗灰黄25Y4/2	石・長・青・ 灰・褐/粗/多量	口縁部外側にサザン。頭部外側 に多段の突起と拂拭直線文。 空窓の上下にヨコナデ。内面ナデ。		
125	SK16	弥生土器	壺	76	—	—	—	外) 明黄褐 10YR7/6 瓶) 黄灰25Y4/1	石・長・青・ 灰・粗	口縁部外側に胎土帯を貼付し スピオサエ。頭部に小突帯と 拂拭波状文。内面ユビナデ。		
126	SK16	弥生土器	壺	11.2	—	—	—	外) に赤い黄橙 10YR6/4 瓶) 黄灰25Y4/1	石・長・青・ 灰・褐/粗/多量	口縁部外側に胎土帯を2段貼付。 頭部に小突帶。内面ナデ。		
127	SK16	弥生土器	壺	94	—	—	—	外) に赤い黄橙 10YR7/4 瓶) 黄灰10YR4/1	石・長・青・ 灰/粗/多量	口縁部外側に胎土帯を貼付し キザミ。口縁部下に拂拭直線 文。内面ナデ。		
128	SK16	弥生土器	壺	11.1	—	—	—	外) 黄灰25Y4/1 内) に赤い黄橙 10YR7/3	石・長・青・ 灰・灰黒・褐・ 赤風・褐・粗	口縁部外側に胎土帯を貼付し 段を出す。頭部に拂拭直線文 と小突帶。外面ナデ。空窓の 上下にユビオサエ。内面ユビナ デ。		
129	SK16	弥生土器	壺	17.6	—	—	—	暗灰黄25Y5/2	石・長・青・ 灰・灰黒/粗	口縁部外側に胎土帯を貼付。 口縁端部に横にキザミ。口縁 部下と頭部に断面三角形の突 きを数条あります。外面ナデ。 口縁端部と突きの上下にヨコ ナデ。		
130	SK16	弥生土器	壺	16.0	—	—	—	に赤い黄橙 10YR7/4	石・長・青・ 灰・灰黒/粗	胎土帯貼付口縁。胎土帯にユ ビオサエ。内面ナデ。		
131	SK16	弥生土器	壺	15.8	—	—	—	黄灰25Y4/1	石・長・青・ 灰・灰白/粗	口縁部外側に胎土帯を貼付し スピオサエ。口縁端部に斜方向 のキザミ。内面ナデ。		
132	SK16	弥生土器	壺	17.6	—	—	—	外) に赤い黄橙 10YR6/3 瓶) 黄灰25Y4/1	石・長・青・ 灰・褐/粗	口縁部外側に胎土帯を貼付し ユビオサエ。口縁端部に断面 カマボコ形の突きを貼付。内 外面ナデ。		
133	SK16	弥生土器	壺	14.5	—	—	—	に赤い黄橙 10YR6/3	石・長・青・ 灰・赤褐色/粗 多量	口縁部外側に胎土帯を貼付し スピオサエ。内面ナデ。		
134	SK16	弥生土器	壺	17.4	—	—	—	灰黄褐10YR4/2	石・長・青・ 灰・灰・灰白/粗	口縁部外側に胎土帯を貼付し ユビオサエ。内面ナデ。		
135	SK16	弥生土器	壺	18.4	—	—	—	外) に赤い黄橙 10YR6/3 瓶) 黄灰25Y5/2	石・長・青・ 灰・白/粗	口縁部外側に胎土帯を貼付し スピオサエ。口縁端部にキザ ミ。外面ナデ。口縁部内面ハ ケ。頭部内面ユビナデ。		
136	SK16	弥生土器	壺	20.6	—	—	—	に赤い黄橙 10YR6/4	石・長・青・灰 /粗	口縁部外側に胎土帯を貼付。 外面ハラミガキ。内面ユビナ デ。		
137	SK16	弥生土器	壺	—	—	—	—	灰黄25Y6/2	石・長・青・灰 /粗/多量	上胴部に拂拭直線文と小突帶 を交互に配し。円形浮文を貼 付。内面ナデ。		
138	SK16	弥生土器	壺	—	—	—	—	外) に赤い黄橙 10YR6/3 内) 赤黄褐 10YR7/3	石・長・青・ 灰・灰黒・褐/粗	上胴部に5条の断面三角形の 突きと円形浮文。内面ナデ。		
139	SK16	弥生土器	壺	—	—	—	—	外) に赤い黄橙 10YR7/3 内) 黄灰25Y4/1	石・長・青・ 灰・灰黒/粗	上胴部に拂拭直線文・断面カ マボコ形の突き・円形浮文。 外面ナデ。頭部内面ハケの ユビナデ。		
140	SK16	弥生土器	壺	—	—	—	—	に赤い黄橙 10YR7/4	石・長・青・ 灰・赤褐色/粗	上胴部に断面三角形の突きを 貼付し上下ヨコナデ。外 面ナデ。内面ユビナデ。		
141	SK16	弥生土器	甕	18.8	—	—	—	褐灰10YR4/1	石・長・青・灰 /粗	渾手、口縁部下端にヨコナ デ。口縁部に胎土帯を貼付。 胎土帯の下端に断面三角形の 小突きを設け上下ヨコナデ。内 外面ナデ。	南四国型	

Tab.13 遺物観察表(7)

団版 番号	出土 地點	種類	器種 形態	法量(cm)・重量			色調	粘土 (含有鉱物/粒度)	特徴 (文様・施色・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
142	SK16	弥生 土器	甕	約20.0	—	—	—	外:灰黄褐 10YR5/2 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰・赤褐色・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し 口縁部下端にギザミ。口縁部下に断面三角形の突帯。突 帯の上下にヨコナテ。内面ナ ヂ。	南国四隅
143	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:暗灰黄25Y5/2 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 ・粗・多量	薄手。口縁部外側に粘土帯を 貼付。口縁部に円滑浮文を貼 付。口縁部下に断面三角形の 突帯。突帯の上下にヨコナテ。内 面ナヂ。	
144	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	褐灰10YR4/1	石・長・雲・灰 ・粗	頭部外側に断面カマボコ形の 突帯。撫摩擦伏文。内面エビナ ヂ。	
145	SK16	弥生 土器	不明	—	—	82	—	褐灰10YR5/1	石・長・雲・灰 ・粗	外面ヨコナヂ。外面下傾方 向のナヂ。内面エビオサエ・イ タナヂ。	
146	SK16	弥生 土器	不明	—	—	89	—	灰黄褐10YR4/2	石・長・雲・灰 ・粗	外面ナヂ・ヘミガキ。内面ナ ヂ。外底ナヂ。	外側下位に僅。
147	SK16	弥生 土器	不明	—	—	68	—	にふい黄褐 10YR6/4	石・長・雲・灰 ・粗	内底面ナヂ。内底に粘土充填。 外底凹状。	
148	SK16	弥生 土器	不明	—	—	60	—	外:にふい黄褐 10YR6/3 内:黄灰25Y4/1 断:黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 ・粗・灰黒・赤褐色 ・粗	外底凹状。内外面ナヂ。内底ユ ビオサエ。外底ナヂ。	
149	SK16	弥生 土器	不明	—	—	64	—	外:にふい黄褐 10YR6/3 内:褐灰10YR5/1	石・長・雲・ 灰・灰・褐・粗	外面ナヂ。内底ユビオサエ・ナ ヂ。外底ナヂ。	
150	SK16	弥生 土器	不明	—	—	68	—	外:にふい黄褐 10YR6/3 内:黄灰25Y4/1 断:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰・灰白・灰 ・粗	外面下傾方向のナヂ。底部 脇にユビオサエ。内底ユビオサ エ・ナヂ。外底ナヂ。	外側下位に僅。
151	SK16	弥生 土器	不明	—	—	60	—	外:にふい黄褐 10YR6/3 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰・灰・灰白・粗	外底凹状。外面ナヂ。内面摩 拭痕不明。外成不定方向の ハケケツリ。	
152	SK16	弥生 土器	不明	—	—	57	—	にふい褐10YR5/4	石・長・雲・ 灰・灰白・灰 ・粗	外面ナヂ。底部脇にユビオサ エ。内底ユビオサエ・ナヂ。外 底ナヂ。	
153	SK16	弥生 土器	不明	—	—	7.0	—	外:にふい黄褐 10YR6/3 内:黄灰25Y4/1 断:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰・赤褐色・粗 ・多量	薄手。内外面ナヂ。内底ユ ビオサエ。	
154	SK16	弥生 土器	不明	—	—	64	—	暗灰黄25Y5/2	石・長・雲・ 灰・褐・粗・多 量	薄手。内外面ナヂ。	
155	SK16	弥生 土器	不明	—	—	60	—	外:暗灰黄25Y5/2 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 ・粗	外底凹状。外面ナヂ。内底ユ ビオサエ・ナヂ。	
156	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:浅黄25Y7/3 内:黄灰25Y5/1	石・長・雲・ 灰・灰・赤褐色 ・粗	上側部に2条の小突帯。撫摩 擦伏文・模様直線文。外面ナ ヂ。内面ユビナヂ。小突帯の 上下にビヨサエ。	
157	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:にふい黄褐 7.5YR6/4 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰・赤褐色・粗 ・多量	薄手。上側部に模様直線文・断 面三角形の突帯・模形浮文。 外外面ナヂ。突帯の上下にヨコ ナテ。	
158	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	にふい黄褐 10YR6/3	石・長・雲・ 灰・灰黒・赤褐色 ・粗	外面上に断面三角形の突帯・円 形浮文・内外面ナヂ。突帯の上 下にヨコナテ。	
159	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:にふい黄褐 10YR6/3 内:黄灰25Y5/1	石・長・雲・灰 ・粗・多量	薄手。外面上に断面カマボコ形の 突帯を多段貼付。内外面ナ ヂ。	
160	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	褐灰色10YR4/1	石・長・雲・ 灰・灰黒・粗	外面上に断面カマボコ形の突帯・ 撫摩擦伏文・撫摩伏文による圓弧 状の文様。内外面ナヂ。	
161	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:にふい黄褐 10YR6/4 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰・赤褐色・粗	外面上に扁平な突帯とギザミ。 円形浮文と竹管による突起。 内外面ナヂ。	
162	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	褐灰10YR5/1	石・長・雲・ 灰・褐・粗	薄手。外表面撫摩直線文・撫摩 伏文。	
163	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:褐7.5YR7/6 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰・粗	外面上に撫摩波状文・撫摩によ る円弧状の文様。外表面ナヂ。 内面ユビナヂ。	
164	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:灰黄褐 10YR6/2 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰・褐・粗	薄手。外表面に撫摩直線文・撫摩 波状文。内面ナヂ。	
165	SK16	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:にふい黄褐 10YR6/4 内:褐灰10YR4/1	石・長・雲・ 灰・褐・粗	外面上に撫摩直線文・撫摩波状 文。内面ナヂ。	

Tab.14 遺物觀察表(8)

回収番号	出土地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	等微 (文様・釉薬・成型・調整)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
166	SK16	石製品	叩石	全長 11.5	全厚 2.8	全幅 6.1	重量 265g				砂岩製。先端部に敲打痕。
167	SK16	石製品	叩石	全長 12.7	全厚 2.7	全幅 5.7	重量 300g				砂岩製。先端部付近と中央に敲打痕。
168	SK18	弥生 土器	壺	104	27.6	6.5	17.3	に赤い黄澄 10YR7/3	石・長・雲・ 白・灰白・灰 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付。 上胴部に乱れの強い横筋直線文。 内外面ナデ。内面上位と 内底にユビオサエ。外底ナデ。	
169	SK18	弥生 土器	壺	9.4	—	—	—	外) 底黄25Y6/2 内) 黄灰25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色 粗/多量	口縁部外側に幅広の粘土帯を 貼付しキザミ。下端に横円形浮文。 内外面ナデ。	
170	SK18	弥生 土器	壺	11.6	—	—	—	に赤い黄澄 10YR7/3	石・長・雲・ 白・灰・灰黑/ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付。 スピオサエし段を慣す。内外 面ナデ。	
171	SK18	弥生 土器	壺	10.0	—	—	—	灰黄25Y6/2	石・長・雲・ 灰白・灰・褐/ 粗/多量	口縁部外側に粘土帯を貼付。 内外面ナデ。	
172	SK18	弥生 土器	壺	—	—	—	—	灰黄褐10YR8/2	石・長・雲・ 灰白・灰・褐/ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し キザミ。内外面ナデ。	
173	SK18	弥生 土器	壺	23.4	—	—	—	に赤い黄澄 10YR6/3	石・長・雲・ 白・灰・褐/ 粗/多量	口縁部外側に粘土帯を貼付。 スピオサエし段を慣す。内外 面ナデ。	175と同一か
174	SK18	弥生 土器	壺	17.8	—	—	—	に赤い橙7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰・褐/ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し キザミ。下端に横円形浮文。 頭部外側に乱れの強い横筋直 線文。内外面ナデ。	
175	SK18	弥生 土器	壺	25.0	—	—	—	浅黄25Y7/3	石・長・雲・ 白・灰・灰黑/ 粗/粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し キザミ。下端に横円形浮文。 頭部外側に乱れの強い横筋直 線文。機械成形文。列点文。 内外面ナデ。	
176	SK18	弥生 土器	壺	15.4	—	—	25.0	外) に赤い黄澄 10YR7/3 内) 黄灰10YR5/1	石・長・雲・ 白・灰・褐/ 粗	口縁端部を拡張させキザミ。 頭部外側タバハケ。頭部上半 ヨコハケ。下半ナデ。胴部内 面ヘラケヅリ後ナデ。	外面に僅。
177	SK18	弥生 土器	壺	15.3	—	—	—	に赤い橙7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色/ 粗	口縁端部に凹面文。内外面ナ デ。	
178	SK18	弥生 土器	壺	10.0	—	—	—	に赤い黄澄 10YR6/4	石・長・雲・ 白・灰・灰黑/ 粗/多量	口縁端部に凹面文。内外面ナ デ。	
179	SK18	弥生 土器	壺	12.5	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・雲・ 灰白・灰・赤褐色/ 粗	口縁端部に凹面文。上胴部に 列点文。内外面ナデ。	
180	SK18	弥生 土器	壺	—	—	7.4	21.9	に赤い黄澄 10YR6/3	石・長・雲・ 灰白・灰黑・赤褐色/ 粗	外面ナデ。ユビオサエ。内面ナ デ。外底ナデ。	
181	SK18	弥生 土器	壺	—	—	6.6	23.0	外) 底黄25Y6/2 内) 黄灰10YR5/1	石・長・雲・ 白・灰・灰黑/ 粗	外面上位に斜方向のキザミ。横 接直線文を二段造らせ。円形 浮文を貼付。外底ユビオサエ。内 面と外底ナデ。	
182	SK18	弥生 土器	壺	14.1	20.8	5.6	14.3	に赤い黄澄 10YR7/2	石・長・雲・灰 白・灰・粗/多 量	口縁部外側に粘土帯を貼付し スピオサエ。内面斜面ナデ。内底 と底部外側ユビオサエ。	南四国型
183	SK18	弥生 土器	壺又は 甌	25.0	—	—	—	黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 灰白・灰・粗/粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し スピオサエ。内外面ナデ。	
184-a	SK18	弥生 土器	壺	19.8	—	—	—	外) 橙7.5YR6/6 内) 黄灰10YR5/1	石・長・雲・ 灰白・灰・赤褐色/ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し スピオサエ。口縁端部ヨコナ デ。内外面ナデ。	
184-b	SK18	弥生 土器	甌	—	—	—	19.4	外) 橙7.5YR6/6 内) 黄灰10YR5/1	石・長・雲・ 灰白・灰・赤褐色/ 粗	外側ナデ。内面上半ユビオサ エ・ナデ。下半ユビオサエ・ヘ ラケヅリ。	
185	SK18	弥生 土器	甌又は 甌	—	—	—	26.2	橙5YR6/6	石・長・雲・ 灰白・灰・赤褐色/ 粗	外側壁方向のヘラケヅリ後ナ デ。内面ヘラケヅリ。内底ユビ オサエ。外底ナデ。	
186	SK18	弥生 土器	甌又は 甌	—	—	7.0	—	外) に赤い黄澄 10YR7/3 内) 黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・褐/ 粗/多量	外側壁方向のヘラケヅリ後ナ デ。内面ヘラケヅリ。内底ユビ オサエ。外底ナデ。	
187	SK18	弥生 土器	不明	—	—	7.4	—	灰黄25Y7/2	石・長・雲・ 白・灰・褐/ 粗/多量	内外面ナデ。外底ナデ。	
188	SK18	弥生 土器	甌	—	—	10.0	—	浅黄25Y7/3	石・長・雲・ 白・灰・灰黑・褐/ 粗/多量	内外面ナデ。内底ユビオサエ。 外底ナデ。	
189	SK18	弥生 土器	不明	—	—	8.6	—	暗灰25Y5/2	石・長・雲・ 白・灰・灰黑・褐/ 粗/多量	内外面ナデ。内底ユビオサエ。 外底ナデ。	

Tab.15 遺物観察表(9)

団号 番号	出土 地點	種類	器種 形態	法量(cm)・重量				色調	粘土 (含有鉱物・粒度)	特徴 (文様・施色・底形・ 調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
190	SK18	弥生 土器	不明	—	—	55	—	外:にぶい・橙 7.5YR7/4 内:灰黄25YR5/2	石・長・素・ 灰・白・灰・赤褐色/ 粗	外面ハケ・ナデ。内底ヘラケズ リ。外底ナデ。	
191	SK18	弥生 土器	不明	—	—	60	—	外:にぶい・橙 7.5YR6/4 内:灰黄25Y6/2	石・長・素・灰 白・灰・灰褐色/ 粗・多量	内外面ナデ。外底ナデ。	
192	SK18	弥生 土器	不明	—	—	54	—	外:にぶい・橙 7.5YR7/4 内:灰黄25Y6/2	石・長・素・灰 白・灰・褐色/ 粗・多量	内外面ナデ。底部外側にユビ オサエ。外底ナデ。	
193	SK18	石製品	石包丁	全長 121	全厚 0.9	全幅 45	重量 69g	灰7SY5/1		頁岩製。磨製石包丁。径0.5cm の丸孔2孔。	
194	SK19	弥生 土器	壺	22.5	—	—	—	外: 橙7.5YR6/6 内: 黄灰25Y6/1	石・長・素・ 灰・褐・赤褐色/ 粗	口縁端部に凹線文。内外面ナ デ。口縁部内面ヨコナデ。	
195	SK19	弥生 土器	不明	—	—	87	—	にぶい・黄橙 10YR6/3	石・長・素・ 灰・褐・粗	内外面ナデ。外面中位に粘土 帯接合痕。	
196	SK23	弥生 土器	壺	16.3~ 17.0	—	—	—	灰黄褐色10YR4/2	石・長・素・ 灰白・灰・褐・粗	薄手。口縁部外側に粘土帶を貼付 しユビオサエ。口縁端部 にキザミ。外面ナデ。内面ハ ケ・ナデ。	
197	SK25	弥生 土器	壺	20.2	—	—	—	にぶい・黄橙 10YR6/4	石・長・素・灰 白・灰・褐・粗	口縁部外側に粘土帶を貼付し キザミ。下端をビロオサエし段 を濶す。内外面ナデ。	
198	SK25	弥生 土器	壺	—	—	—	—	にぶい・黄橙 10YR5/3	石・長・素・灰 白・灰・褐・粗	口縁部外側に粘土帶を貼付。 内外面ナデ。	
199	SK25	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外:にぶい・橙 7.5YR6/4 内:灰黄25Y4/1	石・長・素・灰 白・褐・赤褐色/ 粗	口縁部外側に粘土帶を貼付し キザミ。内面ナデ。	
200	SK25	弥生 土器	壺	—	—	—	—	にぶい・黄橙 10YR6/3	石・長・素・ 灰白・灰・褐・粗	口縁端部を上方へ拡張させる。 端部に亂れた凹線文。内外面 ナデ。	
201	SK25	弥生 土器	壺	14.2	—	—	—	にぶい・黄橙 10YR5/4	石・長・素・ 灰・灰・褐・粗	口縁端部を上方へ拡張させる。 内外面ナデ。	
202	SK25	弥生 土器	鉢	19.0	15.4	9.0	—	外:にぶい・橙 7.5YR6/4 内:灰黄25Y4/1	石・長・素・ 灰・白・灰・褐・粗	口縁端部ヨコナデ。外面ユビオ サエ。内面ナデ・ヘラケズリ。 外底ユビオサエ・ナデ。	
203	SK25	弥生 土器	高杯	17.8	—	—	—	橙25YR6/6	石・長・素・ 灰・灰・赤褐色/ 粗	口縁端部ヨコナデ。外面崩離 し調査不明。内面ヨコナデ。	
204	SK25	弥生 土器	鉢	19.2	—	—	—	外:にぶい・黄橙 10YR7/3 内: 灰黄25Y5/2	石・長・素・ 灰・灰・粗	口縁端部凹状。内外面ナデ。	
205	SK25	弥生 土器	不明	—	—	8.8	—	外:にぶい・赤褐色 5YR4/4 内: 灰黄10YR4/1	石・長・素・ 灰・灰黒・赤褐色/ 粗	内外面傾斜方向のナデ。内底ユ ビオサエ。外底ナデ。	
206	SK27	弥生 土器	壺	11.8	—	—	—	橙5YR7/6	石・長・素・灰 白・灰・粗	内外面ナデ。内面ユビオサエ。	
207	SK27	弥生 土器	不明	—	—	3.0	—	浅黄橙10YR8/3	石・長・素・灰 白・灰・赤褐色/ 粗	外腹ハケ。内面ナデ。内底ユ ビオサエ。	
208	SK27	弥生 土器	鉢	23.0	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・素・灰 黑・粗	外面タキシ後ナデ。内面ナデ。	
209	SK29	弥生 土器	壺	10.8	—	—	—	外:灰黄褐色 10YR5/2 内: 灰黄25Y4/1	石・長・素・ 灰・褐・粗	口縁部外側に粘土帶を貼付し キザミ。頭部外側横直線文。 内面ナデ。	
210	SK29	弥生 土器	壺	10.2	—	—	—	暗灰黄25Y5/2	石・長・素・灰 白・灰・粗	口縁部外側に粘土帶を貼付。 内外面ナデ。	
211	SK29	弥生 土器	壺	16.6	—	—	—	灰黄25Y6/2	石・長・素・灰 白・灰・赤褐色/ 粗・多量	口縁部外側に粘土帶を貼付。 内外面ナデ。	
212	SK29	弥生 土器	壺	13.6	—	—	—	にぶい・黄25Y6/3	石・長・素・灰 白・灰・粗	口縁端部にキザミ。外腹ユビ オサエ・ナデ。内面ナデ。	
213	SK29	弥生 土器	壺	16.3	—	—	—	外: 橙7.5YR5/3 内: 灰黄10YR4/1	石・長・素・ 灰・白・赤褐色/ 粗	口縁部外側に粘土帶貼付後ユ ビオサエして段を濶す。口縁 端部にキザミ。内面ナデ・ハ ケ。	
214-a	SK29	弥生 土器	壺	21.7	—	—	—	外: 橙7.5YR6/6 内: 灰黄25Y4/1	石・長・素・ 灰・白・灰・赤褐色/ 粗	外腹に斜方向のキザミ・横接 直線文。横接直線文。内面ヨ コハケ・ナデ。	
214-b	SK29	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外: 橙7.5YR6/6 内: 灰黄25Y4/1	石・長・素・ 灰・白・灰・赤褐色/ 粗	外腹に斜方向のキザミ・横接 直線文。横接直線文。内面ヨ コハケ・ナデ。	

Tab.16 遺物観察表(10)

回収番号	出土地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有物質・粒度)	特徴 (文様・釉薬・成形・調整)	備考 (生産地・年代・使用歴)
				口径	器高	底径	最大径				
215	SK29	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) 底黄褐色 10YR6-2 内) オリーブ黒 5Y3/1	石・長・雲・灰 白・灰・織・粗 多量	頭部外面に斜線・斜方向のキ ザミ・横描直線文・横円形浮 文。内面ナデ。	
216	SK29	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) に赤い黄褐色 10YR7-2 内) 黄褐色25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・赤織・粗 粗	上側部に横円形浮文。頭部外 面斜方向のタナギ。内面ナ デ。	
217	SK29	弥生 土器	壺	—	—	—	230	外) 棕7.5YR6/6 黄褐色25Y5/1	石・長・雲・ 灰・赤褐色・粗 多量	上側部に横円形浮文・斜方向 のキザミ。内面ナデ。	南四国型
218	SK29	弥生 土器	甕	106	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR5/3	石・長・雲・灰 白・灰・粗	内外面ナデ。	
219	SK29	弥生 土器	高杯	—	—	—	—	に赤い橙75YR7/4	石・長・雲・ 白・灰白・織・粗	杯部外面に胎土充填。外側タ テハケ。内面ナデ・ユビオサ エ。	
220	SK29	弥生 土器	高杯又 は台付 鉢	—	—	15.4	—	棕7.5YR6/6	石・長・雲・ 灰・粗・粗	肩端部に凹線文。脚部外面横 描直線文・3本1単位の竪方向 の沈線。外側ナデ。内面上半 部ナビナギ。下辺脚ナギ。	
221	SK29	弥生 土器	高杯	—	—	74	—	に赤い橙75YR7/4	石・長・雲・ 灰・赤褐色・粗	脚部に凹線文。脚部外面タ テハケ、下辺ヨコナギ。内面強 いイタナギ。下辺ヨコハケ。	
222	SK29	弥生 土器	高杯	—	—	—	—	外) 棕7.5YR7/6 黄褐色25Y5/1	石・長・雲・ 灰・赤褐色・粗	高杯の光觸部分が削離したも のか外側ユビオサエ。内面 ユビオサエ・ナギ。	
223	SK29	弥生 土器	壺又は 甕	—	—	80	20.0	外) に赤い黄褐色 10YR7/3 内) 黄褐色25Y5/1	石・長・雲・ 灰・白・赤褐色・ 赤織・粗	内面イタナギ。底部外側タテハ ケ。内面ナデ。	
224	SK29	弥生 土器	不明	—	—	53	—	に赤い橙 7.5YR6/4 内) 底黄褐色 10YR5/2	石・長・雲・ 灰・織・赤褐色・ 粗	底部外側タテハケ。外底ユビオ サエ・ナギ。	
225	SK29	弥生 土器	不明	—	—	72	—	外) 棕5YR6/6 内) 黄褐色25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色・ 粗	内外面ナデ。	
226	SK29	弥生 土器	不明	—	—	66	—	に赤い橙 10YR7/4	石・長・雲・ 灰・織・赤褐色・ 粗	底部外側と外底ユビオサエ・ナ ギ。内底ナデ。	
227	SK29	弥生 土器	不明	—	—	73	—	外) に赤い黄褐色 10YR6/3 内) 底黄褐色 10YR4/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	外側ナデ。内面ヘラケズリ。外 底ナデ。	
228 - a-d	SK29	弥生 土器	粘土塊	—	—	—	—	外) に赤い橙 7.5YR6/4 内) 底黄褐色 10YR6/2	石・長・雲・ 粗	外側ナデ日。粗糸・織の圧 痕。	
229	SK31	弥生 土器	壺又は 鉢	—	—	—	—	棕7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色・ 粗	口縁部外面に紙やかな凹線。 内面ナデ。	
230	SK32	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) 底黄褐色 10YR6/2 内) オリーブ黒 5Y3/1	石・長・雲・ 灰・灰黒・粗	外側に断面三角形の突変を貼 付し上下に横描直線文と横描 浮文。内面ナデ。	
231	SK32	石製品	叩石	全長 12.4	全厚 3.0	全幅 7.4	重量 390g	—	—	砂岩製。先端部と側面、中央 に削れ痕。	
232	SK33	弥生 土器	壺	11.2	—	—	—	外) 底黄褐色 10YR6/2 内) 底黄褐色 25Y4/1	石・長・雲・ 灰・灰黒・粗	口縁部外面に幅広の粘土帯を貼 付しキザミ。下端に横円形浮 文。頭部から上側部に横描 直線文・斜方向のキザミ・横円 形浮文。内面ナデ。	
233	SK33	弥生 土器	壺	16.8	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR7/2	石・長・雲・ 灰・灰黒・粗 多量	口縁部外面に粘土帯を貼付し 下端にキザミ。口縁部下に横 描直線文。内面ナデ。口縁部 内面ユビオサエ。	
234	SK33	弥生 土器	壺	24.1	—	—	—	横底10YR4/1	石・長・雲・ 白・灰・粗・多 量	口縁部外面に粘土帯を貼付し 下端にキザミ。頭部と上側部 に乱れた横描直線文・横円形 浮文・斜方向のキザミ。内外 面ナデ。	
235	SK33	弥生 土器	甕	28.2	—	—	—	暗灰褐色25Y5/2	石・長・雲・ 灰・赤褐色・粗 多量	口縁部外面に粘土帯を貼付し 下端にキザミ。頭部と上側部 に乱れた横描直線文・横円形 浮文・斜方向のキザミ。内外 面ナデ。	南四国型
236	SK33	弥生 土器	甕	23.4	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR7/2	石・長・雲・ 灰・赤褐色・粗	口縁部上面に柘青させ縫 部に凹線文・円形浮文・棒状 浮文。口縁部内面回転ナデ。 側面内外面ナデ。	

Tab.17 遺物観察表(11)

団版 番号	出土 地点	種類	器種 形態	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	特徴 (文様・施釉・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
237	SK33	弥生 土器	甕	100	—	—	124	外:灰黄褐色 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 白・灰・粗	口縁端部を上下に拡張させ罐 部凹状。内外面ナデ。	
238	SK33	弥生 土器	甕	109	—	—	—	褐灰10YR6/1	石・長・雲・灰 白・灰・粗	口縁端部を上下に拡張させ罐 部凹状。内外面ナデ。	
239	SK33	弥生 土器	甕	132	—	—	133	灰黄褐色10YR6/2	石・長・雲・灰 白・灰・粗・多 量	内外面ナデ。内面ユビオサエ。 南国型 外面に環。	
240	SK33	弥生 土器	不明	—	—	64	—	にぶい灰橙 10YR6/3	石・長・雲・ 白・灰・粗	内外面ナデ。外底ナデ。	
241	SK33	弥生 土器	不明	—	—	52	—	外:灰黄褐色 内:黄灰25Y6/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	外表面ナデ。底部外側にユビオ サエ。内底ユビオサエ・ナデ。 外底ナデ。	
242	SK33	弥生 土器	不明	—	—	47	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・灰 白・褐・赤褐色 粗	外表面ナデ。内面ヘラケズリ。 外底ナデ。内底ユビオサエ。	
243	SK33	弥生 土器	不明	—	—	75	—	にぶい灰黄褐色 10YR6/3	石・長・雲・ 白・灰・粗	外表面ナデ。内面ヘラケズリ。 外底ナデ。	
244	SK35	弥生 土器	甕	24.8	61.2	7.4	38.9	灰黄褐色10YR4/2	石・長・雲・ 白・灰・褐・粗 多量	口縁端部に内面文。頭部下 斜方向のキザミ。頭部外面ナ デ。頭部外側ハケ・ヘラナデ。 内面ナデ。	
245-a	SK35	弥生 土器	甕	21.7	—	—	38.4	灰黄褐色10YR5/2	石・長・雲・ 白・灰・褐・粗	外表面ナデ・ユビオサエ。	
245-b	SK35	弥生 土器	甕	—	—	119	—	灰黄褐色10YR5/2	石・長・雲・ 白・灰・褐・粗	口縁部外面にユビオサエ。内 面ナデ。	
246	SK35	弥生 土器	甕又は 甕	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・褐・赤褐色 粗	外表面に内面三角形の小突帶を 貼付し上下にユビオサエ。外 面ハリ。内面ナデ。	
247	SK35	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:褐灰10YR5/1 内:黄灰25Y5/1	石・長・雲・灰 白・粗	口縁部外面に粘土帶を貼付し ユビオサエ。外表面ユビオサエ・ タテナケ。内面ユビオサエ・ナ デ。	
248	SK36	弥生 土器	甕	15.1	—	—	—	外:にぶい灰橙 10YR6/3 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・粗	口縁部下端から外側にキザミ。 外表面に内面三角形の小突帶を 貼付し上下にユビオサエ。撫 拭波紋文。内面ナデ。	
249	SK36	弥生 土器	甕	—	—	—	—	灰黄褐色10YR4/2	石・長・雲・ 白・褐・粗	口縁部外面に粘土帶を貼付し ユビオサエ。外表面タテナケ・内 面ナデ。	南国型か
250	SK36	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:にぶい灰橙 10YR6/3 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・粗	外表面に内面三角形の小突帶を 貼付し上下にユビオサエ。撫 拭波紋文。内面ナデ。	
251	SK37	弥生 土器	甕	12.0	—	—	—	外:褐灰10YR6/1 内:黄灰25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・粗・多 量	口縁部外面に幅広の粘土帶を 貼付しセザミ・頭部撫拭直線 文。内面ナデ。	
252	SK37	弥生 土器	甕	12.0	—	—	—	黄灰25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰白・粗	口縁部外側に幅広の粘土帶を 貼付しセザミ・ギザミ。内 面ナデ。	
253	SK37	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:にぶい灰橙 10YR6/2 内:黄灰25Y5/1	石・長・雲・ 白・灰・粗・多 量	頭部外側に撫拭直線文。上脇 部に円形浮文と刻文。内面エ ビナデ。	
254	SK37	弥生 土器	甕	—	—	—	—	灰黄褐色10YR4/2	石・長・雲・ 灰・褐・粗	口縁部外面に粘土帶を貼付し 籠部に内面文。内面ナデ。	
255	SK37	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:にぶい灰橙 7.5YR5/3 内:黄灰10YR5/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁端部を上方に拡張し内 縫文。口縁部内面に回転ナ デ。	
256	SK37	弥生 土器	甕	—	—	—	—	外:灰黄褐色 10YR6/2 内:黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	外表面に斜方向のキザミと精 円形浮文。内面エビオサエ・ナ デ。	
257	SK37	弥生 土器	甕又は 甕	—	—	—	—	外:灰黄褐色 10YR6/2 内:黄灰25Y5/1	石・長・雲・ 白・褐・赤褐色 粗	口縁部外面に内面文。外 面ヨコナデ・ヘラナデ。内面ナ デ。	
258	SK37	弥生 土器	甕	19.8	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰白・灰 赤褐色・粗	口縁部外面に内面文。杯部外 面ヘラナデ・内面ナデ。	
259	SK37	弥生 土器	高杯	26.5	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰白・灰 赤褐色・粗	口縁部外面に内面文。杯部外 面ヘラナデ・内面ナデ。	
260	SK37	弥生 土器	高杯	21.4	17.5	10.3	—	にぶい橙7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰白・灰 赤褐色・粗	口縁部外面に内面文。杯部外 面ハケ・イタナケ・内面ナデ。脚 端部に内面文。脚部下位に撫 拭直線文。3本1単位の縦方向 の沈線。脚部外側ナデ。内面 ヘラケズリ。	
261	SK37	石製品	叩石	全長 11.0	全厚 3.2	全幅 8.0	重量 415g			砂岩製。画面の中央と側面に 敲打痕。	

Tab.18 遺物観察表(12)

図版番号	出土地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有物質・粒度)	等級 (文様・釉薬・形態・調整)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
262	SK37	弥生 土器	不明	—	—	118	—	外)に赤い黄澄 10YR6-3 (内)褐灰10YR6-1	石・長・雲・灰 白・灰・粗	外縁イタナデ。内面ナデ。底 部外側に竪方向の強いスピナ デ。外底ナデ。	外底下位に煤。
263	SK37	弥生 土器	不明	—	—	53	—	外)褐灰10YR6-1 (内)黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 白・灰・粗	内面ナデ。底部外側と内底 にエビオサエ。	
264	SK38	弥生 土器	壺	210	—	—	—	外)に赤い黄澄 75YR7/4 (内)黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 白・灰・粗	口縁端部に凹窪文。外縁ナデ。 口縁部内面凹窪ナデ。	
265	SK38	弥生 土器	壺	143	—	—	—	外)に赤い黄澄 10YR7/2 (内)黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 白・粗	口縁部外縁に粘土帯を貼付。 エビオサエし段を残す。外縁 ナデ。	
266	SK38	弥生 土器	壺	135	214	59	148	に赤い黄澄 10YR6-3	石・長・雲・灰 白・粗	口縁部外縁に粘土帯を貼付。 外縁ナデ。胴部内面ヘラケズ リ。	南西国型
267	SK38	弥生 土器	高杯	220	—	—	—	に赤い黄澄 25YR6/4	石・長・雲・ チ・白・灰・赤 褐色	口縁部外縁に凹窪文。杯部外縁 ヘラナデ。内面ナデ。	
268	SK38	弥生 土器	高杯	—	—	脚部径 13.6	—	に赤い黄澄 5YR6/4	石・長・雲・ チ・灰・灰黒 褐色	杯部内面に柱状北彌・脚端部 に凹窪文。脚部下位に6条の ハラ描沈線・3本1束の竪方 向の沈線。内面ナデ。	
269	SK38	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)橙5YR6/6 (内)黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色	口縁端部を上方に強張せる。 端部ヨコナデ。内面ナデ。	
270	SK38	弥生 土器	不明	—	—	38	—	外)灰黄闘 10YR6/2 (内)灰5Y4/1	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色	底部外側に竪方向のイタナデ。 外底ナデ。内底エビナデ。	
271	SK39	弥生 土器	壺又は 壺	—	—	—	—	外)に赤い黄澄 10YR6/4 (内)黄灰25Y5/1	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色	内面ナデ。	
272	SK39	弥生 土器	壺	17.6	—	—	—	外)に赤い黄澄 10YR6-3 (内)黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・粗・多 量	口縁部外縁に粘土帯を貼付し カザミ。内面ナデ。	
273	SK40	弥生 土器	壺	11.4	—	—	23.0	灰黄闘10YR5/2	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色	口縁部外縁に粘土帯を貼付し カザミ。下端に円形浮出・頭 部外側に柳葉直線文・頭ハケ。 上胴部に横形凹浮文・機括直 線文・キザミ。内面エビナデ。	
274	SK40	弥生 土器	壺	214	—	—	—	外)に赤い黄澄 10YR6-3 (内)黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 白・灰・粗	口縁部外縁に粘土帯を貼付し カザミ。下端に橢円形容文。 頭部外側に三角形の小突部 を多数造らせ上下にハケ。内 面ヨコハケ。	
275	SK40 下層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)に赤い黄澄 75YR6/4 (内)灰黄闘 10YR6/2	石・長・雲・灰 白・粗	口縁端部を上方に強張し凹窪 文。口縁部前面ヨコハケ。外 面は接合部で剥離。	
276	SK40 下層	弥生 土器	壺	14.6	—	—	—	外)明黄闘 25YR5/6 (内)褐灰10YR5/1	石・長・雲・ 灰・灰黒・赤褐色	口縁部内面ナデ・ヨコハケ。 胴部内面ヨコナデ・ナデ。	
277	SK40	弥生 土器	壺	14.8	—	—	18.0	に赤い黄澄7.5YR5/4	石・長・雲・ 灰・灰黒・赤褐色	口縁部外縁に粘土帯を貼付し エビオサエ。上胴部に横形浮 文。内面ナデ。	南西国型
278	SK40 下層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)灰黄闘 10YR5/2 (内)黒褐25Y3/1	石・長・雲・ 白・灰・灰 褐色	口縁部外縁に粘土帯を貼付し カザミ。口縁部下ヨコハケ。内 面ナデ。	
279	SK40	弥生 土器	壺又は 壺	—	—	—	—	に赤い黄澄7.5YR7/4	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁部外縁に粘土帯を貼付し エビオサエ。内面ナデ。	
280	SK40	弥生 土器	壺又は 壺	—	—	—	—	に赤い黄澄7.5YR5/4	石・長・雲・ 白・灰・粗・多 量	口縁部外縁に粘土帯を貼付し エビオサエ・ヨコナデで段を残 す。内面ナデ。	
281	SK40	弥生 土器	壺又は 壺	—	—	—	—	に赤い黄澄5YR5/4	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色	口縁部外縁ヨコナデ。	
282	SK40	弥生 土器	壺又は 壺	—	—	—	—	褐7.5YR7/6	石・長・雲・ 灰・褐・赤褐色	内面ナデ。	
283	SK40	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外)に赤い黄澄 10YR6-3 (内)黄灰25Y4/1 (内)黄灰25Y4/1	石・長・雲・灰 白・灰・粗・多 量	外面断面三角形の小突部を多 数造らせ上下にハケ・棒状浮 文。内面ナデ。	
284	SK40	弥生 土器	壺	—	—	—	32.0	外)に赤い黄澄 10YR6-3 (内)黄灰25Y5/1	石・長・雲・灰 白・灰・粗	外面上位に柳葉直線文・機状 の工具によるキザミ。内面 イタナデ。	

Tab.19 遺物觀察表 (13)

団版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量 (cm)・重量				色調	粘土 (含有鉱物・粒度)	特徵 (文様・施素・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
285	SK40 下層	弥生 土器	高杯	160	—	—	—	にぶい赤褐色 25YR5/4	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色 粗	口縁部外側に凹線文。外側 ナデ。	
286	SK40	弥生 土器	鉢	83	7.2	4.0	—	橙75YR7/6	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色 粗	口縁部外側に凹線文。外側と 外底ナデ。内面ナデ・ユビオサ エ。	
287	SK40	弥生 土器	不明	—	—	85	—	にぶい黄褐色 10YR7/3	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色 粗	外側ナデ。内底ユビナデ。	
288	SK41 上層	弥生 土器	壺	164	—	—	—	外) にぶい橙 75YR6/4 内) 黄灰25YR4/1	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し 口縁下端にキザミ。外側 ナデ。口縁部下にユビオサ エ。	
289	SK41 上層	弥生 土器	壺	14.1	—	—	—	浅黄褐10YR8/3	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。周面外側ナデ。内 面ユビオサエ・ナデ・ハケ。	
290	SK41	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) にぶい黄褐色 10YR7/3 内) 前灰N3/ 断) 前灰N3/ 断) 前灰10YR6/1	石・長・雲・ チ・灰黒・粗	頭部下に2条の断面三角形の 突帯。外側ナデ。内面上位 に粘土帶接合痕が残る。	
291	SK41 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) にぶい橙 5YR6/3 内) にぶい黄褐色 10YR7/3 断) 前灰10YR6/1	石・長・雲・ チ・白・赤褐色 粗	外側接直線文・タテハケ・突 帯。内面ナデ。	
292	SK41 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) 灰白75YR8/2 内) 黄灰25YR4/1	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・粗	外側接直線文・拂拭直線文・ 断面三角形の突帯。突帯の上 下にユビオサエ。内面ユビオサ エ・ナデ。	
293	SK41	弥生 土器	甕	—	—	—	—	灰黄褐10YR6/2	石・長・雲・ チ・白・赤褐色 粗	蹲手。口縁部外側に楕状の工 具によるキザミ。内面ナデ。	
294	SK41 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	5YR6/3 内) 前灰10YR5/1	石・長・雲・ チ・白・赤褐色 粗	外側接直線文・椎かい拂拭 波状文。内面ユビオサエ・ナ デ。	
295	SK41 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) にぶい黄褐色 75YR5/4 内) 黑褐25YR2/1	石・長・雲・ チ・白・赤褐色 粗	外側拂拭葉状文・乱れた椎か い拂拭波状文。内面ナデ。	
296-a	SK42	弥生 土器	壺	14.5	—	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/4	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	口縁部外側に凹線文。外側ナデ。 口縁部内面回転ナデ・胴部ユ ビオサエ・ナデ。	
296-b	SK42	弥生 土器	壺	—	—	—	30.5	にぶい黄褐色 10YR7/4	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗		
297	SK42	弥生 土器	壺	—	—	—	—	灰黄25YR6/2	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付。 口縁部下に指円形浮文。内面 ナデ。	
298	SK42	弥生 土器	壺又は 甕	19.4	—	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/4	石・長・雲・ チ・灰・赤褐色 粗	外側上部に指円形浮文・沈線。 外側ナデ。	
299	SK42	弥生 土器	壺	—	—	—	—	9.5) 灰黄褐色 10YR5/2 断) 黄灰25YR4/1	石・長・雲・ 灰・灰褐色・粗 多量	外側上部に指円形浮文・沈線。 外側ナデ。	
300	SK42	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) 灰黄褐色 10YR5/2 内) 黑褐25YR3/1	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色 粗・多量	外側に棒状浮文・沈線。外側ハ ケ・内面ナデ。	
301	SK42	弥生 土器	甕	14.2	—	—	—	外) にぶい黄褐色 10YR6/4 内) 黄灰25YR4/1	石・長・雲・ 灰・灰黒・粗	口縁部を上方に強張し凹線 文・胴部外側ナデ・ヘラナデ。 内面ナデ・ユビオサエ。	
302	SK42	弥生 土器	甕	16.7	—	—	—	外) にぶい黄褐色 10YR5/3 断) 黄灰25YR5/1	石・長・雲・灰 白・灰・赤褐色 粗	口縁部を上方に強張し凹線 文・胴部外側ナデ・ヘラナデ。	
303	SK42	弥生 土器	甕	17.4	—	—	—	外) 灰黄褐色 10YR6/2 内) にぶい黄褐色 10YR7/4	石・長・雲・ 灰・灰黒・赤褐色 粗	口縁部を上方に強張し凹線 文・胴部外側ナデ・ヘラナデ。	
304	SK42	弥生 土器	甕	18.8	—	—	—	にぶい黄褐色 7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰・赤褐色 粗	口縁部を上方に強張し凹線 文・口縁部内外面回転ナデ。	
305	SK42	弥生 土器	高杯	18.8	—	—	—	外) 橙25YR6/6 断) 前灰10YR5/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁部外側に凹線文。内面回 転ナデ。	
306	SK42	弥生 土器	不明	—	—	6.8	—	にぶい黄褐色 10YR6/3	石・長・雲・ 灰・灰褐色・ 粗	外側ナデ。底部外側にユ ビオサエ・ナデ。外底ユビオサ エ・ナデ。内底ユビナデ。外底 四状。	
307	SK42	弥生 土器	不明	—	—	6.2	—	にぶい黄褐色 10YR6/4	石・長・雲・ 灰・灰褐色・ 粗・多量	外側ナデ。外底四状。	

Tab.20 遺物観察表(14)

回収番号	出土地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有物質・粒度)	特徵 (文様・抽象・成形・調整)	備考 (生産地・年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
308	SK42	弥生 土器	不明	—	—	56	—	外) に赤い黄褐色 10YR4/3 内) 橙7.5YR6/6	石・長・青・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	外縁ナデ。底部外側にスピオ サエ。内底スピオサエ・ナデ。 底部ナデ。	底部に径7mmの 焼成後穿孔。
309	SK43 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) 黄褐色 10YR6/2 内) 黄褐色25Y4/1	石・長・青・ 白・灰・灰黒・ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し 斜方角のナギミ。頭部外側タ テハケ。内面ナデ。	
310	SK43 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR7/2	石・長・青・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	口縁部端部に粘土帯を貼付し スピオサエ。内外面ナデ。	
311	SK43 床	弥生 土器	壺	162	—	—	—	灰褐色10YR4/2	石・長・青・ 白・灰・灰黒・ 粗	口縁部端部に延張し凹縫 文。外側ナデ。	
312	SK43 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	灰白25Y7/1	石・長・青・ 白・灰・灰黒・ 粗	薄手。外側に梯状浮文。外側 面ナデ。	
313	SK44	弥生 土器	壺	216	—	—	—	外) に赤い黄褐色 10YR6/3 内) 黄褐色25Y5/1	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し スピオサエ。端部にキザミ。上 側部に梯状浮文。内外面ナ デ。	
314	SK44	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) 黄褐色 10YR6/2 内) 黄褐色 10YR4/2	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	外側に2条の小突部・梯状浮 文。	
315	SK44	弥生 土器	高杯	—	—	120	—	外) 灰褐色25Y5/2 内) に赤い黄褐色 10YR6/3	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	脚端部を上方に延張させる。 脚部外側に小突部2本以上 を1準位とする載荷方向の沈 縫。脚部内側屈曲方向のスピ オサエ。端部内側回転ナデ。	
316	SK44	弥生 土器	不明	—	—	49	—	灰褐色10YR5/2	石・長・青・ 白・灰・灰黒・ 粗	外底凹状。内外面ナデ。	
317	SK44	弥生 土器	不明	—	—	69	—	外) 黄褐色25Y6/2 内) 黄褐色25Y5/1	石・長・青・ 白・灰・粗	内外面ナデ。	
318	SD9 下層	弥生 土器	壺	17.5	—	—	—	外) に赤い黄褐色 10YR6/4 内) 灰褐色25Y5/2	石・長・青・ 白・灰・脚・粗	口縁端部に凹縫文・3本を1準 位とする梯状浮文。外側面ナ デ。	
319	SD9 上層	弥生 土器	壺	11.8	—	—	—	橙7.5YR6/6	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	口縁端部を下方へ延張させる。 堆積凹状。外側スピオサエ。内 面ナデ。	
320	SD9 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR5/4	石・長・青・ 白・白・赤褐色・ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し 外側にキザミ。内面ナデ。	
321	SD9 上層	弥生 土器	壺	17.4	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR6/4	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し 下端にキザミ。外側にスピオサ エ。内側スピオサエ・ナデ。	
322	SD9 上層	弥生 土器	壺	—	—	—	—	外) 明赤褐色5Y5/6 内) に赤い黄褐色 10YR5/3	石・長・青・ 白・白・赤褐色・ 粗	口縁端部に凹縫文。口縁部外 側に粘土帯を貼付しスピオサ エ段を構す。頭部外側タテ ハケ。口縁部内面ヨリハケ。	
323	SD9 上層	弥生 土器	高杯	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	石・長・青・ 白・灰・灰黒・ 赤褐色・粗	口縁部凹状。口縁部外側に 凹縫文。内面回転ナデ。	
324	SD9 上層	弥生 土器	不明	—	—	124	—	に赤い黄褐色 10YR5/3	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	外側ナデ。内底スピオサエ・ナ デ。	
325	SD9	弥生 土器	不明	—	—	59	—	外) 黑褐色10YR3/2 内) 黄褐色25Y4/3	石・長・青・ 白・白・脚・粗	外側ナデ。外底に压痕。	
326	SD9 上層	弥生 土器	不明	—	—	47	—	に赤い黄褐色 10YR5/3 内) 黑褐色25Y3/2	石・長・青・ 白・灰・赤褐色・ 粗	外側スピオサエ。内底スピオサ エ・ナデ。外底スピオサエ・压痕。	
327	SD9 上層	石製品	石包丁	残存長 [108]	全厚 0.7	全幅 4.0	重量 [53g]			貝岩製。磨き石包丁。径6.8cm の円孔1孔。両面に擦痕。	
328	SR1	弥生 土器	壺	—	—	23	128	外) 橙7.5YR6/6 内) 灰褐色25Y5/2	石・長・青・ 白・灰・粗	口縁部外側にタキ。外縁部 上半タキ。下半タキ後タテ ハケ。内面スピオサエ。	
329	P218	弥生 土器	壺	163	—	—	19.0	に赤い黄褐色 10YR7/2	石・長・青・ 灰・灰黒・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し 上側部に断続的角形の小突 部を2条設け。上半スピオサ エ。頭部外側屈曲方向のイグナ デ。脚部ナデ。内面ナデ。粘 土接合部迄にスピオサエ。	
330	P224	弥生 土器	壺	139	—	—	—	橙7.5YR6/6	石・長・青・ 灰・粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し スピオサエ。内外面ナデ。	
331	P228	弥生 土器	壺	—	—	—	—	橙5YR6/6	石・長・青・ 灰・粗	頭部外側タハケ。頭部波狀 文。内面ヨリハケ。	

Tab.21 遺物觀察表(15)

固版 番号	出土 地點	種類	器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	特徵 (文様・施色・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
332	P221	弦生 土器	甕	—	—	28	166	にふい橙75YR7/4	石・長・雲・ 白・灰・赤風・ 緑・粗	体部外縁タキ後でタマヘ。内 面ハケ・イタナデ。内底ユビオ サエ・ユビナデ。	
333	P236	弦生 土器	高杯	—	—	脚部径 95	—	橙75YR6-6	石・長・雲・ 灰・褐・緑・粗	外縁ナデ。内面ユビナデ・チヂ レ目。	
334	土器罐2	弦生 土器	高杯	—	—	脚部径 11.7	—	外)灰黃褐 10YR4/2 内)にふい褐 75YR5/4	石・長・雲・ チ・白・灰黒・ 粗	脚部端に浅い1条の凹窪線。 脚部外縁にヘラ彫りの窪 上を1単位とする直方向の沈 窓。脚部外縁前方のイタナ デ、端部内面凹軋ナデ。	
335	土器罐2	石製品	石斧	残存長 [9.5]	残存厚 [3.0]	全幅 27	重量 [150g]	—	—	結晶片状製。柱状刃・刃石斧。	右斧破損部を即 右部に斜打痕。
336	IV層 最下	弦生 土器	甕	16.1	—	—	—	にふい橙7.5YR6/4	石・長・雲・ 白・灰・赤風・ 粗	口縁部外側に断面三角形の突 帶を貼付し上下にナデ。内外 面ナデ。	
337	IV層	弦生 土器	甕	16.7	—	—	—	オリーブ黒5Y3/1	石・長・雲・ 白・褐・粗・多 量	口縁部外側に粘土帯を貼付し 斜方向のキザミ。下端に指円 形浮文を貼付。内面ナデ。	
338	IV層	弦生 土器	甕	—	—	—	—	外)にふい黄橙 10YR6/3 内)黄灰25Y4/1 断)黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・褐・粗・ 多量	口縁部外側に粘土帯を貼付し 外側にキザミ。下端に指円形 浮文。外縁部特にユビオ サエ・ナデ。内面ユビナデ。	
339	V層	弦生 土器	甕	15.3	—	—	—	外)にふい黄橙 10YR7/2 内)黄灰25Y4/1	石・長・雲・ 白・灰・粗	口縁部下に横擦直線。内外 面ナデ。	
340	V層	弦生 土器	甕	20.3	—	—	—	外)浅黄褐 10YR8/3 断)黄灰25Y5/1	石・長・雲・ チ・白・灰黒・ 粗	口縁部外側に粘土帯を貼付し ユビオサエ。内外面ナデ。	
341	V層	弦生 土器	甕	17.2	—	—	—	外)明赤褐 25YR5/6 断)黄灰25Y4/1	石・長・雲・ チ・白・赤風・ 粗・多量	口縁部下端にキザミ。上側 部に斜方向のキザミ。外縁 部にイタナデ。内面ナ デ。南西国型	
342	VI層	弦生 土器	甕	12.2	21.4	5.7	14.7	橙7.5YR6/6	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 赤風・粗	内外面ナデ。	
343	IV層	弦生 土器	器台	—	—	15.5	—	にふい黄橙 10YR7/4	石・長・雲・ 白・灰・灰黒・ 粗	蛇文岩製。扁平片刃石斧。刃 部を欠損する。	
344	V層 最下	石製品	石斧	残存長 [6.3]	全厚 1.3	全幅 4.2	重量 [73g]	—	—	—	—
345	V層	石製品	石包丁	全長 10.4	全厚 0.9	全幅 5.2	重量 74g	—	—	頁岩製。磨製石包丁。径0.6cm の丸孔孔。	
346	V層	石製品	石斧	残存長 [15.0]	全厚 4.8	全幅 7.3	重量 [590g]	—	—	大型刮刃石斧。刃部を欠損す る。	
347	SB7-P1	瓦器	輪	14.4	—	—	—	外)灰N4/ 内)灰N4/ 断)灰白5Y8/1	石・長・雲・ チ・粗・織	口縁部外側ヨコカタ。体部外 面ユビオサエ・ナデ。内面ナ デ・円錐状の暗文。炭素吸着 良好。	和室型
348	SB10-P2 床	瓦器	輪	14.0	—	—	—	外)灰NS- 25Y7/1 内)灰25Y6/1 断)灰白5Y8/2	石・長・雲・ チ・粗・織	口縁部外側ヨコカタ。体部外 面ユビオサエ・ナデ。内面ユビ オサエ・ナデ。外縁下半部素吸 着なし。	和室型
349	SB9-P5 下層	瓦器	皿	8.9	1.8	4.0	—	外)灰N4/ 内)灰N4/ 断)灰白5Y7/1	石・長・雲・ チ・粗・織	口縁部外側ユビオサエ・ヨコカ タ。外縁ユビオサエ・ナデ。内面 ユビオサエ・ミガキ。炭素吸 着良好。	和室型
350	SB9-P5 下層	土師質 土器	杯	—	—	—	—	にふい黄橙 10YR7/3	石・長・雲・ チ・粗・織	内外面回転ナデ。外底回転系 切り。	
351	SK2	青磁	碗	15.0	—	—	—	外)明緑灰 75GY7/1 断)灰白N8/	—	外面に緩やかなクロ口。明 緑灰色を帯びる半透明の釉。	中国慶寧宮系 青磁碗E類 15世紀後半- 16世紀前半
352	SK2	青磁	碗	16.0	—	—	—	外)オリーブ灰 25GY6/1 断)灰白N8/	—	オリーブ灰色を帯びる半透明 の釉。	中国慶寧宮系 青磁碗E類 15世紀後半- 16世紀前半
353	SK2	陶器	碗	—	—	—	—	外)灰5Y2/1 断)灰白10YR8/2	—	外面ロクロ口。外底下位輪軸。 鉄輪。黒色の釉。	漏斗
354	SK2	吸水器	鉢	—	—	—	—	灰白2.5Y7/1	—	外底回転ナデ。	東播系
355	SK2	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	にふい橙7.5YR7/4	—	口縁部外側ユビオサエ・ヨコカ タ。内面ゴコハ。	播磨型 口縁部外側に保
356	SK2	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	明赤褐25YR5/6	石・長・雲・ チ・白・粗・ 粗	外面ユビオサエ・ナデ。内面ナ デ。	15世紀

Tab.22 遺物観察表(16)

回収番号	出土地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	特徵 (文様・釉薬・成形・調整)	備考 (生産地・年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
357	SK4 下層	青磁	碗	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白INB/ 外) に赤い斑 2.5YR6/4 断) に赤い斑 2.5YR6/4	灰オリーブ色を帯びる半透明 の釉。	灰オリーブ色を帯びる半透明 の釉。	中国龍窯系
358	SK4 上層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	—	—	燒め。内外面回転ナデ。内 面に傷目。外底に凹凸。	焼成 14世紀後半以降
359	SK5 下層	白磁	碗	約137	—	—	—	外) 灰白Y5/2 断) 灰白INB/ 外) に赤い斑 2.5YR6/4 断) に赤い斑 2.5YR6/4	—	口縁部玉縁状。灰白色を帯び る半透明の釉。	中国 白磁窯系 12世紀
360	SK5	土師質 土器	小皿	9.1	15	7.0	—	灰白10YR8/2	石・長・雲・ 子・赤風／繩	摩耗し調整不明。	
361	SK8 下層	瓦器	碗	13.6	—	—	—	外) 灰NA/ 内) 灰NA/ 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・ 粗・繩	口縁部内面に沈没状の段。口 縁部外面ヨコナギ。体部外 面ユビサエ・ナデ。内面ナ デ。内面ナデ・暗面。炭素吸 着良好。	和泉型
362	SK8 上層	瓦器	碗	—	—	—	—	外) 灰NS/ 内) 灰Y5/6/1 断) 灰白SY7/1	石・長・雲・ 子・粗・繩	口縁部外面ヨコナギ。体部外 面ユビサエ・ナデ。内面ナ デ。外表面の底は剥離。内面 口縁部まで炭素吸着あり以下 は剥離。	和泉型
363	SK8 上層	瓦器	碗	—	—	45	—	外) 灰Y6/1 内) 灰SY6/1 断) 灰黄SY7/1 外) に赤い斑 2.5Y6/3・オリーブ 断) 25Y4/3 断) 灰黄25Y7/2	石・長・雲・ 子・粗・繩	貼付高台。外面ユビサエ。 摩耗し調整不明。炭素は剥離。	和泉型
364	SK8 下層	陶器	浅	—	—	—	—	外) に赤い斑 2.5Y6/3・オリーブ 断) 25Y4/3 断) 灰黄25Y7/2	—	黄褐色斑。内面に鉄錆による 赤。外底に凹凸。外底無釉。 に赤い黄色を帯びる透明の釉。	中国福建省 福建窯 12-13世紀
365	SK8 下層	須恵器	鉢	21.0	—	—	—	外) 灰NG/ 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・ 子・粗・繩	外外面回転ナデ。端部と口縁 部外表面は灰色に発色。	東播系 14世紀
366	SK8 下層	土師質 土器	土鉢	残存長 [23]	全厚 10	全幅 11	孔径 0.5 重量 [15g]	橙25YR6/6	石・長・雲・ 灰・繩・粗・繩	摩耗し調整不明。	
367	SK9	瓦器	碗	12.8	—	—	—	外) 灰黄25Y7/2 内) 灰黄25Y7/2 断) 灰黄25Y7/2	石・長・雲・ 粗・繩	外表面ユビサエ・ナデ。内面ナ デ。炭素は剥離。	和泉型
368	SK9	須恵器	碗	—	—	6.8	—	灰白N7/	石・長・雲・ 子・粗・繩	内外面回転ナデ。外底剥離 切り。外面クロロ目。	東播系 13世紀
369	SK10	土師質 土器	楕又は 杯	—	—	7.0	—	灰白25Y8/2	石・長・雲・ 子・粗・繩	貼付高台。	
370	SK12	土師質 土器	杯	13.9	—	—	—	に赤い斑25YR7/4	石・長・雲・ 子・粗・繩	内外面回転ナデ。	
371	SK12 上層	土師質 土器	碗	—	—	4.8	—	灰白10YR8/2	石・長・雲・ 灰・粗・繩	貼付高台。摩耗し調整不明。	
372	SK12	瓦器	碗	—	—	5.2	—	外) 灰NA/ 内) 灰NA/ 断) 灰白10YR8/2	石・長・雲・ 粗・繩	貼付高台。外表面ユビサエ・ナ デ。内面ナデ。内面に平行折 りと不定方向の暗面。炭素吸着 良好。	和泉型
373	SK12	瓦器	皿	8.9	—	—	—	外) 灰IN25Y7/1 内) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・ 粗・繩	L字縁部外表面ヨコナギ。体部外 面ナデ。内面ナデ。炭素吸着 は別々。	和泉型
374	SK12	瓦器	皿	8.8	1.3	6.4	—	内) 灰Y5/6/1 外) 灰Y5/6/1 断) 15Y7/1	石・長・雲・ 灰・白・粗・繩	L字縁部外表面ヨコナギ。外底ユ ビサエ・ナデ。内面ナデ。炭 素吸着は別々。	和泉型
375	SK12	瓦器	皿	9.3	1.6	5.1	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1 断) 25Y7/1	石・長・雲・ 粗・繩	L字縁部外表面ヨコナギ。体部外 面ナデ。内面ナデ。炭素吸着 は殆ど認めない。	和泉型
376	SK12	瓦器	皿	7.7	—	—	—	外) 灰NA/ 内) 灰NA/ 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・ 子・粗・繩	L字縁部外表面ヨコナギ。体部外 面ユビサエ・ナデ。内面ナ デ。炭素吸着良好。	和泉型
377	SK12	青磁	碗	—	—	—	—	外) オリーブ灰 10Y5/2 断) 灰IN7/	—	オリーブ灰色を帯びる透明 の釉。	中国龍窯系
378	SD1 1層 K-3-4	土師質 土器	杯	—	—	7.3	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・ 子・赤風・粗・繩	摩耗し調整不明。	
379	SD1 2層 N-2-3	土師質 土器	碗	—	—	5.2	—	橙5YR6/6	石・長・雲・ 灰・粗・繩	摩耗し調整不明。	
380	SD1 1層 K-L- 3-4	土師質 土器	碗	—	—	7.0	—	に赤い黄橙 10YR7/3	石・長・雲・ 子・粗・繩	貼付高台。内外面ナデ。	

Tab.23 遺物觀察表 (17)

固版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量 (cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	特徵 (文様・施釉・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
381	SD1 2層 K-3・4	土師質 土器	碗	—	—	49	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・手 /粗	貼付高台。内面回転ナデ。外 底ナデ。内外温ロクロ目。	
382	SD1 1層 K-3	土師質 土器	碗	—	—	65	—	にぶい・橙5YR6/3	石・長・雲・赤 風・粗・細	貼付高台。内外温回転ナデ。外 底ユビオサエ・ナデ。	
383	SD1 1層 E-3・4 F-4	土師質 土器	碗	—	—	58	—	にぶい・黄橙 10YR7/3	石・長・雲・手 /粗・細	貼付高台。内底と外底ナデ。	
384	SD1 1層 J-3・4	土師質 土器	碗	—	—	68	—	灰白25Y8/2	石・長・雲・手 /粗・細	貼付高台。内外温ナデ。	
385	SD1 1層 K・L- 3・4	土師質 土器	碗	—	—	72	—	灰白25Y8/1	石・長・雲・赤 風・粗	貼付高台。内面回転ナデ。外 底ナデ。	
386	SD1 1層 J-3・4	土師質 土器	碗又は 杯	—	—	—	—	にぶい・黄橙 10YR6/2	石・長・雲・手 ・赤風・粗・細	内外温回転ナデ。	
387	SD1 1層 F-4	土師質 土器	杯	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	石・長・雲・赤 風・粗・細	内外温回転ナデ。	
388	SD1 1層 K-3・4	土師質 土器	小皿	94	22	30	—	浅黄橙10YR8/3	石・長・雲・手 /粗	摩耗し調整不明。内面ロクロ 目。	
389	SD1 4層上位	土師質 土器	小皿	—	—	54	—	橙5YR6/6	石・長・雲・手 /粗	内外温回転ナデ。外底回転余 切り。内外温ロクロ目。	
390	SD1 1層 N-2・3	土師質 土器	小皿	—	—	52	—	橙7.5YR7/6	石・長・雲・手 /粗	内底凸状。摩耗し調整不明。	
391	SD1 1層 K-4	瓦器	碗	150	52	40	—	外) 明褐色 7.5YR7/2 内) にぶい・黄橙 10YR7/2 断) にぶい・黄橙 10YR7/2	石・長・雲・手 /粗・細	貼付高台。口縁部外面ユビオ サエ・ヨコナデ。体部ユビオサエ・ ナデ。内底に平行状、周 縁に円錐状の暗文。内外面と も炭素吸着なし。	和象型
392	SD1 1層 K・L- 3・4	瓦器	碗	154	—	—	—	外) 灰黄褐 10YR6/2 内) 灰黄褐 10YR6/2 断) にぶい・黄橙 10YR7/2	石・長・雲 /粗・細	口縁部外面ユビオサエ・ヨコナ デ。体部外面ユビオサエ・ナデ。内 面ナデ。炭素吸着なし。	和象型
393	SD1 1層 K・L- 3・4	瓦器	皿	96	—	—	—	外) 灰5Y4/1 内) 灰5Y4/1 断) 灰黄25Y7/2	石・長・雲 /粗・細	口縁部外温ユビオサエ・ヨコナ デ。体部外温ユビオサエ・ナデ。 内外面に炭素吸着あり。	和象型
394	SD1 1層 K・L- 3・4	瓦器	皿	96	—	—	—	外) 黄褐25Y6/1 内) 黄褐25Y6/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・赤 風・細	口縁部外温ユビオサエ・ヨコナ デ。体部外温ユビオサエ・ナデ。 内面に炭素吸着あり。	和象型
395	SD1 1層 K・L- 3・4	黑色 土器	碗	—	—	68	—	外) にぶい・橙 7.5YR7/3 内) 黒褐10YR3/1 断) 黑褐10YR3/1	石・長・雲・手 /粗・多量	貼付高台。摩耗し調整不明。	
396	SD1 1層 J-3・4	黑色 土器	碗	—	—	—	—	外) オリーブ黒 5Y3/1 断) オリーブ黒 5Y3/1	石・長・雲・金 雲・粗	口縁部内面に沈澱。内外面ナ デ。	極量型 11世紀前半
397	SD1 1層 K・L- 3・4	白磁	碗	—	—	—	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 灰白25Y8/1		口縁部玉縁状。灰黄色を帯び る半透明の釉。	中国 白磁碗IV類 12世紀
398	SD1 1層 J-3・4	白磁	碗	—	—	—	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 灰白25Y8/2		口縁部玉縁状。灰黄色を帯び る半透明の釉。	中国 白磁碗IV類 12世紀
399	SD1 1層 K・L- 3・4	白磁	碗	—	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y8/1		口縁部玉縁状。灰白色を帯び る半透明の釉。	中国 白磁碗IV類 12世紀
400	SD1 1層 K・L- 3・4	白磁	碗	—	—	—	—	外) 灰白75Y8/1 断) 灰白N8/		口縁部玉縁状。灰白色を帯び る半透明の釉。	中国 白磁碗IV類 12世紀
401	SD1 1層 K・L- 3・4	白磁	碗	—	—	—	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 灰白25Y8/1		口縁部玉縁状。灰黄色を帯び る半透明の釉。	中国 白磁碗IV類 12世紀

Tab.24 遺物観察表 (18)

回収番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	等級 (文様・釉薬・成形・調整)	備考 (生産地・年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
402	SD1 1層 K・L - 3・4	白磁	碗又は 杯	-	-	-	-	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白NB8/		内底下部無釉。透明の釉。	中国
403	SD1 1層 K・L - 3・4	白磁	皿	-	-	-	-	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1		透明の釉。	中国 白磁黒E群 16世紀
404	SD1 1層 E - 4	白磁	碗	-	-	-	-	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白25Y7/1		内底に櫛目と円錐状の段。灰白色を帯びる透明の釉。	中国
405	SD1 1層 K・L - 3・4	白磁	碗	-	-	50	-	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白NB8/		内底に円錐状の段。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	中国 白磁黒B類 12世紀
406	SD1 1層 J - 3・4	白磁	碗	-	-	46	-	外) 灰白75Y7/1 断) 灰白NB8/		内底に円錐状の段。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	中国 白磁黒B類 12世紀
407	SD1 1層 J - 3・4	白磁	皿	121	-	-	-	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白NB8/		内外底下部無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	中国 白磁黒D群 15世紀
408	SD1 1層 K・L - 3・4	白磁	碗又は 皿	-	-	-	-	外) 灰黄25Y7/2 断) 灰白10YR8/2		内面にヘラ彫りによる文様。外底下部無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉。	中国
409	SD1 1層 N - 2・3	白磁	皿	-	-	35	-	外) 灰白25Y8/2 断) 灰白25Y8/1		内底に放射状の櫛目。平底。底部無釉。釉は焼成不良で白濁。	中国 白磁黒B類 12世紀 - 13世紀 初期
410	SD1 1層 K・L - 3・4	白磁	皿	-	-	36	-	外) 灰白25Y8/2 断) 灰白25Y8/1		内底に放射状の櫛目と円錐状の段。内底に複刻による花文。平底。底部無釉。釉は焼成不良で白濁。	中国 白磁黒B類 12世紀 - 13世紀 初期
411	SD1 1層 K・L - 3・4	白磁	皿	-	-	40	-	外) に赤い黄澄 10YR7/2 断) 灰白25Y8/1		平底。底部無釉。釉は焼成不良で白濁。	中国
412	SD1 1層 K・L - 3・4	白磁	皿	-	-	46	-	外) 灰白25Y8/1 断) 灰白25Y8/1		挿入高台。高台無釉。高台端部無釉。内底に別個体の高台端部無釉。	中国 白磁黒D群 15世紀
413	SD1 1層最下 O - 2	白磁	蓋	88	3.0	32	-	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白NB8/		両面直挿入高台。外底下部無釉。内底に別個体の高台端部無釉。内底に輪郭線が付着。	中国 白磁蓋D群 15世紀
414	SD1 1層 E - 3	青磁	碗	-	-	-	-	外) 灰オーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y8/1		内面に施墨と片切彫りによる文様。灰オーブ色を帯びる透明の釉。	中国龍泉窯系 青磁碗 I - 2類 12世紀後半 - 13世紀前半
415	SD1 1層 E - 3・4 F - 4	青磁	碗	-	-	-	-	外) 灰オーブ 75Y6/2 断) 灰白25Y7/1		灰オーブ色を帯びる透明の釉。	中国龍泉窯系 青磁碗 II 又は E 類 14世紀後半 - 16世紀前半
416	SD1 1層 N - 2・3	青磁	皿	-	-	-	-	外) オーブ灰 25Y6/1 断) 灰白25Y7/1		模花皿。口縁部を波状に変形させる。オーブ色を帯びる透明の釉。	中国龍泉窯系 青磁碗中葉 - 後 半
417	SD1 1層 K - 3・4	青磁	碗	-	-	-	-	外) オーブ灰 25Y6/1 断) 灰白N7/		外底に細密な蓮弁文。オーブ灰を帯びる半透明の釉。	中国龍泉窯系 青磁碗B類 15世紀 - 16世紀 前半
418	SD1 1層 K - 3・4	青磁	碗	-	-	-	-	外) 灰オーブ灰 5Y6/2 断) 灰白25Y7/1		外底に丸彫りによる蓮弁文。灰オーブ灰の釉。釉は焼成不良気味で白濁。	中国龍泉窯系 青磁碗E類 15世紀
419	SD1 1層 北ナラヌ 上面 F - 4	青磁	碗	-	-	58	-	外) 灰オーブ灰 75Y6/2 断) 灰白N7/		釉は高台内面途中まで掛かり外底無釉。灰オーブ色を帯びる透明の釉。	中国龍泉窯系
420	SD1 1層	青磁	碗	-	-	59	-	外) オーブ灰 5Y6/3 断) 赤黃澄 10YR8/3 - 灰白N7/		体部外間に荒いケズリ痕が残る。釉は高台外縁まで掛かり外底無釉。瓷口の釉は剥り取る。オーブ灰色の釉。	中国龍泉窯系 青磁碗D類 14世紀後半 - 15世紀
421	SD1 2層 N - 2・3	青磁	碗	-	-	51	-	外) オーブ灰 10Y6/2 断) 灰白NB8/		高台全面に施し釉。外底の釉は輪郭線に削り取る。オーブ灰を帯びる透明の釉。	中国龍泉窯系 青磁碗D類又は E類 14世紀後半 - 16世紀前半

Tab.25 遺物觀察表(19)

団号 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	特徴 (文様・施釉・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕)	
				口径	器高	底径	最大径					
422	SD1 1層 J - 4	青磁	碗	—	—	4.9	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白10YR8/2	内底に印花文。高台全面に施 釉し外底の釉を輪状に削り取る。 釉は施成不良で白濁。	中国慶寧窯系 青磁碗Ⅰ類 15世紀後半～16 世紀前半		
423	SD1 1層 H - 4	青磁	碗	—	—	4.6	—	外) 灰オリーブ 75Y5/2 断) 灰白N7/	釉は高台外面まで掛かり外底 無釉。足付の釉は削り取る。 灰オリーブ色を帯びる透明の 釉。	中国慶寧窯系		
424	SD1 1層 K - L - 3 - 4	青磁	碗	—	—	—	—	外) に赤い黄 25Y6/3 断) 灰白25Y7/1	内面に拂拭による文様。に赤 い黄色を帯びる半透明の釉。	中国同安窯系 12世紀後半～13 世紀前半		
425	SD1 1層	青磁	碗	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 55Y3/3 断) 灰白5Y7/1	外面に錦運弁文。灰オリーブ 色を帯びる半透明の釉。	中国慶寧窯系 青磁碗Ⅰ類 13世紀後半～14 世紀前半		
426	SD1 1層 J - 3 - 4	青磁	碗	—	—	—	—	外) 明オリーブ灰 5GY7/1 断) 灰白N8/	外面に錦運弁文。明オリーブ 灰色を帯びる半透明の釉。	中国慶寧窯系 青磁碗Ⅱ類 14世紀前半		
427	SD1 1層 O - 2	青磁	碗	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 55Y6/2 断) 灰白N8/	内底に円團状の段。灰オリーブ 色の半透明の釉。	中国慶寧窯系		
428	SD1 1層 F - 4	青磁	碗	—	—	3.3	—	外) オリーブ灰 5GY6/1 断) 灰白N8/	高台は全周施釉後受けの釉を 削り取る。オリーブ灰色を帯 びる半透明の釉。	中国慶寧窯系 青磁碗Ⅲ類 14世紀前半		
429	SD1 1層 E - 3	青磁	碗	—	—	—	—	外) オリーブ灰 10Y5/2 断) 灰白N7/	外面に輪廓刻進弁文。内底に ヘラ刷による文様。オリーブ 灰色を帯びる半透明の釉。	中国慶寧窯系 青磁碗Ⅳ類 15世紀～16世紀 前半		
430	SD1 1層 E - 4	青磁	碗	—	—	—	—	外) オリーブ灰 10Y6/2 断) 灰白N7/	外面に輪廓刻進弁文。オリーブ 灰色を帯びる半透明の釉。	中国慶寧窯系 青磁碗Ⅳ類 15世紀～16世紀 前半		
431	SD1 1層 N - 2 - 3	青磁	香炉か	11.0	—	—	—	外) オリーブ灰 10Y6/2 断) 灰白N7/	内面無釉。オリーブ灰色を 帯びる半透明の釉。	中国慶寧窯系		
432	SD1 1層 E - 3	青花	碗	—	—	—	—	外) 白 断) 白	口縁部外面に雷文帶。口縁部 内面に團雫。	中国景德鎮窯系 青花碗Ⅱ類 16世紀後半		
433	SD1 横出面 北テラス G - 4	陶器	小皿 反り皿	10.4	2.0	5.4	—	外) 浅黄25Y7/4 断) 灰白25Y8/1	灰釉。尚白内と還暉無釉。施 成不良で釉は部分的に白濁。 尚台内に胎土粒状の目立。	唐戸 16世紀前半～中 世紀		
434	SD1 1層 K - L - 3 - 4	組戸器	鉢	19.9	—	—	—	外) 灰白N7/1・灰 NS5/ 断) 灰白N7/	石・長・雲・赤 /粗、黒色粒	内外面削輪ナデ。内面クロカ 目、口縁部外面と縁部は暗灰 色に発色。	東播系 12世紀	
435	SD1 1層 J - 3 - 4	組戸器	鉢	—	—	—	—	外) 灰NS6/・灰NS/ 断) 灰NS6/	石・長・雲・赤 /粗	内外面削輪ナデ。口縁部は 暗灰色に発色。	東播系 12世紀	
436	SD1 1層 H - 4	組戸器	鉢	—	—	—	—	外) 灰NS6/・灰NS/ 断) 灰NS6/	石・長・雲・赤 /粗	内外面削輪ナデ。	東播系	
437	SD1 1層 K - L - 3 - 4	組戸器	鉢	—	—	—	—	外) 灰NS6/・灰NS/ 断) 灰NS6/	石・長・雲・赤 /粗	内外面削輪ナデ。口縁部は 暗灰色に発色。	東播系 13世紀	
438	SD1 1層 K - L - 3 - 4	組戸器	鉢	20.6	—	—	—	外) 灰NS6/・灰NS/ 断) 灰NS6/	石・長・雲・赤 /粗	外面ユビオサエ・回転子ナデ。内 面削輪ナデ・ハバ。口縁部は暗 灰色に発色。	東播系 13世紀	
439	SD1 1層 K - L - 3 - 4	組戸器	鉢	23.8	—	—	—	外) 灰白N7/1・灰 5Y5/1 断) 灰白N7/	石・長・雲・赤 /粗	内外面削輪ナデ。口縁部外 と縁部は暗灰色に発色。	東播系 13世紀	
440	SD1 1層 K - L - 3 - 4	組戸器	鉢	28.8	—	—	—	外) 灰白10YR8/1・ 褐灰10YR5/1 断) 灰白10YR8/1	石・長・雲・赤 /粗	内外面削輪ナデ。口縁部は 暗灰色に発色。	東播系 13世紀	
441	SD1 1層 O - 2	組戸器	鉢	—	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・赤 /粗	内外面削輪ナデ。口縁部外 と縁部は暗灰色に発色。	東播系 14世紀	
442	SD1 1層 H - 4	組戸器	甕	—	—	—	—	外) 灰黄褐 10YR4/2 内) に赤い黄褐 10YR5/3 断) 灰白10YR7/1	石・長・雲/ 赤、大粒の 黒色粒	内面ナデ。外面上平行状のタタ キ目。外面上に自然粒。	佐古山窯	

Tab.26 遺物観察表(20)

回収番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物/程度)	特徵 (文様・釉薬・形成・調整)	備考 (生産地・年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
443	SD1 1層 K・L - 3・4	須恵器	壺	19.4	—	—	—	外) 摺灰 10YR5/1 断) 黄灰 25YR6/1	石・長・雲/ 粗・細	内外面回転ナデ。	
444	SD1 1層 K・L - 3・4	陶器	擂鉢	21.0	—	—	—	外) 摺灰 7.5YR4/1 断) 黄灰 5YR5/2		焼締め。内外面回転ナデ。標 目は不明。	備前 15世紀後半 東岡崎年中世5 期 間堀編年NB 期
445	SD1 1層 J - 3・4	陶器	擂鉢	26.0	—	—	—	外) 摺灰 10YR5/1 断) 黄灰 25YR5/2		焼締め。内外面回転ナデ。標 目は不明。	備前 15世紀後半 東岡崎年中世5 期 間堀編年NB 期
446	SD1 1層 K・L - 3・4	陶器	擂鉢	—	—	13.3	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		焼締め。外面ヨコナデ。内面 横目。	備前
447	SD1 1層 O - 2	陶器	擂鉢	—	—	12.5	—	外) 摺灰 10YR5/1 内) 黄灰 7.5YR5/2 断) 白灰 N7/		焼締め。外面下位ヨコナデ。 内面ロクロ目・横目。外底に 凸凹。	備前
448	SD1 1層 O - 2	陶器	擂鉢	—	—	16.4	—	外) にぶい橙 25YR6/4 断) にぶい橙 25YR6/4		焼締め。外面ユビオサエ・ヨ コナデ。内面回転ナデ。標目。 外底に凹凸。	備前 14世紀後半以降
449	SD1 1層 J - 4	陶器	壺	10.0	—	—	—	外) 赤灰 25YR4/1 断) 赤灰 25YR5/2		焼締め。体部外面にヘラ括き による波状文。内外面回転ナ デ・外面ロクロ目。内面上位 に粘土帶接合痕。外底に自然 縫。	備前
450	SD1 1層 K・L - 3・4	陶器	壺	—	—	—	—	外) 赤灰 7.5YR4/1 内) 赤灰 25YR4/2 断) 赤灰 25YR5/2		焼締め。体部外面にヘラ括き による波状文。内外面回転ナ デ。外面ロクロ目。	備前
451	SD1 1層	陶器	壺又は 甕	—	—	—	—	外) 黄灰 7.5YR6/2 内) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 赤灰 25YR5/2		焼締め。外面ナデ。内面ヨコ ナデ。	備前
452	SD1 1層 L - 3	陶器	壺又は 甕	—	—	17.0	—	外) 黄灰 25YR4/1 断) 黄灰 25YR5/2		焼締め。内外面回転ナデ。外 底に凸凹。	備前
453	SD1 1層 J - 4	陶器	瓶	—	—	5.0	—	外) にぶい黄褐 10YR5/3 内) 黄褐 7.5YR6/2 断) 黄褐 7.5YR6/2		焼締め。内外面回転ナデ。外 底回転系切り。外面に自然縫。	
454	SD1 1層 K・L - 3・4	陶器	甕	—	—	21.9	—	外) 摺灰 10YR5/1 内) 摺灰 10YR6/1 断) 白灰 10YR7/1		外面回転ナデ。内面ナデ。	常滑
455	SD1 1層 J - 4	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰 10YR5/2 - 白灰 25Y7/1 内) にぶい黄褐 7.5YR6/3 断) 白灰 25Y7/1		内外面ナデ。外面格子状のタ タキ目。内面上位に粘土帶接合痕。	常滑
456	SD1 1層 E - 3	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰 5Y5/3 内) 黄灰 10YR6/2 断) 白灰 25Y7/1		内外面ナデ。外面格子状のタ タキ目。	常滑
457	SD1 1層 J - 4	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰 10YR4/1 内) 黄灰 25Y4/1 断) 黄褐 5YR6/1		内面ユビオサエ・ナデ。外面格 子状のタタキ目。	
458	SD1 1層 N - 2・3	土師質 土器	鉢	25.7	—	—	—	にぶい橙 7.5YR7/4	石・長・雲・ チ・白・確・粗 /多量	外面ユビオサエ・ナデ。内面ヨ コナデ・ユビナデ。外面上位に粘土 帶接合痕。	
459	SD1 1層 K - 3・4	土師質 土器	鉢	28.7	—	—	—	粗 5YR6/6	石・長・雲・ チ・白・確・粗 /多量	外面ユビオサエ・ナデ。内面ナ デ。	
460	SD1 1層 K - 3・4	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	外) にぶい黄褐 7.5YR5/3 断) 黄灰 10YR5/2	石・長・雲・ チ・粗・粗 /多量	外面ユビオサエ・ヨコナデ。内 面ナデ。	15世紀
461	SD1 1層 E - 4	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	石・長・雲・チ /粗・多量	外面ユビオサエ・ヨコナデ。内 面ナデ。	15世紀

Tab.27 遺物観察表(21)

固版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	粘土 (含有鉱物・粒度)	特徴 (文様・施素・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
462	SD1 1層 F-4	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	にぶい・黄褐色 10YR7/3	石・長・雲・赤 チ・粗・多量	外面ユビオサエ・ナデ。内面ヨコナデ。	15世紀
463	SD1 1層 J-3・4	土師質 土器	鍋	34.9	—	—	—	にぶい・褐7.5YR6/4	石・長・雲・赤 チ・粗・多量	外面ユビオサエ・ヨコナデ。内面ヨコナデ。	15世紀
464	SD1 1層 K-L- 3-4	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	外)灰褐色7.5YR5-2 瓶)にぶい・褐 7.5YR6/4	石・長・雲・赤 チ・粗・多量	外面ユビオサエ・ヨコナデ。口 縁部内面ヨコナデ。体部内面 ユビオサエ・ナデ。	15世紀
465	SD1 1層床 L-3	土師質 土器	釜	25.1	—	—	—	外)灰黃褐色 10YR6/2 瓶)にぶい・褐 7.5YR7/4	石・長・雲・赤 チ・粗・多量	口縁部外画面回転ナデ、体部ユ ビオサエ・ナデ。内面ナデ。	撫琴型C-1類 15世紀後半 外面に焼。
466	SD1 1層 F-4	土師質 土器	釜	—	—	—	—	にぶい・褐7.5YR7/3	石・長・雲・赤 チ・粗・多量	内外面回転ナデ。	撫琴型
467	SD1 1層 K-4	土師質 土器	釜	36.7	—	—	—	浅黃褐色7.5YR8/3	石・長・雲・ チ・赤風・粗・ 縦	摩耗し調整不明。	
468	SD1 1層 H-4	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	外)灰褐色7.5YR5-2 瓶)褐7.5YR6/4	石・長・雲・ チ・赤透明・ 粗・縦	口縁部外画面回転ナデ。内面ナ デ。	撫琴型
469	SD1 1層 G-4 H-4	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	にぶい・褐7.5YR6/4	石・長・雲・ チ・赤透明・ 粗・縦	口縁部外画面回転ナデ。内面ヨ コナデ。	撫琴型 外面に焼。
470	SD1 1層 K-L- 3-4	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	外)にぶい・褐 7.5YR6/4 瓶)にぶい・褐 7.5YR7/4	石・長・雲・ 灰・赤風・粗・ 縦	口縁部外画面回転ナデ。体部外 面斜方方向の平行タキ。口縁 部内面ヨコナデ。体部ヨコハ ケ。	撫琴型 外面に焼。
471	SD1 1層 O-2	瓦質 土器	鍋	22.6	—	—	—	外)灰黃褐色 10YR6/2 瓶)にぶい・褐褐色 10YR7/2	石・長・雲・ 灰・赤風・粗・ 縦	口縁部外画面に粘土貼を貼付し ユビオサエ・ヨコナデ。体部ユ ビオサエ・ナデ。内面ナデ。内 面の炭素吸着なし。	外面に焼。
472	SD1 1層 I-J-4	土師質 土器	壺類か	12.3	—	—	—	浅黃褐色10YR8/3	石・長・雲・ チ・赤風・粗・ 縦	内外面回転ナデ。	口縁端部に焼。
473	SD1 4層 F-4	土師器	釜	13.5	8.3	9.0	—	にぶい・褐7.5YR7/4	石・長・雲・ チ・赤風・粗・ 縦	内外面回転ナデ。内底にロク 口目。外底ヘラ切り。	9世紀末～10世 紀前半
474	SD1 4層 F-4	土師器	釜	12.8	2.8	8.2	—	にぶい・黄褐色 10YR6/4	石・長・雲・ チ・赤風・粗・ 縦	内外面回転ナデ。外画と内底 にロクロ目。外底ヘラ切り。	9世紀末～10世 紀前半
475	SD1 1層 H-3	綠釉 陶器	碗	—	—	7.4	—	外)灰白5Y7/1 内)灰オリーブ 5Y6/2 瓶)灰白5Y7/1		内外面回転ナデ。底部と外底 回転ヘリテ。内面に緑釉。外 面に緑釉を剥毛化り。内底に 別個体の高台座。	京都系 10世紀
476	SD1 1層 F-4	似唐器	杯	—	—	9.3	—	灰白10Y7/1	石・長・雲・ 粗・縦	貼付高台。外底ヘラ切り。	古代
477	SD1 1層 K-L- 3-4	土師器	甕	—	—	—	—	外)灰褐色7.5YR5-2 瓶)にぶい・赤褐色 5YR5/4	石・長・雲・赤 チ・粗・多量	外面ユビオサエ・ナデ。内面ナ デ。	古代
478	SD1 1層 K-L- 3-4	似唐器	鉢	—	—	—	—	灰白25Y7/1	石・長・雲・赤 風・粗・縦	内外面回転ナデ。	深窓 10世紀後半～11 世紀
479	SD1 1層 N-2・3	土師質 土器	土鍤	全長 46	全厚 0.9	全幅 0.9	孔径 0.3 重量 4.4g	にぶい・黄褐色 10YR6/3	石・長・雲・赤 風・粗・縦	外面ナデ。	
480	SD1 1層 L-3	土師質 土器	土鍤	全長 46	全厚 1.0	全幅 1.0	孔径 0.3 重量 4.0g	にぶい・褐7.5YR5/4	石・長・雲・赤 チ・粗・縦	外面ナデ。	
481	SD1 1層 J-4	土師質 土器	土鍤	残存長 [40]	全厚 1.0	全幅 1.0	孔径 0.5 重量 [3.7g]	黄褐色25Y5/1	石・長・雲・粗・縦	外面ナデ。	
482	SD1 1層 F-4	土師質 土器	土鍤	残存長 [48]	全厚 1.4	全幅 1.4	孔径 0.4 重量 [10.2g]	にぶい・黄褐色 10YR7/4	石・長・雲・赤 風・粗・縦	外面ユビオサエ・ナデ。	

Tab.28 遺物観察表(22)

回収番号	出土地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	特徵 (文様・抽象・成形・調整)	備考 (生産地・年代・使用痕)
				口径	器高	底径	最大径				
483	SD1 1層 N-2・3	土器	輪の羽 口か	復元径 9.7	—	—	—	外)灰5Y4/1 断)橙2.5YR6/8・ [に赤い赤鉄 2.5YR5/4	石・長・雲・白 /粗・粗	前面に自然釉が厚く掛かる。 側面の前方付近に粗糞が付着。	外側面に焦げ、 前面側の断面は 被燒変色。
484	SD1 1層 N-2・3	石製品	砥石	残存長 [5.1]	全厚 2.3	全幅 5.0	重量 [71g]	灰白10YR8/1		4面に擦痕。	
485	SD1 1層 J-3・4	石製品	不明	残存長 [4.0]	全厚 0.7	全幅 3.4	重量 [17g]	灰N5/		蛇紋岩製。欠損品。	
486	SD1 1層 K-3	石製品	石臼	復元径 4.46	—	—	重量 [640g]	褐灰10YR5/1		砂岩製。内面に擦痕。	
487	SD1 1層 N-2・3	銅製品	不明	残存長 [12.3]	全厚 0.5	全幅 0.5	重量 [88g]			棒状製品。断面円形。	
488	SD2 中層	土陶質 土器	杯	13.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	石・長・雲・灰 /粗・粗	外側面回転ナデ。外面ロクロ 目。	
489	SD2 下層	土陶質 土器	杯	—	—	7.8	—	[に赤い]褐7.5YR7/4	石・長・雲・灰 /粗・粗	内外側面回転ナデ。外底回転糸 切り。内外面ロクロ目。	
490	SD2 上層	土陶質 土器	小皿	8.0	1.8	5.0	—	[に赤い]褐7.5YR7/4	石・長・雲・灰 /粗	摩耗し調整不明。外側面ロクロ 目。	
491	SD2 下層	土陶質 土器	小皿	7.7	1.1	4.9	—	褐5YR6/6	石・長・雲・灰 /粗	摩耗し調整不明。外底回転糸 切り。	
492	SD2 下層	土陶質 土器	小皿	7.3	1.7	5.1	—	[に赤い]褐7.5YR6/4	石・長・雲・灰 /粗・粗	摩耗し調整不明。外底回転糸 切り。	
493	SD2 中層	土陶質 土器	小皿	—	—	5.2	—	褐5YR7/6	石・長・雲・灰 /粗	内外側面回転ナデ。外底回転糸 切り。	
494	SD2 下層	土陶質 土器	小皿	—	—	4.8	—	[に赤い]黄橙 10YR7/3	石・長・雲・灰 /粗	内外側面回転ナデ。外底回転糸 切り。	
495	SD2 下層	土陶質 土器	碗又は 杯	—	—	6.0	—	[に赤い]褐7.5YR7/3	石・長・雲・灰 /粗・粗	外底回転糸切り。	
496	SD2 下層	土陶質 土器	碗又は 杯	—	—	5.4	—	褐5YR7/8	石・長・雲・灰 /粗	摩耗し調整不明。	
497	SD2 上層	土陶質 土器	碗	—	—	6.9	—	浅黄褐7.5YR8/3	石・長・雲・灰 /粗	貼付高台。外側面ナデ。外底 ナデ。	
498	SD2 上層	土陶質 土器	碗	—	—	5.8	—	灰黃褐10YR6/2	石・長・雲・ 粗・粗	貼付高台。外側面回転ナデ。 外底回転糸切り後ナデ。	
499	SD2 下層	土陶質 土器	碗	—	—	—	—	[に赤い]褐7.5YR6/4	石・長・雲・灰 /粗・粗	貼付高台。摩耗し調整不明。	
500	SD2 中層	瓦器	碗	13.0	—	—	—	外)灰25Y4/1・ 黄黃褐10YR5/2 内)灰25Y5/1 灰25Y7/2	石・長・雲・灰 /粗・粗	口縁部外面スピサエ・ヨコナ デ。体部内外面スピサエ・ナ デ。外底回転糸以下は吸着 なし、内底は剥離。	象形型
501	SD2 中層	瓦器	碗	—	—	5.3	—	外)灰N4/ 内)灰白25Y8/1 灰白25Y8/1	石・長・雲・灰 /粗・粗	貼付高台。外側スピサエ・ナ デ。内面ナデ。外底吸着 良好、内底なし。	和型
502	SD2 下層	白磁	碗	15.4	—	—	—	外)灰白10Y8/1 灰白N8/		口縁部玉線状。灰白色を帯び る透明の釉。	中国 白磁碗直頸 12世紀
503	SD2 上層	白磁	皿	—	—	—	—	外)灰白5Y7/1 灰白N8/		内底に円錐状の段。外底下位 無釉。灰白色を帯びる透明の 釉。	中国 白磁直V頸 12世紀
504	SD2 下層	白磁	皿	—	—	—	—	外)灰白7.5Y7/1 灰白N8/		口縁部内面と端部無釉。	中国 白磁直直頸 13世紀後半-14 世紀前半
505	SD2 中層	白磁	皿	—	—	6.6	—	外)灰白7.5Y7/1 灰白N8/		内底に段。平底。外底無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。	中国 白磁直直頸 13世紀後半-14 世紀前半
506	SD2 上層	白磁	碗	—	—	4.0	—	外)灰白5Y7/2 灰白5Y7/1 外)灰オリーブ 5Y6/2 灰白5Y7/1		内底に円錐状の段。高台無釉。 灰白色を帯びる透明の釉。	中国
507	SD2 下層	青磁	碗	—	—	4.9	—	—		高台無釉。灰オリーブ色の半 透明の釉。	中国龍泉窯系
508	SD2 下層	青磁	碗	15.0	—	—	—	外)明緑灰 7.5GY7/1 断)灰白N8/		内底に片割れによる文様。 明緑灰色の半透明の釉。	中国龍泉窯系 青磁碗1-2類 12世紀後半-13 世紀前半
509	SD2 中層	青磁	碗	—	—	—	—	外)明オリーブ灰 5GY7/1 断)灰白N8/		外底に褐色介文。明オリーブ 灰色の半透明の釉。	中国慶應堂系 青磁碗直頸 14世紀前半

Tab.29 遺物觀察表(23)

固版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	特徵 (文様・施薬・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
510	SD2 下層	青磁	碗	14.4	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y5/3 断) 灰白5Y7/1	—	内面に絵文・劃文花文。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	中国腹裏青系 青磁碗 I - 4類 12世紀後半~13 世紀前葉
511	SD2 中層	似唐器	鉢	20.6	—	—	—	外) 黄灰25Y6/1· 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・手 /粗	内外面刮軸ナデ。端部と口縁部外表面は黄灰色に発色。	東播系 13世紀
512	SD2 下層	似唐器	鉢	22.4	—	—	—	外) 灰N4·灰黃 25Y7/2 断) 灰黄25Y7/2	石・長・雲・粗	内外面刮軸ナデ。内外面口クロコ。端部と口縁部外表面は灰黄色に発色。	東播系 13世紀
513	SD2 中層	似唐器	鉢	28.1	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰5Y6/1	石・長・雲/ 羅・粗	内外面刮軸ナデ。外面に強いロクロ目。	東播系 13世紀後半~14 世紀初頭
514	SD2 中層	似唐器	鉢	—	—	—	—	外) 黄灰25Y6/1· 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲・粗	内外面刮軸ナデ。端部と口縁部外表面は黄灰色に発色。	東播系 13世紀
515	SD2 中層	似唐器	鉢	—	—	—	—	外) 灰黄褐 10YR5/2 断) 灰黄褐 10YR6/2	石・長・雲・手 /粗	内外面刮軸ナデ。外面ロクロ目。	東播系 13世紀
516	SD2 下層	似唐器	捲鉢又 は捏鉢	—	—	12.0	—	外) 灰5Y4/1 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・手 /粗	外面ユビオサエ・ナデ。内面ナ デ・體目。外底ナデ・ハゲ。内 外面に民衆吸着。	—
517	SD2 中層	似唐器	甕	—	—	—	—	外) 灰NS/ 断) 灰5Y5/1	石・長・雲・粗	外面タクキ。内面ヨコナガ。	東播系
518	SD2	似唐器	甕	—	—	—	—	灰白N7/	石・長・雲/ 羅・粗・大粒の 黒色粒	外面刮軸ナデ。内面ヨコナデ。	佐古龜山窯
519	SD2	似唐器	甕	—	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 褐灰10YR5/2 断) 灰白25Y7/1	石・長・雲/ 羅・粗・大粒の 黒色粒	外面平行状のタキ目。内面ナ デ。	佐古龜山窯
520	SD2 下層	似唐器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰25Y5/1 断) 黄灰25Y6/1	石・長・雲/ 羅・粗	外面縱方向のイタナデ。内面 ヨコナデ。	—
521	SD2 中層	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	にふい橙7.5YR6/4	石・長・雲・手 /粗・多量	外面ユビオサエ・ナデ。内面ナ デ。	15世紀
522	SD2 中層	土師質 土器	不明	—	—	—	—	灰黄褐10YR6/2	石・長・雲・手 /粗・多量	外面ユビオサエ・ナデ。内面ナ デ。	—
523	SD2 上層	瓦質 土器	鍋	—	—	—	—	外) 灰白10YR7/1 断) 灰黄25Y6/1	石・長・雲・手 /粗	口縁部外面に粘土帶を貼付し ユビオサエ・ナデ。内外面ナ デ。	—
524	SD2 下層	瓦質 土器	鍋	18.0	—	—	20.8	外) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・手 /粗	口縁部外面に粘土帶を貼付。 内外面ユビオサエ・ナデ。	外面下位に陳。
525	SD2 下層	瓦質 土器	鍋	20.6	—	—	—	外) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・手 /粗	口縁部外面に粘土帶を貼付し ユビオサエ・ヨコナデ。内外面ナ デ。	—
526	SD2 上層	瓦質 土器	鉢	26.8	—	—	—	外) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1	石・長・雲・粗	外面ユビオサエ・ナデ。内面ハ ケ。	—
527	SD2 上層	瓦質 土器	甕	24.2	—	—	26.5	外) 灰25Y6/2 内) 灰褐7.5YR5/2 断) 灰白N7/	石・長・雲・手 /粗	跡を貼付。口縁部外面回転ナ デ。体部外表面ヨコナデ。口縁部 内面刮軸ナデ。体部内面ヨ コナデ。	河内型 15世紀前半
528	SD2 上層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 灰25Y6/2 内) 灰褐7.5YR5/2 断) 灰白N7/	—	外面に格子状のタキ目。内 面イタナデ。外面上灰オリーブ 色の筋跡が跡かる。	常滑
529	SD2 中層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 褐灰7.5YR5/1 内) 灰N6/ 断) 灰N6/	—	外面ヨコナデ接觸方向のナ デ。内面ヨコナデ。	—
530	SD2 上層	土師質 土器	土罐	全長 32	全厚 1.4	全幅 1.4	0.5 にふい橙7.5YR7/4 重量 42g	孔 0.5 にふい橙7.5YR7/4 断) 灰白N6/	石・長・雲・ 白・灰・粗・繩	外面ユビオサエ・ナデ。	—
531	SD6	土師質 土器	椀又は 杯	16.0	—	—	—	灰白2.5Y7/1	石・長・雲・手 /粗	内外面刮軸ナデ。外面ロクロ 目。	—
532	SD4 上層	土師質 土器	杯	—	—	7.0	—	にふい黄褐 10YR7/3	石・長・雲・手 /粗・繩	準純し調整不明。	—
533	SD4 上層	土師質 土器	小皿	7.8	—	—	—	にふい橙7.5YR6/4	石・長・雲・粗	内外面刮軸ナデ。外底刮軸系 目。	—
534	SD6 上層	土師質 土器	小皿	7.8	1.6	5.9	—	浅黄褐7.5YR8/3	石・長・雲・手 /粗・繩	摩耗し調整不明。外底刮軸系 切り。	—
535	SD6 上層	土師質 土器	小皿	7.6	1.4	6.0	—	にふい黄褐 10YR7/2	石・長・雲・手 /粗・繩	摩耗し調整不明。	—
536	SD6 下層	土師質 土器	小皿	8.1	1.7	6.3	—	浅黄褐10YR8/3	石・長・雲・手 /粗・繩	内外面刮軸ナデ。外底刮軸系 切り。	—

Tab.30 遺物観察表(24)

団版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	等級 (文様・釉薬・形状・調整)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
537	SD6 上層	瓦器	碗	15.3	—	—	—	外) 底5Y6/1 内) 底N6/ 断) 底白25Y7/1	石・長・雲・チ ノ・粗・繩	口縁部外側ヨコナギ。体部ユ ビオサエ・ナデ。内面ナデ・ミ ザキ。外面上位まで灰素吸着 あり。下位なし。	和泉型
538	SD6 上層	瓦器	碗	—	—	40	—	外) 底N6/ 内) 底N6/ 断) 底白5Y7/1	石・長・雲・ 粗・繩	貼付高台。外面ユビオサエ・ナ デ。内面ナデ。灰素吸着は弱 い。	和泉型
539	SD6 上層	瓦器	碗	—	—	48	—	内) 底NS/ 内) 底NS/ 断) 底白5Y8/1	石・長・雲・ 粗・繩	貼付高台。外面ユビオサエ・ナ デ。内面ナデ・暗茶。灰素吸 着良好。	和泉型
540	SD6 下層	瓦器	皿	9.8	—	—	—	外) 底5Y6/1 内) 底5Y5/1 断) 底白5Y7/1	石・長・雲・ 粗・繩	口縁部外側ヨコナギ。体部ユ ビオサエ・ナデ。内面ナデ。灰 素吸着あり。	和泉型
541	SD4 上層	祭祀 陶器	皿	11.8	—	—	—	外) 底白25Y8/2 内) 底白10Y8/1	石・長・雲・繩	内外面回転ナデ。	京都 10世紀
542	SD6 上層	白磁	碗	15.0	—	—	—	外) 底白5Y7/1 内) 底白5Y7/1		口縁部玉緑状。灰白色を帯び る半透明の釉。	中国 白磁 12世紀
543	SD4 上層	白磁	碗又は 皿	—	—	—	—	外) 底白17SY7/1 内) 底白5Y8/1		灰白色を帯びる透明の釉。	中国
544	SD4 上層	青磁	碗	—	—	—	—	外) オリーブ灰 10Y6/2 断) 底白1NB/		外面上部青磁文。オリーブ灰 色を帯びる半透明の釉。	中国 青磁窯系 青磁碗 I - 5b 類 13世紀後半 - 14 世紀前半
545	SD6 上層	須恵器	甕	—	—	—	—	外) に赤い黃褐色 10Y5/3 断) 底白25Y7/1 底NS/	石・長・雲・ 粗・繩。大株の 黑色程	外表面平行状のタケ目。内面 ナデ。外表面に自然釉。	佐賀 山窯
546	SD4 下層	土師質 器	鍋	—	—	—	—	に赤い黄褐色 7SY7/3	石・長・雲・ 粗・繩。粗。	断面三角形の縁を貼付。外 面ナデ。	14世紀
547	SD7	土師質 器	杯	15.0	—	—	—	浅黄褐色SY8/4	石・長・雲・ チ・赤風・繩	摩耗し調整不明。外面ロクロ 目。	
548	SD7	土師質 器	碗	—	—	63	—	底白25Y8/1	石・長・雲・チ ノ・粗・繩	摩耗し調整不明。外底封軸条 切り。	
549	SD7	土師質 器	小皿	7.4	14	49	—	に赤い黄褐色 7SYR7/4	石・長・雲・ 灰・闊・粗・繩	内外面回転ナデ。外底封軸条 切り。	
550	SD7	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 底NA/ 断) 底N6/	石・長・雲・粗 多量	内外面回転ナデ・タタキ。内面回 転ナデ。	
551	SD5	土師質 器	杯	—	—	7.6	—	浅黄褐色SY8/4 断) 底白15Y7/1	石・長・雲・ チ・赤風・粗・ 繩	摩耗し調整不明。外底封軸条 切り。	
552	SD5	瓦器	碗	—	—	5.1	—	外) に赤い黄褐色 10YR7/2 内) に赤い黄褐色 10YR7/2 断) 底白10YR7/1	石・長・雲・灰 粗・繩	貼付高台。内外面とも灰素吸 着なし。	和泉型
553	SD5	白磁	皿	11.8	—	—	—	外) 底黄25Y7/2 内) 底白25Y7/1		灰黄色を帯びる透明の釉。	中国
554	SD5 上層	青磁	碗	15.6	—	—	—	外) 底オリーブ 7SY5/2 断) 底白15Y7/1		内面に飛若文・割花文。外面 ロクロ目。	中国 龍泉窯系 青磁碗 I - 4 類 12世紀後半 - 13 世紀前半
555	P124 下層	土師質 器	杯	14.2	—	—	—	に赤い黄褐色 10YR7/3	石・長・雲・粗	摩耗し調整不明。外面ロクロ 目。	
556	P124 下層	瓦器	碗	15.1	4.6	5.2	—	外) 底NS/ 内) 底NS/ 断) 底白25Y7/1	石・長・雲・ 粗・繩	口縁部外側ユビオサエ・ヨコナ ギ。体部外側ユビオサエ・ナ デ。内面ナデ・暗茶。貼付高台。灰 素吸着良好。	和泉型
557	P124 下層	瓦器	碗	13.6	—	—	—	外) 底NS/ 内) 底NS/ 断) 底白25Y7/1	石・長・雲・ 粗・繩	口縁部外側ユビオサエ・ヨコナ ギ。体部外側ユビオサエ・ナ デ。内面ナデ・暗茶。灰素吸 着良好。	和泉型
558	P124 下層	白磁	碗	16.2	—	—	—	外) 底白5Y7/1 内) 底白25Y8/1		口縁部玉緑状。灰白色を帯び る半透明の釉。	中国 白磁 12世紀
559	P122 6	瓦器	皿	10.1	19	5.3	—	外) 底NA/ 内) 底NA/ 断) 底白25Y8/1	石・長・雲・ 粗・繩	口縁部外側ユビオサエ・ヨコナ ギ。内面ユビオサエ・ナデ。贴付高台。灰 素吸着良好。	和泉型
560	P160	瓦器	皿	—	—	—	—	外) 黄褐色25Y5/1 内) 底白25Y5/1 断) 底白25Y5/1	石・長・雲・ 粗・繩	口縁部外側ユビオサエ・ヨコナ ギ。灰素吸着は弱く部分的 に剥離。	和泉型
561	P171 下層	土師質 器	碗	16.4	5.1	5.2	—	に赤い黄褐色 10YR7/3	石・長・雲・ 白・灰・褐・ 粗・繩	内外面ナデ。貼付高台。	

Tab.31 遺物觀察表(25)

固版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	特徵 (文様・施素・底形・調査)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
562	P210	土師質 土器	杯	14.1	—	—	—	外) 棕75YR6/6 内) 黄褐75YR5/2	石・長・雲・ チ・赤風・粗・ 縦	内外面刮軸ナデ。	
563	P210	土師質 土器	小皿	7.0	—	—	—	浅黃褐75YR8/4	石・長・雲・ チ・粗・縦	内外面刮軸ナデ。	
564	Ⅲ層	土師質 土器	杯	—	—	8.8	—	にぶい棕75YR6/4	石・長・雲・ チ・赤風・粗・ 縦	内外面刮軸ナデ。外底回転系 切り。外底中央に板状の圧痕。 外面コロ日。	
565	Ⅱ・Ⅲ層	土師質 土器	小皿	6.6	1.5	4.7	—	にぶい棕75YR7/4	石・長・雲・ チ・粗・縦	内外面刮軸ナデ。外底回転系 切り。	
566	Ⅱ・Ⅲ層	瓦質 土器	碗	19.7	—	—	—	外) 黄白25Y7/1 断) 黄N4/	石・長・雲・ チ・粗・縦	外面ユビオサエ・ナデ。内面ナ デ。	口縁部外側に 焼。
567	Ⅱ層	須恵器	鉢	—	—	—	—	灰N6/	石・長・雲・ チ・粗・縦	内外面刮軸ナデ。口縁部外側に 焼。	東漢系 12世紀
568	Ⅱ層	須恵器	壺又は 甕	—	—	—	—	外) 灰10Y4/1 断) 灰10Y5/1	石・長・雲・ チ・粗・縦	頭部外側回転方向の粗いV字、 体部外側斜方角のカキ目。頭 部内面コロナデ。体部内面ユ ビオサエ・ナデ。	
569	SB1-P1	陶器	小皿	13.9	—	—	—	外) 灰褐75YR6/2 断) にぶい小皿 25YR5/4	石・長・雲・ 白・灰・粗・縦	内面口沿化粧土刷毛目。灰釉 は焼成不良で白混する。	肥前產 17世紀
570	SB1-P3	土師質 土器	碗	—	—	5.3	—	灰白10Y8B/2	石・長・雲・ 白・灰・粗・縦	貼付高台。摩耗し調整不明。	
571	SB2-P6 上層	磁器 染付	小杯	—	—	2.3	—	外) 灰白N7/ 断) 灰白N8/	—	三方に多条の筋を配し、間に 乳頭による文様を描く。高台 無。	肥前產 17世紀前半
572	SB2-P7 上層	青花	瓶	—	—	7.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白75Y8/1	—	外面圓滑と唐草文様、内面二 重圓滑と不明文様。胫部は青 灰色に発色。胫は灰白色を帶 びる。	中国泉州窯系 16世紀末～ 17世紀初頭
573	SB2-P7 上層	陶器	中碗 壺反形	12.6	—	—	—	外) 灰白75Y8/1 内) 灰白75Y8/1・ 黑褐55YR2/2 断) 灰白25Y7/1	—	黒灰釉。釉は白濁し流れる。	肥前產又は肥前 系 1590～1630年代
574	SB2-P5 床	陶器	中碗	—	—	5.4	—	外) 黑25Y2/1 断) 灰白25Y7/1	—	铁釉。高台内兜巾状。高台無 釉。	肥前產 1590～1630年代
575	SB2-P5 床	陶器	壺	—	—	—	約16.1	外) 灰褐5YR4/2 内) 灰褐5YR5/2 断) 灰褐5YR6/1	燒錠め。内外面コロ日。肩 部外側に自然釉が掛かる。	備前	
576	P137 上層	白磁	碗	—	—	—	—	外) 黄25Y7/2 断) 白25Y8/1	—	灰褐色を帯びる半透明の釉。	
577	P137 下層	磁器 染付	碗	—	—	4.6	—	外) 白 断) 白	—	外面と高台外に乳頭による圓 窓。	肥前產
578	SK11	磁器 染付	中碗 壺反形	10.0	5.3	4.3	—	外) 白 断) 白	酸化コバルトと翠紙刷りによ る文様。外面に忍草・花葉・丸・ 地紋め。壺窓。高台外と見込 みに圓窓。口縁部内面に宝珠 繋ぎ。	肥前系 近代 明治10年代以降	
579	SK11	白磁	小杯	6.2	2.5	2.8	—	外) 白 断) 白	—	—	肥前產又は肥前 系
580	SK11	磁器 染付	小碗 筒形	6.9	7.1	4.4	—	外) 白 断) 白	酸化コバルトによる文字文。	肥前系 近代	
581	SK11	磁器 染付	大皿 变形形	29.5	5.5	16.7	—	外) 白 断) 白	八角形。斜傾による文様。 内面に牡丹・雷文帶・四方棒・麻 の葉・横線による地紋め。外 面不明。壺窓。高台外二重圓 窓。高台内に圓窓・「玩」文 字。	肥前系 近世	
582	SK11	磁器 染付	鉢 变形形	14.0	7.1	6.1	—	外) 白 断) 白	乳頭による文様。外側に全 魚・藻・壺窓。内面に区画間 に全魚・藻・格子による地紋 め。見込み全魚・藻・格子。	肥前產 19世紀前半～中 世	
583	SK11	陶器	五寸皿	16.1	4.7	6.6	—	外) 黄白5Y8/2 断) にぶい白 25YR5/4	白化粧の底。酸化コバルトに よる枝紋と透明の釉を施す。 外側に焼化した草文。内面に 竹文。高台無釉。	能登山窯か 近代以降	
584	SK11	陶器	皿	—	—	6.0	—	外) 灰75YR4/3 断) 黄灰25Y6/1	铁釉。高台無釉。褐色の釉。 見込みの日輪刷毛目白土を 施す。釉剥ぎ部に別體の高 台。	能登山窯	
585	SK11	陶器	捏跡 又は 片口	21.0	11.6	8.3	—	外) 黑灰75YR3/1 断) にぶい白 25YR6/4	铁釉。口縁部と外側下半無 釉。黑褐色の釉。	能登山窯	
586	SK11	陶器	捏跡 又は 片口	23.1	—	—	—	外) 黄灰10YR4/1 断) 黄灰25Y5/1	铁釉。外側下位無釉。釉は燒 成不良で褐色に発色。	能登山窯	

Tab.32 遺物観察表(26)

回版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量(cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物/粒度)	特徵 (文様・釉薬・成形・調整)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
587	SK11	陶器	土瓶蓋	笠部様 8.0	19	31	横み径 1.3	外) 底白10Y7/1 断) に赤い黄澄 10YR7/3		灰釉。径2mmの円孔あり。底 部削輪系切り。内面無釉。	587・588同一個 体
588	SK11	陶器	土瓶 丸形	9.3	9.5	6.7	13.0	外) 底白10Y7/1 内) 黒褐7.5YR3/2 断) に赤い黄澄 10YR7/3		外丽に白土と鉄錆による山水 文、灰釉。内面に鉄錆。三足 なし。外底下位無釉。	外底に羅。587・ 588同一個体
589	SK11	陶器	土瓶蓋	笠部様 8.7	34	かえり径 6.2	横み径 1.7	外) 緑9.5G5/1 断) に赤い赤褐 2.5YR5/3		鋼緑釉。内面とかえり無釉。	
590	SK11	陶器	土瓶	7.5	11.1	6.8	15.7	外) 緑9.5G5/1 断) に赤い赤褐 2.5YR5/3		鋼緑釉。三足の有無は不明。 内面ロクロ目。内面無釉。口 縁部内面と底部に白土を施す。	
591	SK11	陶器	土瓶蓋	笠部様 11.6	32	—	—	外) に赤い黄澄 10YR7/3 断) に赤い黄澄 10YR7/3		天井部削輪ケズリ後飛突。攝 みを貼付。天井部に径2mmの 円孔。内外皆無釉。	
592	SK11	陶器	土瓶	12.8	12.6	8.9	17.7	外) に赤い黄澄 10YR7/3 断) に赤い黄澄 10YR7/3		焼締め。手捏ねによる耳を貼付。 体部外間に飛突。内面ロ クロ目。	外底と体部外間に羅。
593	SK11	陶器	水注瓶	4.0	12.8	7.2	10.5	外) 赤 断) 底白N8/		緑釉。外丽に白土イッサン描 きによる文様。外外面ロクロ 目。内面無釉。	
594	SK11	陶器	盃蓋	笠部様 7.6	2.5	かえり径 5.4	横み径 1.7	外) 底褐7.5YR4/2 断) に赤い赤褐 2.5YR5/4		鉄釉。内面とかえり無釉。	能茶山窯 594・595同一個 体
595	SK11	陶器	小甌	6.7	5.1	4.6	9.5	外) 底褐7.5YR4/2 断) に赤い赤褐 2.5YR5/4		鉄釉。内面施釉。高台無釉。 黒褐色の釉。	能茶山窯 594・595同一個 体
596	SK11	陶器	甌	10.3	16.3	7.6	16.5	外) 底褐7.5YR3/2 断) に赤い黄澄 10YR7/2		鉄釉。外外面ロクロ目。内面 無釉。高台と口縁端部無釉。 黒褐色の釉。	能茶山窯
597	SK11	土瓶質 土器	甌	29.3	—	—	—	外) 底黃褐 10YR5/2 断) 底黃褐 10YR6/2		口縁部下に土帯を貼りし埋 压を加える。体部上部に円孔。 外丽ナチュラル。内面上半部斜ナ チュラル。中段ヨハケ。	
598	瓦瀬1	組器 染付	中碗 端反形	10.4	—	—	—	外) 底白10Y8/1 断) 底白N8/		醸化コバルトによる文様。外 面に略化した不明文様・土坡・ 植物・口縁部内面多量墨斑。 見込みに略化した不明文様・ 土坡・植物。	肥前系 近代
599	瓦瀬1	組器 染付	中碗 端反形	9.7	6.0	3.8	—	外) 白 断) 白		醸化コバルトと型刷毛刷りによ る文様。外外面に建物・草花・ 青海波による地埋め。内面 口縁部内面に珠點彩。見込み 松竹半菊の文様・團扇。高 台外面に團扇。	肥前系 近代 明治10年代以降
600	瓦瀬1	組器 染付	皿	14.5	4.0	9.0	—	外) 底白10Y8/1 断) 底白10Y8/1		醸化コバルトと型刷毛刷りによ る文様。外外面に草花・花 文による地埋め。高台外面に 團扇。	肥前系 近代 明治10年代以降
601	瓦瀬1	組器 染付	小碗 筒形	7.1	7.1	4.9	—	外) 白 断) 白		醸化コバルトと型刷毛刷りによ る文様。外外面に草花・花 文による地埋め。高台外面に 團扇。	肥前系 近代 明治10年代以降
602	瓦瀬1	陶器	小皿 端反形	12.3	4.4	4.5	—	外) 黑褐7.5YR3/2 断) に赤い橙 5YR6/4		鉄釉。見込みの日輪模様が残 白土を剥毛刷り。外下面下半無 釉。黒褐色の釉。	能茶山窯
603	瓦瀬1	組器 染付	小瓶 端反抹 圓形	17	6.4	2.9	3.2	外) 底白25GY8/1 断) 白		醸化コバルトによる文様。外 面に早梅鉢・略化した不明文 様。外底無釉。	肥前系 近代
604	瓦瀬1	陶器	土瓶	11.6	—	—	15.6	外) 底オリーブ 5Y6/2 断) 底白5Y7/1		外面上に鉄頭・白土・醸化コバル トによる化文。手捏ねによる耳 を貼付。体部外間に飛突。 内面と外縁下位無釉。	近代
605	瓦瀬1	陶器	盃 又は 片口	—	—	8.2	—	外) 黑褐10YR3/2 断) 底黄褐 10YR5/2		鉄釉。高台無釉。黒褐色の釉。 内面は焼成不良で灰黄褐色に 発色。内底に日積5足。	能茶山窯
606	瓦瀬1	陶器	瓶	—	—	12.0	—	外) 黑褐7.5YR3/2 断) 底灰黄褐 10YR6/1		鉄釉。内面施釉。高台無釉。 黒褐色の釉。内底に日积。	能茶山窯
607	瓦瀬1	陶器	瓶	—	—	8.4	—	外) 黑25Y2/1 断) 底黄褐 10YR6/2		鉄釉。内面施釉。高台無釉。 黒褐色の釉。内底に日积。	能茶山窯

Tab.33 遺物觀察表 (27)

図版 番号	出土 地點	種類	種類 器形	法量 (cm)・重量				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	特徴 (文様・施薬・底形・ 使用痕跡)	備考 (生産地・年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
608	瓦瀬1	陶器	火鉢	18.6	19.0	17.1	—	外) 灰白5Y8/1 内) 灰褐75YR5/2 脚) 黑褐75YR5/1		外面白化した後、酸化コバルトによる山水文。内面ロクロ目。内面無釉。高台内無釉。	能茶山窯か 近代以降
609	瓦瀬1	陶器	灯明受 皿付	6.8	4.4	3.2	—	外) 黑褐75YR3/1 内) 灰褐75YR5/2		鉄錆。外底斜削み切り。黒褐色の釉。	能茶山窯
610	瓦瀬1	陶器	甕	35.0	—	—	38.8	外) に赤・赤褐 5YR4/4 脚) 黄褐 10YR6/2		鉄錆。上胴部に多条沈線。内外面ロクロ目。内面粘土帯接合部付近に連続したユビオサエ。内面施錆。	能茶山窯
611	I層	磁器 染付	中碗 雄反形	10.8	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 脚) 白		乳頭による文様。外面上に山水文。口縁部内面直文帶。見込みに岩・木・團扇。高台内に角棒内「茶」字。	能茶山窯 19世紀中葉 角棒内「茶」字
612	I層	磁器 染付	鉢	—	—	6.4	—	外) 灰白10Y8/1 脚) 白		乳頭による文様。外面上に不明文様。内面上に美草手。窓に山水文・白化した墨落文。高台内に角棒内「茶」字。	能茶山窯 19世紀中葉 角棒内「茶」字
613	I層	磁器 染付	中碗 平形	11.3	4.3	3.3	—	外) 白 脚) 白		酸化コバルトと豆紙刷りによる文様。外間に旗・菊花・波瀬・点描による地模。内面上に菊花。高台外面上に團扇。	肥前系 近代 明治10年代以降
614	I層	磁器 染付	五寸皿 丸形	14.7	4.0	8.2	—	外) 灰白10Y8/1 脚) 灰白NB/		口縁部は紙やかな花形。蛇の目内輪高台。酸化コバルトと豆紙刷りによる文様。外面上に唐草文様・團扇。内面上に草花・楓加・松竹梅円文彰・團扇による地模め。高台外面上に二重團扇。	肥前系 近代 明治10年代以降
615	I層	陶器	小皿	15.0	4.4	5.6	—	外) 灰白5Y8/2 脚) 黑褐75YR5/1		ロココ成型の後口縁部を押さえ輪化処理する。白化化した後、酸化コバルトによる文様と透明釉を施す。外表面と土被。内底には井戸紋。内底に褐色の目錠。	能茶山窯 近代以降
616	複乱	磁器 色絵	香炉	10.1	7.5	7.1	12.1	外) 白 脚) 白		外面に赤・緑・黄の上繪付による花・帯に七宝繋ぎ。内面下半無釉。	瀬戸 現代
617	複乱	磁器 色絵	中碗 丸形	11.4	5.3	4.3	—	外) 白 脚) 白		外面にリーフ色の種下彩によるよる二重團扇。	瀬戸・美濃又は 西濃系
618	複乱	陶器	大瓶 鶴首通 瓶形	37	25.3	7.9	16.2	外) 灰白25Y8/2 脚) ぶい・黒 25YR5/4		外面上に酸化コバルトによる草文・白化した文様。高台内に黒錆を付し毛刷り。	能茶山窯か 近代以降
619	複乱	窯道具	ノマツ	径 7.0	厚さ 0.8	—	円孔径 29	外) 前灰黄25Y5/2 脚) 後灰黄25Y5/2 脚) 浅黄25Y7/3		輪状の体部に手捏ねによる5足を貼付。脚先端は使用により欠損。	能茶山窯か
620	複乱	窯道具	ノマツ	径 8.2	厚さ 0.8	—	円孔径 34	外) に赤・赤 25YR4/3 脚) 不明 脚) 黄褐 10YR6/2		輪状の体部に手捏ねによる5足を貼付。上面削れ無し。脚先端は使用により欠損。	能茶山窯か
621	複乱	窯道具	ノマツ	径 6.3	厚さ 0.5	—	円孔径 28	外) に赤・黒 25YR6/3 脚) 灰N4/ 脚) 黄褐 10YR6/2		輪状の体部に手捏ねによる5足を貼付。上面削れ無し。上面に幅4.8cmの高台脚が残る。脚先端は使用により欠損。	能茶山窯か
622	I層	窯道具	ノマツ	径 11.8	厚さ 1.4	—	円孔径 37	外) 灰黄褐 10YR6/2 脚) 灰黄褐 10YR6/2		5足は剥離。上面に円形の高台脚が残る。	能茶山窯か
623	複乱	窯道具	ノマツ	径 15.9	厚さ 1.7	—	円孔径 69	外) 灰褐5YR4/2 脚) 黑褐75YR5/1 脚) 灰褐5YR4/2		輪状の体部に製作による6足を貼付。上下面削れ無し。脚先端は使用により欠損。	能茶山窯か

[遺物観察表凡例]

- 1) 法量・重量：〔 〕は残存分。
- 2) 色調：外）は外面、内）は内面、断）は断面を表している。色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。
- 3) 胎土：土師器・土師質土器・瓦器・瓦質土器・須恵器・弥生土器の含有鉱物は、石＝石英、長＝長石、雲＝雲母、金雲＝金雲母、チ＝チャート、赤チ＝赤色チャート、砂＝砂岩とした。その他、赤風＝赤色風化粒、鉱物名が不明なものについては、白・灰白・灰・灰黒・黒・褐・赤・赤褐など鉱物の色調を示した。粒度については、20倍率ルーペを用いて含有鉱物の観察を行なった。鉱物の粒度区分は土壤学区分によっており、およそ2mm以上を砾、200μ～2mmを粗砂、200μ以下の砂粒を細砂とした。「細」「粗・細」「粗」「砾・粗」の表記分けについては、水鏡が良好で粗砂を殆ど含まず細砂のみ含むものを「細」、細砂が多く粗砂が少ないものを「粗・細」、粗砂が多いものを「粗」、粗砂が多く小砾を少量含むものを「砾・粗」とし、相対的に区分した。また、特にその量が多いものについては「多量」と表記した。
- 4) 貿易陶磁器の分類は、12～14世紀前半までの白磁（白磁碗・皿II～IX類）と14世紀～16世紀の白磁（白磁碗・皿・蓋B～E群）は森田・山本分類、12世紀後半～14世紀前半までの青磁（青磁碗I～III類）は森田・山本分類、14世紀～16世紀の青磁は上田分類（青磁碗B～E類）、青花は小野分類による。

第VI章 考察

第1節 御手洗遺跡 弥生時代の検出遺構と遺物

はじめに

御手洗遺跡は高知市街地の西南部に位置し、鏡川の支流、神田川を北に臨んだ微高地上に立地している。周辺ではこれまでに柳田遺跡、鴨部遺跡の発掘調査が行われてきたが、神田地区の遺跡は調査例が少なく、不明なことが多かった。しかし今回、新たな集落遺跡の発見により、弥生時代中期の集落跡に関わる多くの成果が得られている。

今回の調査では、弥生時代中期の竪穴住居跡の他、関連の遺構を多数検出した。また遺構内出土の良好な一括資料もあり、該当期の集落の実態を伝える貴重な資料が得られている。本節では、これらの遺構と遺物の様相をまとめ、高知平野中部での弥生時代中期の集落と遺物組成上の特徴をみていただきたい。

1. 検出遺構

弥生時代の遺構は中期（Ⅲ-2・3～Ⅳ様式）の竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構6基、土坑28基、ピット14個、後期（V様式後半）の土坑1基とピット1個を検出した。以下には、出土遺物や遺構の切り合い関係から時期が特定できたものを中心に、検出遺構の特徴をまとめた。

①竪穴住居跡

円形の竪穴住居跡ST1～4を検出した。ST1は径6.3mで床面積が約34m²、ST2は径6.9～7.0m前後で床面積が約38m²となり、本遺跡では大型のタイプに該当する。このうちST1は、床面で検出した壁溝の状態からみて、床面積19m²前後の小型の住居から大型へと拡張したものである。またST2も、床面から複数の同心円上に並ぶピットを検出しており、小型住居からの拡張が考えられる。一方、ST3・4は床面積15～22m²前後の小型のものであり、ST3がST4を切っている。

これらの住居跡は何れもⅣ様式に該当している。拡張住居内での重複や切り合いを除くと、各住居が4～5m程の間隔を空けて分布する様子が確認されている。

②竪穴状遺構

円形又は梢円形のSX1・9・10、形態不明のSX2・4・5・6を検出した。これらの遺構は全体の規模や形態が不明なものが多いが、良好に検出できたSX1は床面積約12m²、SX9は床面積約15m²、SX10は床面積約11m²となる。これらの遺構は小型で、中央ピットや柱穴を確認できなかったものが殆どであったため用途を特定できなかったが、平坦な床面や斜め上方に立ち上がる壁をもつことから、竪穴住居に関連した機能も想定できる。

年代は何れもⅣ様式に該当するが、SX2がST1に後続し、SX6がST1を、SX5がST2を切ることなどからみて、竪穴住居群に後続する新段階の遺構群と捉えられる。

③土坑

Ⅲ-2・3様式とⅣ様式の土坑を検出した。形態は梢円形のものと、細長い溝状、不整形のものが

あり、Ⅲ-2・3様式では楕円形（SK16・23・24・35・41）と溝状（SK32）、Ⅳ様式では楕円形（SK15・17・19～21・36・43・44）と溝状（SK18・29・33・37～40・42）、不整形（SK25）を検出している。

これらのうちⅢ-2様式の楕円形土坑SK16、Ⅳ様式の溝状土坑SK18・29・33・37～40・42と楕円形土坑SK35には多量の土器が廃棄されている。

遺構の変遷と集落

さて、今次検出の遺構をさらに細分すると次の様になる。^(註1)

中期（Ⅲ-2様式）：SK16・23・24・32

中期（Ⅲ-2・3様式）：SK35・41

中期（Ⅲ-2・3又はⅣ様式）：SK22・26・28・30・31

中期（Ⅳ様式）：ST2～4、SX1・4・5・9・10、SK15・17～21・25・29・33・36・37・39・40・42～44・P218・219・224・236・SD9

中期末（Ⅳ-2様式）：ST1・SX2・6・SK38

後期後半（V様式後半）：SK27・P221

これによると、本調査地点では、弥生時代中期のⅢ-2様式から遺構が出現し始め、遺構出現のピークとなるⅣ様式に、竪穴住居群を中心とした集落が展開している。調査範囲上の制約から集落の規模は特定できなかったが、東西52m、南北13mにわたって遺構の広がりを確認しており、特に土坑や竪穴住居の分布の状態からみて集落の範囲はさらに広がりをみせることが予想される。

また、竪穴住居跡に切り合い関係が少ないとから窺われるよう、本地点が居住域として展開した期間は比較的短く、その後、住居群は他に移動したとみられる。調査区の北西部では流路跡が検出され、流路内から弥生時代後期後半の遺物が出土していることから、この頃には本地点は流路の影響を受け易い立地に変化していたとみられる。ただし、調査区の東部では弥生時代後期後半の遺構も少数検出されており、再び集落の展開が窺われる。

2. 出土遺物の様相

（1）土器

弥生土器は壺・甕・鉢・高杯・器台が出土した。これらの遺物は多くがⅢ-2・3様式とⅣ様式の遺構内から出土したもので、この時期の良好な一括資料が得られている。また、少数ではあるが、V様式の遺構内からも壺・甕・鉢・高杯が出土している。

遺構内出土遺物の点数はTab.34に示した通りである。^(註2)これには小破片で器種が分かり難いものも含まれていたが、Ⅲ-2・3～Ⅳ様式の遺構出土資料では、壺が42.3%、甕が27.0%、壺又は甕が17.8%、鉢が2.1%、高杯が10.4%、壺又は鉢が0.4%となっており、壺の多さが目立っている。

以下、各器種の特徴を時期別に見ていきたい。

①壺

壺は多くの資料が得られているため、良好な一括資料が得られたⅢ-2様式のSK16、Ⅲ-2・3様式のSK35・41、Ⅳ様式のSK18・33出土資料を中心にみていくこととする。

まずSK16・35・41出土資料では、広口壺（SK16-131・132・SK35-244・245）、長頸広口壺（SK16

- 128・130・134・135・144)、長頸壺 (SK16-124・125・127) が確認できた。

口縁部形態は、素口縁 (SK16-124)、粘土帶貼付口縁 (SK16-125・136・143・SK41-288・289)、凹線文を施すもの (SK35-245)、口縁端部を拡張し凹線文を伴わないもの (SK35-244) がみられ、凹線文はⅢ-2・3様式のSK35以降から認められている。このSK35からは、Ⅲ様式の典型的なタイプである広口壺 (244) と併存して、凹線文タイプの広口壺 (245) が出土している。245は口縁端部に凹線文、頸部下に斜方向のキザミを施すものであるが、体部内面のヘラケズリは認められない。

頸部-体部の施文をみると、円形浮文、櫛描直線文、櫛描簾状文 (SK16-144・156・160・SK41-295)、細かい櫛描波状文 (SK16-125・139・162・164・SK41-294)、数段の小突帯を巡らすもの (SK16-124・129・137・138・144・159・SK41-290・292) などがあり、これらの組み合わせが認められる。

また、黄灰色や暗灰黄色、褐灰色などの色調で1mm前後の粒度が揃った粗砂を多量に含む特徴的な胎土をもつもの (SK16-124・126・127・133・137・143・157・159他) が一定量含まれており、神西式土器^(註3)の特徴を備えたⅢ様式の壺が認められる。

次にⅣ様式のSK18-33出土資料では、広口壺 (SK18-175～177・179)、長頸広口壺 (SK18-174)、長頸壺 (SK18-168・169・SK33-232・233) を確認した。

口縁部形態では、粘土帶貼付口縁 (SK18-168～175・SK33-232～234)、凹線文を施すもの (SK18-177～179)、口縁端部を拡張し凹線文を伴わないもの (SK18-176) がある。

体部の装飾は、粘土帶貼付口縁をもつタイプの壺に、列点文 (SK18-175・179)、円形浮文や梢円形浮文 (SK33-232・233)、櫛描直線文、櫛状の原体による斜方向のキザミ (SK18-181・SK33-232) などがみられる。また凹線文の口縁部をもつタイプの壺では、上胴部に列点文を施すもの (SK18-179) がある。また算盤玉形の体部をもつ長頸壺 (SK18-181・SK33-232) は円形浮文や梢円形浮文を貼付し、外面に斜方向のキザミ・櫛描直線文を多段巡らせるなど、胴部上半まで一面に加飾されている。

また、Ⅳ様式の壺及び壺又は甕の体部片では、内面にヘラケズリを伴うもの (SK18-185・186・SK33-242・243) が認められた。

②甕

今回の資料では甕の確認数が少なく、小破片で形態が分かり難いものが多かったが、Ⅲ-2・3様式では殆どが南四国型に該当するとみられる。Ⅳ様式では南四国型甕と、口縁端部に凹線文を施すタイプ、素口縁のタイプがみえるが、このうちST4-41～45・SX4-90・SX10-111・112・SK18-182・SK29-217・SK33-235・239・SK38-266・SK40-277・278が南四国型に該当する。

Ⅲ-2様式の南四国型甕 (SK16-141・142) の特徴をみると、何れも粘土帶貼付口縁をもち、口縁端部下端にキザミを施している。また141・142とも口縁部下や粘土帶の下端に断面三角形の小突帯を設けて上下にヨコナデを施している。これらの資料は小破片で出土したため頸部以下の文様が不明であるが、胎土が褐灰色・灰黃褐色に発色し、141は薄手である。

次にⅣ様式の南四国型甕では、粘土帶貼付口縁のものが多いが、素口縁も少數認められた。上胴

部への施文は、櫛状の原体による斜方向のキザミと櫛描直線文の組み合わせ (ST4 - 41)、円形浮文・多重の小突部・櫛描直線文・ハケ状の工具によるキザミの組み合わせ (SX4 - 90)、楕円形浮文と斜方向のキザミ (SK29 - 217)、楕円形浮文 (SK40 - 277) など、バリエーションがある。これらの文様は主に頸部下端から上胴部にかけて施されるが、例外的に口縁部下から上胴部まで櫛描直線文・楕円形浮文・斜方向のキザミが連続して施されるもの (SK33 - 235) もみられた。一方、南四国型壺のプロポーションを保つものの、上胴部の施文が省略されるもの (SK18 - 182・SK38 - 266) や、素口縁で上胴部の施文も無いもの (SK33 - 239) も認められる。このうちIV - 2 様式のSK38から出土した無文の南四国型壺 (266) は胴部内面にヘラケズリを施しており、最終段階の南四国型壺にも内面ヘラケズリ技法が認められている。

V 様式後半の資料は少数であるが、くの字状に外反する口縁部をもった壺 (SK27 - 206)、叩きを施した壺の体部 (P221 - 332) などが出土している。

③鉢

IV 様式の出土資料では、素口縁で丸形のもの (SX10 - 114)、口縁が緩やかに外反するもの (SK25 - 202・204)、口縁部外面に凹線文を施すもの (SK37 - 258・SK40 - 286) などがみられる。このうち鉢 (SK25 - 202) は体部内面にヘラケズリを伴う。

V 様式後半のSK27出土資料では叩きを伴う鉢 (208) がみられる。

④高杯

IV 様式の出土資料は、何れも杯部内面に粘土盤を充填したものである。杯部は、口縁部が直立気味に立ち上がり外面に凹線文を施すもの (ST4 - 49・50・SX10 - 115・116・SK15 - 120・SK37 - 259・260・SK38 - 267・SK40 - 285・SK42 - 305・SD9 - 323)、口縁部が直立気味に立ち上がり口縁端部凹状のもの (ST1 - 11)、口縁部に向かい内湾気味に立ち上がるもの (SK25 - 203) がある。このうち凹線文を伴わないタイプの高杯 (11) はIV - 2 様式のST1から出土したものである。

脚部では、脚端部に凹線文を施すもの (ST4 - 52・54・SK29 - 221・SK37 - 260・SK38 - 268・土器溜2 - 334) と面取るもの (ST1 - 12・ST4 - 54・SK44 - 315・P236 - 333) がある。脚部の施文には、多重のヘラ描沈線をめぐらせ、その下に数本を1単位とする縱方向の沈線を組み合わせるもの (ST4 - 52 - 54・SK37 - 260・SK38 - 268・SK44 - 315・土器溜2 - 334) がみられる。

⑤器台

包含層出土資料であるが、器台 (343) が確認されている。

口縁部形態の変化

最後に、壺・壺の出土資料をもとに口縁部形態の変化をみると (Tab.35)、III - 2・3 様式では、素口縁が19.4%、粘土帶を貼付するタイプが75.0%、凹線文を施すタイプが2.8%、口縁端部を拡張し凹線文を伴わないタイプが2.8%となっている。次に、IV 様式では、素口縁が14.9%、粘土帶貼付口縁が46.6%、凹線文が24.7%、口縁端部を拡張し凹線文を伴わないタイプが13.2%、粘土帶貼付と凹線文が組み合わさるものが0.6%であり、IV 様式以降、凹線文のタイプが増加している。

このうちIV 様式の粘土帶貼付口縁には、明瞭に段を残すもの他、粘土帶を貼付した後ユビオサエによって段を潰すもの (173) があり、バリエーションがみえる。

また、IV様式のSK37から出土した壺(254)は口縁部外面に粘土帯を貼付し、これに凹線文を組み合わせており、高知平野でIII様式末頃にみられる出現期の凹線文土器の特徴が、本遺跡ではIV様式の段階まで残されている。

(2) 石器

石器はIV様式の遺構内と包含層から、石包丁(ST4-63・64・SK18-193・SD9-327・V層-345)、石包丁未製品(SX1-87)、石斧(土器溜2-335・V層-344・346)、砥石(ST4-66)、叩石(ST4-65・SK16-166・167・SK32-231・SK37-261)が出土している。

石包丁は磨製石包丁が5点、未製品が1点である。これには紐孔が1孔のもの(ST4-63・64・SD9-327・V層-345)と、2孔のもの(SK18-193)があり、石材は何れも頁岩製である。石斧は、結晶片岩製の柱状片刃石斧(土器溜2-335)、蛇文岩製の扁平片刃石斧(V層-344)、緑色岩製の大型船刃石斧(V層-346)がある。砥石(ST4-66)は鉄器を研いだとみられる条痕が観察される。

3. 御手洗遺跡の立地と周辺の遺跡

前述の様に、本調査区では弥生時代中期(III-II様式)から遺構が現れ始め、集落はIV様式にピークを迎えている。しかし、後期前半に続く遺構は認められず、この頃には居住域が他に移動していくと推察される。そして、調査区東部では後期後半(V様式後半)に遺構・遺物が少数確認され、再び近辺に集落が展開していたことが窺われる。御手洗遺跡にみえるこうした集落の動きは、地域の遺跡群の中でどのような位置付けがなされるのだろうか。最後に、周辺の遺跡の動きにも視点を広げ、御手洗遺跡の立地環境と神田川流域の遺跡群の展開について考えてみたい。

まず、近隣での遺跡の分布をみると(Fig.4)、南の井戸山山腹のケジカ端遺跡から弥生時代の石包丁や磨製石斧が出土し、同じ尾根筋のシルタニ遺跡から石包丁が採集されている。また南東約750mの独立丘陵北端の神田遺跡でも弥生土器片や石斧が出土するなど、丘陵部やその周辺の微高地上で弥生時代の遺物が確認されている。また、周辺の丘陵部には舟岡山古墳、高座古墳などの後期古墳も点在している。

南の丘陵部付近に分布するこれらの遺跡については、発掘調査が行われておらず、実態が不明なものが多い。しかし平野部では、御手洗遺跡から西に約800mの地点で平成4年度の柳田遺跡発掘調査が行われており、縄文時代後期の遺物包含層、古墳時代の流路跡の他、弥生時代前期～中期前半の土坑群や該当期の遺物が多数検出されている。^(註4)また、独立丘陵周辺の微高地上では、北に約800mの位置にある鶴部遺跡で平成12・13年度に発掘調査が行われ、縄文時代後期・弥生時代前期～中期・後期後半の遺物包含層と、弥生時代の竪穴住居跡他多くの遺構が検出されている。^(註5)

この2次の調査と今回の御手洗遺跡の成果によって、神田川流域に点在する弥生集落の姿が見えつつあるが、この間の集落の広がりについては不明なところが多い。そこで、この3遺跡が分布する径1km程の範囲について、近年までの試掘調査の結果^(註6)を補足し、調査成果を検討することとした。以下、周辺域で行われた調査について、調査年度順に便宜的に地点番号1～18を付け、概要をまとめている。概要はTab.36、調査地点はFig.94に示した通りである。^(註7)

西部

平成4年度の柳田遺跡発掘調査地点（地点1）では、弥生時代前期末～中期前半の土坑群や該当期の遺物が多数検出されている。また、これに隣接する平成21年度試掘調査地点（地点14）でも、前期末の遺物包含層と中期の土器溜りを検出している。隣接するこれらの調査区は検出遺構・遺物の時期がほぼ一致しており、同じ集落に属するとみられる。次に遺構・遺物の検出密度が高かったのは、柳田遺跡平成6年度調査地点（地点3）と平成18年度調査地点（地点10・11）であり、平成6年度調査地点では弥生時代前期末～中期前半の遺物包含層と、前期末の溝状遺構、該当期のものとみられるビット、性格不明遺構、杭跡を検出している。また、平成18年度調査地点では前期末の土器を多量に含む炭化物溜りや、前期末～中期の遺物包含層が検出されている。地点3・10・11は、先の地点1・14から南に200m程の近距離にあって、遺物量が多く、遺構・遺物の年代もほぼ共通している。そのためこの一帯が、弥生時代前期末～中期の集落の分布範囲にあたっていた可能性が高い。^(註8)

遺物は、平成6年度調査地点（地点3）から、弥生時代前期の壺（4・5）、中期の壺（1～3）等が出土している。また、平成18年度調査地点（地点10）では砂層から中期の壺（15・16）が出土し、同（地点11）では、中期の土器溜りから壺（17）と甕又は鉢（18）が、その下の粘土層から前期末の南四国型甕（19）が出土している。（Fig.95）

東部～中央部・北部

前期末～中期の遺物包含層が検出され、多くの遺物が出土したのは、神田ムク入道遺跡近接地平成7年度調査地点（地点7）で、ここは今回の御手洗遺跡調査地点（地点19）から東へ約250mの位置にある。遺物は粘質土層内から、中期の壺（6～11）と前期末の南四国型甕（12～14）等が出土している。^(註9)（Fig.95）

北部にある鴨部遺跡平成12・13年度本調査地点（地点8）では弥生時代前期～中期、後期後半の遺物包含層から多量の土器が出土し、遺構を多数検出することから、ここでは長い期間にわたって集落が営まれたことが分かる。

この他、弥生時代終末～古墳時代の遺物を含む自然流路跡が、平成22年度神田ムク入道遺跡本調査地点（地点17）で検出されている。同様の流路跡は御手洗遺跡（地点19）でも検出されており、弥生時代後期後半の遺物が出土することから、この時期の流路の位置が推定できる。また、流路跡に関わる堆積層はその西方でも確認されており（地点1・2・5・18）、当時の河道の分布がある程度推定されよう。

集落の展開と環境

この様に、神田川流域の平野部では、弥生時代前期末～中期の遺構・遺物を検出する地点が東西に広く分布しており、この頃の集落の範囲も推定できそうである。ただし、西部の集落（地点1・3・10・11・14周辺か）は、堅穴住居を主体とした居住域が未確認であるため、集落の規模や継続期間などについては特定を避け、今後の調査の充実を持ちたい。また、前期末と中期前半（Ⅱ～Ⅲ様式）の遺構・遺物が主体をなす西部に対して、東部の御手洗遺跡は中期後半（Ⅲ～Ⅳ様式）に属するものであり、集落の展開に時期差が認められている。

鏡川の一支流である神田川は、かつてその河道を様々に変化させたとみられ、神田地区周辺には

蛇行する河道跡らしい地形が幾筋か認められている。(Fig.2・3) 神田川流域の弥生集落は、河筋を変化させる神田川の影響を受けながらも、この流路によって形成された自然堤防上や周辺の微高地に展開していたとみられる。そしてその中には、御手洗遺跡のように、短期間で集落の位置を移動させるものもあったと思われる。

一方、弥生時代後期～古墳時代の集落の動きについては、流路に関連するもの以外は遺構・遺物の確認数が減少しており、不明なことが多い。しかし、北部丘陵付近の鶴部遺跡など、弥生時代後期後半まで集落が継続するものもあり、御手洗遺跡でも弥生時代後期後半の遺構・遺物を少数検出している、また、西部(11・15地点)でも古墳時代の遺構や遺物が確認されており、この頃の遺跡の存在が窺われている。課題を残す弥生時代後期～古墳時代については、後期古墳が分布する神田南部の丘陵部付近など未調査部分を含めて、資料の蓄積を待つこととしたい。

謝辞

今回の報告にあたっては、出土資料と遺構年代の同定について出原恵三氏より多くのご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。

【註】

- 1) 出土遺物の同定と遺構の時期特定について、出原恵三氏よりご教示を得た。
- 遺構の時期については、出土遺物の組成や遺構の切り合い関係から特定した。遺物量が少なく、時期特定の根拠が得られなかった遺構については、「Ⅲ～Ⅳ様式」などとし、可能性の範囲内で示した。Ⅳ様式の遺構では、特に土器組成に新しい要素が見えⅣ様式新段階と特定できたものや、遺構の切り合い関係から特定できたものをⅣ-2様式として区別したが、その他は古・新の区別が付かないものが多く、Ⅳ様式と表記している。
- 2) 出土点数と組成比(%)は、推定個体数を用いて割り出している。個体数の算出方法は次の通りである。壺・甕・鉢は口縁部点数による。遺構内で同一個体と判別できる複数の口縁部が出土した場合は1点とカウントした。高杯は口縁部点数又は遺構内で口縁部が供伴しない脚部の点数によってカウントした。
- 3) 神西式土器は、昭和25年の高知県高岡郡庵川町神西遺跡発掘調査にて発見されたことから、岡本健児氏によって、神西式と称する土佐独自の土器型式として提唱されたもので、砂礫を多量に含む独特の胎土特徴、口縁部形態、上胴部文様帶の構成に特徴がみられる。このタイプの土器は、高知県下西部から中央部まで広く分布が確認されている。
- 4)『柳田遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1994年
- 5)『鶴部遺跡』高知市教育委員会2002年
- 6) 調査主体は平成4年度本調査が高知県埋蔵文化財センター、平成6年度試掘調査は同センターの協力のもと高知市教育委員会が行った。またその他は高知市教育委員会による。本調査分以外は報告書が未刊行であるため、実測図その他のデータは高知市教育委員会作成の概要報告書から引用した。なお、各年度の遺物は高知市教育委員会が保管している。
- 7) 地図上では、西側の柳田遺跡付近に調査が集中する傾向が認められるが、これは包蔵地内の開発が多かったことによるものである。東部側については調査件数が至って少なく、遺跡の状況が分かり難い。
- 8) 本稿では平成4年度柳田遺跡発掘調査地点から東側の範囲に限定して報告しているが、これ以西でも柳田

遺跡の試掘調査が実施されており、弥生時代の遺物包含層が確認されている。

9) 試掘調査報告『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2005年。

【参考文献】

岡本健児「神西式土器の再検討」『高知女子大学研究紀要 人文・社会学編 第20巻』1972年

出原恵三「土佐地域」『弥生土器の様式と編年 - 四国編』木耳社2000年

Tab.34 弥生土器の器種別出土点数と組成比

遺構名	時期	壺	甕	壺又は甕	鉢	高杯	壺又は鉢	合計
ST1	IV - 2	2				1		3
ST2	IV	3	2	4				9
ST3	IV	2	1			1	2	6
ST4	IV	3	8	2			5	18
SX1	IV	8	11	3				22
SX2	IV - 2	1						1
SX4	IV		1					1
SX5	IV		1	3				4
SX6	IV - 2							
SX9	IV	3	6	7				16
SX10	IV	4	3	3		4		14
SK15	IV	1	1			1		3
SK16	III - 2	21	2	6				29
SK17	IV	1						1
SK18	IV	12	2	4				18
SK19	IV	1						1
SK20	IV							
SK21	IV							
SK22	III - 2 ~ IV							
SK23	III - 2	1						1
SK24	III - 2							
SK25	IV	3	3		2	1		9
SK26	III - 2 ~ IV							
SK28	III - 2 ~ IV							
SK29	IV	4	4			2		10
SK30	III - 2 ~ IV							
SK31	III - 2 ~ IV						1	1
SK32	III - 2							
SK33	IV	6	5					11
SK35	III - 2 ~ 3	2			1			3
SK36	IV	1	1					2
SK37	IV	4	1			1	2	8
SK38	IV - 2	2	2				1	5
SK39	IV	1			1			2
SK40	IV	3	3	4	1	1		12
SK41	III - 2 ~ 3	2	1					3
SK42	IV	3	4	1		1		9
SK43	IV	2	1	1		1		5
SK44	IV	1					1	2
P218・219・224・236	IV	2		1		1		4
SD9	IV	3	2	2		1		8
合計		102	65	43	5	25	1	241
%		42.3%	27.0%	17.8%	2.1%	10.4%	0.4%	100.0%
SK27	V後半		1		1			2
P221	V後半		1					1
合計			2		1			3
%		0.0%	66.6%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	99.9%

Tab.35 壺・甕の口縁部形態と組成比

造構名	時期	壺・甕の点数	素口縁	粘土帶貼付	凹線文	抵張
SK16	III - 2	29	5	24		
SK23	III - 2	1		1		
SK24	III - 2	0				
SK32	III - 2	0				
SK35	III - 2 - 3	3	1		1	1
SK41	III - 2 - 3	3	1	2		
計		36	7	27	1	1
%		100%	19.4%	75.0%	28%	28%

造構	時期	壺・甕の点数	素口縁	粘土帶貼付	凹線文	抵張	凹線文+粘土帶貼付
SK15	IV	2			1	1	
SK17	IV	1		1			
SK18	IV	18		13	4	1	
SK19	IV	1			1		
SK20	IV	0					
SK21	IV	0					
SK25	IV	6		3	2	1	
SK29	IV	8	4	4			
SK33	IV	11	1	4	4	2	
SK36	IV	2	1	1			
SK37	IV	5		2	2		1
SK38	IV - 2	4		2	1	1	
SK39	IV	2		1		1	
SK40	IV	10	3	6	1		
SK42	IV	8	2	1	5		
SK43	IV	4	1	2	1		
SK44	IV	1		1			
ST1	IV	2		2			
ST2	IV	9		6	2	1	
ST3	IV	3	1	1	1		
ST4	IV	13		5	6	2	
SX1	IV	22	6	8	2	6	
SX2	IV	1	1				
SX4	IV	1	1				
SX5	IV	4	2	2			
SX9	IV	16	2	6	6	2	
SX10	IV	10		5	1	4	
P218・219・224・ 236・SD9	IV	10	1	5	3	1	
計		174	26	81	43	23	1
%		100.0%	14.9%	46.6%	24.7%	13.2%	0.6%

Tab.36 周辺の調査と遺跡の分布

地点番号	調査年度	遺跡名	調査地点・調査面積	遺跡の時期	概要(縄文時代～古墳時代)
1	平成4年度 本調査	柳田遺跡	高知市朝倉甲字柳田 4555 m ²	縄文時代後期～晩期 弥生時代前期末～中期 前半 弥生時代後期末～古墳 時代前半	弥生時代前期末～中期前半の遺物包含層と土坑群、古墳時代の流路を検出。
2	平成6年度 試掘調査	柳田遺跡	高知市朝倉字梶原 24 m ²	古墳時代・古代・中世	旧河道とみられる砂礫層から古墳時代・古代・中世の遺物が出土。
3	平成6年度 試掘調査	柳田遺跡	高知市朝倉字沖田 1029 m ²	縄文時代・弥生時代前期 末～中期前半・古代・中 世・近世	縄文時代・弥生時代前期末～中期前半の遺物包含層・弥生時代前期末の溝状遺構と・弥生時代のピット・性格不明遺構・杭跡を検出。
4	平成7年度 本調査	神田ムク入道遺跡	高知市神田ムク入道 323 m ²	中世	
5	平成7年度 試掘調査	鷲泊橋付近遺跡	高知市鷲部字長田 100 m ²	古代・中世	旧河道とみられる砂礫層から古墳時代・古代・中世の遺物が出土。
6	平成7年度 試掘調査	鷲泊橋付近遺跡	高知市鷲部字鷲泊 16 m ²	弥生時代後期・古代	明灰色粘土層から弥生時代後期の遺物が少量出土。
7	平成7年度 試掘調査	神田ムク入道遺跡 近接地	高知市神田字泉川 125 m ²	弥生時代前期末～中期 中世	暗灰褐色粘質土層から弥生時代前期末～中期の遺物が多数出土。
8	平成12・13年度 本調査	鷲部遺跡	高知市鷲部字追込道 2926 m ²	縄文時代後期 弥生時代前期・後期後半 古代～近世	縄文時代後期・弥生時代前期～中期・後期後半の遺物包含層と、弥生時代の堅穴住居跡他多くの遺構を検出。
9	平成17年度 試掘調査	柳田遺跡近隣地	高知市鷲部字黒間 65 m ²		遺構・遺物とも未検出。
10	平成18年度 試掘調査(1)	柳田遺跡	高知市朝倉字梶原 125 m ²	弥生時代前期末～中期	褐色灰色砂礫層から弥生時代前期末～中期の土器が多数出土。灰色粘土層で前期末の炭化物滲りを検出。
11	平成18年度 試掘調査(2)	柳田遺跡	高知市朝倉字梶原 125 m ²	弥生時代前期末～中期 古墳時代	灰色粘土層から弥生時代前期末～中期の土器が多数出土。中期の土器滲りを検出。粘土層から古墳時代の甕が出土。
12	平成18年度 試掘調査(3)	柳田遺跡	高知市朝倉字梶原 89 m ²		遺構・遺物とも未検出。
13	平成20年度 試掘調査	柳田遺跡隣接地	高知市朝倉字栄田 75 m ²	古代～中世	
14	平成21年度 試掘調査	柳田遺跡	高知市朝倉東町 125 m ²	弥生時代前期末～中期	黄灰色粘土層で弥生時代中期の土器滲りを検出。その下位から前期末の土器が出土。
15	平成21年度 試掘調査	柳田遺跡隣接地	高知市朝倉字栄田 50 m ²	古墳時代・古代	古墳時代のSX1を検出し小型丸底甕他の土器が出土。
16	平成21年度 試掘調査	鷲泊橋付近遺跡近 隣地	高知市鷲部字鷲泊屋根添 32 m ²		遺構・遺物とも未検出。
17	平成22年度 本調査	神田ムク入道遺跡	高知市神田ムク入道 870 m ²	弥生時代終末～古墳時代 古代・中世	旧河道とみられる砂礫層から弥生時代終末～古墳時代の遺物が出土。
18	平成23年度 試掘調査	柳田遺跡	高知市朝倉字コウジ原 105 m ²	弥生時代～古墳時代	旧河道とみられる砂礫層から弥生時代～古墳時代の遺物が出土。
19	平成23年度 本調査	御手洗遺跡	高知市神田字御手洗 960 m ²	弥生時代中期後半・後期 後半 古代末～中世・近世	弥生時代中期後半の集落跡を検出。後期の遺構・遺物を少数検出。弥生時代後期後半以降の流路跡を検出。

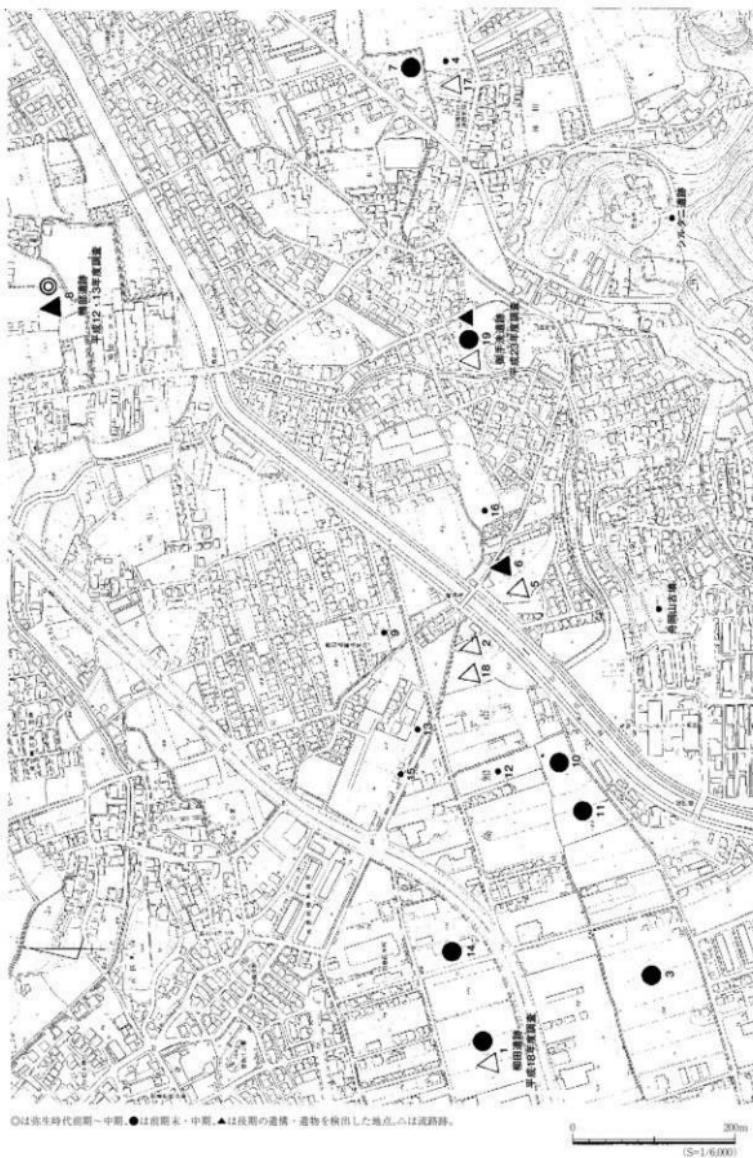
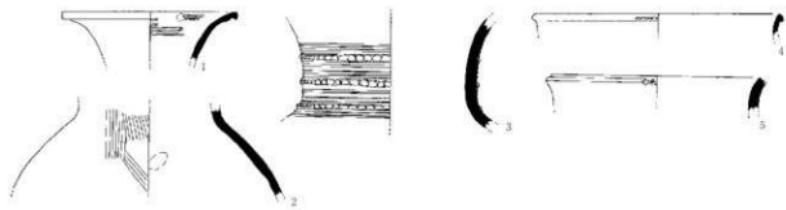
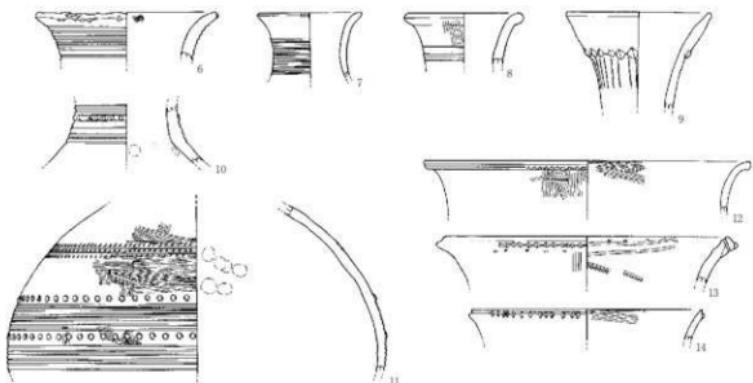


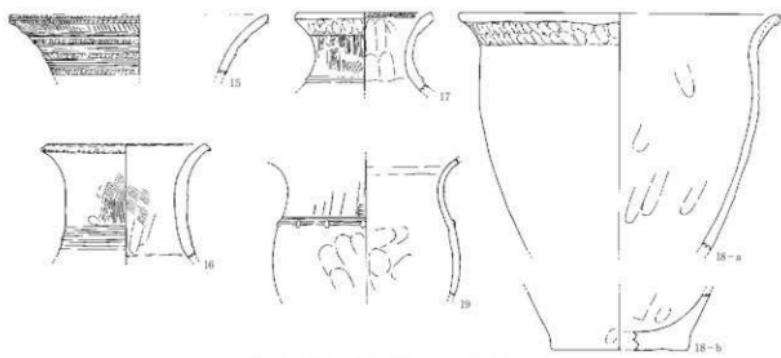
Fig.94 御手洗遺跡周辺の調査と遺跡の分布



平成 6 年度柳田遺跡（沖田地区）試掘調査



平成 7 年度神田ムク入道遺跡近隣地試掘調査



平成 18 年度柳田遺跡（菅原地区）試掘調査

Fig. 95 柳田遺跡・神田ムク入道遺跡近隣地出土遺物実測図

第2節 古代末～中世の御手洗遺跡 検出遺構の性格と変遷

はじめに

御手洗遺跡が所在する神田は、古代には「土佐郡」の「神戸」郷にあたると考えられており^(註1)、『続日本紀』神護慶雲2年(768)の記事^(註2)からは中央の古代豪族との強い関わりが推定されている。また、朝倉、鴨部、神田地区などの鏡川下流地域には、条理地割が広く分布することが指摘されており、古くからの開発が窺われている。しかし、古代末から中世にかけては実像が分かり難く、『長宗我部地帳帳』天正16年(1588)の『神田地帳帳』にみえる「神田之庄」についても、その他の史料を欠き不明なところが多い。

こうした中、平成7年と22年に行われた神田ムク入道遺跡の発掘調査では、古代末～中世の屋敷跡が発見され、古代の集落跡の存在も確認されるなど、当時の実態が徐々に明らかになっている。

今回の御手洗遺跡の発掘調査では、掘立柱建物跡、土坑、ピット、溝などからなる古代末～中世の遺構を多数検出し、神田ムク入道遺跡の西方にも屋敷地が存在していたことが明らかになった。本節では、これらの検出遺構の分析を通して屋敷地の空間構成を復元し、その変遷をみていくこととした。また、周辺の遺跡とも対照させながら、神田南西部域の遺跡の動向や性格についても考えたい。

1. 検出遺構の特徴

古代末～中世の遺構は、掘立柱建物跡10棟、土坑13基、ピット217個、溝7条を検出した。以下では、このうち特に屋敷地の性格を特徴付ける溝、掘立柱建物跡を取り上げて検討し、その特徴や帰属時期をみていくこととする。

(1) 溝

溝はSD1～7を検出した。これには時期、性格とも不明なものが含まれるが、ここでは特徴的なものを取り上げ、その機能と年代観についてみてみたい。

①屋敷地の溝 (SD2・4～7)

SD2・4～7は調査区南東部で検出したもので、SD4とSD6、SD5とSD7が直角に交わり、同時期に機能した区画溝と考えられる。検出状況からみると、SD5・7、SD4・6は屋敷地の北東隅の一角にあたっており、これに囲まれる屋敷の主体部分はその南西側に展開していたと考えられる。また、SD2は対応する南北溝が検出されていないが、溝を境に南側でのピットの検出数が増加すること、溝の軸方向が掘立柱建物群ともほぼ共通することなどから、屋敷地の溝であった可能性が高い。

軸方向は、東西溝のSD2・4がN-65°-E、SD5がN-72°-Eで、それぞれに直角に交わる南北溝を組み合わせた場合、SD2とSD4・6による区画は真北から西に25°、SD5・7による区画は西に18°振った軸をもつことになる。検出規模はSD4・6が幅58～66cm、深さ18～24cm、SD5・7が幅55～79cm、深さ6～12cm、SD2が幅80～126m、深さ41～60cmで、SD2が最も大きい。断面形態についても、前者の溝群がU字形または逆台形であるのに対し、SD2は床が狭まりV字形に近い形態を示

している点に違いがみえる。

前後関係についてみると、SD6がSD5を切っており、SD5・7からSD4・6への変遷が分かる。また、SD5・7から12～13世紀、SD4・6から12～14世紀、SD2から12～15世紀の遺物が出土しており、各溝の廃絶時期はSD5・7が13世紀、SD4・6が14世紀、SD2が15世紀に比定される。このためSD5・7→SD4・6→SD2という変遷が想定できよう。

②大溝 (SD1)

SD1は幅5.0～5.4m、深さ70～77cmの検出規模をもつ大型の溝である。壁は床面から緩やかに立ち上がるが、北岸と南岸ではテラス状の段が認められ、特に北岸には幅広いテラス部や2段のテラスによる段差が認められる。このテラス状の拡張部は、溝埋め戻しの埋土(1層)によって埋まっており、溝の最終段階の姿とみられるものである。そのため、この拡張部を除いた本体部分は、本来幅4m程度であったと思われる。また、溝の最下層にはシルト混じりの粗砂層が堆積しており、水路としての機能も窺われる。

水路、区画溝など、その性格は特定し難いが、SD1東部では南岸が直線的に延びており、区画溝SD2・4と軸方向がほぼ一致している。西部は近代以降の搅乱を受けており軸が不明であるが、溝は北西に緩やかに向きを変えているようである。北側で検出されたSD3がSD1の流れを意識したものと仮定すれば、本来のSD1は現在三所神社の境内がある小丘陵を避けて、カーブを描き北西に向かうと推察される。

この溝がいつから機能し始め、他の区画溝とどのような関係にあったのかは特定し難いが、軸がSD2・4とほぼ揃っていることなどから、当初から周辺の軸方向を意識して設けられていたことが窺われる。また、SD1の東部では岸に沿って、白色系のチャートや砂岩からなる大型の角礫が多く出土し、近接するSD2でも同様の礫の廃棄が確認されることからみて、SD1とSD2には併存した時期があり、SD2が廃絶する15世紀には機能していたとみられる。

遺物は、最下層の砂層内から中世の土師質土器小皿(389)が出土し、埋土全体の出土遺物も12～15世紀の製品が主体を占めている。また最上層からは16世紀中葉～後半までの遺物が出土しており、溝の埋没もこの頃と考えられる。

(2) 挖立柱建物跡

古代末～中世の掘立柱建物跡は1間×3間の東西棟建物7棟と1間×2間の東西棟建物2棟、2間×2間又は2間×3間以上の建物1棟を確認した。(Tab.37)しかし、調査区内では柱痕をもつピットが他に多数あり、特定できたもの以外にも多くの建物が存在したと思われる。また建物跡は溝SD1・2を境に南側と北側に分布が分かれており、別の屋敷地の建物と捉えられるため、ここでは南部と北部に大きく分けたうえで、各建物の特徴をまとめたい。

まず、南部に分布するSB4～10は建物の軸方向や規模に一定の規格をもつものがあるため、共通の規格をもつグループに分類し、これに建物間の重複や近接があり併存したと考えにくいものなど、位置関係を加えて検討した。また、遺構の切り合い関係や出土遺物等も、建物群の帰属時期を推定する根拠とした。

①分類

南部建物群

A群 (SB7・8)

調査区南東部で検出した1間×3間の東西棟建物である。軸方向はN-68°～73°-Eで、真北より17°～22°西に振っている。柱間寸法はばらつきがあるが2.00～2.26mで、梁間が2.60～2.66mと小さい点に特徴が認められる。面積は17～18m²前後と、後述の建物群に比較するとやや小型である。SB7とSB8は重複しており、併存は考え難い。

B群 (SB4～6)

調査区南東部で検出した1間×3間の東西棟建物である。軸方向はN-70°～73°-Eで、真北より西に17°～20°振った軸をもつ。柱間寸法は1.90～2.24mで、梁間が2.94～3.40mと大きめである。面積は18～20m²前後で、A群建物に比較するとやや大型化している。南北に並列するSB4とSB5は併存の可能性が考えられるもので、規模や規格も類似している。一方、規模が若干大型化するSB6はSB4と重複しており、併存は考え難い。

C群 (SB9・10)

調査区南東部で検出した1間×2間の東西棟建物である。軸方向はN-68°～70°-Eで、真北より西に20°～22°振った軸をもつ。桁行の柱間寸法は2.70～3.04mと広く、梁間が3.16～3.39mと大きめである。面積は18～20m²前後である。位置関係からみてSB9・10の併存は考え難い。C群は桁行の柱間寸法の違いを除くと、B群と梁間の寸法がほぼ共通し、建物の規模も類似している。

北部建物群 (SB11～13)

調査区北西部で検出した建物群で、SB11・12が1間×3間の東西棟建物となる。SB13は全体の規模が明らかでないが、東西3個、南北3個の柱穴の並びを確認しており、梁間2間で桁行2間又は3間以上の建物などが推定できる。軸方向は東西棟建物のSB11・12がN-72°-E、南北棟のSB13がN-19°-Wで、何れも真北より西に18°～19°振った軸をもつ。

Tab.37 古代末～中世の掘立柱建物跡計測表

分類	遺構番号	桁行の軸方向	真北との ずれ	規模				
				梁間×桁行	梁間(m)	桁行(m)	桁行の柱間 寸法(m)	面積(m ²)
南部-B群	SB4	N-71°-E	西に19°	1×3	3.00	6.40	1.96～2.24	18.90
南部-B群	SB5	N-73°-E	西に17°	1×3	2.94	6.20	1.90	18.23
南部-B群	SB6	N-70°-E	西に20°	1×3	3.40	6.10	1.90～2.24	20.74
南部-A群	SB7	N-73°-E	西に17°	1×3	2.66	6.78	2.00～復元 2.40m	18.03
南部-A群	SB8	N-68°-E	西に22°	1×3	2.60	6.60	2.06～2.26	17.16
南部-C群	SB9	N-68°-E	西に22°	1×2	3.16	5.72	2.70～3.00	18.08
南部-C群	SB10	N-70°-E	西に20°	1×2	3.39	5.94	2.90～3.04	20.14
北部	SB11	N-72°-E	西に18°	1×3	3.28	6.12	2.14～復元 2.02m	20.07
北部	SB12	N-72°-E	西に18°	1×3	2.70	5.80	1.62～2.42m	15.66
北部	SB13	N-19°-W	西に19°	2×2又は2 ×3以上	3.76	—	1.85～1.90	—

②帰属時期と変遷

これらの建物の年代については、柱穴内から瓦器椀・土師質土器杯・小皿などの遺物が出土するが、建物の時期や前後関係を特定できる資料は得られていない。そこで区画溝との位置関係や切り合いをもとに、これらの建物の時期を考えてみたい。

まず南部のB群建物(SB4～6)についてみると、SB4が第2段階の区画溝であるSD6を切り、SB5とSB6についても建物の一部がSD4・6に重複するか、区画の外側に出ている。またC群建物(SB9・10)についてもSD4・6の区画外にあり、これらB・C群建物がSD4・6の廃絶以降、すなわち第3段階のSD2によって区画される屋敷の一部であった可能性が高い。

次に、A群建物(SB7・8)は第1段階の区画溝であるSD5・7の外側に出ているが、区画溝SD4・6の範囲内にあり、SD4・6あるいはSD2によって区画された屋敷の建物と考えられる。

これらの建物についてみると、何れも区画溝に沿った軸方向をもっており、最終段階まではほぼ変化がない。また、SD2に伴う第3段階の建物群をみると、SB4とSB5は2m程の距離を空けて南北に並列しており、ほぼ同じ場所にSB6やSB9・10が重複して建てられている。こうしたことから、南部の敷地内では一定の規格のもとで数回の建て替えが行われていたことが窺われる。

一方、大溝SD1の北側においてもピット群の集中がみられた。北部で検出されたピットについては、後世の削平を受けて浅くなったものが多く、検出深度が10cmに満たないものが殆どであった。遺構の性格にもよるが、北部では全体的にピットや土坑、溝などの検出遺構が南部よりも深い傾向があり、屋敷が展開していた当時には北側の土地がやや高かった可能性も考えられる。建物は規格や規模、時期が明らかでないものが多いが、梁間2間以上の建物(SB13)が存在するなど、建物の規模に異なる様相がみられた。しかし、軸方向は南部の建物群や区画溝ともほぼ共通している。

2. 屋敷地の空間構成と変遷

前述の様に、今次調査区では南北2つの屋敷区画が確認できた。南側の屋敷地の継続期間は、出土遺物から12～15世紀に推定されるが、この間にも、一定の軸方向を保ちつつ屋敷地の拡張が行われていたことが、溝や建物の分布から明らかになった。以下では、これらの屋敷地の規模や変遷について考えたい。

(1) 屋敷地の規模

南部屋敷地については、区画溝の北東隅部分のみの検出であるため、規模が明らかにできない。しかし、15世紀に廃絶したとみられる第3段階の区画溝、SD2が東西約22mにわたって検出されており、この頃には一辺22m以上の規模をもつ屋敷地であったことが推定できる。また、第2段階の区画溝であるSD4は東西17.2m、第1段階の区画溝であるSD5はSD7との接続部よりさらに延びて南に屈曲しており、この屈曲部から東西13.2mを検出している。

限られた検出条件から屋敷地の規模を推定することは困難であるが、今次調査区のすぐ南西には、現在、三所神社の境内となっている小丘陵があり、こうした地形的な制約を考慮すると、東西の区画溝は長くともSD5が35m以内、SD4が33mになると推定される。

また、1期のSD4、2期のSD5はともにそのまま南へ直角に曲がっており、これらの溝によって囲まれた屋敷の本体部分は今次調査区の南側に広がっているとみられる。

一方、SD1北側の建物地については、SD1の位置に、先行する別の区画溝が存在していたのか、あるいは幅4m前後の初期のSD1が屋敷境の役割をなしていたのか、いくつかの形態が考えられるが特定できなかった。

(2) 変遷と画期

さて、南部屋敷地での区画溝の変化や掘立柱建物の出現のあり方、またその後の展開から、本遺跡では1~5の小画期をみることができる。(Fig96・97)

1期－屋敷が区画溝SD5・7とその区画内に分布する建物群によって構成される時期である。継続期間は出土遺物の年代幅から導いた12~13世紀とみられ、溝は13世紀に廃絶する。

2期－屋敷が区画溝SD4・6とその区画内に分布する建物群(SB7・8か)によって構成される時期である。継続期間は13~14世紀とみられ、溝は14世紀に廃絶する。

3期－屋敷が区画溝SD2とその区画内に分布する建物群(SB4~6・9・10)によって構成される時期で、溝の規模は大型化している。継続期間は14~15世紀と推定され、溝は15世紀に廃絶する。

4期－SD2廃絶以降、大溝SD1が存続する時期で、16世紀には大溝が埋没する。

5期－大溝SD1の埋没以降、17世紀からは近世の建物群(SB1~3)が出現し始める。

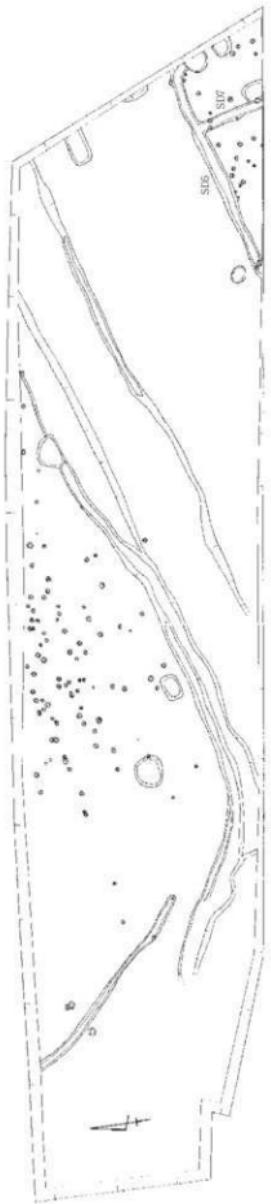
上記の小画期のうち、1期と2期の間では屋敷地の北側への拡張がみられるものの、溝の構造には大きな変化が無く、連続した屋敷での改修と考え易い。

3期には屋敷地がSD2によってさらに北側に拡張される。溝の構造は大型化し断面形態にもやや変化が生じているが、SD4からSD2への移行期に、所有者の性格に変化があったのかを裏付ける資料は見出せない。SD2出土遺物には15世紀以降の製品が加わるが、それ以外にも12~14世紀の遺物が多く含まれ、組成上も大きな変化がない。また、SD5・7、SD4・6の廃絶の際にも廃棄遺物が少なく、屋敷の廃絶を窺わせる様な14世紀のまとまった遺物廃棄も確認できていない。このため、所有者の変化については特定できないものの、SD4廃絶からSD2掘削までの間に時間的な断絶があったとは考え難く、連続して屋敷地が拡張されていたと推察される。

4期はSD2の廃絶以降である。SD2廃絶の際の埋め戻し埋土中には15世紀前半までの遺物が含まれることから、溝の廃絶は15世紀中葉~後半以降と推定される。またSD2とSD1内に白色系大型磚のまとまった廃棄が見られ、施設の解体などが推察されることや、SD2の上面を切って建てられる中世の建物跡が以後検出されないこと、15世紀後半以降の遺物を含む遺構がSD1以外に確認できないことなどから、中世までの屋敷地はこれをもって途絶えたとみられる。ただし大溝SD1は浅くなりながらも引き続き機能したとみられ、埋没は、最上層からの出土遺物から導いた16世紀中葉~後半に推定される。

以上のことから、本調査地点における画期は、古代末~中世の屋敷が出現し始める12世紀、中世の屋敷地が廃絶し居住が途絶える15世紀中葉~後半、大溝SD1が埋没する16世紀中葉~後半と、近世の建物群が出現し始める17世紀にみることができる。

1期 (12~13世紀)



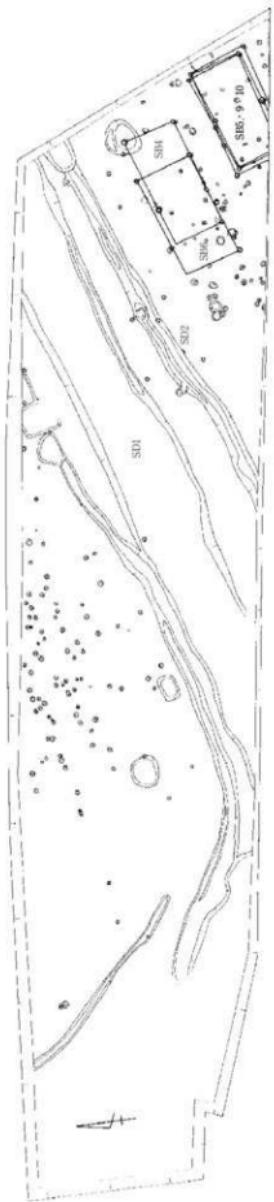
2期 (13~14世紀)



参考SUS、北隅部施設の遺構など、料理が明らかでない遺構は、可能のあるまでに記載している。

Fig.96 御手洗跡屋敷地の変遷 (1)

3期 (14~15世紀)



4期 (16世紀)

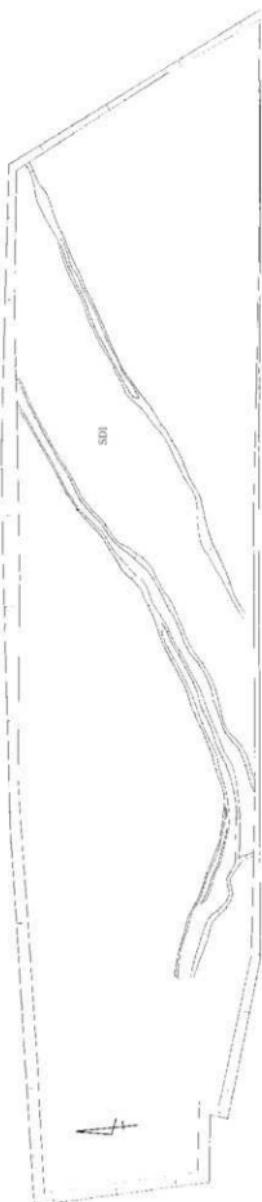


Fig. 97 御手洗跡屋敷地の変遷 (2)

3. 周辺の遺跡と景観

さて、ここまで本遺跡での検出遺構の特徴や変遷をみてきたが、屋敷地の出現と終焉、その後の景観の変化は、周辺の遺跡とどのように関わっているのだろうか。次に、近隣に所在する神田ムク入道遺跡にも目を向け、双方の遺跡を対比させることによって、神田南西部域の遺跡の動向や地域の特質について考えてみたい。

御手洗遺跡から東へ250mの位置には神田ムク入道遺跡^(註3)があり、古代の集落跡と古代末～中世の屋敷跡が確認されている。まず古代についてみると、8～9世紀の遺構群が検出され、径50～100cm前後の柱穴を伴う掘立柱建物跡や土坑、ピット等が検出されている。出土遺物は土師器や須恵器など在地の製品が主体を占めるが、製塙土器や赤色塗彩土師器も出土しており、有力者の屋敷や地域の拠点的施設が近隣に存在することを暗示させるものであった。

対して、御手洗遺跡では古代の遺構は検出されていないが、9世紀の土師器杯や10世紀の綠釉陶器碗が調査区南西部から完形に近い形状で出土している。このため、古代の御手洗遺跡と神田ムク入道遺跡の近隣には、赤色塗彩土師器や綠釉陶器を所有できる有力な遺跡が近隣に存在していたことが暗示される。

統いて12世紀以降、神田ムク入道遺跡では区画溝を伴った屋敷跡が現れる。区画溝は南北30.9m、東西45mにわたって検出されており、溝に囲まれた敷地内では石組による2基の井戸と、多数の掘立柱建物跡が検出されている。^(註4)また、区画溝の西側にも中世のピット群が分布しており、区画溝を境に複数の屋敷が並んでいたことが示唆されている。この屋敷地では12世紀～14世紀前半までの遺物が出土しており、継続期間は12世紀～14世紀前半と推定されるが、本地点ではこれをもつて遺構・遺物とも途絶え、新たな屋敷の出現がみられない。

両遺跡の屋敷地を比較すると、14世紀までの溝や建物の規模はほぼ共通している。また、遺構の出現時期についてもともに12世紀に推定でき、共通している。しかし、屋敷の継続期間は、神田ムク入道遺跡が14世紀前半頃をもって終焉するのに対し、御手洗遺跡では新たな区画溝が設けられ15世紀まで継続している。この様に、御手洗遺跡の周辺では、300m程の範囲内に区画溝を伴った複数の屋敷地が12世紀から14世紀にかけて展開しており、その後は、神田ムク入道遺跡のように終焉するものと、御手洗遺跡のように15世紀まで存続するものとに分かれていく。

なお、両遺跡の軸方向に注目すると、神田ムク入道遺跡の区画溝は真北から3～4°西に振り、御手洗遺跡は、12～15世紀を通じて真北から西に18～25°振った軸を保っている。この後、近世に現れる建物群SB1～3は真北から西に16～18°振っており、やや変化が生じるが、真北から西に振る軸方向は引き継がれている。

神田の南東部とその西にある朝倉地区には、西に16°振った軸方向をもつ条里地割が分布することが指摘されているが^(註5)、神田ムク入道遺跡は神田の地割のすぐ北西にあり、御手洗遺跡は神田と朝倉の地割りのほぼ中間、双方の地割りからおよそ350mの位置にある。(Fig2・3) 御手洗遺跡では古代末から近世を通じてこの地割に近い軸方向が認められており、その影響が窺われる。

4. 中世後期の御手洗遺跡と周辺の景観

ここまで見てきた様に、御手洗遺跡とその周辺では、古代末以降、溝によって区画された屋敷地が展開した。その後、当遺跡では15世紀前半～中頃には屋敷が廃絶し、残された大溝SD1も16世紀には埋没する。これに続く遺構の出現は近世の建物跡SB1～3が出現する17世紀まで待たなければならず、16世紀の動向は不明なところが多い。そこで以下では、現在の神田の小字^(注6)と『長宗我部地検帳』の記載をもとに当時の土地所有のあり方を検討し、中世後期における御手洗遺跡の性格や周辺の景観を知る手掛かりとしたい。

御手洗遺跡が所在した中世の神田村は、『長宗我部地検帳』に収められた天正16年(1588)『神田地検帳』に記載されている。その村域は「西ハ猿谷朝倉境北ハ川を詰面東ハ楠崎限潮江境を限」と記され、冒頭には「土州上佐郡神田之庄地検帳之事 天正十六年二月十八日」と竿入の日が記されている。同地検帳には、当時の字、土地の状況、土地の領有関係、土地の名請人などが示されており、ここから中世後期における土地の領有のあり方や屋敷の位置等を読み取ることができる。

さて、今次調査地点には現在「御手洗」の小字が残るが、ここから神田ムク入道遺跡へ向かって、東へ「祝言屋敷」「青木」「間所」「ムク入道」「片山ノ下」の小字が並ぶ。これらのうち「御手洗」「祝言屋敷」「青木」「間所」「片山ノ下」は『神田地検帳』に記載があり、小字の由来を中世後期以前に求めることができるものである。(Fig.98)

また、近隣の地名を記述順にみると(史料1・2)、「マトコロヤシキ」「作道ノ西」「同じノ南」「道場ヤシキ」「青木ノ本」「ヤカシロノ下」「別当ヤシキ」「土みヤシキ」「中ウチ」「シウケンヤシキ」「中ウチ」「テウハイ」「西ノ川原」「西ノクホ」「ヒノクチ」「カウヤノマヘ」「土居ヤシキ」と統いており、この範囲に屋敷に関連した地名が多い。このうち「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土居ヤシキ」は小字が現存せず位置が分かり難いが、記載順からみると、「マトコロヤシキ」「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土居ヤシキ」「シウケンヤシキ」の地名が、現在の「高野ノ前」「間所」「青木」「祝言屋敷」の小字が分布する範囲内に所在していた可能性が高い。^(注7)

これらのうち「マトコロヤシキ」の地名は政務や庶務を司る場所を意味した「政所」に由来するとみられるものである。また、「別当ヤシキ」は政所の長官や寺を統轄する僧官の屋敷、「道場ヤシキ」「シウケンヤシキ」は神社に関連する屋敷、また「御手洗」も神社に関連する地名であり、神社やそれに関連する有力者の屋敷にまつわる地名が多く集まっている。

次に『神田地検帳』に記載された土地所有の内容についてみると^(注8)、神田は、国主一門の番地又は寺社の所領にあたる「分」、国侍や一領具足、職人などに支給された番地にあたる「給」の記載が多くみられ、「地頭分」と、もと「八名分」で国侍などの給地になったものに分かれている。^(注9) 御手洗遺跡と近隣の土地の所有をみると、「ミタライ」は「地頭分」で「中」の耕作地、「シウケンヤシキ」は「中島帶刀丞給」の「中ヤシキ」、「マトコロヤシキ」は「八名分 田村八郎左衛門給」の「中ヤシキ」となっている。また、神田ムク入道遺跡については、同史料上に「ムク入道」の地名が見出せないが、隣接する「片山ノ下」「谷間鹿」を含めて一帯の記載を見ると、耕作地で「八名分」から国侍の給地になったものが殆どであるため、もと「八名分」と推定される。(Tab.38・39)

これによると、16世紀末頃の御手洗遺跡は耕作地であったが、すぐ東側の土地には長宗我部氏家

臣の屋敷が存在していたことが窺われる。また、「地頭分」の領有地であった御手洗遺跡に対して、神田ムク入道遺跡とその周辺は「八名分」を経て長宗我部家臣の給地になったものであり、双方の土地所有の背景には違いがあったことが窺われる。

〔註〕

- 1)『和名類聚鈔』によると神田地区は「土佐郡」に属し、「神戸」郷にあたると考えられる。
- 2)『続日本紀』神護慶雲二(768)年条には「土左国土左郡人神依田公名代等冊一人賜姓賀茂」との記事があり、隣接する「鶴部」郷の地名からも、古代豪族「賀茂氏」との強い関わりが想定されている。
- 3)神田ムク入道遺跡では平成7年度と22年度の2次にわたる調査が行われている。『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2005年・2012年
- 4)検出した溝の範囲から、2基の井戸を伴った南北約31m東西約45mの屋敷地、または、各々1基の井戸を伴った南北約31mで東西約28mと東西約17mの2区画の屋敷地が推定される。『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2012年
- 5)朝倉、鶴部、神田地区など鏡川下流域にN-16°-Wの地割造構が広く分布することが指摘されている。大脇保彦「土佐の条理—その復元再考と補説」「高知の研究2 古代・中世編」1982年
- 6)高知市教育委員会社会教育課作成の小字図。また、字の一部については高知市史編纂委員会絵図・地図部会よりご教示を得た。
- 7)記載順では「マトコロヤシキ」(現「問所」)の位置から南へ進んで「道場ヤシキ」「青木ノ本」(現「青木」)に至り、その後「別当ヤシキ」「土みヤシキ」を経て北の「中ウチ」(現「中ノ内」)、「シウケンヤシキ」(現「祝言屋敷」)に至っている。また、北の「ヒノクチ」(現「樋ノ口」)から「カウヤノマヘ」(現「高野ノ前」)へ南下して再び「土居ヤシキ」に戻っている。このため、「マトコロヤシキ」「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土居ヤシキ」「シウケンヤシキ」の地名は、現在の「高野ノ前」「問所」「青木」「祝言屋敷」の小字が分布する範囲に所在していた可能性が高い。
- 8)『長宗我部地検帳』では字と一筆の地籍、屋敷・田・畠などの等が記され、その下段に土地の名義人、土地の領有の状況が示されている。
- 9)中世の神田庄が「八名分」と「地頭分」に分割されていることから、これを莊園制下の下地中分の名残として、「八名分」がもと領家分にあたるとの推定がなされている。『高知市史 上巻』

〔参考文献〕

- 『長宗我部地検帳 土佐郡上』高知県立図書館 昭和1957年
横川末吉「第一編 古代・中世」「高知市史 上巻」高知市史編纂委員会編1958年
山本大「中世の土佐 その十九」「土佐史談 156号」土佐史談会1981年
大脇保彦「土佐の条理—その復元再考と補説」「高知の研究 第2巻 古代・中世編」清文堂1982年
市村高男「土佐国の都と莊園」「高知県の歴史」山川出版2001年
『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2005年
『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2012年

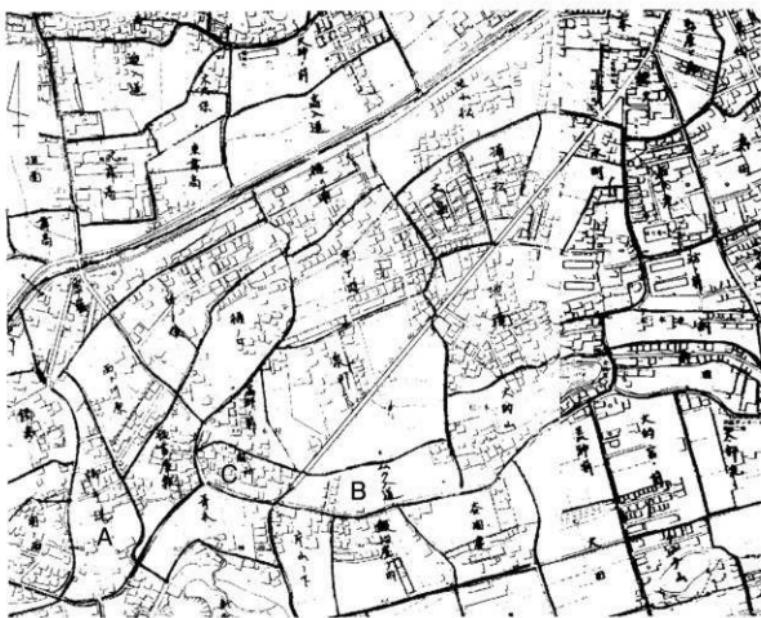
史料2 「神田之庄地帳」 「マトコロヤシキ」とその周辺に関する記載(2)

史料2 「神田之庄地帳」 「マトコロヤシキ」とその周辺に関する記載(2)

新山ノ下
→ 武反廿代上一代久 内曾反
西田三郎左衛門の娘二人

八名分 橫山 資物給

左新門	同	八名分	同
西浜	同	八名分	同
かん	同	八名分	同
兵	同	八名分	同
鑑	同	八名分	同



B-御手洗道跡、C-神田ムケ入道道跡、D-「マトコロヤシキ」確定地。

Fig.98 御手洗遺跡と周辺の小字(1)



Fig.99 御手洗遺跡と周辺の小字 (2)

Tab.38 神田の小字と『神田地検帳』の記載(1)

現在の字	地検帳記載の字	土地について	筆数	土地の使用状況	土地の領有と給に関する記載
[神田中部～西部] ④ 神田ムク入道造跡周辺					
高座か	高座ノ後	5	中、下	地頭分	
一	福井沢	2	下、荒	地頭分	
一	タ□沢	2	下々、荒	地頭分	
一	ツ・シリ	6	中、荒	地頭分、 (八名分) 谷忠兵衛 組、執行六大夫船	
一	スルヰ山	1	下々山畠	地頭分	
一	トワタリ	南道越	9	中、荒	地頭分
一	スミタ	3	中	地頭分	
神田	神田	9	中	地頭分	
山地	山路	9	中、下々	地頭分	
シルタニ	シル谷	3	中ヤシキ、中、下々	地頭分	
片山ノ下 ●片山ノ下		21	上々、上、中、下、 下々、下畠田	地頭分、 (八名分) 横山監物 組、横山左衛門應給、西 浜かん兵衛給、一円又 兵衛給、豊田神介給、吉 田三郎左衛門給、吉田 三郎左衛門給、谷忠 兵衛給、中口三左給、依光 太郎衛門給、一円又兵 衛給、吉本四郎左衛門 給、下平左衛門給、執行 六大夫船	
一	角田	2	上、下々、大的大 明神田	(八名分) 谷忠兵衛給	
谷間底 ●谷マカタ		8	中	(八名分) 島村善右衛 門給、吉本四郎左衛門 給、下村与二郎給、竹内 九郎兵衛給、吉本九郎左 衛門給、足瀬四郎左衛 門給、谷忠兵衛給	
一	サイノウ	2	中	(八名分) 倭屋善十郎 給、前田作衛門給	
石津	石津	12	中	地頭分、 (八名分) 弘助町左衛門 給、野村九兵衛給、下村 与衛門給、一円又兵衛 給、野村清兵衛給、執行 六大夫船、谷忠兵衛給	
荒神面	荒神舞	6	上中、中、下々	地頭分	
大的山か	大的	1	下々、大的大明 神テン	(八名分) 谷忠兵衛給	
猪ノ口	ヒノクチ	5	上	地頭分、 (八名分) 吉村九兵衛給	
中ノ内	中ノ内	2	上	地頭分、 (八名分) 亀岡左兵衛給	
[神田南西部] ④ 御手洗造跡周辺					
問所	●マトコロ ヤシキ	2	中ヤシキ	(八名分) 田村八郎左衛 門給、谷忠兵衛給	
一	作道	3	上	地頭分	
一	●道場ヤシキ	寺中	1	下ヤシキ	地頭分

現在の字	地検帳記載の字	土地について	筆数	土地の使用状況	土地の領有と給に関する記載
青木	青木	1	上		(八名分) 馬崎彦左衛門 給
一	ヤカシロ	1	下ヤシキ	地頭分	
一	●別当ヤシキ	寺中	1	下ヤシキ	地頭分
一	●土みヤシキ		2	中ヤシキ、中	地頭分、 (八名分) 仲内二助給
撰言屋敷	●シウケン ヤシキ		1	中ヤシキ	中島帯刀重組
中ノ内	中ウチ		4	中ヤシキ、下ヤ シキ	地頭分、 (八名分) 一円松鶴丸 給、谷忠兵衛給
一	テウハイ		2	上	地頭分
西ノ川原	西ノ川原		8	中ヤシキ、下ヤ シキ、下カガシ キ、下畠	地頭分、 (八名分) 谷忠兵衛 組、吉本九郎左衛門 給
猪ノ口	ヒノクチ	土みノ 内	II	上ヤシキ、中ヤ シキ、下ヤシ キ、下畠	地頭分、 (八名分) 吉田三郎左衛 門給、田村八郎左衛門 給
高野前	カウヤノマ ヘ		1	上	地頭分
一	●	西路懸 テ	38	上ヤシ キ、上、中、下、下 畠、下々畠	地頭分、 (八名分) 藤せ善十郎 給、横山修院給、谷忠 兵衛給、下村二郎衛 門給、吉村九兵 衛給、浜田兵衛給、慈 舟七郎左衛門給、下村六 郎左衛門給、藤せ善十 郎給、坂本丸善衛給、島 木善衛門給、木本分 因 沢殿分、千頭六郎門給
[神田北部・西部] ④ 御手洗造跡周辺					
一	中ノツ		2	上	(八名分) 吉田三郎左衛 門給、木本分 因沢殿分
一	ホウメン		16	上、中	地頭分、 (八名分) 竹内善左衛 門給、一円又兵衛 給、(横山左衛門給) 吉田三 郎左衛門給、今村十郎 給、弘田善右衛門給、谷忠 兵衛給、佛山二郎左衛 門給、前田満介給、執行六 大夫給、土平左衛門給
永町	永町	5	中、下畠		地頭分、 (八名分) 竹内善左衛 門給、鹿田又衛門給、鍋 島四郎兵衛給
一	溝添	6	中		地頭分、 (八名分) 江継准四郎 給、竹内与介給、前田新 兵衛給、池上左衛門給
大畠	大ハタケ	9	中、荒		地頭分、 (八名分) 田内左衛門財 給、西本市介給、入村清 兵衛給、吉田三郎左衛門 給、中間善左衛門給、中 島善刀給、奥田又衛門給
一	ス・レ川	5	中、下		地頭分
御手洗	●ミタライ	1	中		地頭分
一	三月テン	遠懸テ	1	上	地頭分
一	寺内		3	下ヤシキ、下、山畠	地頭分

Tab.39 神田の小字と『神田地検帳』の記載(2)

現在の字	地検帳記載の字	土地について	筆数	土地の使用状況	土地の領有と給に関する記載
一	馬場ノウラ	1 中		地頭分	
花ノ水	花水	3	下ヶ山ヤシキ、下ヶ山島	地頭分	
一	鍵音堂寺中	1	下ヶ山田	地頭分	
【神田南西部山鹿、神田川沿】					
中山田	中山田	6	下ヤシキ、中、下	地頭分	
大通寺	大通寺	5	下山ヤシキ、下ヶ山ヤシキ、中、下ヶ山島田	地頭分	

現在の字	地検帳記載の字	土地について	筆数	土地の使用状況	土地の領有と給に関する記載
一	崎山ノ鼻		9	下、下ヶ	地頭分
船岡	●舟岡	江ヲ話テ	13	中、下、下ヶ	地頭分、朝倉分
実盛	サ子モリ		8	中、下	地頭分
辰ノ尾か	タツノハナ		11	下、下ヶ	地頭分
カケカ子	カケカ子		1	下	地頭分

※●は注目される記載名。

第3節 古代末～中世の御手洗遺跡 出土遺物の様相

はじめに

今回の調査では、古代末～中世の屋敷跡や大溝が検出され、遺構内から多様な遺物が出土している。これらの資料には在地産の土師質土器の他、国内各地の搬入品や貿易陶磁器が含まれるが、その内容の豊富さや稀少な貿易陶磁器の所有は本遺跡の特徴の一つとなっている。

本節ではこれらの出土遺物の様相をまとめ、遺物所有のあり方からみえてくる本遺跡の特質について考えたい。また、近隣に所在する神田ムク入道遺跡とも対照させながら、搬入品の内容を検討し、神田の地域的特質や、神田南西部域の遺跡群の性格を探る手掛かりとしたい。

1. 遺物組成

今回得られた資料は12～15世紀の屋敷地に伴う遺構と、屋敷の終焉後も機能し16世紀に埋没した大溝SD1から出土したものである。屋敷地に関する資料は、多くが区画溝SD2から南側に分布する溝、土坑、ピット内から出土したものであるが、調査範囲が屋敷地の北西隅部分に限定されているため、遺物所有の全体像をつかむことが難しい。また、SD1についても周辺の複数の屋敷から遺物が廃棄されている可能性があり、性格がつかみにくいものである。この様に今次資料についてはいくつかの制約があるが、それらをふまえた上で、遺構内出土資料の内容をみていくこととしたい。

遺構内出土遺物の点数はTab.40に示した通りである。^[註1]これによると、多くの遺物が出土した遺構には、SD1と屋敷の最終段階の区画溝にあたるSD2があるが、その他は全体的に出土量が少ない傾向が認められる。

まず屋敷地に関する資料（資料A）をみると、土師質土器が74.7%と多く、瓦器が14.7%と続いている。また国産陶器は0.2%、貿易陶磁器は4.5%を占めている。一方、SD1出土資料（資料B）では、やはり土師質土器が72.3%と最も多いが、国産陶器が3.0%まで増加し、貿易陶磁器は9.9%とさらに多くなっている。

用途別にみると（Tab.41）、屋敷地関連資料（資料A）では、杯・椀・皿などの供膳具が最も多く90.1%、鉢・擂鉢などの調理具が24%、鍋・釜などの煮炊具が21%、壺・甕・瓶などの貯蔵具が0.2%であり、調理具・煮炊具など生活の場で使用される器種が一定量含まれている。しかし白磁・青磁などの貿易陶磁器が多く含まれ、一般集落にみられる所有形態とは違いがある。同様にSD1出土資料（資料B）でも、供膳具・調理具・煮炊具・貯蔵具が一通り見られるものの、やはり貿易陶磁器の多さや青磁香炉や天目碗などの高級品の所有に特徴がみえている。なお、SD1出土資料は前者と比較して、瓦器椀・皿と須恵器鉢が減少し、土器製の鍋・釜、陶器擂鉢が増加するなどの変化がみられるが、遺構年代の違いが反映されたものと捉えられる。

Tab.40 御手洗遺跡出土遺物器種別出土点数と組成比

出土地点	SD5・7	SD4・6	SD2	SD1	SK	P	合計	組成比 SD1 以外	A (SD1 以外)	組成比 (SD1)	B (SD1)	組成比
土師質土器 杯・碗・小皿	35	46	126	248	46	63	564	73.6%	316	74.7%	248	72.3%
瓦器 椀・皿	9	11	15	11	14	13	73	9.5%	62	14.7%	11	3.2%
綠釉陶器椀・ 黒色土器椀		2		1			3	0.4%	2	0.4%	1	0.3%
土師質土器・ 瓦質土器 鍋・釜		1	6	27	1	1	36	4.7%	9	2.1%	27	7.9%
東播系須志器鉢			8	8	1		17	2.2%	9	2.1%	8	2.3%
東播系須志器椀					1		1	0.1%	1	0.2%		
東播系須志器甕			(1)				(1)		(1)			
龜山窯須志器甕		(1)	(2)	(4)			(7)		(3)		(4)	
その他の 須志器甕	(2)	(9)	(1)	(48)	1 (4)	(2)	1 (66)	0.1%	1 (18)	0.2%	(48)	
常滑焼甕			(11)	1 (6)			1 (17)	0.1%	(11)		1 (6)	0.3%
備前焼甕・甌・瓶				2 (23)			2 (23)	0.3%			2 (23)	0.6%
瀬戸碗・皿				3	(1)		3 (1)	0.4%	(1)		3	0.9%
備前焼擂鉢		(1)		4	1		5 (1)	0.7%	1 (1)	0.2%	4	1.2%
貿易陶磁器碗・ 杯・皿・蓋	1 (3)	2 (8)	8 (16)	33 (86)	5 (10)	2 (6)	51 (129)	6.7%	18 (43)	4.3%	33 (86)	9.6%
貿易陶磁器洗・ 香炉				1	1		2	0.3%	1	0.2%	1	0.3%
土鍤		1	1	4	1		7	0.9%	3	0.7%	4	1.7%
合計							766	100.0%	423	99.8%	343	100.6%

Tab.41 御手洗遺跡出土遺物用途別出土点数と組成比

	A推定個体数	A組成比	B推定個体数	B組成比
供膳具(椀・杯・皿)	381	90.1%	263	76.7%
調理具(鉢・擂鉢)	10	2.4%	12	3.5%
煮炊具(鍋・釜)	9	2.1%	27	7.9%
貯蔵具(甕・甌・瓶)	1	0.2%	3	0.9%
奢侈品(貿易陶磁器碗・皿・蓋・洗・香炉)	19	4.5%	34	9.9%
その他(土鍤)	3	0.7%	4	1.2%
計	423	100.0%	343	100.1%

2. 搬入品の様相

前節で触れたように、今次調査では、SD4～7によって区画された前期屋敷地（12世紀～14世紀中頃）、SD2によって区画された後期屋敷地（14世紀後半～15世紀）、SD1存続期（16世紀）の各期の遺構が検出されており、主にこの期間の遺物が出土している。しかし遺構は未検出であるものの、土師器皿、京都系の緑釉陶器碗・皿と黒色土器碗、篠窯の須恵器鉢など、9～11世紀の遺物も少量出土しており、長い期間にわたる資料が得られている。この様に今次出土資料は年代幅が広く、時期によって背景に違いがあるが、ここでは緑釉陶器、黒色土器、瓦器、須恵器、陶器、貿易陶磁器などの搬入品を取り上げて、各期における搬入品のあり方をみていく。

（1）国内搬入品

①緑釉陶器・黒色土器

10世紀に生産された京都系の緑釉陶器碗（475）と皿（541）が出土している。碗（475）はSD1、皿（541）はSD4から出土したものであるが、今次出土資料中で10世紀に遡るのはこの2点と後述する篠窯の須恵器鉢のみであり、廃棄の経緯は分かりにくい。

黒色土器は桶葉型の黒色土器碗（396）が出土しており、11世紀前半に比定される。

②瓦器

瓦器は碗・皿が出土しており、何れも和泉型に属するものである。碗には炭素吸着がみられないもの（375・391・392・552）、炭素吸着が弱く殆ど剥離しているもの（362・363・367・373・374・538・560）、外面下位又は口縁部以下の炭素吸着がみられないもの（348・500・537）、内面の炭素吸着がみられないもの（501）などが含まれており、こういった粗製タイプの瓦器碗が多く認められるのも本遺跡の特徴である。資料は小破片で出土し生産年代を明らかにできなかったものが多いが、概ね12～14世紀に該当する。

③須恵器

須恵器は東播磨地域からもたらされた東播系須恵器の碗・鉢・壺、佐古龟山窯の壺、その他生産地不明の壺が出土している。また、年代が遡るが10世紀後半～11世紀の篠窯の須恵器鉢（478）がSD1から出土している。

東播系須恵器は碗（368）、鉢（354・365・434～441・511～515）、壺（517）が出土した。東播系須恵器の鉢は、12世紀末～13世紀を中心に土佐での流通量が増加するものであるが、本遺跡では12世紀（434・435）と14世紀（365・441）の製品も出土しており、長い期間にわたって鉢が搬入されたことが分かる。また、碗と壺は県内の出土事例が少なく、屋敷や津の性格をもつ遺跡に出土が限定されるものであるが^{〔三〕}、当遺跡でも2点の出土が確認されている。

亀山窯は現在の高知県香南市野市町佐古に所在する須恵器窯である。発見された窯跡からは平安時代の須恵器杯・蓋・壺・瓦などが出土しており、その生産は古代まで遡る。また、窯跡からは古代末～中世前期の須恵器壺も出土しており、中世の須恵器生産も確認されている。中世の亀山窯製品については、これまで窯跡以外からの出土事例が報告されておらず、流通の実態が殆ど分かっていないなかつたが、近年の報告では神田ムク入道遺跡から壺が出土し、同窯の製品が県中央部以西まで流

通することが明らかになっている。今回の調査では壺(442・518・519・545)が出土しているが、何れも胎土が緻密で胎土中に1mm前後の大粒の黒色粒を多く含んでいる点に特徴があり、体部片は外側にタタキ目が残る。^(註3)

④陶器

陶器では、常滑焼の壺(454～456・528)がSD1・2から出土するが、何れも体部片であったため生産年代を明らかにできていない。

備前の製品は擂鉢(358・444～448)、壺(449・450)、壺又は壺(452)がSK4とSD1から出土しており、14世紀後半以降～16世紀までの製品が認められる。

⑤土師質土器

播磨型鍋(468～470)がSD1から出土した。小破片のため年代を特定し難いが、形態や遺構の年代からおおむね15世紀と捉えられる。

(2) 貿易陶磁器

貿易陶磁器は破片点数にして133点が出土しているが、この中には16世紀まで続いたSD1の遺物も入るため、12世紀から16世紀までの幅広い年代の資料が含まれている。そこで、以下では貿易陶磁器の分類^(註4)に基づいて12世紀～14世紀中頃と14世紀後半～16世紀のグループに分け、主な出土遺物の内容を示した。

[12世紀～14世紀中頃]

白磁碗IV類(359・397～401・405・406・502・542・558)

白磁皿V類(503)・VII類(409・410)・IX類(504・505)

同安窯系青磁碗(424)

龍泉窯系青磁碗I～2類(414・508)・I～4類(510・554)・I～5b類(544)・III類(428・509)

磁竈窯黄釉鉄絵洗(364)

[14世紀後半～16世紀]

白磁碗(506・404)、白磁皿D群(407・412)・E群(403)、白磁盃D群(413)

龍泉窯系青磁碗B3類(418)・B4類(417・429・430)・D1類(420)・E類(351・352)・

D又はE類(415・421)・不明(357・416・419・423・507)

龍泉窯系青磁皿(416)、青磁香炉(431)、景德鎮窯系青花碗(432)

これによると、白磁碗IV類や白磁皿IX類、龍泉窯系青磁碗1類、同安窯系青磁碗・皿等など、集落部からも出土する碗・皿類が多く出土しているが、他にも青磁碗III類などの上質の青磁、青磁香炉、黄釉鉄絵洗などの高級な製品が含まれている。

中でも福建省晋江市磁竈窯の黄釉鉄絵洗(364)は12～13世紀の製品で^(註5)、類例の資料は博多遺跡群から黄釉鉄絵盤の出土が報告される^(註6)他、瀬戸内海水運と淀川を結ぶ物資流通の拠点である兵庫県の大物遺跡^(註7)で黄釉盤の出土が確認されている。しかし、国内での出土事例は極めて少なく、都市遺跡や物資流通の要衝となる遺跡に限定されている。^(註8)高知県内では、近隣の神田ムク入道遺跡で磁竈窯の灰釉壺が出土しており^(註9)、同製品の神田地域への流通が注目される。

3. 製品流通にみる御手洗遺跡の特質と神田

ここまで搬入品を中心に当遺跡での出土遺物の様相をみてきた。御手洗遺跡では12～14世紀にかけて畿内産の瓦器や東播系須恵器が多く出土しており、畿内や東播磨地域との物資流通上の深い結びつきが窺われた。また15～16世紀の遺構からは、播磨型鍋など播磨地域の製品が引き続き認められ、備前焼の擂鉢・甕・壺や瀬戸の天目碗など、新たな地域の製品も出土し始める。この様に、今次資料中には畿内、播磨、常滑、備前、瀬戸など国内各地からもたらされた搬入品、貿易陶磁器が多く含まれていたが、この中には稀少な貿易陶磁器や、東播系須恵器甕・壺などのように流通の拠点に限定されて出土する製品も含まれており、本遺跡の特徴を見ることができた。

出土品にみえるこうした特徴は神田地域の遺跡に共通してみられるものなのだろうか。以下では、近隣に所在する神田ムク入道遺跡の事例を対比させながら、御手洗遺跡の性格や神田の地域的特質について考えてみたい。

神田ムク入道遺跡では、屋敷の継続期間にあたる12世紀から14世紀中頃までの遺物が出土しているが、ここには畿内系の瓦器甕・皿、東播磨地域の須恵器鉢・甕、常滑の陶器甕、佐古龜山窯の須恵器甕などの国内搬入品や貿易陶磁器が豊富に含まれている。この中には、国内での出土が稀な中国福建省磁竈窯の灰釉壺、寺社関連の遺跡や屋敷跡、城館、物資集積の要衝の遺跡などに限定されて出土する中国産の白磁壺と水注などの貿易陶磁器が含まれている。また国内製品では、初期の常滑焼甕（赤羽・中野編年の3～4型式、12世紀第4四半期～13世紀第1四半期）^(註10)や、政治・経済の拠点や交通の要衝に関連した性格をもつと指摘されている楠葉型瓦器甕^(註11)が出土している。また、東播系須恵器の甕も認められている。

両者の遺跡を比較すると、14世紀中頃までは、搬入される国内製品の傾向はほぼ同じである。また貿易陶磁器では、御手洗遺跡には白磁壺・水注は認められなかったが、磁竈窯の製品など稀少な貿易陶磁器の所有に共通性がみられる。また、出土が限定される東播系須恵器の甕や甕などの様相も共通している。

この様に、近接する双方の屋敷地では類似した製品内容が認められており、この時期の神田南西部域の屋敷群における需要のあり方を示していると思われる。そして、その製品内容からは政治や経済の拠点、物資流通の拠点としての性格が窺われる。

なお、流通に関連して本遺跡の立地環境をみると、神田と津との関係性を直接的に示す遺物は遺跡内から出土していないが、周辺の地名には、西方450mの神田川沿岸の位置に「船岡」、その西に「船戸」「下船戸」など津の存在を思わせる字が残っている。このうち「船岡」については『長宗我部地帳帳』に収められた『神田地帳帳』と『土佐郡朝倉庄地帳帳』に「舟岡」の記述が見え、関係の地名が中世後期以前から近隣に存在していたことが分かる。

さらに両遺跡が所在する神田南西部域は神田川と至近の距離にあり、古代以来の外港であった浦戸とは、浦戸湾から鏡川・神田川に至る水運によって結ばれていたとみられる。この水運上の遺跡には、他に鏡川中流域に所在する尾立遺跡^(註12)があるが、ここからも京都産の縁軸陶器や古代末～中世の貿易陶磁器が出土している。

これらのことから、神田南西部域の屋敷群は、浦戸湾から鏡川・神田川を上る水運のルート上に

あり、津を扼する経済の拠点として機能していた可能性がある。そして古代末から中世には、このルートを介して当地域へ豊富な貿易陶磁器や国内製品が運び込まれたとみられる。

最後に、本節では特に12世紀から15世紀の出土資料を中心にみてきたが、神田ムク入道遺跡では9世紀の遺構群も検出されており、製塙土器や、寺院や地域の拠点、中央権力と在地支配層との接点、水上・陸上交通の要衝となる遺跡に出土が限定される^(註13)赤色塗彩土師器も出土している。また、御手洗遺跡でも10世紀に遡る京都系縁釉陶器皿や楠葉型黒色土器碗、11世紀の築窯の鉢が出土しており、この頃から、これらを入手できる有力者の屋敷や地域の拠点的施設が近隣に存在していたことが暗示されている。そのため、本地域における畿内（特に京都か）との関係性、流通拠点としての基盤は古代から引き継がれるものであったと考えられる。

謝辞

今回の報告にあたっては、出土資料の同定について、森達也氏、池澤俊幸氏、吉成承三氏より貴重なご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。

【註】

- 1) 今回表示した出土点数と組成比（%）は、推定個体数を用いて割り出している。個体数の算出方法は次の通りである。土師質土器杯・碗・皿、瓦器碗・皿は口縁部点数と底部点数からカウントし、同一遺構内で口縁部と底部が併存した場合は、底部のみをカウントした。貿易陶磁器碗・皿・盃・洗、土器鍋、須恵器壺、陶器壺は、口縁部点数と底部点数からカウントし、同一遺構内で同じ器種の破片が複数出土した場合は、釉調、胎土、調整痕等の観察から別個体と判断できたものを1点としてカウントした。土錘は破片点数を（ ）で表記している。
- 2) 東播系須恵器壺は県東部の田村遺跡、県西部の木塚城跡、上ノ村遺跡、岩井口遺跡、県西南部の坂本遺跡など、屋敷や津の性格をもつ遺跡に出土が限定されている。
- 3) 亀山窯製品の産地同定にあたり、松村信博氏よりご教示を得た。
- 4) 貿易陶磁器の分類は、12～14世紀前半までの白磁（白磁碗・皿II～IX類）と14世紀～16世紀の白磁（白磁碗・皿B～E群）は森田・山本分類、12世紀後半～14世紀前半までの青磁（青磁碗I～III類）は森田・山本分類、14世紀～16世紀の青磁は上田分類（青磁碗B～E類）、青花は小野分類による。
- 5) 同定にあたって森達也氏よりご教示を得た。
- 6) 福岡市の博多遺跡群第167次調査において、磁窯窓黄釉鉄絵盤の出土が報告されている。『博多遺跡群第167次調査報告』福岡市教育委員会
- 7) 兵庫県尼崎市の大物遺跡は、瀬戸内海水運と神崎川・淀川水運を結ぶ物資流通の拠点であった河尻の港で、12世紀後半～13世紀前半にかけて発展した。ここでは北部九州、山口県、広島県、岡山県など瀬戸内海沿岸で生産された土器が出土し、瀬戸内海の物資輸送に従事する人々の使用品が持ち込まれたものと考えられている。大物遺跡からは多量の貿易陶磁器が出土するが、貿易品の荷主を示すために記された博多での荷揚げの際に選別されたとされている「中国人名+綱」の墨書きもった貿易陶磁器も認められている。この墨書きを伴った貿易陶磁器は博多と大物遺跡以外では確認されていないことから、中国貿易の玄関口であった博多と大物遺跡との関わりが注目されている。『図説 尼崎の歴史－中世編』・『大物遺跡第

1次調査概要』尼崎市教育委員会

- 8) 16世紀に交易都市として発展した大分県の府内でも、明代後期の磁窯窯撃軸壺が出土している。
- 9)『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2012年
- 10) 3型式以前に遡る常滑焼甕は、土佐の政治上の拠点である国衙跡、土佐の一宮である土佐神社に付随した寺社関連の屋敷地である土佐神社西遺跡、仁淀川河口の物資の集散地である上ノ村遺跡など、政治・宗教の拠点的施設の周辺や、物資流通の拠点的性格をもつ「津」の遺跡に限定されて出土している。
- 11) 楠葉型瓦器椀は畿内以外では限定的な出土状況であることから、土佐で出土する12世紀後業～13世紀後業の楠葉型瓦器椀が、政治・経済の拠点や交通の要衝に関連した性格をもつと指摘されている。
- 池澤俊幸「南四国に搬入された中世土器・陶磁器と海運」「中世土佐の世界と一条氏」高志書院2010年
- 12) 尾立遺跡では、ピット、土坑、溝、船着き場の一部とみられる土手状の遺構と石列などが検出されている。調査区からは10世紀に生産された京都産の縁輪陶器10点の他、白磁、青磁などが出土しており、鏡川中流域における流通の拠点と推定されている。『尾立遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1995年
- 13) 赤色塗彩土師器が一定量出土した高知県下の遺跡には、下ノ坪遺跡、十万遺跡、深沢北遺跡、田村遺跡などがあるが、きわめて限定的な分布で、寺院や地域の拠点、中央権力と在地支配層との接点となる遺跡、水上・陸上交通の要衝に位置する遺跡に特定されている。池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相 下ノ坪遺跡の成果を中心として」『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会1998年

【参考文献】

- 池澤俊幸「南四国に搬入された中世土器・陶磁器と海運」「中世土佐の世界と一条氏」高志書院2010年
- 橋本久和『中世考古学と地域・流通』真陽社2009
- 橋本久和『瓦器椀の西日本における分布と畿内産瓦器椀の流通』『中世山茶碗と瓦器椀・その流通と背景を探る』中世土器・陶器編年研究会記録2008年
- 『解説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会1995年
- 『日本出土の貿易陶磁器』国立歴史民俗博物館1993年
- 『長宗我部地検帳 土佐郡上』高知県立図書館 昭和32年
- 『尾立遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1995年
- 『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2005年
- 『土佐神社西遺跡』高知市教育委員会2006年
- 『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2012年

写 真 図 版



調査区全景（東より）



調査区全景（西より）



完掘状況（第1面、東より）



完掘状況（第1面、西より）



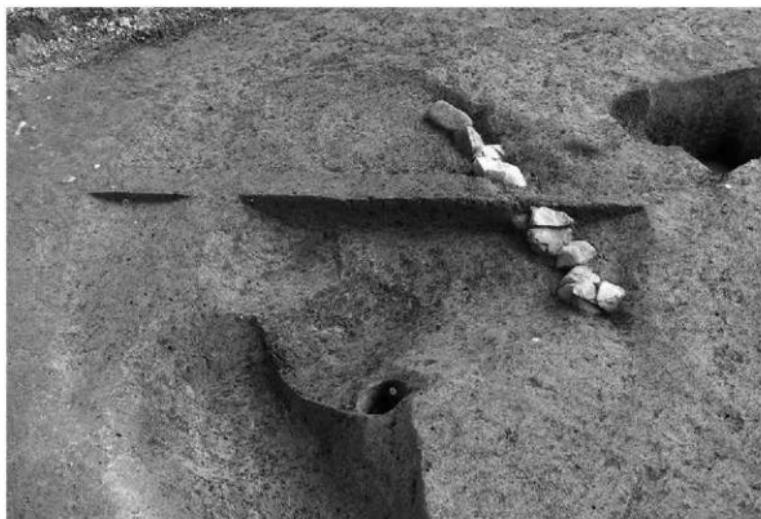
調査区北壁（東部、I～V層・SD1）



調査区北壁（中央部、I～V層）



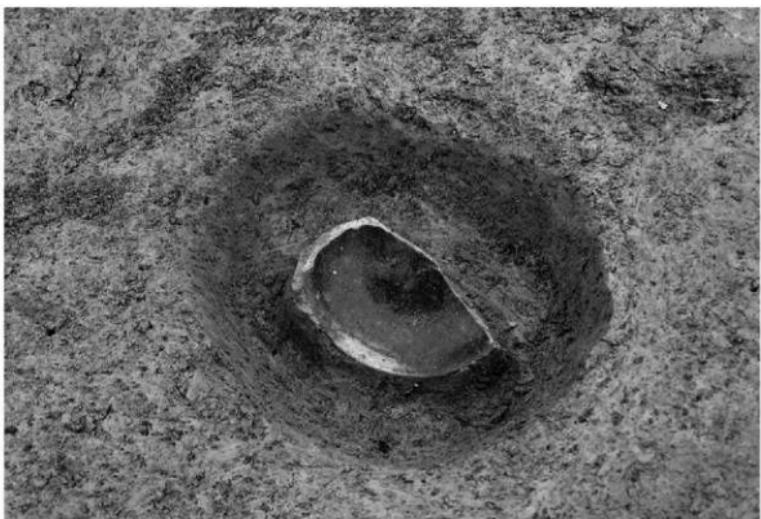
SK5 (西より)



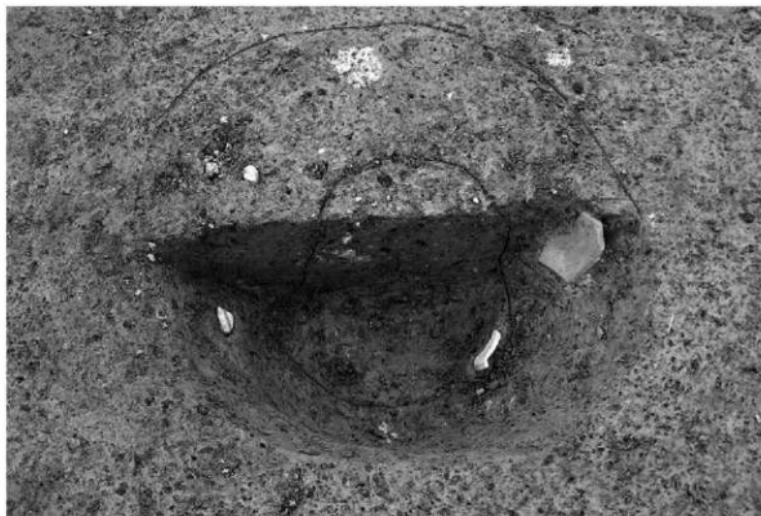
SK9 セクション・礫出土状況 (西より)



SB1 - P1 セクション・礫出土状況



P122 遺物出土状況 (559)



P124 セクション・遺物出土状況



P124 遺物出土状況 (555 ~ 558)



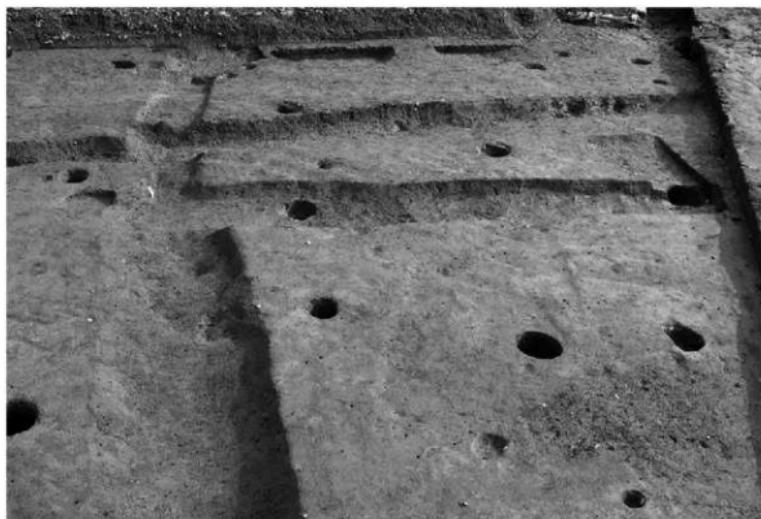
SD1・2・4 (西より)



SD4～7 (西より)



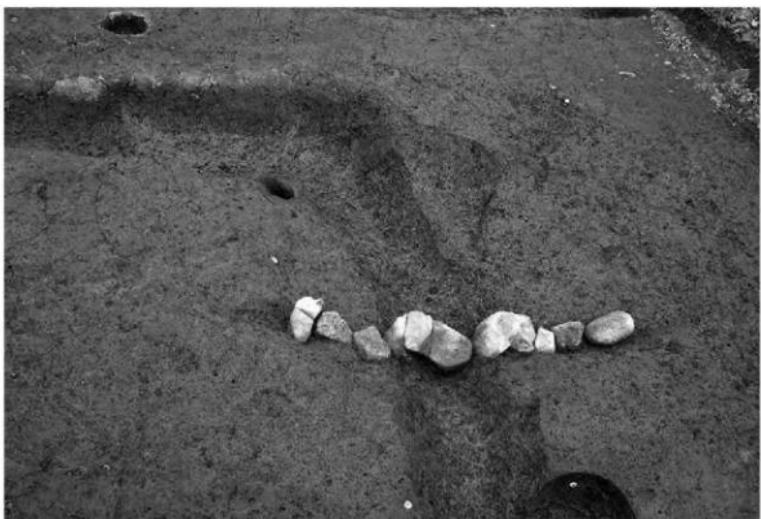
SD4 (西より)



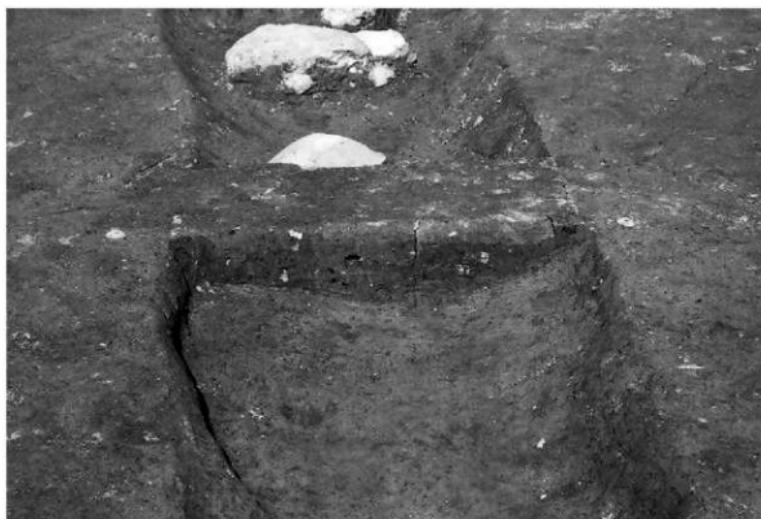
SD5 ~ 7 完掘状況 (西より)



SD2 セクション (西より)



SD6・SK9 種出土状況 (南より)



SD7 セクション（南より）



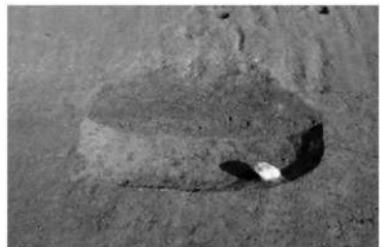
SD1 東部縫出土状況（東より）



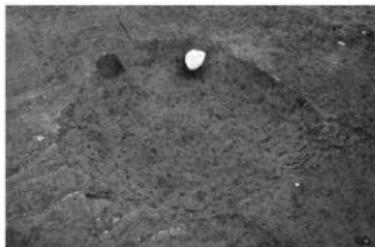
SD1 東部（3層床面、西より）



SD1 西部セクション（1～3層、西より）



SK4 セクション（南より）



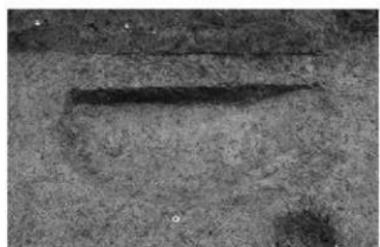
SK4 完掘状況（西より）



SK6 セクション（西より）



SK7 完掘状況（西より）



SK10 セクション（西より）



SK13 セクション（西より）



SK14（西より）



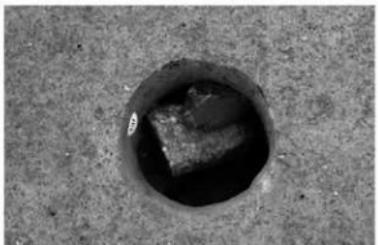
SD3（南より）



SB1 - P7 柱痕検出状況



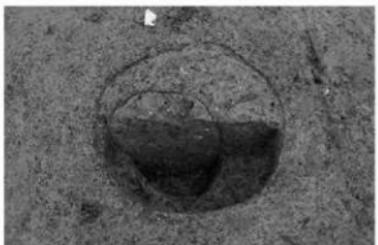
SB4 - P7・SB6 - P6 柱痕検出状況



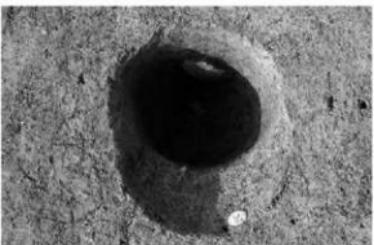
SB9 - P1 爛出土状況



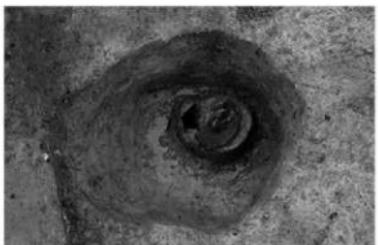
SB8 - P3 爛出土状況



SB3 - P6 セクション



P155 完掘状況



SB9 - P5 遺物出土状況 (349)



P171 遺物出土状況 (561)



SD1 遺物出土狀況 (395)



SD1 遺物出土狀況 (410)



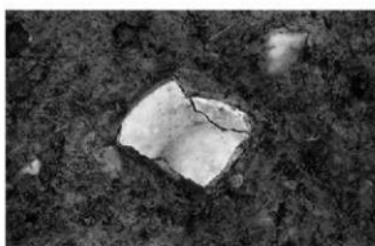
SD1 遺物出土狀況 (412)



SD1 遺物出土狀況 (419)



SD1 遺物出土狀況 (429)



SD1 遺物出土狀況 (433)



SD1 遺物出土狀況 (449)



SD1 遺物出土狀況 (452)



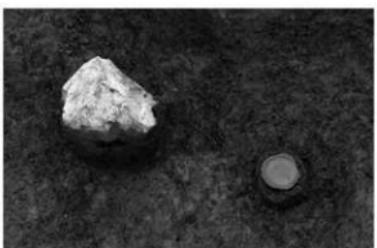
SD1 遗物出土状况 (475)



SD1 遗物出土状况 (482)



SD1 遗物出土状况 (486)



SD2 遗物出土状况 (492)



SD2 遗物出土状况 (509)



SD2 遗物出土状况 (513)



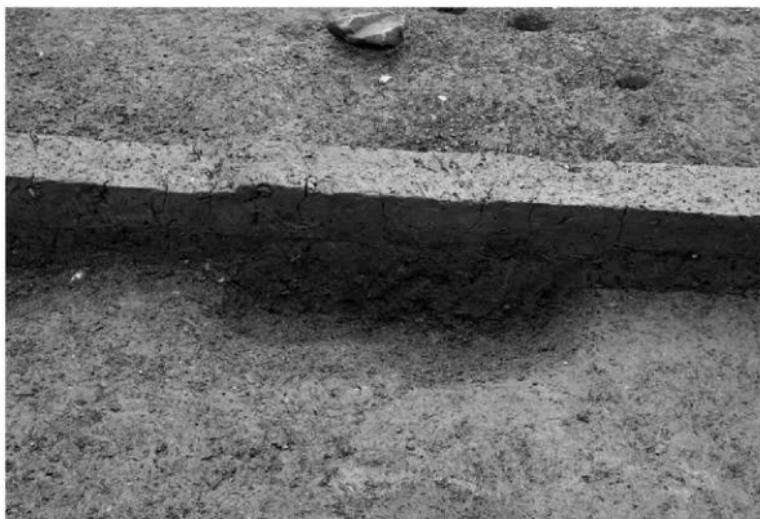
SD2 遗物出土状况 (524)



SD2 遗物出土状况 (527)



ST1 完掘状況・礫出土状況（西より）



ST1 中央ピットセクション（南より）



ST2 完掘状況（東より）



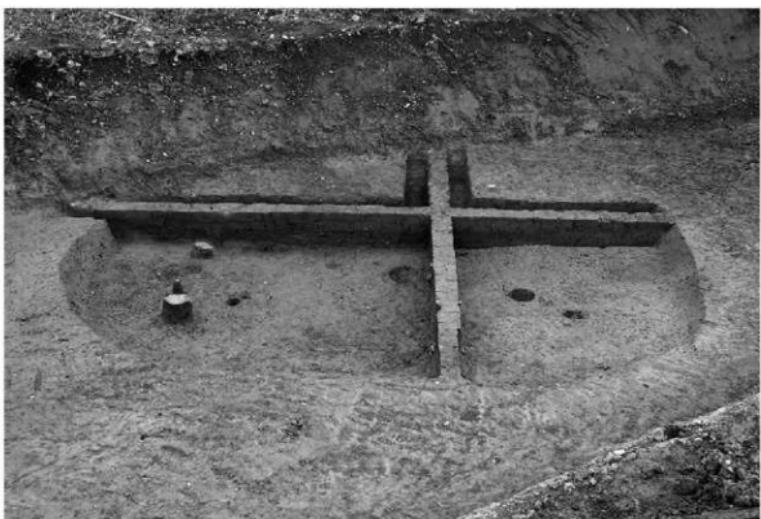
ST4 遺物出土状況（南より）



ST3・4 セクション（東より）



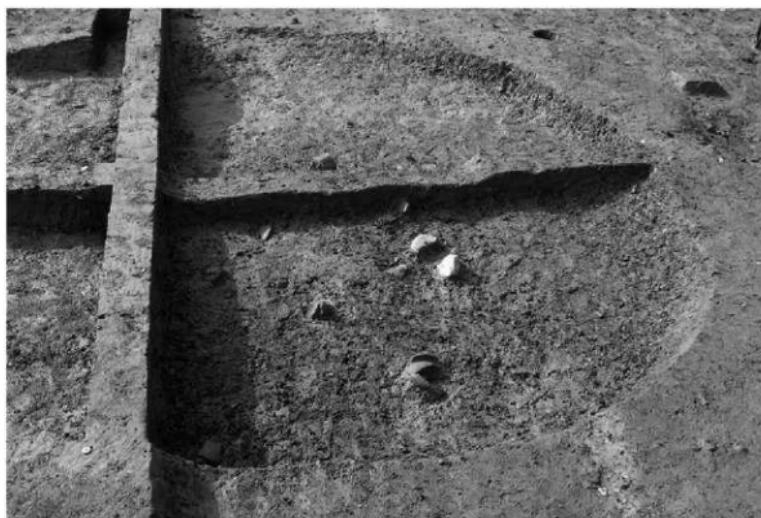
ST4 遺物出土状況（北より）



ST3・4 (北より)



ST3・4 完掘状況 (西より)



SX1 遺物出土状況（東より）



SX1 完掘状況（西より）



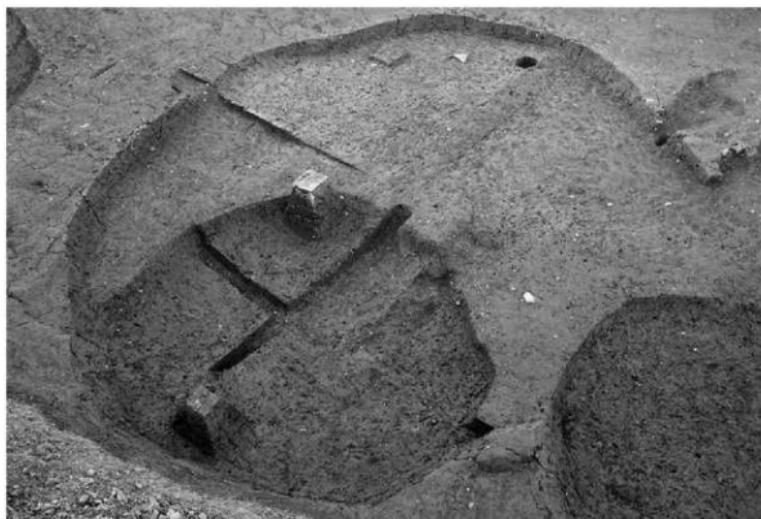
SX9・SK42 遺物出土状況（南より）



SX9 完掘状況（北より）



SX9・10 (東より)



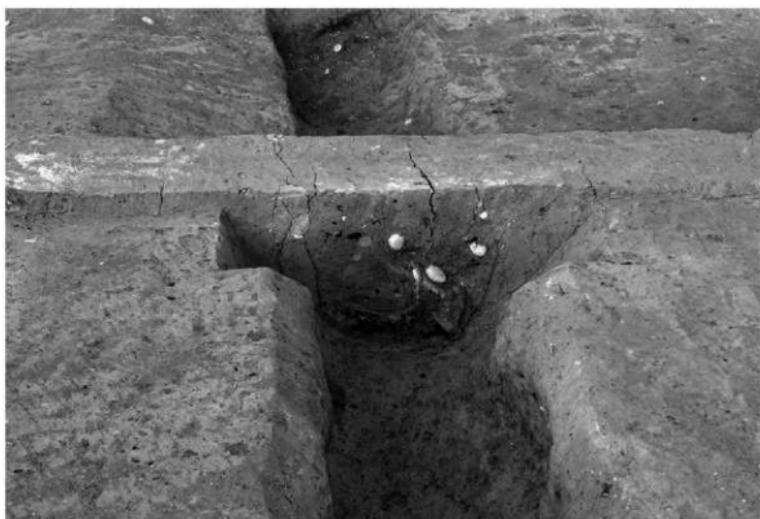
SX9・SK41 完掘状況 (南より)



SK16 遺物出土状況（北より）



SK18 遺物出土状況（北より）



SK18 セクション（南より）



SK18 遺物出土状況



SK29 遺物出土状況（西より）



SK33 遺物出土状況（南より）



SK37 遺物出土状況（東より）



SK38 遺物出土状況（西より）



SK40 遺物出土状況（西より）



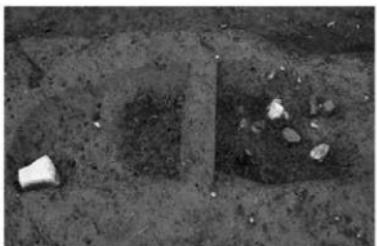
SK42 遺物出土状況



石集中 1・SK44 磬出土状況（北より）



SK44 遺物出土状況



SK15 遺物出土状況（南より）



SK16・23・24 完掘状況（南より）



SK17 セクション（北より）



SK19 遺物出土状況（東より）



SK21 セクション（西より）



SK25 セクション（南より）



SK26 遺物出土状況（南より）



SK27 遺物出土状況（南より）



SK28 (南より)



SK30・31 完掘状況 (北より)



SK33 遺物出土状況



SK35完掘状況・ST2中央ピット礫出土状況(南より)



SK39 (西より)



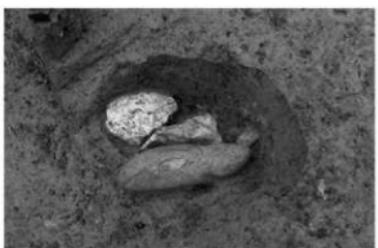
SK43 完掘状況 (南より)



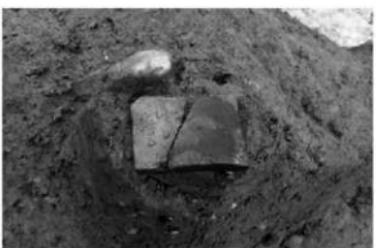
SD9 (西より)



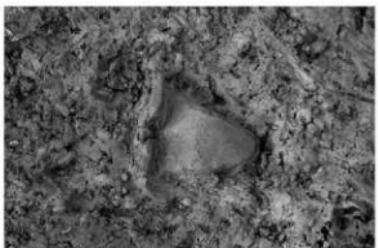
SX1・SD9 (西より)



ST3 - P5 瓷出土状况



ST4 遗物出土状况 (66)



SX1 遗物出土状况 (74)



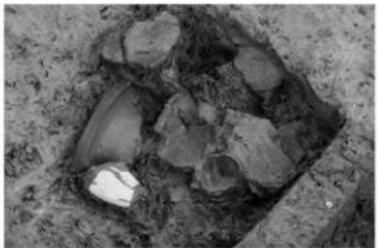
SX1 遗物出土状况 (72 + 74)



SX10 遗物出土状况 (104)



SK18 遗物出土状况 (182)



SK33 遗物出土状况 (245)



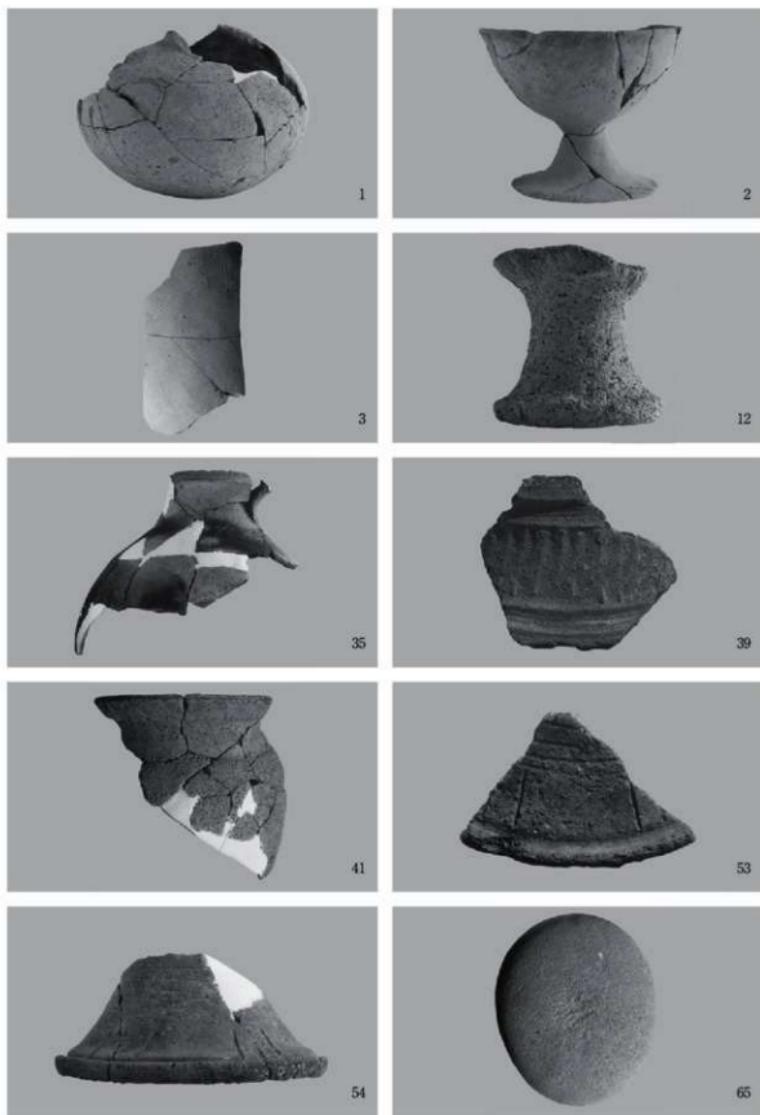
SK37 遗物出土状况 (260)



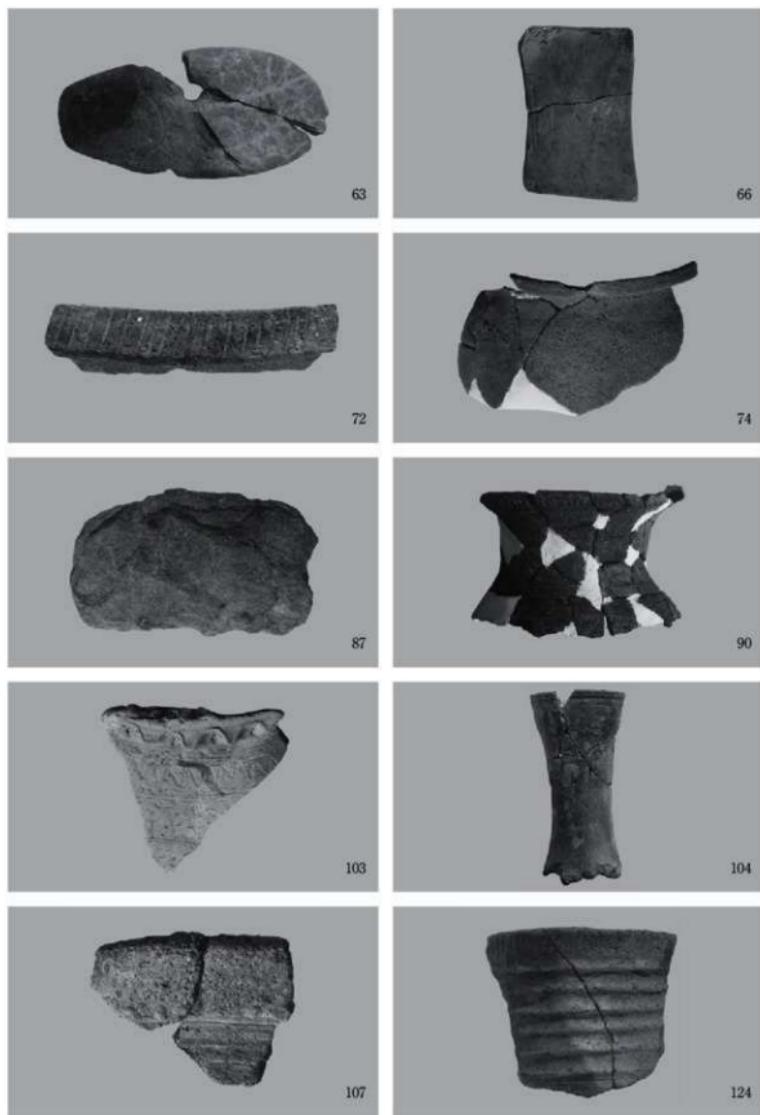
調査区北壁（西部・SR1）



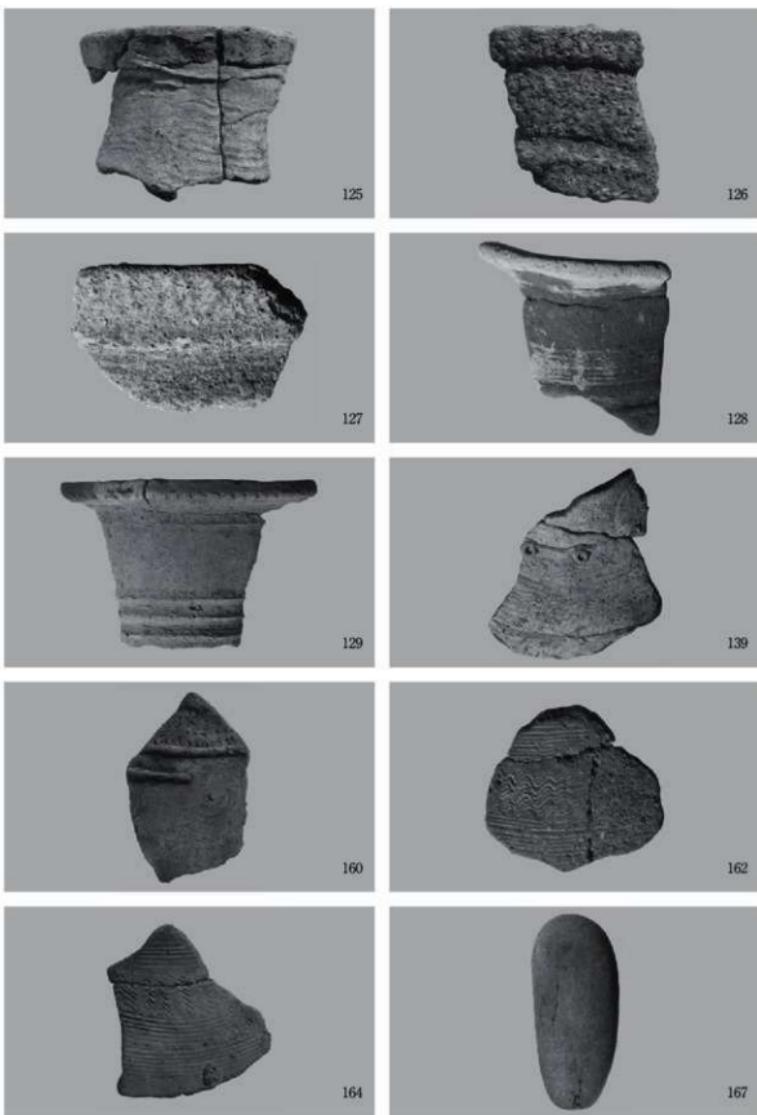
調査区風景（西より）



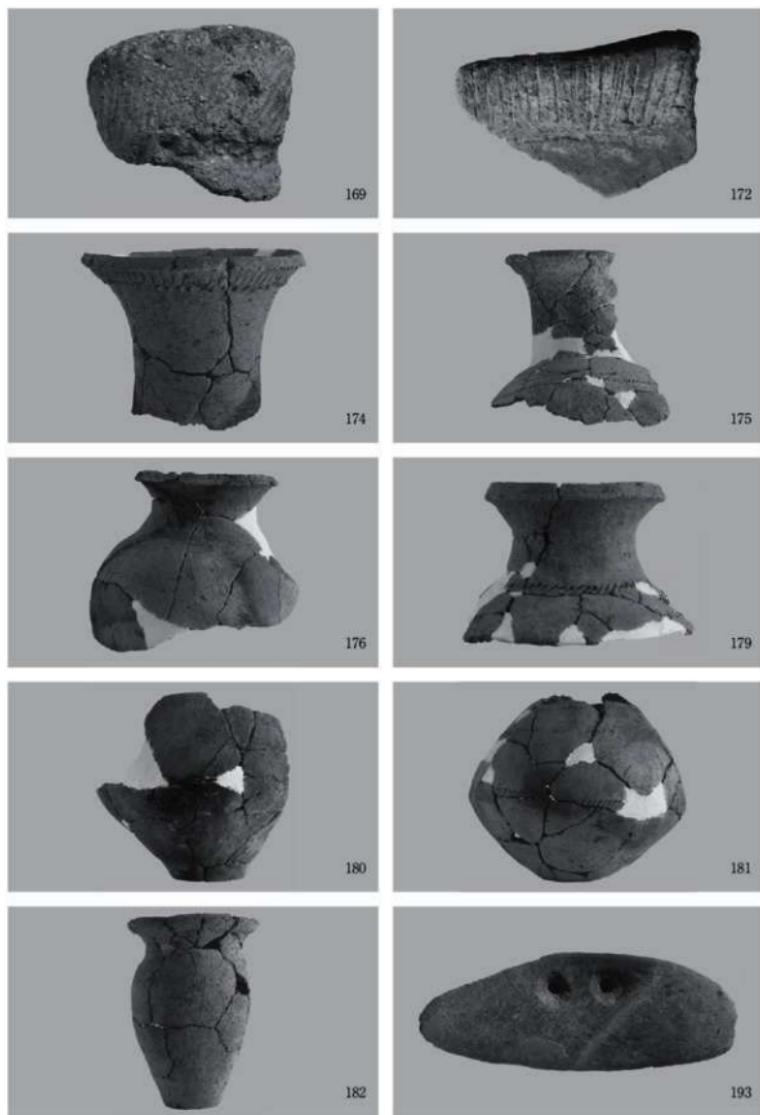
平成 21 年度試掘調査（柳田遺跡隣接地）・ST1・4 出土遺物



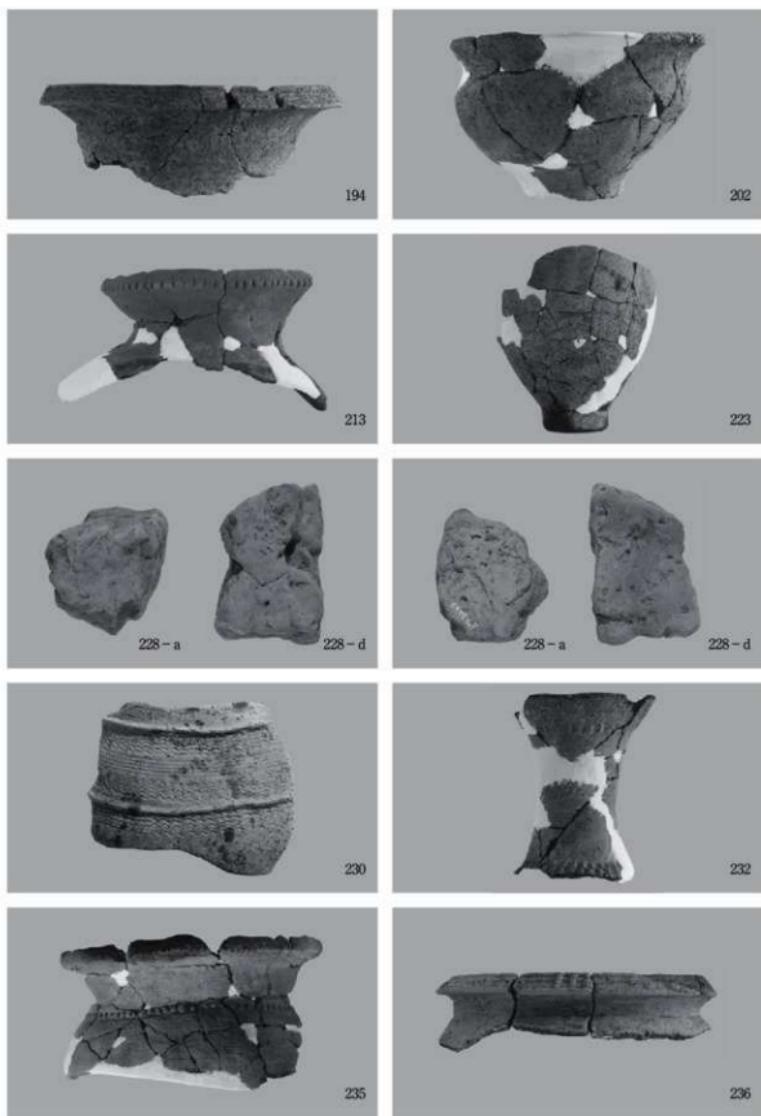
ST4 · SX1 · 4 · 9 · 10 · SK16 出土遺物



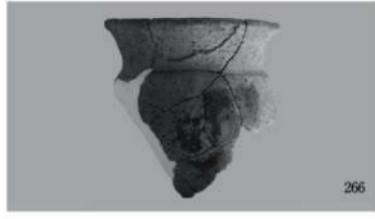
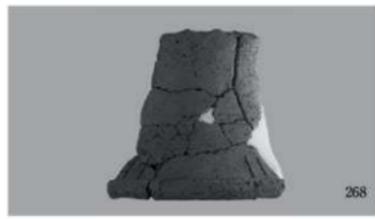
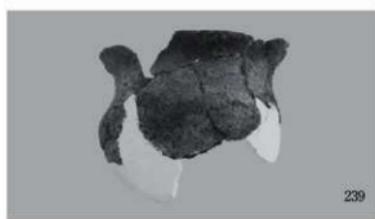
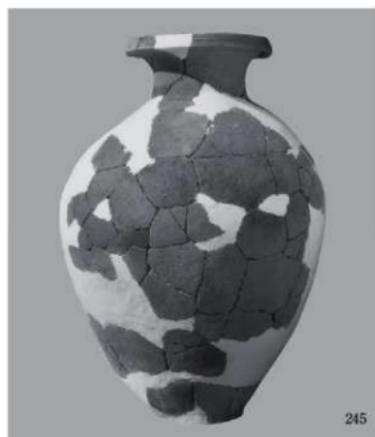
SK16 出土遺物



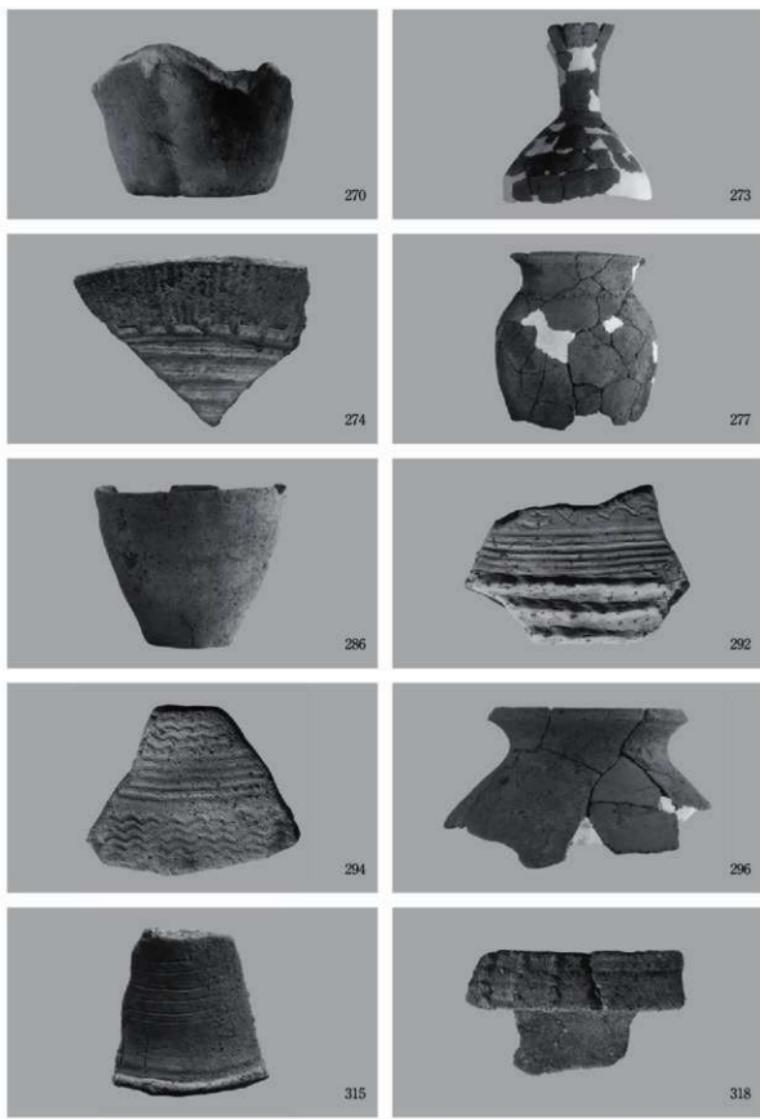
SK18 出土遺物



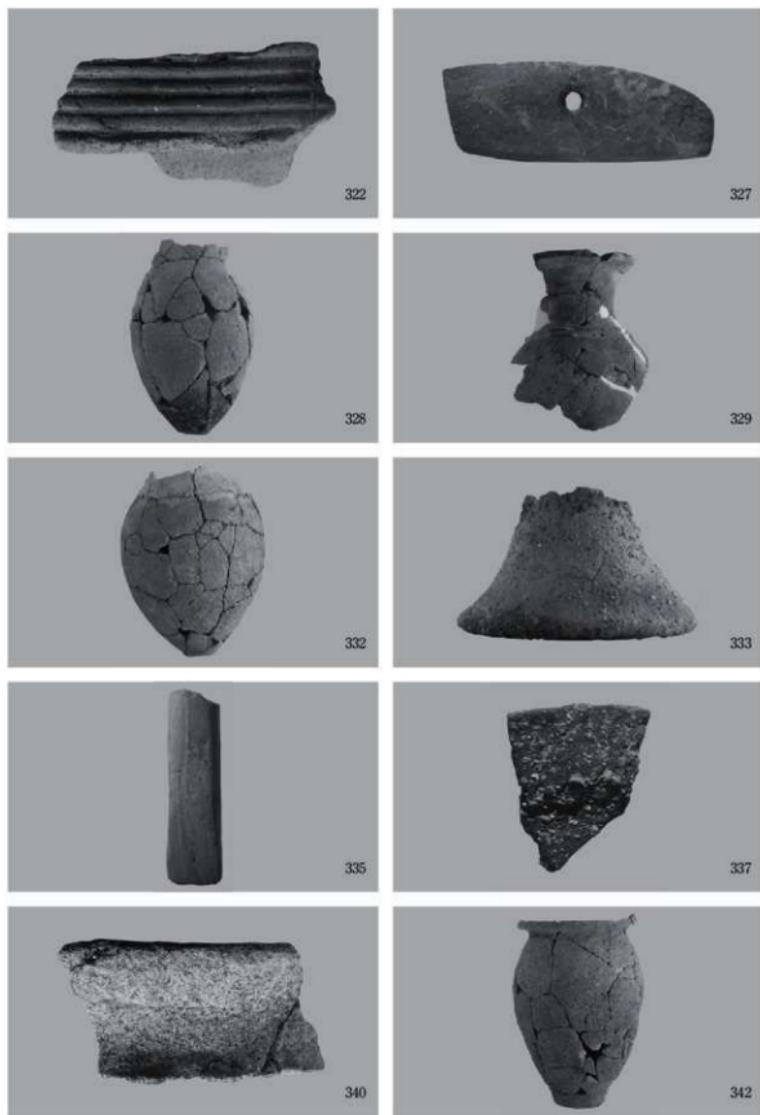
SK19 · 25 · 29 · 32 · 33 出土遺物



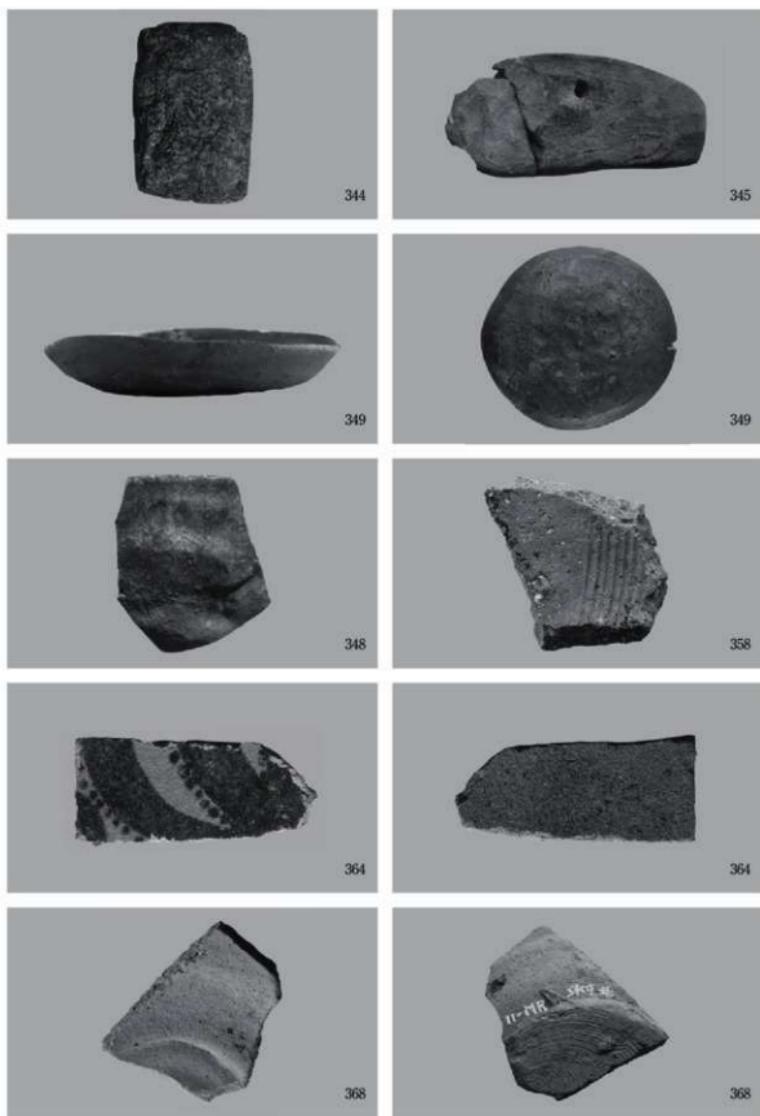
SK33 · 35 · 37 · 38 出土遺物



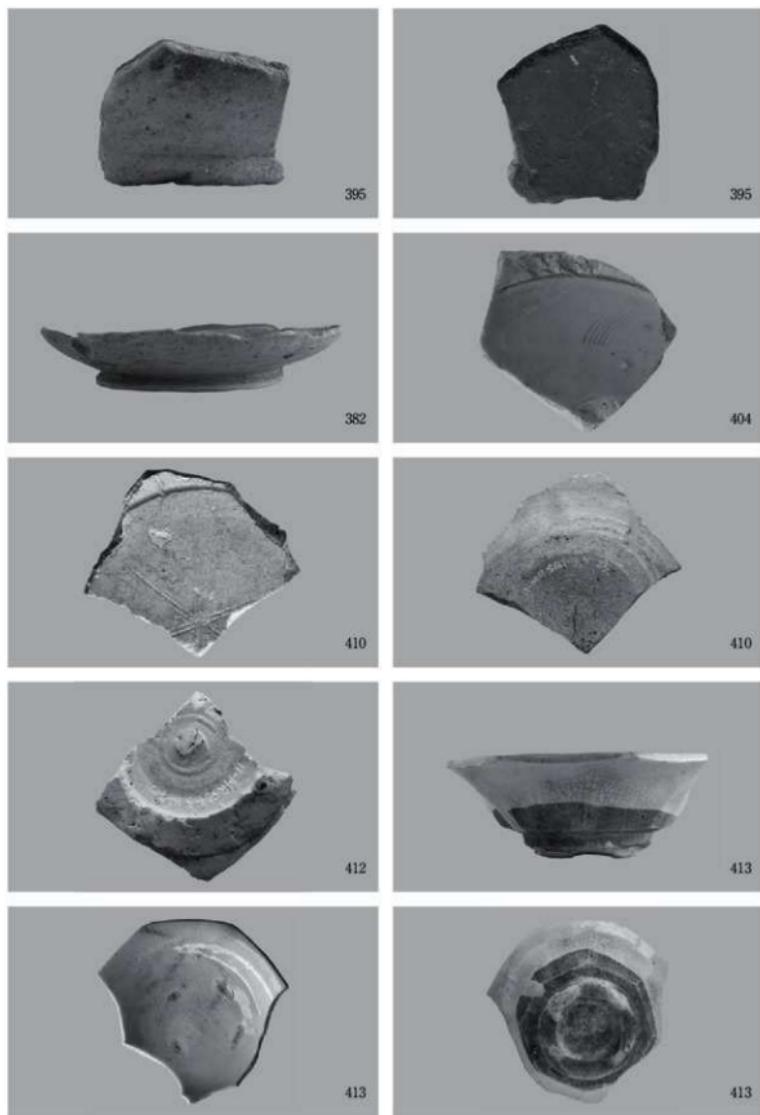
SK38 · 40 ~ 42 · 44 · SD9 出土遺物



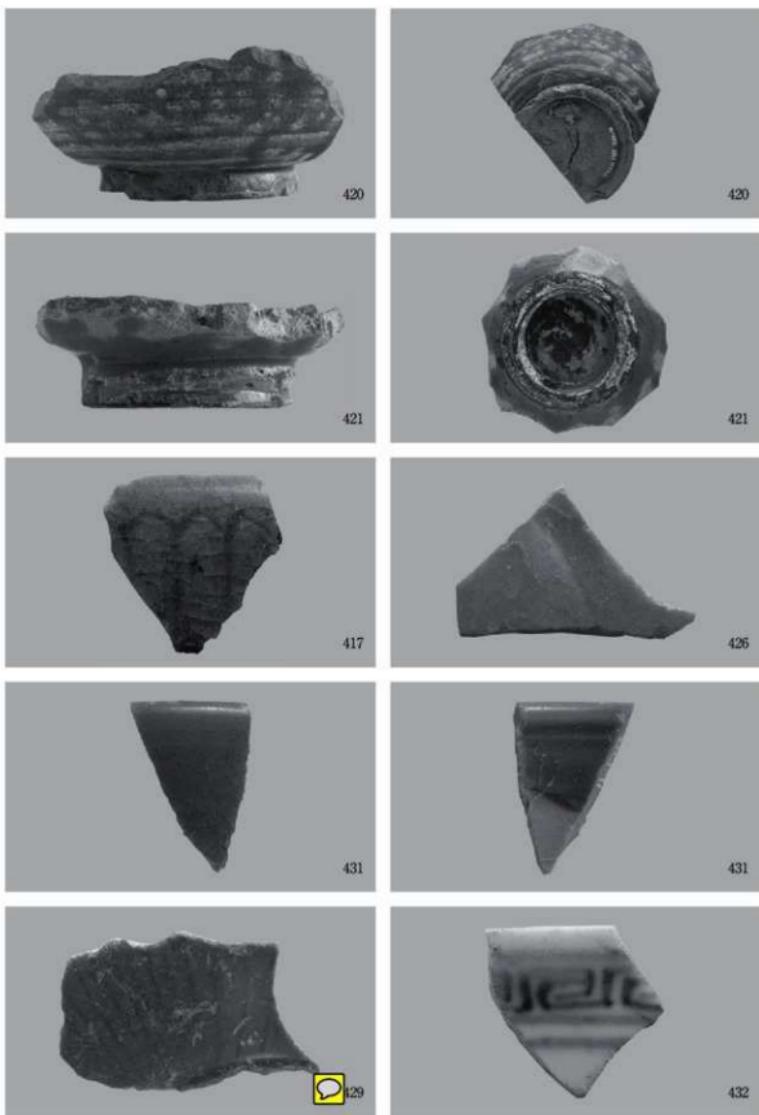
SD9・SR1・P218・221・236・土器溜 2・IV～VI層出土遺物



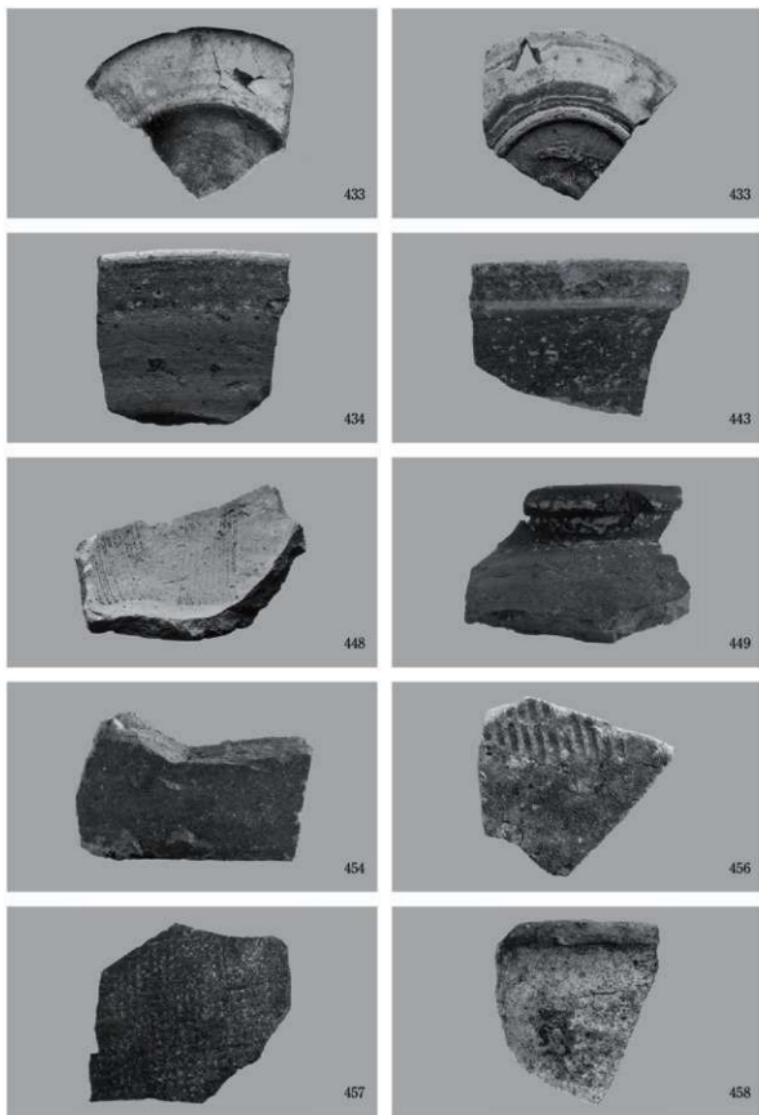
V層・SB9・10・SK4・8・9出土遺物



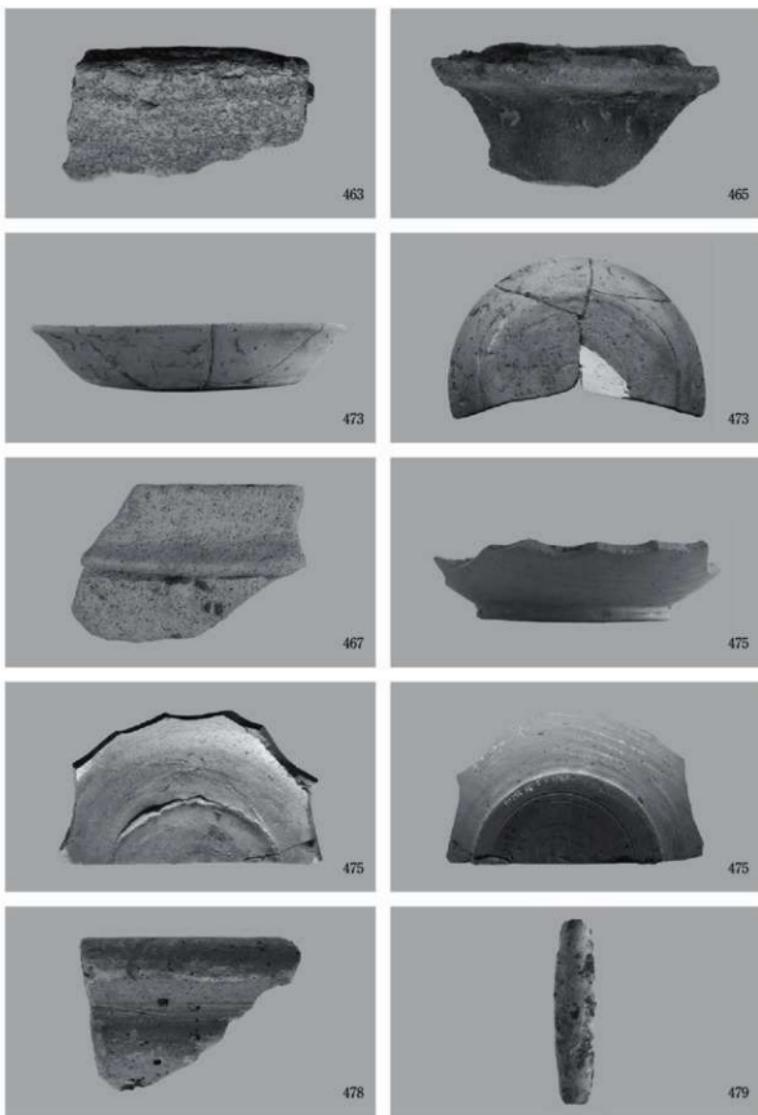
SD1 出土遺物



SD1 出土遺物



SD1 出土遺物



SD1 出土遺物



481



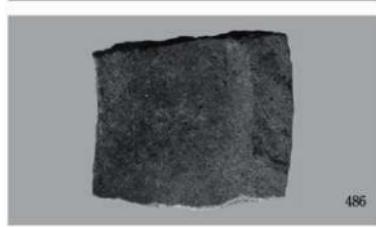
482



483



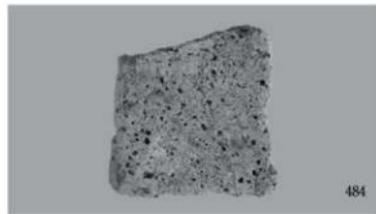
483



486



486



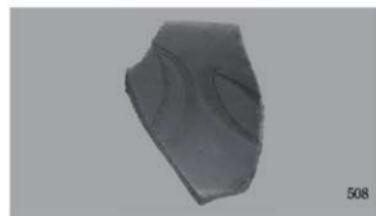
484



492

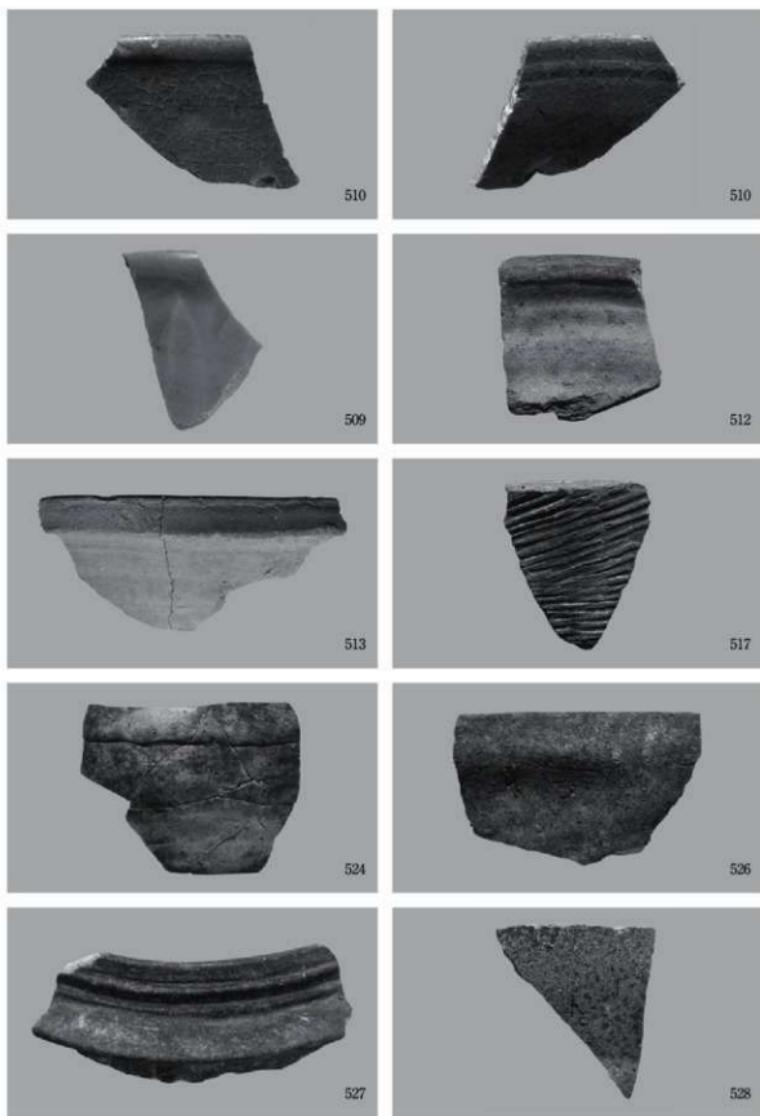


502

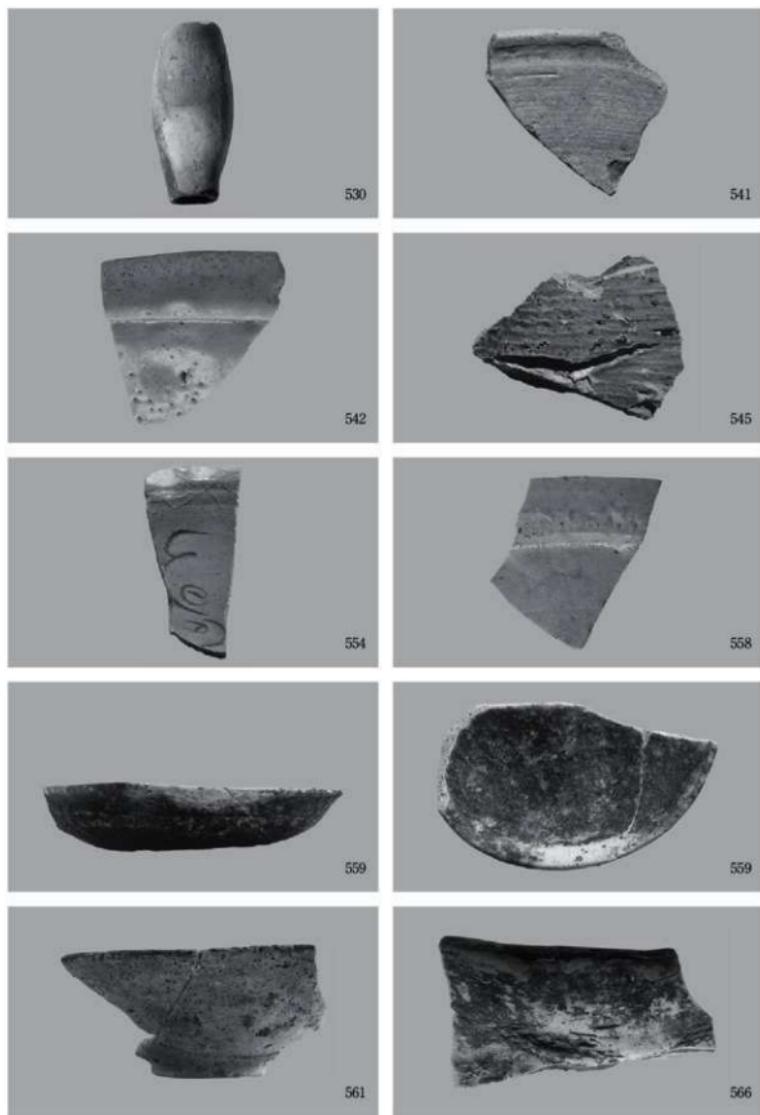


508

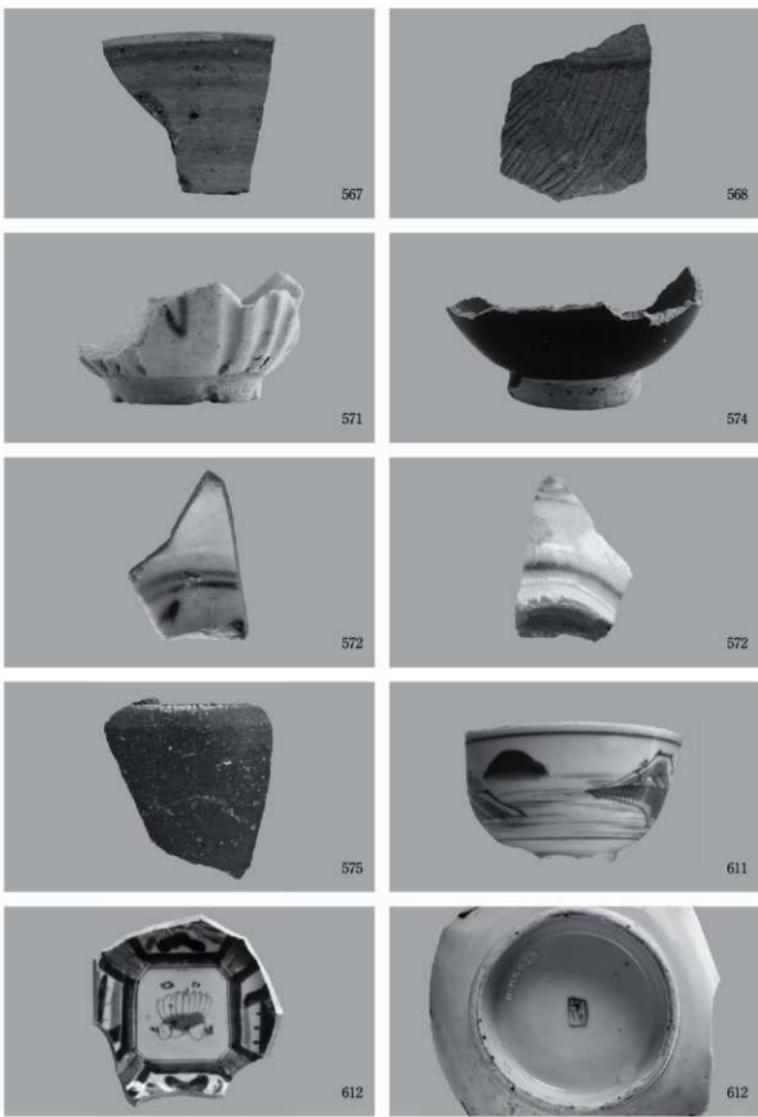
SD1 · 2 出土遺物



SD2 出土遺物



SD2・4～6・P122・124・171・Ⅱ・Ⅲ層出土遺物



SB2 · I · II 層出土遺物



調査区風景（東より）



発掘作業風景

報告書抄録

ふりがな	みたらいせき							
書名	御手洗遺跡							
副書名	高知広域都市計画道路上町2丁目南城山線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高知市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	浜田恵子・梶原瑞司							
編集機関	高知市教育委員会							
所在地	〒780-8571 高知県高知市鷹匠町2丁目1番43号 TEL 088-832-7277							
発行年月日	西暦 2014年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みたらいせき 御手洗遺跡	こうちけんこうちむし 高知県高知市 こうだあざみみたらい 神田字御手洗 368・371・ 374-2他	39201	10171	33度 32分 35秒	133度 30分 26秒	2011年 10月11日 ～ 2012年 2月10日	960 m ²	都市計画 道路上町 2丁目南 城山線道 路改良工 事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
御手洗遺跡	集落跡 屋敷跡	弥生時代 古代末～中世	竪穴住居跡 竪穴状遺構 土坑 ピット 獨立柱建物跡 溝状遺構 性格不明遺構	弥生土器 土師質土器 中世陶器 近世陶磁器 貿易陶磁器 金属製品 石製品 瓦	弥生時代中期の集落跡を検出。 古代末～中世の屋敷に伴う掘立柱建物跡・土坑・溝・ピットを検出。			

高知市文化財調査報告書第38集

御手洗遺跡

高知広域都市計画道路上町2丁目南城山線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年3月

発行 高知市教育委員会

〒780-8571 高知市鷹匠町2丁目1番43号

民権・文化財課

電話088-832-7277

印刷 共和印刷株式会社

